兵庫県文化財調査報告　第372冊

姫路市所在

市之郷遺跡 Ⅱ

―(都)大日線緊急街路整備工事に伴う発掘調査報告書―

2010 (平成22) 年 3 月

兵庫県教育委員会

姫路市所在

市之郷遺跡Ⅱ

―(都)大日線緊急街路整備工事に伴う発掘調査報告書―

2010(平成22)年3月

兵庫県教育委員会

遠景（南東から）

Ⅰ区全景（北から）

Ⅰ区SK16　出土土器

弥生前期　出土土器

弥生中期　出土土器

Ⅱ区出土　炭化米

出土打製石器

出土磨製石器

例　　言

1．本書は姫路市市之郷に所在する市之郷遺跡の発掘調査報告書である。市之郷遺跡では多くの調査を行っており、今後とも同名の報告書が予定されていることから、書名を市之郷遺跡Ⅱとした。

2．調査は、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所が計画施工する都市計画街路事業大日線に伴うものである。姫路市教育委員会では仮称姫路駅周辺遺跡№３地点として扱っているが、周知の遺跡であり地名でもある市之郷遺跡として報告する。

3．分布調査は平成５年度に、確認調査は平成17年度に、本発掘調査は平成18年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査担当した。

4．本発掘調査は、平成18年度に渡辺　昇・長濱誠司・柏原正民が担当した。

5．調査で使用した方位は国土座標第Ⅴ系を使用し、水準は兵庫県姫路土木事務所および姫路市建設課設定の２級基準点を使用した。

6．基準点の測量ならびに平面図の図化は㈱サンコムに委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。

7．遺構写真は調査担当者が撮影した。空中写真は、㈱サンコムに委託して撮影したものである。

8．整理作業は、平成20・21年度の２ヵ年に渡って、兵庫県立考古博物館で行った。遺物写真は株式会社タニグチフォトに委託して撮影した。

9．執筆は本文目次の通りで、編集は増田麻子の協力を得て渡辺が行った。

10．本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中１－１－１）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630－１）に保管している。ご活用ください。

11．発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。

姫路市教育委員会・大谷輝彦・小柴治子・青木哲哉

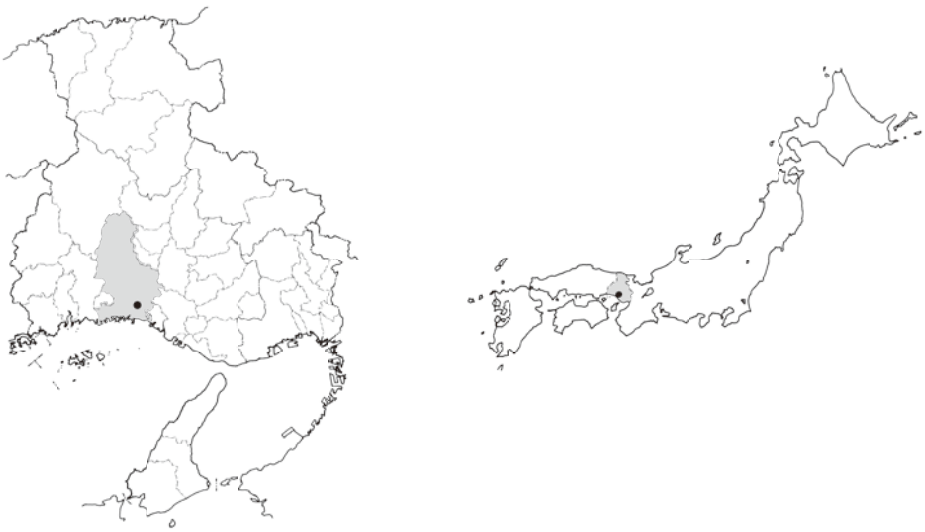


図１　市之郷遺跡の位置

本文目次

例言
Ⅰ　はじめに……渡辺……1
　１．調査に至る経緯
　２．本発掘調査の経過
　３．整理作業の経過
Ⅱ　遺跡の環境……長濱……5
Ⅲ　遺　　構……長濱……9
Ⅳ　出土遺物……渡辺・古谷……15
Ⅴ　市之郷遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）……㈱加速器分析研究所……56
Ⅵ　おわりに……渡辺……59

挿図目次

図１　市之郷遺跡の位置……i
図２　調査風景……1
図３　調査風景……2
図４　市之郷遺跡の範囲と調査地点……2
図５　調査地点位置図……3
図６　整理作業風景……3
図７　整理作業風景……4
図８　整理作業風景……4
図９　周辺の遺跡……7
図10　石鏃の形式分類……38
図11　楔形石器の形式分類……40
図12　金属器実測図……43
図13　暦年較正年代グラフ……58
図14　調査地遠景写真……60
図15　出土遺物……61

表 目 次

表１　石器計測表……41
表２　出土遺物観察表……44～55
表３　試料一覧……57

巻頭図版目次

巻頭図版１　上　遠景（南東から）
　　下　Ⅰ区全景（北から）
巻頭図版２　上　Ⅰ区SK16　出土土器
　　下　弥生前期　出土土器
巻頭図版３　上　弥生中期　出土土器
　　下　Ⅱ区出土　炭化米
巻頭図版４　上　出土打製石器
　　下　出土磨製石器

図版目次

図版１　調査区全体図
図版２　Ⅰ区遺構　平・断面図
図版３　Ⅰ区遺構　住居跡・土坑（1）
図版４　Ⅰ区遺構　土坑（2）
図版５　Ⅰ区遺構　土坑（3）
図版６　Ⅰ区遺構　土坑（4）
図版７　Ⅱ区遺構　平・断面図
図版８　Ⅱ区遺構　土坑（1）
図版９　Ⅱ区遺構　土坑（2）
図版10　Ⅲ区遺構　平・断面図
図版11　Ⅲ区遺構　土坑・溝
図版12　Ⅲ区遺構　流　　路
図版13　出土土器（1）
図版14　出土土器（2）
図版15　出土土器（3）
図版16　出土土器（4）
図版17　出土土器（5）
図版18　出土土器（6）
図版19　出土土器（7）
図版20　出土土器（8）
図版21　出土土器（9）
図版22　出土土器（10）
図版23　出土土器（11）
図版24　出土土器（12）
図版25　出土土器（13）
図版26　出土土器（14）
図版27　出土土器（15）
図版28　出土土器（16）
図版29　出土土器（17）
図版30　出土土器（18）
図版31　出土土器（19）
図版32　出土土器（20）
図版33　出土土器（21）
図版34　出土土器（22）
図版35　出土石器（1）
図版36　出土石器（2）
図版37　出土石器（3）
図版38　出土石器（4）
図版39　出土石器（5）

写真図版目次

写真図版１　上　遺跡の遠景　南から
　　下　遺跡の遠景　北から
写真図版２　上　Ⅰ区遺構　全景（垂直写真）
　　中左　Ⅰ区遺構　全景　南から
　　中右　Ⅰ区遺構　全景　北から
　　下　南半部　南から

写真図版３　上　SH01　北から
中　SH01断面　東から
下　SK01　東から
写真図版４　上　SK01断面　東から
中上　SK02断面　西から
中下　SK03断面　東から
下　SK05　東から
写真図版５　上　SK05土器出土状況　南から
中　SK07　西から
下　SK07断面　西から
写真図版６　上　SK06　東から
中　SK06断面　東から
下　SK10・SD01断面　東から
写真図版７　上　SK16　西から
中　SK16土器出土状況　西から
下　SK16完掘　北から
写真図版８　上　Ⅱ区遺構　全景（垂直写真）
中　Ⅱ区遺構　全景　北から
下　SK01　東から
写真図版９　上　SK01土器出土状況　東から
中　SK02　南から
下　SK04　西から
写真図版10　上　SK05　東から
中　SK05断面　東から
下　SK05土器出土状況　東から
写真図版11　上　SX01、SK08・13　南から
中　SX01断面（a－a’）　西から
下　SK08断面　南から
写真図版12　上　Ⅲ区遺構　全景（垂直写真）
中　Ⅲ区遺構　全景　北から
下　南半部東壁土層断面　西から
写真図版13　上　Ⅲ区遺構　全景　北から
中　調査区南端東壁際土坑　西から
下　SK01　東から
写真図版14　上　SK02断面　北から
中　SK02土器出土状況　西から
下　SD03・04・05　西から
写真図版15　上　SD02土器出土状況　西から
中　SD03　西から
下　SD03土器出土状況　北から
写真図版16　上　流路断面（a－a’）　南西から
中　流路断面（b－b’）　南から
下　作業風景
写真図版17　出土土器（1）
写真図版18　出土土器（2）
写真図版19　出土土器（3）
写真図版20　出土土器（4）
写真図版21　出土土器（5）
写真図版22　出土土器（6）
写真図版23　出土土器（7）
写真図版24　出土土器（8）
写真図版25　出土土器（9）
写真図版26　出土土器（10）
写真図版27　出土土器（11）
写真図版28　出土土器（12）
写真図版29　出土土器（13）
写真図版30　出土土器（14）
写真図版31　出土土器（15）
写真図版32　出土土器（16）
写真図版33　出土土器（17）
写真図版34　出土土器（18）
写真図版35　出土土器（19）
写真図版36　出土土器（20）
写真図版37　出土土器（21）
写真図版38　出土土器（22）
写真図版39　出土土器（23）
写真図版40　出土土器（24）
写真図版41　出土土器（25）
出土金属器
出土炭化米
写真図版42　出土石器（1）
写真図版43　出土石器（2）
写真図版44　出土石器（3）
写真図版45　出土石器（4）
写真図版46　出土石器（5）
写真図版47　出土石器（6）
写真図版48　出土石器（7）
写真図版49　出土石器（8）

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

姫路市内の渋滞緩和とスムーズな通行を図るため市内外環状線の機能を持った街路大日線が兵庫県姫路土木事務所によって計画されていた。国道312号の大日交差点から市之郷に向かうものである。

その間は市街地となっており、買収部分から順次確認調査が実施されていた。今回対象となった部分については、周辺の開発や既調査結果から遺跡の存在する可能性は非常に高いものと思われていた。Ⅰ区東側には市之郷廃寺の礎石が置かれている薬師堂が存在し、市之郷廃寺の寺域北限もしくは隣接地であろうと想定されていた。南側の姫路市立すこやかセンター建設に先立つ発掘調査でも関連遺構が検出されている。

確認調査は平成17年度に実施された。２回に分けて実施し、５月30日と６月16日の２日間行った。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査第２班吉識雅仁が担当した。その結果、弥生時代の竪穴住居跡と思われる遺構が検出され、１地区を除いて本発掘調査が必要とされた。それによって、今回本発掘調査を行った部分についても市之郷遺跡が広がっていることが考えられた。

２．本発掘調査の経過

本発掘調査は平成17年度に実施した。調査計画が詰まっていたこともあってスムーズに着手することはできなかったので、変則的な調査となった。調査を担当する予定のチームが朝来市の調査に入っていた段階で入札を行わざるを得なかったので、県道西側のⅢ区についてはデスク担当の企画調整班柏原が先行して12月中旬から調査に入り、１月上旬から長濱が合流する形となった。その後、北近畿豊岡自動車道の上エ山古墳群の調査を終えて、１月中旬から渡辺が参加した。県道西側のⅢ区からⅡ区、そして県道東側のⅠ区の順で調査を行った。車両や歩行者が多いこともあって、調査区はフェンスで囲い事故防止に努め安全に留意した。上層のアスファルト・コンクリートは場外処分地に搬出し、人力掘削の土は調査区内に仮置きし、各々埋め戻しを行った。各調査区とも遺構面の調査を行い、個別写真・実測などの作業を行い、足場による全景写真とヘリコプターによる空中写真撮影を行い図化作業も行った。３月18日に遺物・写真類や器材を搬出して、市之郷遺跡の調査を終了する。

調査の組織

《調査主体》　兵庫県教育委員会

《調査事務》　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長：平岡憲昭

主幹：輔老拓治

総務課　課長：織田正博

企画調整班　主査：柏原正民

課付：稲田　毅

調査専門員：吉田　昇

《調査担当》　調査第１班　主査：渡辺　昇・長濱誠司

企画調整班　主査：柏原正民

図２　調査風景

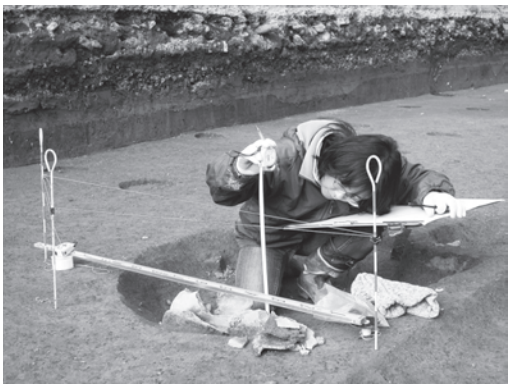


図３　調査風景

《調査参加者》　森本文子・赤壁千恵子・高田祐一
覚野郁子・菊島昌子・藤田　泉
佐藤朋子・清水洋子

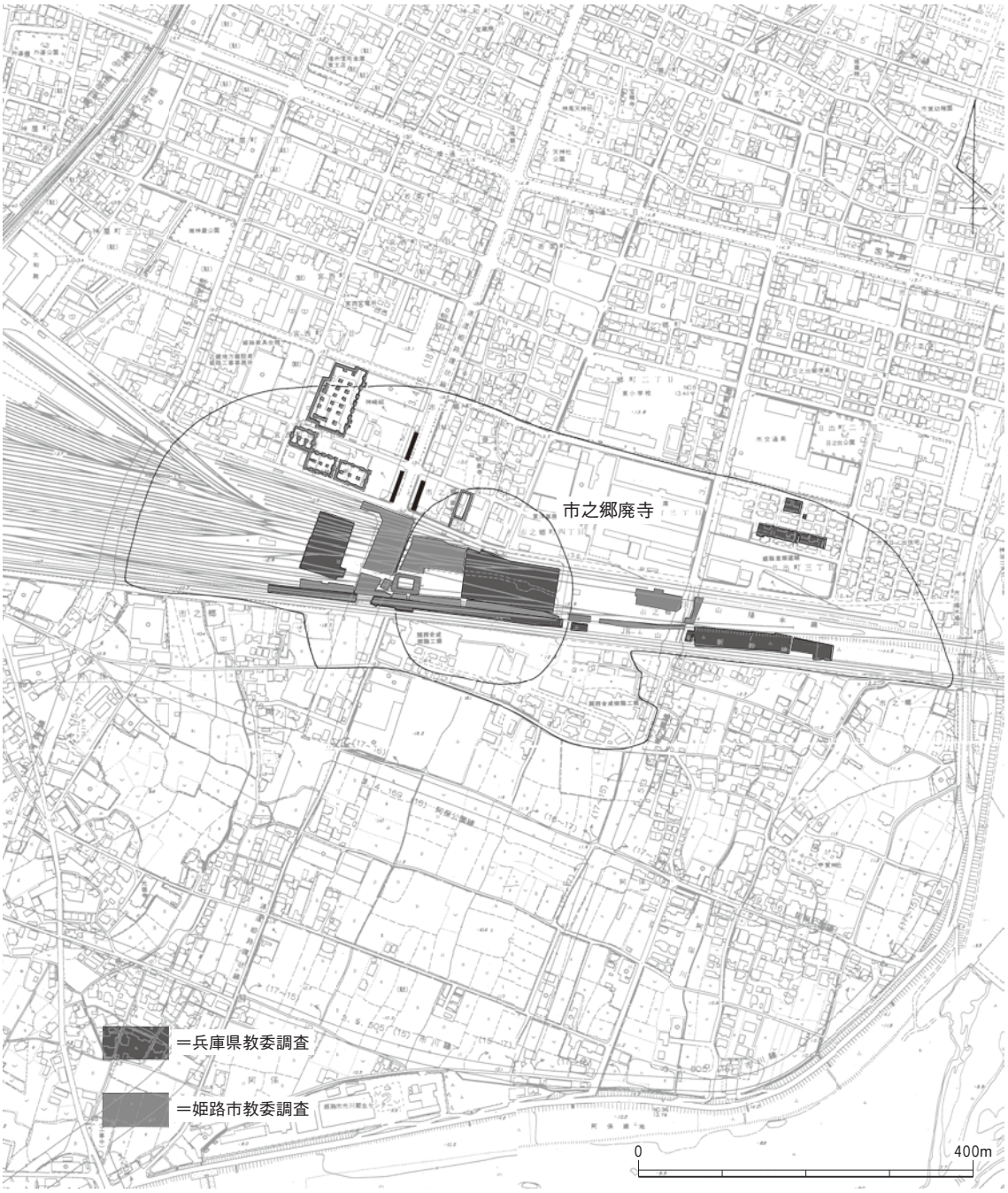


図４　市之郷遺跡の範囲と調査地点

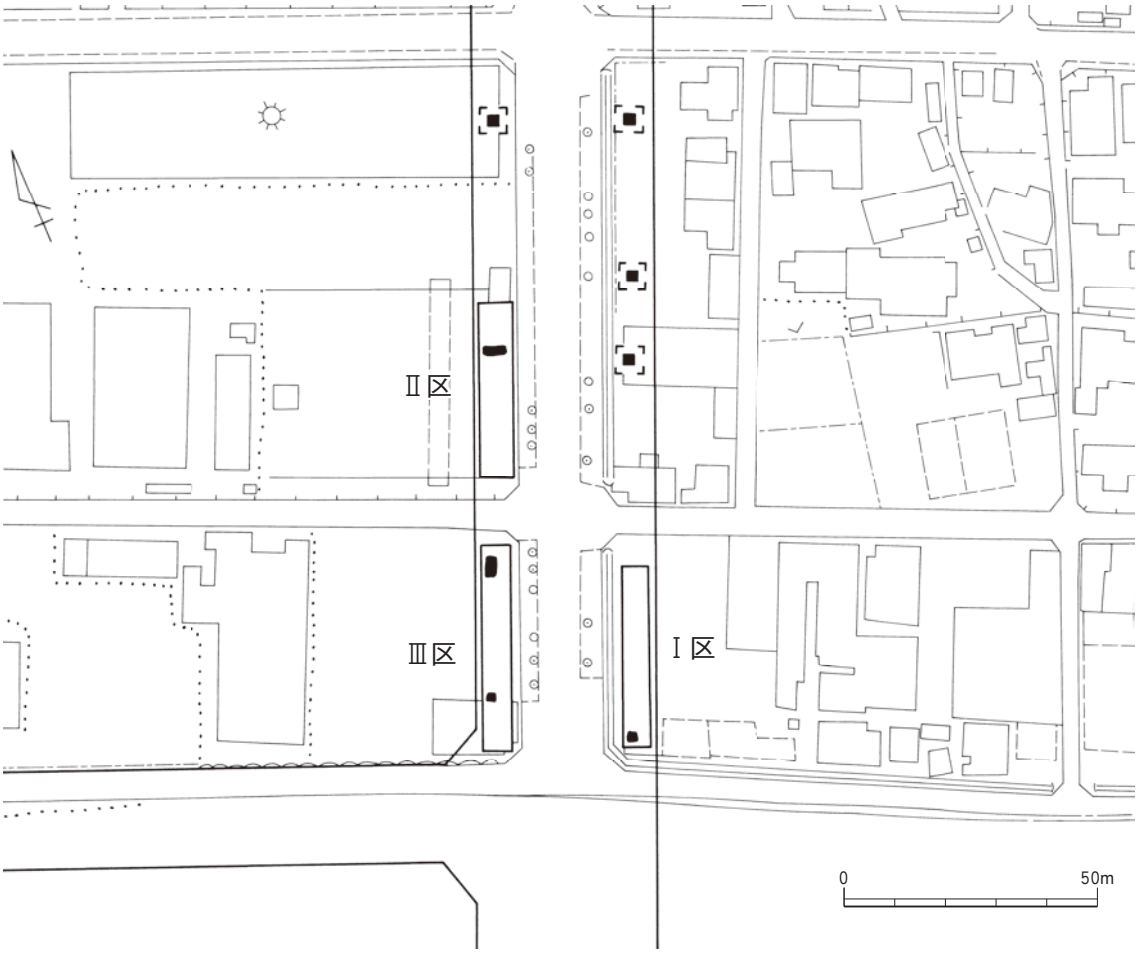


図５　調査地点位置図

3. 整理作業の経過

整理作業は現地調査事務所で発掘調査の進捗に応じて一部土器洗浄などを実施していった。

本格的に作業に入ったのは、整理作業契約を交わした平成19年度からで、３カ年に渡って作業を行った。平成19年度は主に魚住分館で遺物の洗浄作業・注記作業を実施した。平成20年度に組織は兵庫県立考古博物館に変わり播磨町に引越しを行い作業を行った。接合復原作業から実測作業を行った。Ⅱ区からはじめⅢ区・Ⅰ区へと作業を行った。平成21年度は継続して実測作業とトレース・レイアウト作業を行い、報告書刊行までを実施した。

調査の組織

《調査主体》　兵庫県教育委員会

（平成19年度）

《調査事務》　兵庫県立考古博物館

《事務担当》　埋蔵文化財調査部長：若生晃彦

主幹：岡崎正雄

総務部　総務課長：若狭健利

主査：橋本弘昭

整理保存班　調査専門員：西口和彦

主査：菱田淳子

図６　整理作業風景

《調査管理》 担当課長補佐：森内修造

《調査担当》 調査第２班：渡辺　昇・長濱誠司

嘱託員：島村順子・蔵　幾子・奥野政子・荒木由美子・藤池かづさ・吉村あけみ

（平成20年度）

《調査事務》 兵庫県立考古博物館

《事務担当》 埋蔵文化財調査部長：若生晃彦

主幹：岡崎正雄

総務部　総務課長：若狭健利

課長補佐：山下裕恵

整理保存班　調査専門員：森内修造

主査：菱田淳子

《調査管理》 主査：篠宮　正

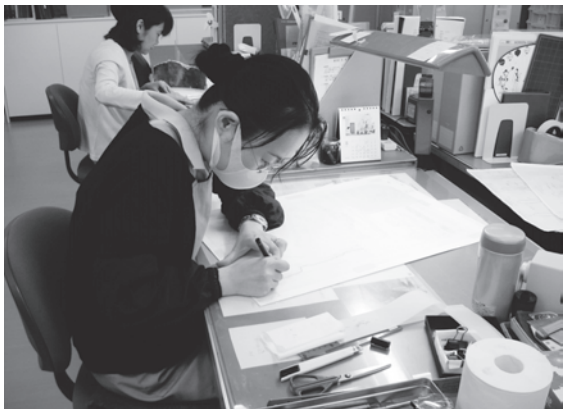


図７　整理作業風景

《調査担当》 調査第２班：渡辺　昇・長濱誠司

嘱託員：古谷章子・増田麻子・栗山美奈・加藤裕美・佐々木誓子・大西美緒

西口由紀・島村順子・蔵　幾子・藤池かづさ・吉村あけみ

図８　整理作業風景

（平成21年度）

《調査事務》 兵庫県立考古博物館

《事務担当》 埋蔵文化財調査部長：若生晃彦

総務部　総務課長：前川浩子

主査：大西晃彦

整理保存班　調査専門員：森内修造

主査：篠宮　正

《調査管理》 主査：菱田淳子

《調査担当》 調査第１班：渡辺　昇・長濱誠司

嘱託員：古谷章子・増田麻子・栗山美奈・岡崎輝子・加藤裕美・吉田優子

島村順子・蔵　幾子・吉村あけみ

Ⅱ　遺跡の環境

(1) 地理的環境

姫路市は兵庫県の中西部に位置する。その南側は瀬戸内海に面し沖合に家島諸島が点在する。また北側は標高200m級の山地が東西に広がっている。近代に入り姫路県、飾磨県を経て兵庫県に編入、1889（明治22）年に市制が敷かれる。その後周辺の町村を合併して市域を拡大、さらに「平成の大合併」により2006（平成18）年に周囲の飾磨郡夢前・家島町、神崎郡香寺町、宍粟郡安富町と合併し面積534.27㎢の現在の市域が形成される。また1996（平成８）年には中核都市に移行している。市街地は市川などの河川よって形成された県内有数の平野に位置する。1600（慶長５）年池田輝政によって築かれた姫路城の城下町から発達したものである。近代以降大阪鎮台営所、師団司令部と県立尋常中学校、姫路師範学校などが設置され、播磨地域の政経中枢都市であるとともに、県庁所在地である神戸市に次ぐ兵庫県第２の都市としても歩んでいる。

市街地付近は古代山陽道をはじめ西日本へ至る主要街道が東西に通過し、これを基点に周辺地域へ至る街道が放射状に延びていた。これらの街道は今日でも国道２号などの主要道路になっている。また近代には鉄道が開通し、常に交通の要衝地でもあった。

姫路市に深く関わりをもつ市川は、朝来市生野町を源とし神崎郡、姫路市を貫流し瀬戸内海に注ぐ、全長約77㎞を測る兵庫県下第２の河川である。市街地は河口から約５㎞さかのぼった西岸にある。南流する市川は市街地の北側でそれを避けるように東側に流れを変えている。この現在の河道は姫路城築城に際し付け替えが行われたとする説もある。

遺跡の所在する姫路市市之郷は、姫路城城下町の南東部にあたる。かつては城下町の外縁部であり、市之郷や阿保などの集落が点在する田園地帯であった。調査区北側、国道２号沿いにある神尾天神社付近が小高くなる他は水田が広がり、その中に藪や墓地が島状に点在していた。繁栄する市街地に対してさびしい場所だったと言われる。景観が一変したのは国鉄の操車場設置以降であり、水田の埋立てが進み、線路沿いに倉庫が建ち並び、周辺の集落も市街地と一体化していった。

(2) 周辺の歴史的環境

姫路市街地は早い時期に都市化が進んでいるため遺跡の状況は明らかでなく、わずかに工事中に遺物の出土が報告される程度であった。しかし姫路駅周辺の連続立体交差事業やそれに伴う区画整理事業などに関連して市街地の発掘調査が進み、播磨国の中心部の状況が明らかになりつつある。

縄文時代

この時期の遺跡は市街地の西側に集中する。辻井遺跡(28)は中期の屈葬された人骨、晩期の土器棺などが検出された著名な遺跡である。今宿丁田遺跡(25)では後期前半の埋甕、土坑が検出されている。英賀保駅周辺遺跡第４地点(24)では後期の土器が出土し、付近に生活跡があるものと推定される。堂田遺跡(23)でも晩期の土器が出土している。

弥生時代

弥生時代に入ると遺跡数は増大する。遺跡は長期にわたり存続し、規模の大きいものが多い。

前期後半から始まる遺跡に千代田遺跡(13)、八反長遺跡(22)がある。市之郷遺跡に隣接する北条遺跡

(11)では前期末の旧河道、姫路駅周辺第２地点(3)や豆腐町遺跡(6)では前期の溝などが検出される。

今宿丁田遺跡(25)、辻井遺跡(28)では中期の住居跡が検出される。姫路駅周辺第２地点(3)では中期後半の土坑・住居・溝などが検出されている。船場川東区整遺跡は集落が弥生時代中期以降古墳時代まで存続し、多数の住居跡が検出される。この時期、注目する遺物として銅鐸鋳型の出土がある。名古山遺跡(30)では住居内から袈裟襷文銅鐸、今宿丁田遺跡(25)では扁平紐式四区画袈裟襷文銅鐸の石製鋳型が出土している。銅鐸そのものは発見されていないが現市街地の西側地域で銅鐸生産が行われていた可能性がある。

弥生時代後期の遺跡としては西延末遺跡(14)、今宿丁田遺跡(25)、今宿遺跡(26)があり住居跡を検出している。八反長遺跡では後期末から古墳時代初頭の方形周溝墓が検出される。

古墳時代

市之郷遺跡の所在する市川西岸の古墳の分布状況は、市街地化や姫路城築城により不明であるが、市川下流域の東岸では前期から後期にわたる首長墓の変遷がうかがえる。独立山塊上に所在する御旅山古墳群内には前期の前方後円墳があるものの、この中に大型古墳はみられない。このうち３号墳(46)からは三角縁神獣鏡が出土している。中期に入ると全長145mの前方後円墳である壇場山古墳(41)、続いて全長約50mの大型方墳である山之越古墳(42)が築かれる。どちらも長持形石棺を直葬し、被葬者は播磨国造に近い人物が想定される。宮山古墳(43)は５世紀半ばに築造され、壇場山・山之越古墳に続く首長墓と推定されるが、初期須恵器や金製垂飾付耳飾など朝鮮半島に由来する遺物が出土している。後期になると丘陵や山裾に群集墳が築造される。６世紀前半に築造された見野長塚古墳(44)は最末期に位置づけられる前方後円墳であり、初期の横穴式石室を埋葬施設とする。

長越遺跡(19)は船場川沿いの微高地上に立地する古墳時代初頭～前期の集落であり山陰など各地からの搬入土器が多く出土している。

古　　代

市之郷遺跡の一帯は、この時期播磨国飾磨郡に属していた。飾磨郡は16里からなる大郡であり、播磨国府が所在した。本町遺跡(12)で検出した建物群や出土瓦から播磨国庁の一部と推定されている。また近隣の豆腐町遺跡(6)では掘立柱建物群、井戸などを検出し、出土遺物からも播磨国府、飾磨郡衙に関連する遺跡と推定される。播磨国分寺と国分尼寺は市川左岸にある。国分寺跡(39)は調査により築地で囲まれた方２町の寺域が確認され、中軸線上に南門、中門、金堂、講堂が一線に並ぶことが判明した。また国分尼寺は金堂基壇、築地などが検出された。古代寺院は市之郷廃寺(2)、辻井廃寺(29)、見野廃寺(45)がある。辻井廃寺(29)は調査により法隆寺式伽藍配置が想定される。この他に上原田(38)、小川(37)、白国(34)、平野(35)の廃寺があるが実態は明らかでない。今宿遺跡(26)では調査で多量の瓦が出土し、これまで未確認だった「今宿廃寺」の存在がほぼ明らかとなった。市之郷廃寺の南側に所在する阿保遺跡第２地点(9)では石帯、硯などの遺物が出土し、市之郷廃寺と関連する遺跡と考えられる。

北条遺跡(11)では土坑、井戸などを検出し、旧河道内からこの時期の土器などがまとまって出土している。英賀保駅周辺遺跡第４地点(24)では計画的な配置が想定される建物群が検出され、硯や墨書土器などが出土している。これらは官衙関連遺跡か有力な集落であると思われる。

古代山陽道は飾磨郡を通過していたが、市街地化が進むこともあり、復元ルートは充分に解明されていない。国府に隣接して草上駅が所在したとされ、山陽道と美作道の分岐点となっていた。草上駅の所在地は明らかでないが、今宿遺跡(26)、今宿丁田遺跡(25)は有力な比定地である。

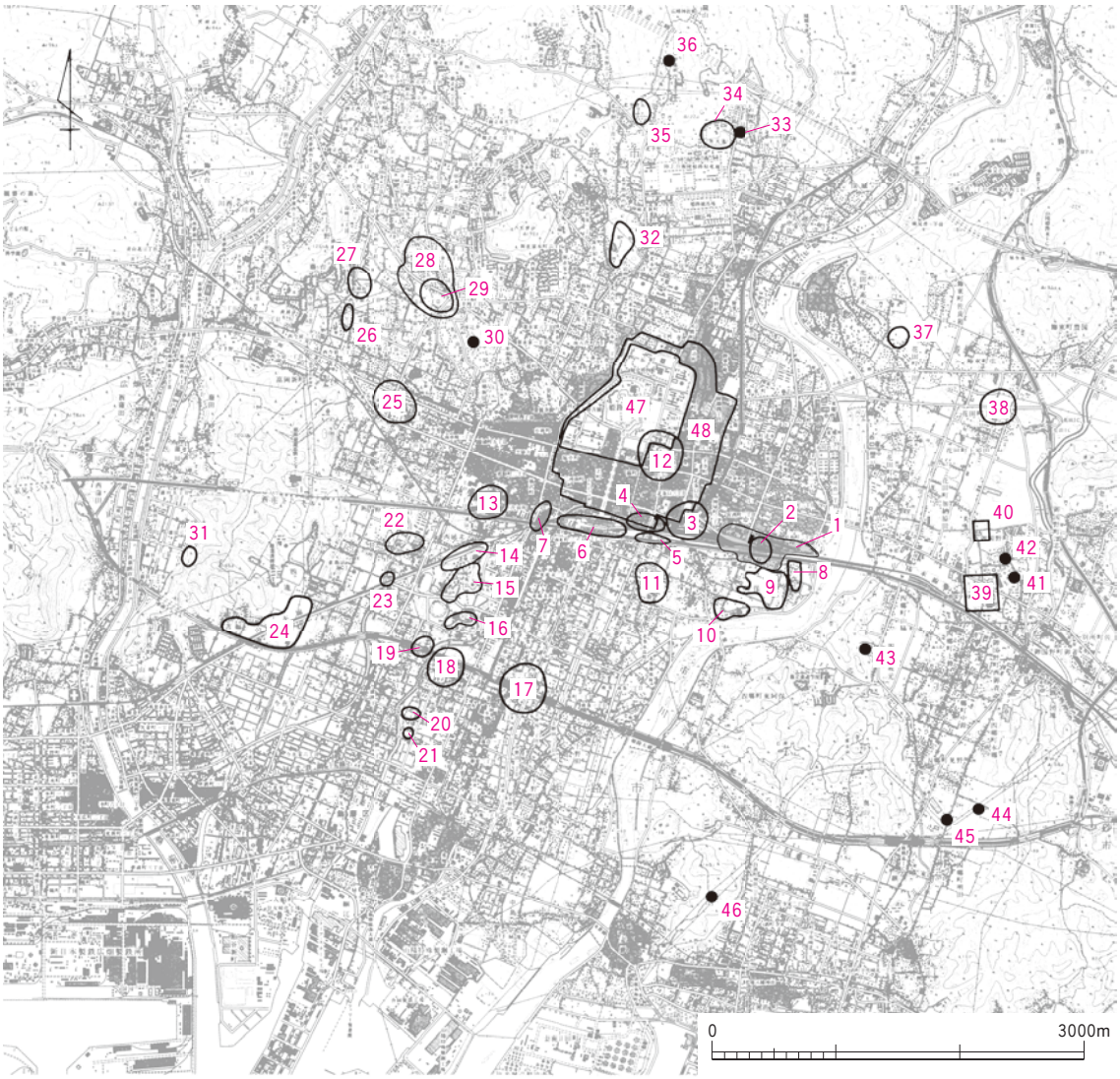


図 9　周辺の遺跡

1．市之郷遺跡
（仮称姫路駅周辺第 3 地点）
2．市之郷廃寺
3．仮称姫路駅周辺第 2 地点
4．仮称姫路駅周辺第 4 地点
5．仮称姫路駅周辺第 1 地点
6．豆腐町遺跡
7．南畝町遺跡
8．阿保遺跡
9．阿保遺跡第 2 地点
10．阿保遺跡第 1 地点
11．北条遺跡
12．本町遺跡
13．千代田遺跡
14．西延末遺跡
15．手柄山北丘遺跡・群集墳
16．手柄山南丘遺跡・群集墳
17．三宅遺跡
18．仮称船場川東区整遺跡第 6 地点
19．長越遺跡
20．仮称船場川東区整遺跡第 2 地点
21．仮称船場川東区整遺跡第 4 地点
22．八反長遺跡
23．堂田遺跡
24．英賀保駅周辺遺跡第 4 地点
25．今宿丁田遺跡
26．今宿遺跡
27．山吹遺跡
28．辻井遺跡
29．辻井廃寺
30．名古山遺跡
31．山所遺跡
32．八代山古墳群
33．二塚古墳
34．白国廃寺
35．平野廃寺
36．御輿塚古墳
37．小川廃寺
38．上原田廃寺
39．播磨国分寺跡
40．播磨国分尼寺跡
41．壇場山古墳
42．山之越古墳
43．宮山古墳
44．見野長塚古墳
45．見野廃寺
46．御旅山 3 号墳
47．姫路城跡
48．姫路城城下町跡

(3) 市之郷遺跡

市之郷遺跡（仮称姫路駅周辺第３地点）は姫路駅の東部に所在する微高地上に広がり、東端は市川に接する。その範囲は東西約1,000m、南北約350mである。遺跡は微高地の最も高位となる地点に立地しているが、さらに微細に見ると遺跡は複数の微高地から構成され、それぞれの微高地上に遺構が分布するようである。遺跡の中央付近には郡内最古の古代寺院である市之郷廃寺が所在する。

遺跡の大半は旧国鉄の操車場であったが、その建設の際に出土した弥生土器や瓦類、現在の薬師堂境内に所在する塔心礎が古くから知られている。これらが地元研究者により調査・報告され、播磨地域の考古学史的にも重要な遺跡となっている。遺跡の大半は長らく鉄道用地だったため実態が不明であったが、JR山陽本線の高架事業と鉄道施設跡地の再開発に伴い発掘調査が継続して行われ、多くの成果が得られている。

遺跡は弥生時代前期に始まり、前期末の墓、土坑、溝などが検出されている。また中期中葉では環濠の可能性のある溝が検出されるものの遺構・遺物は少ない。遺構・遺物が多くなるのは弥生時代中期後半からである。広範囲に集落が形成され竪穴住居、棟持柱を持つ大型掘立柱建物跡が検出される。その周辺部では円形周溝墓、周囲に木棺墓などが検出され、墓域を形成している。後期～古墳時代初頭も集落が形成され、竪穴住居、墓、掘立柱建物跡などが検出される。

古墳時代に入っても集落が営まれるが、中期のカマドをもつ竪穴住居から韓式系土器が出土しているほか、オンドル状遺構が附属する住居跡も検出される。これら遺構・遺物から在地人の集落とともに渡来人の居住する集落があったことが明らかである。時代が下がるとともに韓式土器の在地化が進むが、古墳時代後期まで集落は存続していく。後期の集落では竪穴住居跡の他に大型掘立柱建物も検出され、ここに居住する有力者が後の市之郷廃寺の造営者となることが推定される。廃寺の西側では竪穴住居廃絶後、飛鳥時代の寺院建立にやや先行する時期に大型掘立柱建物跡群と井戸が造られる。

市之郷廃寺は鉄道用地内に寺域が想定され長らく幻の寺院であった。2008年に塔心礎が所在したといわれる土壇推定地付近の調査が行われ中心伽藍の仏堂跡基壇が検出された。付近では水煙の破片も出土していることから塔の存在も確実視されるが、遺構の残存は良好でないため伽藍配置など解明すべき課題は多い。寺院の周辺では寺域を区画するとみられる溝が検出されている。

市之郷廃寺が廃絶した平安時代以降も集落が形成され、掘立柱建物跡など多くの遺構が検出されている。特筆すべき遺構として中世末の梵鐘鋳造遺構がある。この地は鋳造に関する工人組織、野里鋳物師の活動拠点になっていたと推定される。

参考文献

『平成18年度　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所年報』　兵庫県立考古博物館　2007年
『TUBOHORI　姫路市埋蔵文化財調査略報　平成６年度(1994)～13年度(2001)』　姫路市教育委員会　1999年～2002年
『市之郷遺跡』　兵庫県文化財調査報告第286冊　兵庫県教育委員会　2005年
『豆腐町遺跡Ⅰ』　兵庫県文化財調査報告第322冊　兵庫県教育委員会　2007年
『北条遺跡』　兵庫県文化財調査報告第325冊　兵庫県教育委員会　2008年
『今宿遺跡Ⅰ』　兵庫県文化財調査報告第333冊　兵庫県教育委員会　2008年

Ⅲ　遺　　構

(1)　Ⅰ区の調査

1．概　　要

今回の調査では唯一道路東側の調査区である。東側約50mに位置する薬師堂には市之郷廃寺出土と伝えられる塔心礎が設置されている。遺構は南半部に集中し今回の調査では最も遺構密度の高い調査区である。ここでは竪穴住居を１棟検出したほか、多数の土坑を検出した。土坑の中には多量の土器を投棄したものがある。北半部で検出した一部の土坑が中世に属する他は弥生時代の遺構のみである。

2．基本層序

現地表は約60㎝の盛土によってなされたもので、その下に造成以前の水田面が残存していた。さらにその下層にも旧耕土層があり、その直下が遺構面となる。遺構面は、南半部は黒褐シルト質細砂層上面であるが、中央より北半は礫層が隆起しこの部分は遺構の分布が疎らである。遺構面の標高は11.9～11.8mを測り、北から南へゆるやかに傾斜する。

3．遺　　構

竪穴住居

SH01（図版３　写真図版３）

平面は不整な円形を呈し西半は調査区外へ広がる。SD02と重複し、本遺構が切られる。規模は南北3.2m、検出面からの深さ約10㎝である。壁面に沿って幅10㎝、深さ３㎝の浅い周壁溝が巡る。床面では複数の柱穴を検出したが、検出状況から主柱穴は４本柱と推定する。柱穴の規模は径20㎝、深さ15～25㎝を測る。

中央土坑は楕円形を呈する。60㎝×50㎝、深さ30㎝を測り、断面は逆台形である。この土坑の南側に浅いくぼみがあり、厚さ５㎝程度の炭の集積が認められた。くぼみの規模は90㎝×20㎝を測る。炭の一部は中央土坑に流れ込むような状況で堆積していた。所謂「Ⅰ○土坑」に類する構造であろう。

土　　坑

SK01（図版３　写真図版３・４）

他の遺構との重複はない。平面は東西に主軸をもつ楕円形を呈する。長径１m、短径0.75m、深さ15㎝を測る。埋土上層に土器・石器片を包含する。

SK02（図版３　写真図版４）

東壁際で検出した。東側調査区外へ続き全容は不明である。平面は楕円形を呈し、短径50㎝を測る。深さは25㎝で断面形は逆台形である。

SK03（図版３　写真図版４）

西壁際で検出した。現況では半円を呈するが、西半は調査区外へ続く。本来は南北に主軸をもつ楕円形となるのであろう。検出面からの深さは40㎝を測る。埋土中・下層に土器片を包含する。

SK04（図版４）

調査区南半で検出した。柱穴と重複関係にあり本遺構が切られている。平面は長楕円形を呈し、西端

付近は消滅している。長さ2.35m、幅１mを測る。断面形は皿状で深さは５㎝程度と浅い。

SK05（図版４　写真図版４・５）

調査区南半で検出した。平面は南北に主軸をもち楕円形を呈する。長径0.9m、短径0.5m、深さ15㎝を測る。断面形はU字状を呈する。南半部から土器・石器片が集中して出土した。

SK06（図版４　写真図版６）

調査区北半で検出した。平面は長方形を呈し西側は調査区外へ続く。検出長2.3m、幅１m、深さ20㎝を測る。埋土が他の土坑のものと異なることから、中世以降の水田に伴うものの可能性がある。

SK07（図版４　写真図版５）

調査区南半部で検出した。柱穴と重複し、本遺構が切られている。平面は東西に主軸をもつ不整な隅丸方形を呈する。長さ1.1m、幅0.95mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは50㎝ である。埋土の上・中層に20㎝以下の礫とともに土器片を包含する。

SK09（図版５）

調査区中央付近で検出した。柱穴と重複し本遺構が切られている。平面形は東西に主軸をもつ楕円形であり、長径1.1m、短径0.85mを測る。断面は皿状を呈し底は平坦である。深さは10㎝と浅い。

SK10（図版５　写真図版６）

調査区南半で検出した。SD01と重複し本遺構が切られている。本来の平面は円形を呈したのであろう。径0.95m、深さ20㎝を測る。底は平坦である。下層に土器を包含している。

SK12（図版６）

調査区中央付近の西壁際で検出した。遺構の大半は調査区外へ広がるため全容は不明である。SD02と重複し、本遺構が切られている。深さは15～20㎝で底部は凹凸がある。

SK13（図版５）

調査区中央付近で検出した。他の遺構との重複は認められない。平面は東西に主軸をもつ楕円形を呈する。長径1.15m、短径0.5mを測る。深さは30㎝で断面は箱掘り状である。埋土下層には炭を含み、底の東端付近に15㎝以下の礫が４点集積している。

SK14（図版６）

調査区中央付近、東壁際で検出した。柱穴と重複し、本遺構が切られている。平面は東西に主軸をもつ楕円形になると思われる。径80㎝、深さ35㎝を測る。断面は逆台形を呈する。

SK16（図版５　写真図版７）

調査区中央付近で検出した。溝・柱穴と重複し本遺構が切っている。平面は南北に主軸をもつ隅丸長方形を呈する。長さ1.65m、幅1.35mを測る。深さは50㎝であるが、北半は深さ15㎝ほどのテラス状を呈し、この付近を中心に土器片が多量に出土した。

SK17

調査区北半で検出した。他の遺構との重複はみられない。平面は東西に主軸をもつ楕円形である。長径0.9m、短径0.6mを測る。深さは15㎝で断面形はU字状を呈する。埋土の上層には炭・焼土が少量混じり、下層には土器片をわずかに包含している。

SX03（図版４）

調査区中央付近、西壁際で検出した。西側は調査区外へ続く。平面は東西に主軸をもつ不整楕円形を呈する。東西長1.55m、幅1.35m、深さ30㎝を測る。

溝

SD01（図版６　写真図版６）

南東－北西方向に直線的にのび、その偏りはN50°－Wである。検出長2.5m、幅45㎝、深さ50㎝を測る。南東端は調査区内で終結し北西側は調査区外へのびる。埋土は水平な堆積をみせる。埋土内より石器片などが出土した。

SD02（図版６）

調査区中央付近、西壁際で検出した。大半は調査区外へ広がるためその全容は不明である。検出長2.0m、検出幅40㎝、深さ25㎝を測る。底はほぼ水平である。

(2) Ⅱ区の調査

１．概　　要

調査区は市之郷遺跡の北辺付近に位置する。遺構面は攪乱の影響が大きいが、中央付近で複数の土坑と柱穴を検出している。遺構面は１面のみであるが、重複がみられることから時期幅をもつと考える。

２．基本層序

Ⅰ区同様約45㎝の盛土がなされ、その下に造成以前の水田面、さらにその下層に旧耕土層が１層ある。遺構面はこの直下である。調査区南半部は礫層が隆起しているが北端付近は灰黄褐シルト質極細砂層の上面が遺構面となる。

３．遺　　構

土　　坑

SK01（図版９　写真図版８・９）

調査区北端で検出した。柱穴と重複し、本遺構が切られている。平面形は北西－南東方向に主軸をもつ長楕円形を呈し、長径2.8m、短径1.1mを測る。断面は浅いⅢ状を呈し、深さは８㎝である。底の中央～南半にかけて土器片が集中している。

SK02（図版９　写真図版９）

調査区北端で検出した。他の遺構との重複はみられない。南半部を攪乱で損なうが、本来の平面形は南北に主軸をもつ楕円形を呈するものと思われる。長径1.0m、短径0.8mを測る。深さは10㎝で底面が火熱による赤化が認められる。埋土内には土器片が多く混じる。

SK03（図版８）

調査区北端で検出した。他の遺構との重複はみられない。南半を攪乱で損なっているが、本来の平面形は楕円形を呈するものと思われる。東西75㎝、南北の現存長45㎝を測る。深さは３㎝程と浅く、底は凹凸がある。

SK04（図版９　写真図版９）

調査区中央付近で検出した。SK10と重複し本遺構が切られている。平面形は不整な楕円形を呈し、長径2.1m、短径1.7m、深さ30㎝を測る。埋土内には土器片の他に20㎝以下の礫を包含している。

SK05（図版９　写真図版10）

調査区中央部の西壁際で検出した。西半は調査区外へ広がっている。柱穴と重複し、本遺構が切られ

ている。本来の平面形は東西に主軸をもつ長方形で、現長1.8m、幅1.15mを測る。壁面の立ち上がりは急で、箱掘り状を呈する。深さは30㎝である。埋土内には炭や焼土が多く混じり、30㎝以下の礫や土器片を包含している。

SK08（図版８　写真図版11）

調査区中央部、SX01北端付近で検出した。平面は東西に主軸をもつ長方形を呈し、東西1.8m、南北1.3mを測る。深さは65㎝で断面は逆台形を呈する。埋土には炭・焼土が混じり、最下層には炭化材が集積する。埋土内には石器剥片などを包含する。

SK09（図版８）

調査区中央部東壁際で検出した。平面は南北に主軸をもつ楕円形を呈し、長径65㎝、短径50㎝、深さ25㎝を測る。断面はU字状を呈し、埋土には炭粒を含む。

SK10（図版９）

調査区中央付近で検出した。SK04と重複し本遺構が切っている。平面形は東西に主軸をもつ長方形を呈し、長さ1.5m、幅1.0mを測る。断面は浅いU字状を呈し深さは５㎝程度である。埋土のしまりが弱いことから中世以降の水田に伴うものと思われる。

SK13（図版８　写真図版11）

平面は長方形を呈し、SX01と重複する。規模は長さ4.3m、幅1.6mを測る。埋土には10㎝以下の礫を多く含む。埋土は礫を多く包含し、その状況からSK10同様後世の水田に伴うものと思われる。

SX01（図版８　写真図版11）

調査区中央で検出した。SK08、SK13の他に柱穴などと重複し、SK08を切り、SK13や柱穴に切られている。当初住居跡を想定したが調査により不整形の土坑状の落ち込みであることが判明した。規模は南北4.9m、東西3.4m、深さ25㎝を測る。埋土は土壌化した上層と粗砂混じりの下層に分かれ、埋土内には土器片の他に15㎝以下の礫を多く包含している。

(3) Ⅲ区の調査

１．概　　要

調査区南西部にあたりⅠ区とは道路をはさんだ西側となる。遺構は柱穴、溝が中央から南半部に集中するが、遺構の密度はⅠ区と比較してやや疎らとなる。北半部は流路が北東－南西方向にのび、その北側は礫層が隆起する。この部分では遺構は検出されていない。

２．基本層序

他の調査区同様50～60㎝の厚さで盛土・整地がなされ、その下には造成以前の水田面、さらに旧耕土層が１面認められる。遺構面はこの直下である。遺構面を構成するのは、南半部では褐灰シルト～シルト質極細砂、北半部は褐灰シルト質細砂～極細砂である。本来はこの上面が遺構面となり、断面でもそれを確認しているが、土壌化がすすんでいることから、遺構検出はこの土壌化層を削り込んで行っている。そのため掘削中に土器がまとまって出土した地点があったが、これらは溝や土坑に伴う遺物のうち埋土上層にあったものの可能性があり、本来所属すべき遺構が不明のためSX01～03とした。

３．遺　　構

土　　坑

SK01（図版11　写真図版13）

調査区中央付近で検出した。平面形は南北に主軸をもつ楕円形を呈し、長径1.6m、短径1.1mを測る。断面は広いU字状を呈し、底は平坦である。深さは14㎝ある。埋土中には甕などの土器片を包含する。

SK02（図版11　写真図版14）

調査区中央付近の東壁際で検出した。東側は調査区外へ広がり全容は不明であるが、本来は東西に主軸をもつ長方形を呈するものと思われる。検出長約１m、幅1.15mを測る。深さは20㎝で断面は広いU字状を呈する。土坑内より土器片が多数出土した。

柱　　穴

掘立柱建物や柵を復元するには至っていないが、分布状況から中央付近と南半部の２群として把握できる。流路や溝の埋没後に掘り込まれているが、遺物は埋土内から弥生土器片が出土するのみで、須恵器などの出土が見られないことから、弥生時代に属するものと推定する。規模は径10～30㎝、検出面からの深さは10～35㎝である。

溝

SD01（図版11）

調査区南半部で検出した。SD02と重複し本遺構が切っている。北西－南東方向にのび、偏りはN70°－Wある。直線的にのび西端は調査区内で収束し、東側は調査区外へ続く。検出長3.5m、幅40㎝、深さ５㎝を測る。

SD02（図版11　写真図版15）

調査区南端で検出した。両端ともに調査区内で収束する。N20°－Eの方向をもち、北半はくの字状に屈曲する。SD01と重複し、本遺構が切られている。長さ4.5m、幅0.5m、深さ10㎝を測る。断面形は浅い皿状を呈する。溝内より甕片が出土している。

SD03（図版11　写真図版14・15）

調査区中央付近の東壁際で検出した。西端は調査区内で収束し、東側は調査区外へ続く。SK01、SD04、柱穴と重複し、本遺構がSK01、SD04を切り、柱穴に切られている。N32°－Wの方向をもち、検出長約３m、幅85㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、中央部が窪む。深さは20㎝である。埋土上層より甕などの土器片が出土している。

SD04（図版11　写真図版14）

調査区中央付近で検出した。SD05・07、柱穴と重複し、本遺構が切られている。直線的にのびその偏りはN23°－Eである。両端ともに調査区内で収束している。長さ6.8m、幅42㎝を測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは６㎝である。

SD05（図版11　写真図版14）

調査区中央付近の東壁際で検出した。SD04と重複し本遺構が切っている。西端は調査区内で収束し、東側は調査区外へ続く。直線的にのびN50°－Wの方向をもつ。検出長約４m、幅30㎝を測る。断面形は浅いU字状を呈し深さは８㎝である。

SD06（図版11）

調査区中央付近の東壁際で検出した。柱穴と重複し本遺構が切られている。西端は調査区内で収束

し、東側は調査区外へ続く。直線的にのびN50°－Wの方向をもつ。検出長約２m、幅32㎝を測る。断面形は浅いU字状を呈し深さは５㎝である。

流路（図版12　写真図版16）

調査区北西隅で検出した。北東から南西方向にのびる。西側の肩部は礫層が隆起している。事情により調査は平面検出と断面観察にとどめ、完掘していない。なお溝状遺構SD07は、本流路の最終埋土であると考えられる。埋土内から弥生時代中期以降の遺物が少量出土している。

(4) 小　　結

今回の調査区は周知の遺跡である市之郷遺跡（仮称姫路駅周辺第３地点）の北辺付近にあたる。調査区北側については確認調査の結果、遺構が認められないか、遺構面が損なわれていることが明らかになっており、今回の調査が遺跡の北端の状況を示すものと思われる。市之郷遺跡はJR山陽本線の高架とそれに伴う市街地再開発により遺跡南半部にあたる鉄道用地内の発掘調査が大規模に行われてきたが、市街地と化した遺跡北半部の情報に関しては乏しいため、調査面積こそ広くはないが、遺構の分布状況など得られた情報は少なくないと考える。

検出された遺構の大部分は弥生時代に属するもので、Ⅰ区北半およびⅡ区で中世以降の遺構がわずかに検出されたのみである。なお、調査区南東部に伽藍が想定される市之郷廃寺に関連する遺構・遺物は、今回全く検出されなかった。調査区は過去の調査成果から推定される寺域外ではあるが、遺構検出面はⅠ～Ⅲ区ともに旧水田層直下であり、伽藍周辺施設を含めた古代・中世の遺構および遺物包含層は一帯の水田化に際して削平され、損なわれた可能性もある。

市之郷遺跡の開始は弥生時代前期とされ、過去の調査では前期末の墓、土坑、溝などの遺構が検出されている。本調査区ではⅠ区SK16、SX03が前期の土器を包含した遺構であり、包含層からも少数ながら土器が出土している。したがって当該期の集落の西端が本調査区付近であり、集落本体はⅠ区東側にあるものと考える。

弥生時代中期後半は市之郷遺跡の盛期の１つであり、遺構・遺物の量が多くなる。遺跡内の広範囲に集落が形成され竪穴住居のほかに大型掘立柱建物も検出されている。本調査区でも主体となる時期であり、今回検出した遺構もその集落の１つとなるのであろう。竪穴住居跡はⅠ区で１棟検出しただけだが、Ⅰ・Ⅲ区では柱穴がまとまって検出され、他にも復元できなかった竪穴住居あるいは掘立柱建物が存在した可能性がある。しかし遺構の密度はⅠ区よりもⅢ区が疎らになる傾向にあり、前期と同様に遺構の中心はⅠ区の東側に想定され、Ⅲ区検出の流路付近が集落の西限になるのではないかと考える。流路はⅢ区の北東側へ延びていくため、Ⅰ・Ⅲ区とⅡ区は流路によって隔てられることになり、Ⅱ区付近には別の集落が存在することになる。流路北岸に立地する集落も西に隣接する商業施設建設に伴う発掘調査では遺構が検出されていないことから、本調査区付近が集落の西限になるものと考えられる。

過去の調査では集落の周辺部で円形周溝墓、周囲に木棺墓などが検出され、墓域を形成している状況がみられる地区もあった。本調査区内でも土坑や溝から比較的多くの土器の出土をみた。しかし溝は東西方向に延びるものが多く方形周溝墓を想定しがたい。また土坑も完形に復元できる土器が出土する状況がみられないため、廃棄土坑と考えられ、土器棺墓は想定しがたい。

後期以降は、遺構・遺物ともには認められず、この時期に調査区周辺に集落が営まれた可能性は低く、生活域が他へ移動したものと考える。

Ⅳ　出土遺物

(1) 土　　器

１．Ⅰ区遺構出土遺物

SK01出土遺物（１～７）

1 は口径11.0㎝の小形の壺口縁部である。外傾し折り曲げて口縁部を形成している。やや下がったところで端面になっており、斜格子文の上に小さな円形浮文を添付している。内面は灰黄褐、外面はにぶい橙～黄灰を呈しており、石英・長石・チャートの砂粒を含んでいる。ヨコナデで仕上げる。

2 は外傾し緩やかに内湾し端部丸い。最大径のところに径４㎜前後の小孔を穿っている。２個残存している。内湾する部分はユビ成形で圧痕が多く残っている。内面はハケ整形ののちナデ仕上げ。外面はナデである。端部外側に２条の凹線が認められる。下半は残っていないが台が付くものと思われる。内面はにぶい橙、外面はにぶい黄橙である。クサリ礫を含む。

3 の体部は内湾し端部は水平に肥厚する。ナデ仕上げで端部周辺のみヨコナデを施す。外面には黒斑が見られ、灰黄橙～にぶい黄橙をしている。砂粒含む。

4 は把手部である。手捏ねで断面形は不定形である。にぶい橙で砂粒含む。

5 は直立に近く内湾する体部からくの字に外傾し端部内外に肥厚している。端部中央に浅い凹線があり、端部近くは上部に僅かに反っている。体部内外面ともにハケ整形からナデ調整で、口縁部はヨコナデである。内面は橙、外面はにぶい黄橙で、器肉は黒褐のサンドイッチ状になっている。石英・チャートなどのクサリ礫多く含んでいる。

6 は平底で外傾する体部に続く。底径7.1㎝とやや大きい。強く被熱している。内面は浅黄橙、外面は赤橙～灰黄褐である。外面はヘラで粗く調整しており、内面と底面はナデである。石英・チャートの砂粒含んでいる。

7 も底部で突出平底から外傾している。底は平たいが、僅かに上がっている。外面はヘラミガキであるが、細かいものではない。内面は黄灰、外面はにぶい黄橙で器肉は黒褐である。

SK02出土遺物（８～11）

8 は外側に開いて端部は湾曲して僅かに垂下させ端部は大きく肥厚している。端部は面にならず丸みを持っている。端部には３条の凹線があり、上下に幅・長さの異なる刻み目が施されている。端部中央には円形浮文を貼り付けている。１周せず単位があるようで、残存部では２個並んでいる。にぶい黄褐～黒褐でヨコナデ仕上げである。

9 は前期の壺体部である。内傾し２条の沈線と貼り付け突帯を有する。ナデ調整で、内面灰褐、外面褐灰で石英・チャートの砂粒多く含む。

10は直口壺口縁部で端面に１条の凹線がある。外面にも５条の凹線が施されている。ナデ仕上げののちヨコナデが行われている。灰黄褐～にぶい橙で砂粒含んでいる。

11は鉢もしくは高杯口縁部である。内湾し端部は内外に肥厚し、端面は水平で上を向く。端面には２条の凹線があり、外面にも４条の凹線が施されている。にぶい橙で、器肉と外面の一部は黒褐である。ヨコナデで仕上げる。

SK03出土遺物（12～14）

12は直線的に開く体部から短く屈曲する口頸部に続く。端部は丸く肥厚している。内外面ともにハケ整形からナデ仕上げで、口縁部はヨコナデである。内面は灰褐、外面は灰黄褐で砂粒含む。外面には煤付着している。

13は底形10.5㎝と大きめの甕底部である。平底から外傾している。内面はユビ成形で黒褐。外面は灰黄褐でヘラミガキを施す。黒斑認められ、クサリ礫含む。

14は外傾する壺体部である。にぶい橙～にぶい黄橙を呈し、クサリ礫多く含む。直線文と波状文が交互に文様帯となる。

SK05出土遺物（15～16）

15は平底から内湾する体部になる。ユビ成形ののち、内面はケズリ、外面はヘラミガキで調整する。底面もナデである。内面は浅黄橙、外面はにぶい橙で砂粒多く含む。煤付着している。

16は接合部はないが、図上で復原した甕である。底部は平たく外反し倒卵形となる。器高は高くスマートである。最大腹径は上位にある。体部上半は内傾し、くの字の頸部となる。内面の稜線はやや甘く短く外反する。端部は丸く、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面はヘラケズリで薄くしており、全体的にナデ仕上げである。外面はハケ整形からナデ仕上げであるが磨滅している。にぶい黄橙～にぶい橙で砂粒多く含む。

SK06出土遺物（17～22）

17は外反する壺口縁部で端部は下側に肥厚している。端面には大きな刻み目が施されている。ヨコナデ仕上げであるが磨滅している。器表はにぶい黄橙で、器肉は黒褐で、砂粒含む。

18は台付鉢口縁部で内湾し端部は内外に水平に肥厚する。ヨコナデで仕上げており、外面はヨコナデによって幅広の凹線状になっている。クサリ礫含み、にぶい黄橙～灰白を呈する。

19は壺か水差しの把手である。ユビ成形で内側はケズリを施している。にぶい橙～橙である。

20は直線的に開く体部で内面はケズリ、外面はハケ整形かと思われる。色調は灰黄褐で磨滅著しい。口縁部は短く外傾し端部は丸く肥厚する。端部は面となり１条の凹線があるかもしれない。

21はバチ形の口縁部で端部は上部につまみ出すように肥厚する。内外面ともにハケ整形でナデ調整を加える。口縁部はヨコナデで仕上げる。にぶい黄橙～にぶい赤褐で砂粒含む。

22は大形の甕で内湾する体部はハケ整形である。ナデ調整を加えているようであるが､磨滅している。口縁部は短く外傾し端部は内外に肥厚する。内側の方がより肥厚している。内面は灰白、外面は淡赤橙で、胎土は緻密だがクサリ礫含んでいる。

SK07出土遺物（23～41）

23は内面に突帯を有する壺口縁部で、にぶい橙をしている。外傾し突帯部から垂下し端部は内外に肥厚する。端部は中央が窪んでおり、そこに細長い刻みを装飾する。突帯端部にも刻み目が入れられている。ナデからヨコナデを行う。

24は内湾する体部から口縁部で端部は水平に内外に肥厚している。端面は平坦でヨコナデで仕上げる。外面には３条の貼り付け突帯が付加される。浅黄橙～にぶい橙でクサリ礫含む。

25は垂下する壺口縁部の破片である。内面に５条の波状文が施され、ヨコナデである。にぶい黄橙で砂粒含む。

26は壺体部の破片である。８条１組であろう４組の直線文帯である。外面はハケ整形で内面はナデ仕

上げ。灰黄褐で砂粒含む。

27は壺頸部である。１条の貼り付け突帯で指頭圧痕が付けられている。外面はハケ整形で、にぶい橙を呈する。砂粒含む。

28は壺体部で２組の波状文が認められる。にぶい黄橙～灰白でハケ整形である。

29は内湾する体部から短く外反する口縁部となる甕である。端部は上方につまみ上げており丸く納めている。薄く仕上げているが、磨滅している。口縁部はヨコナデである。色調は灰白～にぶい黄橙で砂粒含む。

30は直線的に広がる体部から外反する口縁部になる甕である。端部は上方に大きくつまみあげている。内外面ともハケ整形で、口縁部はヨコナデ仕上げ。褐灰～にぶい黄橙である。

31は内湾する体部から短く外反する口縁部を持つ大きめの甕である。内面は斜め方向のハケ整形で、外面は板ナデをナデで仕上げる。端部は内外に肥厚しておりヨコナデである。灰白～にぶい黄橙で砂粒多く含む。

32は内湾ぎみに外傾する体部から外反する口縁部を持つ甕である。端部は内側を上方につまみ上げている。内面はハケ整形でにぶい黄橙、外面はナデでにぶい橙である。口縁部はヨコナデで砂粒含む。

33甕底部で外面に刺突文ふうのヘラ記号がある。内面はナデで褐灰、外面はハケ整形でにぶい橙～黄灰である。

34～36も甕底部である。内面ヘラケズリで外面ミガキである。底は上げ底ぎみである。

37は鉢口縁部で内湾する体部から水平に開く口縁部になる。端部に刻み目を施す。内外面ともハケ整形で口縁部はヨコナデである。にぶい橙～灰白でクサリ礫含む。表面磨滅顕著。

38も鉢口縁部で**37**と似通っている。ハケ整形で口縁部はヨコナデで灰黄褐を呈する。内湾する体部から水平に開く口縁部である。水平に肥厚するが内側にも肥厚している。２次焼成を受けている。

39は鉢口縁部で内湾する体部に内外に水平に大きく肥厚する口縁部となる。端部上面は平坦でなく中央が窪んでいる。内面は斜め方向のハケ整形で、外面は斜め方向のハケ整形からヘラミガキで仕上げる。にぶい橙～灰白で砂粒多く含む。高杯かもしれない。

40は高杯筒部である。外反しており、円板充填法である。内面は絞り目残りヘラケズリ、外面はミガキである。にぶい橙で砂粒多く含む。

41は高杯もしくは鉢などの脚部である。円板充填法で内面はナデ整形である。外面はハケ性尾系からミガキかと思われる。にぶい黄橙で砂粒含む。

SK08出土遺物（42～43）

42は鉢口縁部で、内湾する体部から端部は面となり内外に肥厚する。強いヨコナデで体部外面は凹線状になっている。器表はにぶい橙で器肉は明褐灰～灰白で、砂粒多く含む。表面磨滅顕著。

43は脚部で42と同一個体かもしれない。外反する脚部で端部は肥厚する。体部はナデで端部はヨコナデで仕上げる。灰白を呈している。

SK10出土遺物（44～46）

44は外反する大形の甕口縁部である。端部は内外に肥厚しヨコナデである。内面は灰白、外面はにぶい橙で砂粒多く含む。

45は壺体部で、外面はハケ整形ののち波状文を施している。２帯ありそうである。外面は暗灰黄。

46は壺底部で平底から外傾する。内面はにぶい黄橙でヘラケズリからナデで整形している。外面はに

ぶい黄橙～灰白で細かいヘラミガキで仕上げる。底面はナデ調整。

SK13出土遺物（47～49）

47は緩やかに屈曲しつつ外傾する口縁部で、端部は内外に肥厚し刻み目を有している。ヨコナデで仕上げており。灰黄褐～オリーブ灰をしている。

48は細かい波状文を施した壺体部の破片である。12条以上認められる。にぶい橙でナデ仕上げ。

49は平底の甕底部である。内面と底面はケズリ、外面はミガキである。

SK14出土遺物（50～51）

50は甕口縁部で内傾する体部から甘い稜線となる頸部から外反する口縁部になる。端部は肥厚しており、刻み目を付けている。刻み目は細長いもので全周している。ヨコナデで、内面はにぶい黄橙、外面は暗灰である。細砂粒含んでいる。

51は平底から内湾する壺で、内面はユビ成形である。灰白～褐灰であるが、器表は淡赤橙である。２次焼成を受けている。

SK16出土遺物（52～74）

前期の土坑で多くの土器が出土している。一括出土として良好な資料である。**74**を除くとすべて壺である。**52**は外反する口縁部で端部やや肥厚している。内面は灰～灰白、外面は浅黄で、磨滅している。

53は頸部に７条の沈線を有する。ユビ成形からナデている。頸部から口縁部へ外反しており、端部は角張りぎみで端面に１条の沈線がある。灰白～浅黄橙で砂粒多く含む。

54も外反する頸部は端部は角張り１条の沈線を持つ。細かい刻み目を沈線の上に施文している。頸部は僅かに厚みを増している。外面には５条の沈線があり、ミガキを施しているようである。にぶい橙～にぶい黄橙で砂粒多く含む。

55は外反する口部頸部で６条の沈線を持つ。頸部が薄く１度厚くなってから端部は尖りぎみに薄くなる。灰白～にぶい黄橙である。

56は体部上半で肩が張りぎみである。最大腹径上に４条の沈線を施し、その上に５条の沈線で飾り、最上部の沈線を消さないように三角形の刺突文を巡らせている。ユビ成形からナデである。灰白～にぶい黄橙をしている。

57は突出平底から倒卵形の体部になり、外反する頸部につながる。口縁部は残存していない。頸部も接点はないが同一個体と思われる。２条の貼り付け突帯がある。緩やかな三角で低い突帯である。ユビ成形からナデ仕上げで外面は全体にヘラミガキが施されている。体部下半に黒斑があり、にぶい黄橙である。

58は外反する壺口縁部で端部は角張る。灰白～にぶい黄橙でナデ仕上げであろう。磨滅顕著。

59は内湾する壺体部で外面に３条の沈線がある。内面は灰白～黄灰、外面は灰白～灰黄褐で砂粒多い。

60も外反する壺で頸部に３条以上の沈線がある。外面はにぶい黄橙でハケ整形であろう。

61は直線的に内湾する壺体部で肩部に３条の沈線が施される。外面はハケ整形からミガキを施し、灰白～にぶい黄褐を呈する。内面は灰白である。

62はやや肩の張る最大腹径36.4㎝を測る球形の体部から外反するものの長めの頸部に続く。口縁部は外反し端部は肥厚ぎみに角張り、端面に大きめの刻み目ふうの刺突文を施す。施文によって端部が波打っている。頸部には中央に３条の沈線を施し上下に各々３条の貼り付け突帯を有する。突帯には刻み目を

付けたかもしれないが磨滅のため明確でない。外面はハケ整形がナデ仕上げでにぶい黄橙～灰白、内面は灰白～灰で砂粒多く含む。

63はなで肩の壺体部上半である。内湾しており、肩部に６条の沈線がある。外面はミガキであろう。内面はユビ成形で痕跡強く残る。色調は灰白で砂粒多く含む。

64は平底から倒卵形の体部になる。頸部から上は欠失している。ユビ成形からナデ仕上げで頸部下内面にはユビの痕跡が明瞭に残っている。肩部と最大腹径上部に４条沈線が各々施文されている。外面は全体に丁寧にミガキで仕上げている。

65は大形の壺で体部の接合部はないが同一個体である。口縁部は残存していない。底部は突出平底から内湾する。ユビ成形からナデ整形で外面はミガキと思われる。底面は粗いナデである。底面付近に黒斑がある。内面は灰白～褐灰、外面はにぶい黄橙～明褐灰である。頸部は外反し５条の沈線がある。１本づつヘラで描いている。頸部から肩部にかけてはヘラミガキで仕上げている。

66は平底の大形壺で、直線的に開く体部に続く。にぶい黄橙～灰で、ナデ仕上げであろう。

67は外反する頸部から口縁部で端部は角張り、１条の沈線を施してから幅広の刻み目をしている。頸部には６条の山形になる貼り付け突帯がある。頸部は縦方向のハケ整形から突帯を付加している。内面は褐灰～にぶい黄橙をしており、ナデ仕上げから突帯を付けている。口縁部に付くように内面に２条の貼り付け突帯で文様を付けている。外面は橙～浅黄橙である。

68も口縁部内面に突帯で装飾する壺である。口縁端部を欠いている。内面の突帯は２条あり、刻み目が付けられている。頸部は外反し４条１単位の貼り付け突帯を上下２帯に付けている。体部は緩やかに内湾し、肩部に３条１単位の貼り付け突帯が２単位ある。内面はユビ成形でナデ整形をしているものの指痕跡は明瞭に残る。粘土紐も明瞭に残っている。色調は灰白で砂粒多く含む。

69は中形の比較的残りの良い壺である。平底から長胴に内湾する体部で頸部は直立する。口縁部は欠失しているが、内面には装飾の貼り付け突帯が２条付いている。頸部には６条の刻み目を付けた貼り付け突帯がある。頸部内面には絞り目が残り、体部内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭に見られる。肩部には刻み目を付加した４条の貼り付け突帯がある。上下２条ずつで刻み目の位置が異なっている。上２条刻み目がある下２条には刻み目はなく、11～12個の刻み目を付けてから両側はなくなる。24.4㎝の最大腹径部分にやはり刻み目の付いた貼り付け突帯が４条認められる。上部の突帯と同じく上下で刻み目を付ける位置が交互になっている。その下には逆U字の突帯は波状文状に粘土紐を付けて装飾している。内面は灰白～褐灰、外面は黄灰～灰白で砂粒多く含む。

70は３条の貼り付け突帯を有する壺頸部である。緩やかな頸部で、稜線は認められない。外面はハケ整形であるが、山形文状に整形している。内面は工具の痕跡が残る。灰白で砂粒多く含む。

71は壺胴部で内湾し７条の貼り付け突帯が付く。内面は灰白、外面はにぶい橙である。

72は外反する壺口縁部で、内面に突帯で円形の文様を描いている。端部は中央が尖り気味である。３重弧になり、内面は灰白、外面は黄灰となる。

73は突出平底で内湾する体部になる。ナデ仕上げで、内面は灰白、外面は浅黄～灰である。

74はSK16出土唯一の甕である。如意状の口縁部で端部は丸く、刻み目が施されている。頸部はユビ成形によって形成している。頸部に１条、体部に５条以上の沈線がある。ナデ仕上げで砂粒多く含む。にぶい黄橙～灰白をしている。

SK17出土遺物（75）

古代末から中世の土師器と思われる。椀底部ではないかと思われ、平底は糸切りではないかと思われる。にぶい橙でナデ仕上げ、底部の一部はヨコナデである。

SK19出土遺物（76）

土師質の小皿である。ロクロナデで整形し、底面はヘラ切りである。内面はにぶい橙、外面はにぶい黄橙で平底から外傾する口縁部で端部は尖る。今回調査した中で最も新しい遺物である。

ピット出土遺物（77～83）

77はP03出土で鉢口縁部である。内湾する体部から口縁部になり、端部は水平に内外に肥厚する。内面はにぶい橙で外面は灰白である。端部周辺はヨコナデで仕上げる。

78は直口壺もしくは水差しで内湾する体部から直立する頸部になる。端部は内側に傾くように肥厚させている。内傾する端面になっている。内面は灰白～にぶい橙で、ユビ成形からナデ仕上げ。外面はにぶい橙でナデ仕上げ、口縁部はヨコナデ。頸部に５条以上を１単位とする直線文帯を２帯設け、体部に向かって斜格子文、そしてその下に櫛先刺突文を列点文状に施す。口縁部は10条の凹線文である。

79はP05から出土しており、甕底部である。上げ底で底面は薄く、体部は外傾する。内面は褐灰～灰白でユビ成形からハケ原体を止めて工具痕跡が残るハケ整形である。外面は灰白～灰黄褐でユビ押さえ。

80はP30出土の加飾された壺口縁部である。垂下し端部は内側に肥厚する。上面には貼り付け突帯を巡らせ、端部には刻み目を付ける。粘土紐を貼った棒状浮文を２個単位で貼付している。浮文部分には刻み目がないので、貼付してから刻み目を施している。垂下部分には端部近くに円形に近い扇形文を施し、その後内側突帯近くに径の大きい竹管文を巡らせている。端面にも同じ竹管文を施す。灰白～にぶい黄橙でヨコナデである。砂粒多く含む。

81・82はP33出土で壺口縁部である。**81**は外反し端部内外に肥厚し端面となる。外側に刻み目を有する。褐灰～灰白で、ハケ整形で端部周辺はヨコナデである。**82**は外反しない害に肥厚しヨコナデである。

83はP41出土で壺体部である。内湾しており、内面はハケ整形、外面はヘラミガキを施している。黄灰～灰白をしており、文様は上から斜格子文・径の大きい竹管文・直線文となっている。

SD01出土遺物（84～92）

84は端部が垂下する壺口縁部で、上面と端面に竹管文を施している。端面上部に刻み目をしている。浅黄橙で砂粒含む。

85は壺口縁部であるが端部を欠いている。内面に２条の突帯を付け刻み目を施している。ヨコナデで内面はミガキも行う。にぶい黄橙。

86は把手部で、断面隅の取れた台形状となり手捏ねである。にぶい黄橙をしている。

87は壺頸部で内傾する体部から外反する口頸部になる。ハケ整形で頸部に突帯を貼り、指圧痕で文様としている。灰黄褐で砂粒含む。

88は平底から内湾する体部に続く壺でユビ成形から底面も含めてハケ整形している。淡黄～にぶい橙。

89は器肉の薄い平底から外傾する壺底部でナデ整形から外面はミガキを行う。浅黄橙～灰白。

90は大形の甕口縁部で内湾する体部から短く外反する口縁部になる。頸部内面は稜があり、端部は内側につまみ上げている。ハケ整形で口縁部はヨコナデ。灰黄褐で砂粒含む。

91も甕口縁部で内傾する体部から外傾し端部は大きくつまみ上げる。ハケ整形で口縁部はヨコナデで灰黄褐である。

92は平底から外反する体部となる甕底部である。にぶい橙～灰黄褐をしており、内面は板ナデで外面はミガキか。

SD02出土遺物（93）

壺底部で平底から外傾する。ナデ整形で、外面はハケ整形である。にぶい黄橙だが底面だけ色調異なる。

SH01出土遺物（94～107）

94は壺肩部で最大腹径57㎝を測る大形品である。内湾する体部で肩部に２条の貼り付け突帯に刻み目を付ける。上の突帯に接して直交して棒状浮文（刻み目付き）を貼付する。ナデ整形で外面はミガキで仕上げる。外面はにぶい橙で、内面は橙～にぶい褐である。

95も壺胴部で38.4㎝の最大腹径部分に２条の刻み目を持つ貼り付け突帯がある。内面はにぶい橙で外面は灰黄褐を呈し、ナデ仕上げ。

96～101は壺体部の文様片である。**96**は内湾し４条１単位である櫛描き斜格子文の上に円形浮文で飾っている。**97**は外反し、ハケ整形ののちに直線文と波状文を描いている。にぶい黄橙で、内面はユビ成形からナデ仕上げ。**98**は上に直線文、下に波状文が施されている。僅かに内湾し、にぶい黄橙をしている。**99**は２条の貼り付け突帯がある。刻み目も付加されていたかもしれない。**100**は内湾し、内面はにぶい黄褐、外面は灰黄褐～にぶい黄褐をしている。ハケ整形ののち斜格子文を施し、刻み目を持つ２条の貼り付け突帯を付けている。その上には円形浮文の剥がれた痕跡がある。**101**は斜格子文を施す小片でナデ整形で、内面は黒、外面はにぶい黄橙である。

102・103は壺底部で、内面はユビ成形からナデ・ハケ整形、外面はミガキで仕上げている。**102**の外面はにぶい黄橙、内面は黄灰である。**103**は底径14.1㎝とやや大きめの底部で内面はにぶい橙、外面はにぶい黄橙をしている。

104～107は甕である。**104**は短く外反する口縁部で内面はケズリののちナデ整形で灰黄褐～橙、外面は橙でハケ整形ののちナデている。端部周辺はヨコナデで端部は角張りぎみである。**105**は口径34.0㎝と大形で内傾する体部から外反する短い口縁で端部は内外に肥厚し端面となる。内面は灰白～黄灰でヘラケズリからナデである。外面はにぶい橙でナデ整形である。口縁部はヨコナデ。**106**は外反しながら水平に開く口縁部で端部は丸く内外に肥厚する。ヨコナデで、内面は褐灰、外面は灰黄褐を呈している。**107**は底部で底面の器壁は薄く、上げ底ぎみである。ケズリののち外面は粗いミガキで仕上げている。底面もナデており煤が付いている。体部は外反し、内面は灰黄褐、外面は橙～にぶい橙である。

SX03出土遺物（108～111）

４点とも壺で、**108**は５条以上の突帯を有する外反している頸部である。にぶい黄橙で外面にはミガキも見られる。**109**は外反する頸部で11条以上の沈線を縦方向のハケ整形ののちに施す。内面はナデ仕上げでにぶい橙をしている。**110**は不安定な平底から外傾しており、灰白～にぶい橙で外面はミガキをしている。**111**は底径19.2㎝に復原される大形の底部である。底面は平坦で器壁も1.8㎝前後と厚い。ナデ仕上げで、にぶい橙～橙をしている。

２．Ⅱ区遺構出土遺物

SX01上層出土遺物（112～126）

112は外反する壺口縁部で端部は大きく肥厚し下方向に垂れる。端部には５条の凹線を施し円形浮文を付けている。全体に磨滅しているが、ヨコナデでにぶい黄橙～灰白を呈する。細かい砂粒含む。

113は垂下する口縁部を持つ壺で端部は内外に肥厚している。端面には円形浮文が付加される。ヨコナデでにぶい橙である。

114は外傾する広口壺で端部は角張り、内側に肥厚する。端部下に２条貼り付け突帯を回し、刻み目が突帯に施されている。内面はハケ整形で、外面はミガキと思われる。端部周辺はヨコナデで、にぶい橙をしている。

115は把手の付くもので片口になっている。把手自体は外れており、118の把手が同一個体で付くかもしれない。内面は板ナデでにぶい橙、外面はハケ整形で浅黄橙、口縁部はヨコナデ。体部に孔を開けて把手を挿し込んでいる。端面に沈線がある。

116は内湾する体部から口縁部で端部は丸く納めている。イイダコ壺のような形態を採るが断定しかねる。細頸壺などかもしれない。内面はにぶい黄橙～にぶい橙で細いヘラでなで上げている。端部のみヨコナデで仕上げる。外面は灰白である。

117は僅かに内湾ぎみに外開きの直口壺か無頸壺口縁部であろうか。端部は角張り水平になり内外に肥厚する。内面は黄灰～にぶい黄橙で細かいハケ整形である。外面は灰黄褐～にぶい黄橙で粗いハケ整形で上下２段に刺突文を押している。端部周辺はヨコナデ。

118は把手部である。手捏ねで断面長楕円形である。灰白～にぶい橙で厚みは1.2㎝となる。

119は無頸壺口縁部で内湾しており、端部は面となり内外に肥厚する。内側に向かって面をなしており、端部外側には刻み目を付ける。端部下に２条の断面三角形の突帯を巡らせ、やはり刻み目を付けている。内面は浅黄橙で外面は灰白である。

120も無頸壺口縁部小片である。内湾し端面は内側に向いている。端部は内外に肥厚し、外側端部下には２条の突帯をつける。ヨコナデで仕上げ、刻み目は有さない。にぶい橙である。

121は平底から外傾する壺底部である。内面はユビ成形からナデているが、指圧痕明瞭に残る。オリーブ黒～褐灰をしている。外面は灰白～にぶい黄橙で板状工具を使って整形している。

122は頸部の短い甕で頸部に指圧痕の付いた突帯を巡らす。体部は直線的に開く。口縁部は短く内外に肥厚する端部に続く。端部に２条の凹線を巡らせ上下２段に小さい円形浮文を付ける。灰白～にぶい黄橙で砂粒多く含む。

123はくの字で端部は上方につまみ上げる。端面に１条の凹線がある。灰白～褐灰で砂粒含んでいる。

124は甕底部で平底から外傾する。内面はにぶい黄褐～灰でヘラケズリ、外面は暗灰黄～オリーブ黒でヘラミガキである。底面はナデ仕上げ。

125は如意状に近い頸部内面の稜線が甘い甕である。端部は丸く肥厚している。浅黄橙～灰白で外面には黒斑が認められる。内面はケズリ、端部周辺はヨコナデである。

126は脚台部で外反しており、端部は角張り、磨滅著しい。にぶい黄橙～にぶい褐を示す。

ピット出土遺物（127～130）

127はP03出土で内湾する体部から短く外反する口縁部になる。端部はつまみあげている。にぶい黄橙で外面には黒斑がある。内面はハケ整形、外面はナデ、口縁部はヨコナデである。

128はP05出土で端部が垂れる壺口縁部である。端部は肥厚し、端面に刺突による長い刻み目を羽状に施し、中央に円形浮文を付けている。にぶい褐でヨコナデである。

129はP19出土で内湾する体部から外反する口縁部になる甕口縁部である。端部は内側に肥厚しつまんでいる。にぶい黄橙で、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデ。

130はP31出土で細頸壺であろう。反りぎみに外傾し端部周辺は厚くなり角張る。外側端部には刻み目が入れられている。端部下に細く高い突帯が１条存在する。橙～灰黄褐で端部周辺はヨコナデ。

SX01出土遺物（131～137）

図化した７点は前期の甕136を除いた６点すべて壺である。131は垂下する口縁端部で上部には突帯が付いている。にぶい黄橙で磨滅著しい。端部は下方に肥厚し断面三角形になる。

132は外反する口縁部で端部は角張る。にぶい黄橙で端部周辺はヨコナデである。

133は頸部で外面に３条の貼り付け突帯が巡る。貼り付け後ヨコナデで仕上げている。口縁部上端に突帯を付け、そこから垂下する口縁部が付くものと思われるが残存していない。灰白～にぶい黄橙。

134は体部の破片で、内面はハケ整形。外面には７条の波状文と８条の直線文が残る。さらに上下にも文様帯が続いていそうである。にぶい橙で砂粒含む。

135も文様のある体部で、外面には黒斑がある。残存部上から９条波状文―８条直線文―９条波状文―８条直線文―７条以上は状文となっており、下の２帯の上に竹管文が施されている。外面は縦方向のハケ整形で、内面はナデである。灰黄褐を呈する。

136は弥生前期の甕口縁部である。如意状口縁で端部は尖りぎみに丸い。３条の沈線がある。橙～にぶい橙で砂粒多く含む。小片のため、口径の復原は困難である。

137は僅かに上げ底となり体部は外傾する。磨滅している。灰白で砂粒含む。

SK01出土遺物（138～141）

138は大きめの壺で頸部から上を欠く。平底から楕円球形の体部になる。ユビ成形からナデ整形で、外面はハケ整形からナデである。内面は灰～灰白、外面はにぶい褐～にぶい橙である。最大腹径38㎝の上である肩部に５条の貼り付け突帯があり、さらに上に間をおいて４条の貼り付け突帯がある。

139は頸部で８条の貼り付け突帯がある。比較的間を開けて突帯を付けている。体部にヘラ先で先に印を付けて、そこに突帯を回している。橙で、外面はハケ整形している。

140は如意状口縁の甕で端部は丸い。３条と少し開けて３条の計６条の沈線が施されている。外面はにぶい黄橙、内面は灰白でナデ仕上げ。

141はやや角度の甘いL字状口縁の甕である。端部は丸い。直線的に底部に向かう体部で角度は緩やかである。残存部までで16条の沈線が認められる。上から12条と残存部下４条の間は少し間隔が広くなっている。内面は灰白～浅黄橙、外面はにぶい黄橙で砂粒多く含む。磨滅のため端部の刻み目の存在は不明瞭。

SK04出土遺物（142～153）

142は内傾する体部から外反して口縁部に続く。端部は上に尖るように角張る。頸部に２条の沈線がある。外面はハケ整形で、灰白～にぶい黄橙をしている。

143は８条の沈線を持つ壺体部である。外面はにぶい橙でナデ整形、内面は灰褐でナデと思われる。

144は鉢口縁部であろう。端部角張り肥厚し、外側に刻み目を有する。１条の沈線があり黒斑認められる。外面はにぶい黄橙～灰、内面は浅黄橙。

145～147・152・153は底部である。**145**は平底から外傾する小形の底部で、外面浅黄橙～灰、内面灰白で、黒斑がある。**146**は平底から外反する。外面は灰白～黄灰で縦方向のハケ整形、内面はにぶい橙でナデ仕上げ。底面未調整。**147**は底径14.9㎝と大きめの平底で中央がやや上がっている。上がった部分はナデ整形によるもので、周囲は未調整である。体部は外傾しナデと思われる。外面はにぶい黄橙～暗灰で内面は灰白である。**152**は平底から外傾する。内面はにぶい褐で外面は橙～浅黄橙でナデ整形。底面未調整。**153**は焼成後に底部穿孔している。上げ底から外傾する体部で外面は橙で縦方向のハケ整形、内面は浅黄橙である。

148～151は甕口縁部で如意状で端部に刻み目を持つ。**148**は７条の沈線が体部に見られる。直線的な体部で端部は丸い。外面は橙、内面は浅黄橙でナデ整形である。**149**は内傾する体部で８条の沈線がある。端部は角張りぎみでにぶい黄橙～褐灰をしている。**150**も直線的に延びる体部で外面ハケ整形ののち８条沈線を施す。暗灰～にぶい黄橙で内面はナデである。口縁部は短く折り曲げ、端部角張る。**151**は直線的な体部で８条の沈線がある。浅黄橙～にぶい黄橙でナデ整形である。

SK02出土遺物（154～155）

154は外反する頸部から短く水平に開き、端部内外に肥厚する。灰白を呈しヨコナデで仕上げる。

155は頸部に幅広の突帯を有し、頂部に指頭圧痕で押圧して文様とする。内湾する体部から外反し端部内外に大きく肥厚する。淡黄～橙で口縁部はヨコナデ、体部はナデである。

SK05出土遺物（156～173）

156は復原して完形となった小形壺である。平底から最大腹径の張った倒卵形の体部、外反する口縁部となる。端部は肥厚ぎみに丸い。ユビ成形から体部内面上半はナデ、下半はハケ整形する。外面はハケ整形からミガキであろうが、磨滅顕著で器表が剥離している。頸部のみハケメがよく残っている。口縁部はヨコナデでにぶい橙～橙をしている。

157は大きく外反する壺口縁部で端部の一部を欠く。にぶい褐～にぶい橙を呈しヨコナデで仕上げる。

158は外反する口縁部で垂下ぎみに開いている。内面には１条の突帯を付ける。頸部にも２条の貼り付け突帯が付く。にぶい黄橙～橙を示しヨコナデで仕上げる。

159は口径31.5㎝と大形の鉢（もしくは無頸壺）で内湾し端面は水平で肥厚する。外面に高めの突帯を３条付ける。３条の両端２条には刻み目が認められるが、すべてに施文されていたと思われる。明黄褐でヨコナデ仕上げである。

160～167は壺体部の文様片で、大半はにぶい黄橙～橙を呈する。**160**はハケ整形から斜格子ののちに７条以上の直線文を施す。**161**は７条以上の波の大きな波状文である。**162**は細かい原体を使用している。上から10条以上の波状文、20条以上の直線文、10条以上の波状文となっている。上の２帯は接しており、波状文の方が後に施文している。**163**も細かい原体で13条以上の波状文と６条以上の直線文が施される。**164**はハケ整形ののちに９条以上の直線文、８条以上の波状文、７条以上の波状文を施し、上２帯の間に竹管文を配している。**165**も細かい原体で６条以上の波状文である。**166**は10条以上の直線文と斜格子文である。**167**はハケ整形の後、下半はミガキで仕上げている。文様の大きな斜格子と９条直線文を施し、直線文の下に刺突文も施す。

168・169は底部で、**168**の底面はナデ、外面はミガキである。**169**は内面ケズリである。

170は甕口縁部小片である。外反し端部は角張り、内側につまみあげている。ヨコナデでにぶい黄橙をしている。

171は非常に薄手の甕で、内湾する体部から大きく外反している。端部は丸く納める。底部169が同一個体かと思われる。強く焼けており赤橙に変色している。磨滅顕著。

172は高杯で、内湾する体部から水平に口縁部が開く木器模倣形である。口縁部は内側にも突出している。端部は角張り、端面に円形浮文を付加している。単位（３個１単位？）があるようで間隔が開いている。橙をしている。

173は土器片を利用した紡錘車である。4.65㎝×3.8㎝の楕円形で中央に孔径0.55㎝の円孔を両面から開けている。厚さは1.05㎝と厚めである。

SK07出土遺物（174～176）

174は垂下する壺口縁部の一部である。上部に刻み目の付く突帯を１条存在する。細かい丁寧な刻み目で浅黄橙である。

175は外反する壺口縁部で端部は下方に垂下するようにつまみ出している。端面に円形浮文の剥がれた痕跡が残る。にぶい橙でヨコナデ仕上げ。

176は甕底部で平底から外反する。内面と底面はナデ、外面はミガキである。にぶい黄橙。

SK08出土遺物（177～187）

177は垂下する口縁端部で角張りぎみである。端面の稜線を境に利用して上下に綾杉状に細長い刻み目を入れてから、上下ともに竹管文を並べる。

178は内傾する肩部から直立ぎみの頸部となる。肩部に11条の直線文を入れ、頸部に２条の貼り付け突帯を置く。内面はにぶい橙、外面は褐灰～にぶい褐である。

179は無頸壺で外傾して端部近くで屈曲し短く内傾する。端部は丸く、上端に細かい刻み目を施す。径の大きくなる外側屈曲部にも刻み目を付けている。その下に２個１対の孔径４㎜の円孔が穿たれている。ヨコナデ仕上げで内面は灰白～明褐灰、外面はにぶい橙である。

180は内湾する口縁部で端部は内外に肥厚して水平な面となる。外側に１条の突帯があり、端部外側と突帯に刻み目が入れられている。灰白～にぶい橙で砂粒含む。ヨコナデである。

181は内湾する壺体部でハケ整形である。磨滅しているが、波状文と直線文が施されている。灰白。

182は平底から外傾する大きめの底部である。灰白で内面はナデ、外面は粗いミガキのようにヘラと思われる工具で調整している。

183・184も壺底部で平底から外反する体部になる。底面はナデ調整し僅かに上げ底になる。外面はミガキである。183は内面浅黄橙、外面灰白～黄灰、184は内面にぶい橙､外面褐灰である。内面ハケ整形。

185は口径40㎝を測る大形の甕である。内湾する体部から外傾し端部内外に肥厚する。内面はユビ成形で口縁部はヨコナデである。にぶい橙。

186は突出した小さな平底から外に開く。胎土・焼成など他の土器と差がないことを思えば天地逆で蓋とすべきであろうか。ハケ整形ののち、外面はナデている。褐灰～灰白。

187は甕底部で内面はナデ、外面は黄灰でミガキ、内面は灰でケズリである。平底から内湾する体部になる。

SK12出土遺物（188～189）

188は外反する壺頸部で２条の突帯を有する。外面は縦方向のハケ整形で灰黄褐、内面はナデでにぶい黄橙～褐灰を呈する。

189は高杯裾部と思われる。僅かに外反し端部は内側に肥厚し端面となる。端部周辺のみヨコナデで

仕上げる。内面は明褐灰～灰白、外面は黄灰である。

３．Ⅲ区遺構出土遺物

SX01出土遺物（190～206）

190は外反する口縁部で端部角張る。端面になり中央に１条の沈線がある。断面は灰で器表は灰白で砂粒多く含む。

191は内傾する頸部からくの字に外傾し端部断面三角に肥厚する。端面には６条前後の波状文で装飾し２個１対の竹管文付きの円形浮文を回す。端部内面にも４条の波状文で加飾する。頸部は上から４条直線文、８条波状文、６条直線文、６条波状文で飾っている。灰白で、砂粒多く含み装飾の割りには胎土が悪い。口縁部はヨコナデである。

192は短い頸部から外反し端部内外に大きく肥厚している。端面に３条の凹線を施しヨコナデである。にぶい橙で砂粒含んでいる。

193・194・195は体部で文様が残されている。194は外傾しナデ仕上げで、上から７条の直線文、条数不明の波状文、５条の直線文、斜格子文になっている。表面磨滅著しいが、黒雲母・長石の砂粒含み、にぶい黄橙～黄灰を呈している。河内からの搬入品の可能性がある。195も外傾しており、ハケ整形ののちに施文している。上から11条以上の波状文、13条の直線文、13条の波状文、８条以上の直線文になっている。にぶい黄橙で細砂含んでいる。193は内湾する体部で頸部下と思われる部分に三角形に面的に窪ませた刺突文を連続して巡らす。その下に４条以上の直線文の上に円形浮文を巡らす。その下に斜格子文、３条以上の直線文を施している。にぶい黄橙で細砂を含む。

196は底面が歪で上げ底になっている。僅かに内湾する体部に続く。内面は板ナデ、外面は粗いヘラミガキで調整しているが平滑である。器壁は黒で器表はにぶい橙～にぶい黄橙を呈している。

197は平底であるが、周囲が僅かに高くなるドーナツ状の底部である。体部は内湾する。灰白で、器壁はやや暗く砂粒多く含む。

198は内湾する体部から短い頸部で大きく屈曲し外傾する口縁部で端部角張り内外に肥厚する。端面は凹んでおり凹線状になっている。灰白で細砂含む。

199は大きく外反する口縁部で端部角張り中央やや凹んでいる。内面はケズリで、外面はナデ、口縁部はヨコナデである。にぶい黄橙で細砂多く含む。

200は外傾し端部内外に肥厚している。端面には２条の凹線がありヨコナデである。橙～黄灰で砂粒多く含む。

201は平底から外傾しており、底中央を焼成後に径６㎜の円孔を穿っている。にぶい橙～灰黄褐で細砂多く含み、焼成良好である。外面はハケ整形から板ナデ・ナデで整形しミガキで仕上げる。内面はナデである。

202は平底から直線的に開いている。底面から体部下部に黒斑が認められる。ユビ成形からナデ、外面はヘラミガキで仕上げている。内面はヘラケズリである。にぶい黄橙～暗灰で細砂含む。

203は平底から外傾する底部で強く被熱している。にぶい橙～黒で砂粒含む。外面はハケ整形。

204はつまみ部だけの破片である。にぶい橙で砂粒含むもので体部内湾する。

205は土器体部を利用した紡錘車である。周囲を打ち欠いて作ったもので、製品の一部を欠いているが、径5.25㎝と思われる。中央に３㎜の円孔が開けられている。色調・胎土から中期の土器と思われる。

206は小片であることから時期・天地など確実ではない。外傾する体部に２条の突帯が付き、小さな刻み目を施す。ヨコナデで仕上げ、灰白を呈し細砂を含む。下側には円形の上側には方形の透孔が存在しそうである。透孔の大きさ・個数などは小片のため不明である。

SX02出土遺物（207～209）

207は内湾する体部から短く外傾する口縁部になる。端部はバチ形に肥厚している。ヨコナデによって頸部が薄くなっている。表面磨滅しているが、内面はハケ整形かと思われる。色調は器表がにぶい橙で器肉が黒褐である。金雲母・長石の砂粒多く含んでおり、地元産ではない。讃岐からの搬入品であろうか。口径29.3㎝と大きい。

208は不安定な平底から内湾する体部になる。底部中央に焼成前の穿孔がある。外面はタタキを縦方向のハケ整形で消している。内面はラセン形に近い不定方向のハケ整形である。工具痕を残しており、７本／㎝とやや粗い原体である外面はにぶい黄橙で、断面は黒で、クサリ礫含んでいる。

209は体部の小片である。内湾しており、内面ヘラケズリからナデ、外面ハケ整形である。10条以上の細かい直線文と波状文が施されている。器表はにぶい黄橙～灰黄褐、器肉はオリーブ黒で、チャート・石英などのクサリ礫を含んでいる。

SX03出土遺物（210～211）

210は突出平底の底部で体部内湾する。底部ユビ成形からナデをする再成形である。２次焼成を受けており、外面は橙～にぶい橙で、内面はにぶい黄橙である。クサリ礫を含み、表面磨滅している。

211は細身の体部で平底から内湾している。内面はユビ成形・ケズリからナデ、外面はヘラミガキで仕上げている。底面との接合部はユビによって成形している。器表はにぶい黄橙～浅黄、器肉はオリーブ黒で、クサリ礫含む。外面に大きな黒斑がある。

SK01出土遺物（212～218）

212は外反する口縁部で頸部に断面山形の貼付突帯が４条配されている。口縁端部付近でやや開き端部は角張り、端面に１条の沈線を有する。口縁部は歪になっており、端面には大きな刻み目が施される。にぶい黄橙で長石・チャートなどの砂粒多く含む。

213は外反する頸部で口縁部を欠いている。頸部に５条の貼付突帯を付けている。２次焼成を受けており、赤橙～にぶい橙をしている。砂粒多く含む。

214の外面はにぶい橙でヘラミガキで仕上げる。内面は橙でユビ成形からナデである。最大腹径15.5㎝とやや細身である。砂粒多く含む。

215は内湾し最大腹径のすぐ上の位置に６条以上の沈線を施す。内面はユビ成形からナデ、外面はハケ整形からナデ・ミガキを行っている。外面の方が色調はやや暗く、橙～にぶい黄橙をしている。砂粒多く含む。

216は平底から外傾しており、極端に部厚くはない。ユビ成形からナデている。底面はハケをナデ消しているように思われる。器壁は灰で他はにぶい黄橙～灰白で大きめの砂粒多く含む。

217は口径の大きい（浅め）大形の甕で体部は内湾する。口縁部に向かって直立し、短い如意形の口縁部になる。端部は丸く、刻み目を入れている。ユビ成形ののち内面はナデで、外面はハケ整形である。頸部下に２条１対の沈線を入れている。ハケ整形ののちに施踏みし重なり合っている部分があるが、４対８条の沈線が施されている。口縁部はヨコナデでにぶい黄橙を呈し砂粒多く含む。

218は口縁部がほぼ完存し体部から底部にかけては約半分残存している。底径8.5㎝とやや大きめの平

底から下半は内湾し上半は直立する体部になる。口縁部は短く如意状に外反し端部丸い。端部は丸く刻み目を有している。口縁部は歪で楕円形になっており、長径24.2㎝、短径22.9㎝ となる。器高は27.85㎝と高く、口径との比率から長胴に見える。内面はユビ成形から強いナデを施し、外面はハケ整形からナデ調整している。底面には粘土紐の痕跡が看取され、ナデ仕上げである。外面の一部は橙であるが、全体的には灰白を呈す。石英・チャート・長石の砂粒多く含む。

SK03出土遺物（219）

219は底部で焼成後に穿孔している。平底から内湾している。外面は斜め方向から底部近くでは縦方向のハケ整形で底部端部のみナデ仕上げである。にぶい橙で長石などの小石粒と砂粒多く含む。内面はナデ。

ピット出土遺物（220～222）

220は内湾する体部から外反する口縁部で端部丸く、僅かに下方につまみ出している。体部はナデで口縁部はヨコナデである。にぶい橙で端部周辺のみ煤が付着している。雲母などの細砂粒少量含む。

221は体部破片でハケ整形の上に竹管文を施す。内傾しており、器壁は黄灰、器表はにぶい褐で砂粒含む。

222も小片で全体像は不明ながら刺突文を２条施している。外面橙で内面黒褐で砂粒含む。

SD01出土遺物（223～239）

223は大きく外反する口縁部で端部は内外に肥厚するものと思われる。下側端部は欠失している。上部端部には刻み目が施され、その内側には刻み目を付けた突帯が巡っている。頸部には断面三角形の突帯が２条以上付けられている。内外面ともにハケ整形からヨコナデで、内面にはミガキも行われている可能性が高い。にぶい橙で、一部と器壁は灰黄褐で、砂粒多く含んでいる。

224は外反する頸部から口縁部で、端部を欠いている。口縁部内面に突帯を有し、刻み目を付加している。頸部には２条の貼付突帯を施す。断面三角形で幅広く、ヨコナデで仕上げる。全体的にヨコナデであろうが磨滅顕著である。橙で砂粒多く含む。

225は口縁部上部に突帯が巡らされ、端部に刻み目が付加される。口縁部は斜めに内湾して垂下し端部内外に肥厚する。端面には列点を持つ幅の広い刺突文を施している。器表はにぶい橙で、器壁は浅黄で部分的に黒になっている。ヨコナデで、砂粒多く含む。

226は算盤玉状の体部に平底が付く。底部は中央に円板充填のように粘土をはめている。器肉は黒褐で器表は橙～暗灰黄で砂粒多く含む。軽侮近くの内面は強いナデである。磨滅著しい。

227は器種不明である。体部に楕円形に粘土が剥がれたような円孔が生じている。把手が外れたようにも思えるが、粘土が楕円形になっていたかもしれない。非常に歪である。にぶい黄橙～黄灰で黒斑がある。粘土紐痕が見られ雑な作りである。ハケが僅かに見られる。

228は２次焼成を受けている。接合点はなかったが図上復原している。僅かな上げ底から算盤玉状に内湾する体部から短い口縁部が付く。頸部は外反し口縁部はさらに強く外反し、端部は垂下し丸く納めている。磨滅顕著であるが、ユビ成形ののちナデ、そしてヘラミガキで丁寧に仕上げているようである。最大腹径28.8㎝と口径12.25㎝を大きく凌駕している。器高27.15㎝よりも数値は大きい。にぶい橙～橙で、器壁や部分的に灰黄である。砂粒多く含む。

229は大形壺底で平底から外傾している。底を中心に強く被熱している。内面には有機質が付着しており、砂粒含んでいる。磨滅顕著であるが、内面はハケ整形である。SK02出土の土器と接合している。

にぶい橙～灰黄褐である。

230は被熱している底部で平底から内湾している。ユビ成形からナデ整形し、外面はヘラミガキで仕上げている。淡黄で被熱した部分は橙になっている。砂粒多く含んでいる。

231は完存する底部で平底から外反ぎみに開く。器壁は薄く仕上がっている。ユビ成形からナデ仕上げしている。明黄褐～淡黄で黒部分が内外にある。砂粒多く含んでいる。

232は大形の甕で表面磨滅著しい。内湾し最大腹径が口径より僅かに大きい32.95㎝の体部に頸部内面の稜線が鋭くなる。口縁部は短く外傾し端部内外に肥厚する。内面はケズリで外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。器肉は黄灰～灰、器表は明黄褐で砂粒含む。

233は内湾する体部に短く外傾する口縁部が付く。端部は角張っている。明黄褐で部分的に黒になる。ユビ成形からナデ整形であるが、薄く仕上げられている。口縁部はヨコナデで砂粒含む。

234～236は似た形態の肩の張る甕である。**234**は内湾する体部に短く内湾ぎみに開く口縁部となり、端部内側に肥厚する。ユビ成形から強い板ナデで整形しており、ヘラケズリ状の痕跡が残っている。頸部に工具痕が明瞭に認められる。口縁部はヨコナデであるが、丁寧でなく歪んでいる。器肉は灰、器表は浅黄橙で砂粒含んでいる。**235**は**234**より口縁部・体部が歪んでいる。肩の張る内湾する体部から短く内湾ぎみに開く口縁部になる。端部は内側につまみ出し肥厚している。ユビ成形から強い板ナデを施す。頸部下の体部内面には指圧痕が残る。灰白～褐灰で、被熱した部分は明黄褐になっている。**236**は内湾ぎみながら直線的に広がる体部に短く内湾する口縁部となる。端部は肥厚し浅い沈線を有する。ユビ成形からケズリをし、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。口縁部内面には成形時の指圧痕が認められる。橙～褐灰で砂粒多く含む。口縁部は大きく歪んでいる。

237は口縁端部の残存部分が少なく口径を復原することは困難である。ユビ成形からナデており、口縁部のみヨコナデである。器肉は黒褐で器表はにぶい橙～褐灰で、砂粒含む。

238は甕底であるが、焼成後に中央からずれた位置に穿孔を加えている。底面を中心に強く被熱しており、甑として使用されたものか。上げ底から内湾ぎみに開き、砂粒多く含んでいる。色調は灰白が基調で、被熱した部分は橙～にぶい橙で、底面は黒になっている。黒斑がある。ナデののち外面にはミガキがある。

239は平底から外傾しており、底部中央に穿孔の意図がある。底面からは径・深さともに８㎜の円孔を開けようとしている。内面にも竹管状に窪んでいるが開けてはいない。内外面ともに黒斑状の黒部分がある。にぶい黄橙で砂粒多く含む。ユビ成形から底面内面はナデで体部はいたナデで整形し外面はミガキを加えている。

SD02出土遺物（240・241）

240は最大腹径25.45㎝とあまり広がらないスマートな体部で内湾する。口頸部は外反し端部内側が肥厚し端部は尖りぎみである。肩部と頸部に２条ずつの沈線が施される。いずれも沈線間は開いている。ユビ成形からナデ整形で、外面はミガキで仕上げる。肩部に黒斑がある。にぶい橙で部分的に灰白で砂粒多く含んでいる。

241は平底から内湾ぎみに延びている。底部端部はやや突出している。黒斑があり、外面はにぶい橙、内面は灰黄褐で砂粒含む。外面はハケ整形で器面は丁寧である。残存良好である。

SD05出土遺物（242）

242は平底から外反する体部に続く。底面近くはユビ成形からナデている。外面はにぶい橙で内面は

灰黄褐で砂粒多く含む。前期末の壺である。

SD03出土遺物（243～249）

243は外反し端部が垂下し丸く納める口縁部である。端面には３条の沈線があり、刻み目を施している。円形浮文が剥がれた痕跡があるが、１ヶ所だけである。上部に突帯が付いており、丸い端部に刻み目を入れている。突帯内側に２個１対の小さな穿孔が見られる。蓋との接合部である。小片であることから何ヶ所あるかは不明である。にぶい橙～灰黄褐でクサリ礫含む。

244は平底から外傾している。緩やかに広がることと底径が大きめであることから壺と思われる。底面はナデで、外面はミガキである。にぶい橙～にぶい黄橙でクサリ礫含む。

245は外反する裾部で端部は大きく上につまみ上げている。中央付近外面に突帯を付加する。ユビ成形ののちナデている。ヨコナデで仕上げているが、磨滅のため範囲は明確でない。黒斑がある。器肉は灰白～灰で器表はにぶい橙である。クサリ礫含む。

246は底部を欠く甕でやはり長胴で器壁薄い。口縁部は短く外反し端部を上方につまみ上げており丸い。磨滅著しいがユビ成形から内面は板ナデ、外面はハケ整形からナデ・ミガキと思われる。器表はにぶい黄褐で、内面は浅黄橙～橙で、クサリ礫含む。

247は平底から長胴で内湾する体部で、最大腹径は上位にある。底部中央に焼成後の穿孔が認められる。肩は丸く、頸部は明瞭で口縁部は短く外反する。端部は角張り、上方につまみあげている。ユビ成形からハケ・ナデ整形で、口縁部のみヨコナデで全体に薄く仕上げられている。外面は一部ミガキも行われているかもしれないが、磨滅している。にぶい黄橙～にぶい橙で砂粒含んでいる。

248も文様片でやや内湾する。竹管など２本１対の施文具を使用している。沈線と山形に近い波状文が施されている。前期の壺体部であろう。

249は列点文を巡らす文様片で黒斑がある。砂粒やや多くにぶい黄橙～にぶい橙を呈する。

SD07出土遺物（250～259）

250は外反し端部内外に大きく肥厚する加飾の壺口縁部である。端面には４条の凹線があり、先に細くて浅く長い刻み目を付けている。上半には上の凹線にほぼ接して全面に円形浮文を巡らせる。下半は全体の６ヶ所に２個１対の円形浮文を付加する。上の端部には刻み目を施す。内面には端部と同じように断面三角で上部が丸い突帯を２条付けている。端部には刻み目も施す。２条の突帯の間に２個１対の小円孔を穿っている。端面下半の円形浮文に呼応する位置に配されている。にぶい橙で細砂含む。

251は外反する口頸部で端部を欠いている。頸部には断面三角の２条の細めの突帯が回っている。ハケ整形ののちナデで、ヨコナデで仕上げる。端部内面には２条の断面半円の突帯があり、刻み目が施されている。下方に垂下する部分が欠失している。突帯間に小円孔が貫通している。一個しか残存していないが、２個１対になろうか。にぶい橙で雲母などの砂粒含む。焼成良好。

252は垂下する口縁端部であろう。端面には３条の凹線があり、その上に竹管文付きの大きめの円形浮文が施される。にぶい橙で細砂含む。

253は内面に細い３条の突帯を付ける外反する口縁部である。断面半円で刻み目を付ける。突帯間に２個１対の小円孔を各々開けている。橙で細砂含み、ヨコナデである。

254は外反する頸部で指頭圧痕の付いた貼付突帯が巡っている。にぶい橙で砂粒含む。ヨコナデ。

255は内湾する壺胴部の破片で、器肉は暗灰、器表は淡黄である。内面はユビナデの痕跡が明瞭に残っている。上から６条以上の櫛描き直線文、４条の波状文、３条以上の直線文で装飾している。

256は高杯で口縁端部の開く部分を欠いている。直線的に開き、内面に断面方形の突帯を有し、水平ぎみに広がり垂下するか。ハケ整形ののち内面はミガキで仕上げる。口縁部はヨコナデ。にぶい橙で砂粒含む。

257は甕底部であろう。上げ底から広がる。ユビ成形からナデである。底面も同じである。砂粒多く含み、にぶい褐で内面だけ黒褐である。

258はドーナツ底で、器表に化粧土を塗布している。器肉は暗灰で、器表は橙～にぶい黄橙を呈する。体部は外傾する。ナデ仕上げと思われるが、表面磨滅著しい。黒斑が認められる。

259は小さめの平底から開き内湾する体部になる。ハケ整形で内面は板ナデである。にぶい橙で細砂含む。

北半部礫層上落ち込み出土土器（260～310）

260～287は壺、288～301は甕、302～310は高杯である。

260は外反する口縁部で端部内外に肥厚する。端面に細長い刻み目を入れている。橙～にぶい黄橙でヨコナデ仕上げ。端部に黒斑あり。

261は外反し垂下する口縁部で端部は肥厚する。端部は貝殻状のもので押圧した痕跡（刺突文）がある。外面はハケ整形で全体にヨコナデが加えられる。灰黄褐をしている。

262は外反する口縁部で端部大きく内外に肥厚する。４条の凹線文ののち細長い大きな刻み目状の斜線を施してから長さの差がある棒状浮文を貼付する。２個か３個１単位（残存部は３個）と思われ、復原すると９ヶ所になる。頸部には指頭圧痕の付いた幅広の突帯が付く。にぶい褐～灰黄褐をする。

263は口縁端部の破片で端面に12条の波状文を有する。橙をしており、ヨコナデである。

264は外傾し端部が大きく肥厚する口縁部で、端面に３条の凹線があり、その上に棒状浮文を４個貼付している。にぶい黄橙でヨコナデ仕上げ。

265は端部が下方向に垂れるもので端面に５条凹線があり、斜線文を加える。端部内側に小孔があり、蓋との結合であろうか。

266は頸部に２条の突帯を持つ。軽侮外面はヨコナデ、内面はナデ。体部は内湾しハケ整形である。外面は上から直線文―波状文―直線文―円形浮文―波状文と装飾している。磨滅しており、単位は上の直線文が７条であることしかわからない。明黄褐～浅黄橙である。

267は外傾する口縁部で端部肥厚する。浅黄橙を呈し、ヨコナデである。器肉厚い。

268は外傾し端部肥厚するもので、端面に円形浮文を付けている。ヨコナデでにぶい橙を呈する。

269は外反し端部近くで直立する広口壺で、端部は角張り、立ち上がる部分は面になっている。内外面ともにハケ整形で、端部周辺はヨコナデで端面には４条の凹線がある。橙で砂粒多く含む。

270は垂下する端部で肥厚している。上に貼り付け突帯があり、刻み目を入れている。垂下する上面には円に近い扇形文を施し、端面には刺突文を入れる。灰黄褐～オリーブ黒で河内からの搬入品である。

271は垂下する口縁部で、端部肥厚し端面には貝殻で押圧し施文している。内面には２条の突帯を付け、磨滅しているが刻み目があるようである。オリーブ黒～にぶい黄橙でヨコナデである。

272は外反し端部肥厚する。内面に高い突帯を付け刻み目が施される。橙でヨコナデ仕上げ。

273は外反する頸部で２条の突帯が付く。頸部にある突帯は指頭圧痕の付く低い突帯で、その上の突帯は断面三角形である。ハケ整形からナデ・ヨコナデ仕上げである。

274～281は文様片で、274は頸部の小片で４条の貼り付け突帯で上に棒状浮文を付ける。ヨコナデで

にぶい橙である。275は内湾し８条波状文―10条直線文―８条波状文を施している。276は斜格子文と円形浮文が付けられている。にぶい橙で砂粒含む。ナデ仕上げである。277はハケ整形ののち外面はミガキ、内面はナデである。肩部に刺突文があり、にぶい橙である。278はハケ整形後ナデ調整で、17条以上の直線文と８条以上の波状文が見られる。にぶい黄橙～灰をしている。279もハケ整形からナデで橙を呈する。残存部で６条以上の直線文―８条波状文―斜格子文で飾る。280はナデ整形で内湾する。にぶい黄橙で直線文の上に円形浮文が付く。比較的大きめの浮文が４個残存している。281は斜格子文―６条直線文―斜格子文で、橙でクサリ礫含んでいる。上の斜格子文は下の方が開いている。内面はナデで磨滅顕著。

282～284は無頸壺である。282は内湾し端部が最も厚くなり角張る。端部周辺はヨコナデで端部下に２条の突帯が付く。橙でクサリ礫含んでいる。283は282より口径が大きい。内湾し端部角張る。にぶい褐で外面ハケ整形、内面ナデ、端部周辺ヨコナデである。端部下に２条の突帯を持ち、刻み目を入れている。284は内傾し端部丸い。ヨコナデで２条の突帯を端部下に持つ。

285は外反し端部が内外に肥厚して水平面になっている。橙でヨコナデ、外面の端部下に３条の低い突帯を付け指頭圧痕を施す。

286・287は壺底部で平底から内湾する。ユビ成形から外面はミガキ、内面はハケ整形である。ともににぶい黄橙で砂粒含む。286は底面もミガキを行い、黒斑がある。

288は大形甕口縁部で、外反し端部内外に肥厚する。頸部に幅の広い突帯を貼り指頭圧痕で装飾する。にぶい黄橙で端部周辺はヨコナデ。端面に円形浮文が外れたような痕跡が残る。

289は内湾する体部からくの字の頸部になり、短く外傾し端部はつまみ上げる。ハケ整形で口縁部はヨコナデ仕上げ。浅黄でクサリ礫含む。煤付着している。

290は内傾する体部から外傾し、端部は肥厚し上につまむ。体部はハケ整形で口縁部はヨコナデ。灰黄褐。

291は直立ぎみながら湾曲する体部から緩やかに外反する口縁部になる。端部は丸い。体部はハケ整形で口縁部はヨコナデ。にぶい黄橙を呈し砂粒含む。端部に刻み目がありそうである。

292は器壁の厚い内湾する体部から短く外反する口縁部に続き、端部は丸く肥厚する。内面はユビ成形からハケ整形し指ナデをする。外面はハケ整形で口縁部はヨコナデである。にぶい橙～灰黄褐をしている。

293は内湾する体部から断面バチ形の短く外傾する口縁部になる。端部は開き肥厚する。ハケ整形からナデ仕上げ、口縁部はヨコナデでにぶい橙である。

294は内湾する体部から外反する口縁部で端部は厚く角張る。口縁部はヨコナデ、体部内面はケズリ、外面はナデ。浅黄橙をしている。

295は前期に遡る甕口縁部である。外反し端部は丸く刻み目を有する。頸部には１条の沈線がある。浅黄橙で砂粒多く含む。

296～298は似た形状で平底から外反する体部になる。内面と底面はナデ、外面はミガキである。にぶい黄橙で砂粒含む。297には黒斑がある。

299は底部端が外に開く平底で外反する体部に続く。２次焼成を強く受けており、土器器肉が層状に剥離しそうに変化している。にぶい橙でユビ成形からハケ整形・ナデ゛である。

300は甕底部としたが、コップ形土器の底部か。平底から内湾する体部になる。内面は指ナデである。

301は大形甕で僅かな上げ底から外傾する。内面はユビ成形からナデ、外面はミガキである。浅黄橙～にぶい橙で黒斑がある。

302は外反ぎみで端部は角張る。ヨコナデで仕上げている。灰白～暗灰。

303は器壁厚く外反し端部角張る。内面はナデで端部から外面はヨコナデである。浅黄で砂粒含む。

304は浅めの杯部で内湾して端部は水平に短く延びる。端部は角張り、端面に３条の凹線を入れる。細長い刺突文を刻み目状に入れ、さらに円形浮文を巡らす。端部周辺はヨコナデで体部は内外面ともにヘラミガキで仕上げる。にぶい黄橙で砂粒含む。

305は木器模倣形の杯部で内湾する体部はヘラミガキで仕上げる。体部延長上に突帯を設け、そこから水平に開き、端部はバチ形に肥厚する。浅黄橙をしており、口縁部はヨコナデである。端面には細長い刻み目状に刺突文を斜めに入れ、円形浮文を貼る。浮文は４個単位で１周せず、８ヶ所に配置しているようである。

306は外傾する体部でヘラミガキで仕上げている。方形の幅広に突出してから水平に開く口縁部であろう。

307～310は脚部である。外反して端部は内外に肥厚する。内面はすべてヘラケズリで端部周辺はヨコナデである。**307**は端面が凹んでおりにぶい黄橙である。外面は板ナデであろうか。**308**は端面ではなく裾部に鋸歯文を設けている。右上がりに３本の斜線を入れている。にぶい橙である。**309**は端部が上に面となって延びている。にぶい橙で内面はハケ整形を加える。**310**は体部の器壁薄く、橙を呈する。文様は不明ながら線刻を施している。縦方向に１本描かれている。その横の斜線も関連するものかもしれない。その下に三角形のヘラ先で押圧した刺突文が巡っている。刺突文によって端部の突出がより際立っており、断面はT字形になっている。

北半流路出土土器（311～327）

311は外反し口縁頂部に突帯を有して垂下する口縁部である。端部を欠いている。突帯は２条あり刻み目を加えている。もう１条上にありそうである。橙で内面は横方向の細かいヘラミガキで仕上げる。外面はナデ、端部近くはヨコナデである。

312は外傾する口縁部で端部は玉縁状になっている。外面は橙で、内面は灰白でヨコナデ。

313は外反し端部内外に肥厚する。ヨコナデで端面に２条の凹線がある。外面は橙～褐灰、内面はにぶい橙～褐灰で砂粒多く含む。

314は外反し端部も大きく屈曲させている。丸みを持った端面に綾杉状に刺突文を施している。外面はハケ整形、内面は細かいヘラミガキである。端部周辺はヨコナデで橙をしている。

315は外反し端部近くで内湾ぎみになり端部内側に肥厚し面となる。外面は縦方向の、内面は縦方向から横方向のハケ整形である。灰白～灰黄をし、端部周辺はヨコナデ。

316は壺頸部かと思われる。外反しており３条の突帯を付け浅い刻み目を施す。棒状浮文を貼付している。残存しているのは２個だけであり巡らせてはいないだろう。頸部外面には縦方向に綾杉状にヘラ先で線刻している。内面は板ナデで橙をしている。

317は外反する甕口縁部で端部は角張る。ハケ整形からナデ仕上げ、端部はヨコナデ、にぶい橙を示す。

318は鉢口縁端部で内湾し端部肥厚する。浅黄～灰白でヨコナデ仕上げ。

319は高杯脚部で外傾し端部上方に肥厚する。外面に三角形の押圧文を置き、上に鋸歯文を施す。左上がりで３本の斜線が描かれる。内面けずり、外面ナデ、端部周辺ヨコナデで、にぶい黄橙をしてい

る。

320は壺底部で平底から内湾する。内面はハケ整形でにぶい橙～灰黄褐である。

321～327は**322**を除き壺体部の文様片である。**321**は内傾しており、波状文―直線文―２条貼り付け突帯となっており、直線文の上に２段の竹管文帯を設けている。突帯の上に棒状浮文を付加する。にぶい黄橙である。**322**は鉢口縁部で内湾し端部角張る。端部下に径７㎜の円孔が１対存在する。内面ケズリ、外面タタキからナデで、にぶい黄橙をしている。**323**は内湾し３条の刻み目を付ける突帯を有する。**324**は外反し３条の低い突帯を持つ。灰黄をしている。**325**は壺体部で算盤玉状に内湾している。最大腹径上に刺突文を施し、その上端に接して円形浮文を巡らす。その上に波状文もあるが不明瞭である。内面はユビ成形からナデ整形。明黄褐～浅黄砂粒含む。**326**は内湾し２条波状文―竹管文―２条以上直線文がある。ナデ仕上げで浅黄橙。**327**は刺突文が見られる。にぶい黄橙を呈している。

４．包含層出土土器（328～420）

①縄文晩期の土器（328）

１点だけ突帯文が出土している。時期的に弥生土器と併行していても良いものである。外反し端部は丸く突帯は低い。突帯には刻み目が入れられている。にぶい赤褐～褐灰で、外面は条痕文が内面はナデ。

②弥生前期の土器（329～334）

図化した土器はすべて壺である。**329**は内湾し貼り付け突帯２条で刻み目が加えられる。褐灰～にぶい黄橙でナデ仕上げ。**330**は内面にぶい赤褐でナデ、外面黄褐でハケ整形ののち５条の沈線を入れる。**331**はヘラ描きで上から６条沈線―２条波状文―２条沈線―２条波状文―２条沈線を施している。波状文特に下のものは山形に近い。灰黄褐で砂粒含む。**332**は内湾し頸部したに７条の沈線を有する。内面は浅黄橙～灰白、外面はにぶい黄橙～灰白でナデ仕上げ。**333**は外反ぎみの肩部で３条の沈線がある。灰白～明黄褐をしている。ナデ調整。**334**は大形の底部である。ユビ成形から強いナデで整形する。外面はハケからナデである。平底から緩やかに内湾している。外面は灰白、内面はにぶい橙～橙で、砂粒多く含む。

③弥生中期の土器（335～418）

壺（335～392）

壺は口縁部などの特徴から幾つかに分類できる。口縁部からは、Ａ通常に口縁部が開くもの、Ｂ通常に口縁部が開き端部は肥厚するもの、Ｃ端部が大きく垂下するもの、Ｄ直口するもの、Ｅ小形で直口するものＦ広口壺、Ｇ無頸壺に分けられる。さらに内面の突帯や文様の有無、端面の凹線・刺突文の有無で細分が可能である。また、頸部の突帯の有無なども分類作業での条件になる。

Ａ通常に口縁部が開くもの（351・352）

頸部に突帯を持つ**351**と、持たない**352**に細分できる。**351**は外反し端部上につまむ。頸部に指頭圧痕を押圧した低い突帯を持つ。外面ハケ整形でにぶい橙～にぶい黄橙。**352**は外反し端部丸くにぶい黄橙。

Ｂ通常に口縁部が開き端部は肥厚するもの（339～344・346～350・354）

内面に突帯のないＢ１と突帯のあるＢ２（**340**）に分けられる。**339**は３条の凹線の上に綾杉状に細長

い斜線を引いている。端部は内外に肥厚しヨコナデで、橙をしている。**340**は突帯に刻み目がなされている。端面は３条凹線に斜線の刺突文を施し、さらに細い棒状浮文を付けている。にぶい橙を呈しヨコナデである。**341**は端部の小片でここにしているが、本来は垂下する**C**の可能性が高い。ヨコナデで丸い端部に円形浮文を付けている。**342**は３条の凹線を持ち、やや外開きである。にぶい黄橙でヨコナデ。**343**は端部を欠いている。凹線２条残存し浅い斜線文を引き、細い棒状浮文も貼付している。にぶい橙で砂粒含む。**344**も似た文様構成である。４条凹線に斜線文と細い棒状浮文を施す。ヨコナデで、にぶい橙～灰白をしている。**346**は端部下側に突出しており、端面に５条の凹線から棒状浮文を付ける。棒状浮文は４個１単位であろうか。にぶい橙をする。**347**は内外に肥厚する端部で上と内側突帯に刻み目を入れている。端面には３条の凹線があり斜線文を入れる。端部内側に３㎜前後の小円孔がある。にぶい黄橙で内面はハケ整形で他はヨコナデ。**348**は肥厚する端部で大きめの刻み目のような刺突文を端部全体に入れる。灰黄褐でヨコナデ仕上げ。**349**はヨコナデで橙をしている。文様のない無地である。**350**は上側につまむ端部で端面に円形浮文があったと思われる。にぶい橙でヨコナデ。**354**は小片で外反し端部肥厚し端面には２条の凹線があるか。外面はハケ整形で端部周辺はヨコナデ。にぶい橙。

Ｃ端部が大きく垂下するもの（335～338･345）

内面に突帯のないＡ１（**335**・**337**）と突帯のあるＡ２（**336**・**338**・**345**）に分けられる。**345**は突帯が２条ある。**337**は突帯がないが、その部分に円形浮文を巡らせている。**335**は端面上部に１条凹線、下に波状文を施し、その間に円形浮文を配置する。頸部には指頭圧痕のある突帯を付け、内面にも波状文で飾っている。浅黄橙で内面はハケ整形。**336**は端部上部と突帯に刻み目を有する。にぶい黄橙でヨコナデである。**337**は短く垂下する。端部は下に尖っている。にぶい橙でヨコナデ仕上げ。**338**は垂下するが直線的である。端面には交差するような細長い刺突文がある。内面突帯には刻み目が見える。にぶい黄橙をしている。**345**は小さく垂下し端面両端に刻み目がある。刻み目の間に円形浮文が貼付されている。浅黄橙でヨコナデ調整。

Ｄ直口するもの（364～366）

364は外傾し端部内外に肥厚する。端部下に２条の突帯があり、端部外側も合わせて刻み目が入れられる。突帯の下には波長の高い波状文がある。内面はハケ整形で、外面はナデ、端部周辺はヨコナデでにぶい橙をしている。**365**は内湾ぎみに直立し端部は角張る。端面中央が凹んでいる内面はナデで他はヨコナデ。明黄褐～橙。**366**は内湾し端部幅広く角張る。外面には４条の貼り付け突帯が付くにぶい橙でヨコナデ仕上げである。

Ｅ小形で直口するもの（356・357）

356は外傾し端部角張り外側に出る。端部下に２条の凹線がある。橙～にぶい橙でヨコナデ。**357**は外傾し端部は角張る。端部外側に刻み目を入れている。端部周辺はヨコナデ、橙を呈する。

Ｆ広口壺（370）

口径34.4㎝と大形の口縁部である。外反する頸部には指頭圧痕の付く突帯が付けられる。途中から直立ぎみに外傾し端部は上に尖っている。頸部はナデで端部はヨコナデである。直立部分外面に斜格子文を入れ、端部には刻み目を入れ竹管文の付く円形浮文が貼られている。内面は灰白、外面は浅黄橙。

Ｇ無頸壺（371～376）

371は外傾し端部近くで内傾し端部角張る。屈曲する下に凹線が１条ある。体部はナデかミガキで、端部周辺はヨコナデである。灰白～暗灰である。器高の高いもので脚台が付くであろう。**372**は口径38.4

cmと大形である。端部下に突帯が１条あり、ヨコナデである。外面はハケ整形で灰白を呈する。**373**は内湾し端部は内外に肥厚する。外面に２条の突帯があり刻み目を入れる。端部周辺はヨコナデで他はナデ仕上げ。にぶい黄橙でクサリ礫含む。**374**は内傾し端部内側に尖る。６条の凹線があり、その下に５条以上の波状文がある。にぶい橙で端部周辺はヨコナデである。**375**は内湾し端部大きく肥厚する。外側に刻み目付ける。浅黄橙～灰白でヨコナデ仕上げ。**376**は大きく内湾し端部内側に尖る。端部中央やや凹んでいる。端部下に２条突帯があり、刻み目を加える。内面はナデで端部周辺はヨコナデ。にぶい黄橙をしている。

口縁部で分類できなかった壺も幾つかある。**353**は突帯が２条ありタイプがやや異なる。端面には凹線３条あり棒状浮文を付ける。浅黄橙でヨコナデ。**355**は口唇部に３条凹線があり斜線文を入れる。口縁部はヨコナデで受け口状になる。橙～灰黄である。

361から**363**は底部である。**361**は突出平底に近く、他は平底である。**361**は内面ハケ整形で外面はミガキ、底面はナデである。浅黄橙である。**362**は外傾する体部で内面にぶい橙でハケ整形、外面灰白～にぶい橙でナデである。**363**は外反する体部でユビ成形から内面はハケ整形で灰黄褐～にぶい赤褐、外面はミガキで赤褐～褐灰をしている。

367～369・377～392は文様片である。口縁部・頸部と体部の部位がある。波状文が多いが、突帯・刻み目もある。**367**は肩部に直線文を引いた上に円形浮文を配する。外面はにぶい黄橙でハケ整形からナデを加える。内面は橙～褐灰でナデ仕上げ。**368**は内傾する体部で頸部に突帯が１条付く。波状文と直線文で飾る。にぶい黄褐～にぶい黄橙でハケ整形からナデである。**369**は頸部で３条の突帯の上に棒状浮文を付ける。内面には絞り目状の痕跡が残る。にぶい橙でナデである。**377**も頸部で幅の広い突帯を付け指頭圧痕が付く。にぶい橙でヨコナデ仕上げ。**378**も指頭圧痕で押圧した突帯を持つ頸部である。にぶい黄橙でヨコナデ。**379**は内湾する体部でハケ整形ののち、４条以上の直線文と斜格子文を施す。にぶい橙で内面ナデ。**380**は低い１条の貼り付け突帯でナデ。**381**は内湾する口縁部で端部肥厚する。５条凹線―５条波状文―６条直線文―５条波状文―２条以上直線文で装飾する。橙で内面ハケ整形、外面ヨコナデ。**382**は６条の波状文である。にぶい黄橙～灰黄褐でナデ整形。**383**は上下２条の凹線（沈線）の間に２条の波状文がある。磨滅顕著で不分明であるが、胎土に砂粒多く含んでいることから前期かもしれない。**384**は灰黄褐で竹管文が施されている。ナデ整形。**385**はハケ整形ののち11条以上の直線文と18条以上の波状文が見られる。内面ナデでにぶい黄橙である。**386**は６条以上の直線文―条数不明の波状文（磨滅のため）－直線文となされ、円形浮文が貼付される。にぶい橙で内外ともナデである。**387**は内湾し肩部に円形浮文を付ける。明黄褐でナデ。**388**は頸部から内傾する体部で８条波状文と８条直線文を施す。にぶい黄橙でナデ仕上げ。**389**は外反ぎみの体部で６条直線文と波状文が認められる。灰黄褐でナデ。**390**は残存部下端に突帯があり棒状浮文が付く。上に２帯の丈管文が回り、条数不明の波状文がある。灰黄褐でナデ、河内からの搬入品と思われる。**391**は内湾する体部から頸部で頸部には突帯が付く。体部には８条直線文と８条波状文、３条以上直線文がある。ハケ整形からナデで、にぶい橙である。**392**は内湾する体部で９条直線文―７条波状文である。外面は赤褐～灰白でハケ整形、内面はにぶい橙でナデ。

蓋（393）

内湾する体部に短く外反するつまみが付く。ナデ整形で灰黄をしている。黒斑がある。

甕（394～410・412）

くの字のものと端部が肥厚するものに分けられる。色調はにぶい黄橙のものが大半で端部はヨコナデである。**394**は短く外反する口縁部で端部肥厚する。内外面ともハケ整形である。**395**は内湾する体部からバチ形に端部が肥厚する口縁部となる。396は頸部内面の稜線が鋭い。内湾する体部から外傾する口縁部で端部肥厚する。内外ともハケ整形か。内面は磨滅している。**397**は内湾する体部から外反し端部上につまみ上げ丸く納める。頸部に刺突文を巡らせている。余り見かけないタイプで搬入であろうか。**398**は大きく外反する口縁部で端部角張る。内面ケズリで頸部厚く稜線鋭い。**399**は薄手に仕上げており、内外面ともにハケ整形である。内湾する体部から短く外傾し端部つまみあげている。**400**は内傾する体部から外反し端部内外に肥厚する。にぶい橙となり砂粒含む。**401**は内湾する体部からバチ形に開く短い口縁部になる。内面はハケ整形。**402**は頸部が外反し外に開き端部肥厚する。丹塗りである。**403**は内傾する肩部から短く外反し端部大きく肥厚する口縁部である。端面に３条の凹線文を施しヨコナデで仕上げる。外面はハケ整形からナデでにぶい黄橙、内面は板ナデで橙。砂粒少量含む。黒斑がある。**404**は外反ぎみの口縁部で端部肥厚し内側につまみあげる。内面ハケ整形。**405**は大きく屈曲する頸部から外傾し端部内外に肥厚する。端面には２条の凹線が施されている。**406**は小形で内傾する体部から短く外傾する。内面ケズリ、外面ハケ整形で、外面は黒褐である。**407**は球形に内湾する体部から外傾する。端部厚く丸く肥厚している。**408**は底部に近い体部で外面ミガキで籾痕が残っている。**409**は平底から外反する体部になる。内面はナデで外面はミガキである。**412**は平行から右上がりのタタキで底は平坦でナデている。内面もナデである。

甑（411・413）

３点図化している。**411**は平底から直線的に開く底部で焼成前に穿孔している。底面と内面は板ナデで外面はヘラミガキである。にぶい褐～灰黄褐である。413は平底から外傾する。内面ナデで外面ミガキ、焼成前の穿孔である。

高杯（415～417）

415は内湾し端部肥厚する口縁部で、端部の一部を欠く。端面に１条の凹線がある。内外面ともハケ整形である。にぶい橙～にぶい黄橙である。**416**は外傾から急に湾曲し端部は面となり水平に肥厚する。端部外面に刻み目があり、屈曲した外側に刺突文が施される。内面はハケ整形からナデ、口縁部はヨコナデである。橙で砂粒含む。**417**は脚部である。外反し端部は角張り幅広になる。内面ケズリで端部周辺はヨコナデである。橙～にぶい黄橙をしている。

脚台（418）

台付き壺・鉢などの脚台であろう。外反し端部は丸く納める。底部は平たくハケ整形である。黄灰～浅黄橙で砂粒含む。内面はハケ整形、外面はナデで端部周辺はヨコナデ。

④弥生時代後期の土器（358～360・414）

４点とも底部で形態から後期の土器と思われる。３点壺で突出平底である。１点は甑である。**358**は小形でミニチュアかもしれない。河内からの搬入品と思われる。底面外面もナデており、外面はミガキを加えている。灰黄褐である。**359**はハケ整形で内面には工具痕が残る。にぶい黄橙である。**360**は内面のハケが原体の痕跡を残すものである。外面はミミガキで底面はナデである。灰黄褐である。**414**は尖り底で中央に焼成前に穿孔している。底部の厚さは2.6㎜と厚い。外面はタタキ、内面はハケ整形であ

る。大きな黒斑がある。灰黄～にぶい黄橙を呈する。

⑤古墳時代・中世の土器（419・420）

１点ずつ図化している。**419**は明確ではないが、古墳時代はじめの器台かと思われる。外反し上部に２条の突帯を付ける。高い突帯で２条の間がくっついており断面M字形になっている。刻み目を施す。円形の透孔がある。

420は土師器甕である。直立する体部で端部から外側に水平に開く鍔が付く。端部は角張っている。外面はにぶい黄橙でハケ整形である。煤付着している。内面は灰黄褐でナデ整形である。鍔部はハケ整形からナデ、ヨコナデで仕上げる。（渡辺）

(2) 石器（図版35～39）

54点を図化した。ここでは、器種別に報告を行う。

打製石鏃（図版35、Ｓ１～S10）

10点を図化した。すべてサヌカイト製である。石鏃の型式設定は、基部形態を次のように５つに分類した。

１類：中央部に抉りがあるいわゆる凹基で、両端が尖るもの。

２類：１類と同様凹基で、両端が丸みを帯びるもの。

３類：基部が平坦で、これまで平基と呼んできたもの。

４類：中央部が突出し、凸基と呼んでいるもの。

５類：その他、分類が不明なもの。

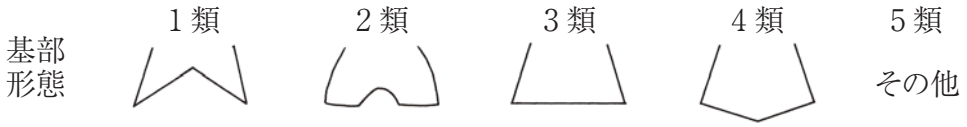


図10　石鏃の形態分類

１類　凹基式石鏃（Ｓ１）

Ｓ１は基部の一部が欠損する。作用部のつくりは丁寧ではなく、先端部がやや厚い。

２類　凹基式石鏃（Ｓ２・Ｓ３・Ｓ８・Ｓ９）

Ｓ２は抉りのある基部は薄く、先端部に最大厚を持つ。作用部のつくりも雑なことを考えると、未製品に近いと思われる。Ｓ３は長さ15.4㎜、厚みが２㎜と、10点の石鏃の中で最も小さい。作用部のつくりは、先端部に行くほど雑になっている。Ｓ８は先端部がやや欠損しているが、両側縁はS字状を呈しており、中央部に最大厚を持つ。縄文時代に属する可能性もある。Ｓ９は10点の中では最も大型の石鏃である。裏面に大きな剥離面を残す。

３類　平其式石鏃（Ｓ４～Ｓ７）

Ｓ４・Ｓ５は、ともに裏面に大きな剥離面を残す。作用面も、両面から比較的丁寧な押圧剥離によって調整されている。Ｓ５は大きさのわりに厚みが2.8㎜と薄く、断面は平坦である。Ｓ６は基部付近に最大厚を持つ。表面に比べて、裏面のつくりは荒い。Ｓ７は基部が欠損しているので円基式の可能性もある。Ｓ３に次いで小さいが、先端部にいたるまで丁寧に作られている。

４類　凸基式石鏃（S10）

基部がやや欠損しているが、作用部と基部の長さはほぼ等しい。最大厚は基部に近い部分にあり、両面ともに剥離面を残すため、断面は菱形を呈さない。表面の先端部付近には、真ん中に稜線が通る。

打製石剣（図版35、S11）

両面とも稜線は中央を通らず、裏面には大きな剥離面が残る。その為、多くの石剣に見られるような菱形の断面を呈さない。基部側は大きく欠損している。作用部は、連続した剥離によって調整されており、先端と基部には欠損後に再加工された痕が認められる。表面の稜線の一部に磨滅が見られるが、全体に見られないことから水磨によるものではないと思われる。サヌカイト製である。

石錐（図版35、S12～S15）

S12は作用部と装着部が明瞭に分かれる。基部の「頭部」にあたる部分が欠損しているが、おそらくは両側が張り出した菱形を呈していたと思われる。錐部先端は急角度の稜をなし、断面は三角形に近い形をなす。S13は半面と錐部先端を欠くが、作用部と装着部に分かれている。先端部付近の断面は平坦である。S14は作用部と装着部の境がなく、一定の幅を持つ棒状のもので、半面と先端を欠く。一ヶ所に抉られた剥離が見られ、何らかの石器を錐に転用したとも考えられる。S15も厚さが6.8㎜と厚く、調整された抉りがあること、切断面の縁辺にも潰れ状の剥離が認められることから見て、楔形石器から錐に転用したものと思われる。先端部は短く、潰れている。全てサヌカイト製で、S15は他の石器に比べてやや色が白く、風化によるものと思われる。

削器（図版36、S16～19）

S16は上部に自然面を残す剥片を利用し、微細な連続した剥離面を持つ一側縁を作用面としている。作用面のエッジの一部と、欠損部の一部に潰れた剥離面が見られる。上部に急角度の稜が見られ、厚みも10.7㎜と厚いことから、何らかの石器を作るつもりで剥片を取ったものの上手くいかず、削器に利用したと考えられなくもない。S17は三角形状の剥片のやや湾曲した一側縁を刃部としている。大きめの調整を両面から行っているが、刃部はかなり潰されている。楔として再利用したとも考えられる。S18は横長剥片の一側縁を刃部としているが、調整は連続して施されてはいない。片側の面は、丸みを帯びて割れているが、後に意図的に数回敲打され（剥片の採取あるいは）調整が行われた可能性がある。S19は大型の剥片の短辺の方を作用面としている。調整は両面から行われており、表裏面とも大きな剥離面を残す。全てサヌカイト製で、S17は他の石器に比べ色が白い。風化によるものと思われる。

打製石包丁（図版36、S20～S22）

S20は約２／３を欠損するが、湾曲した背部と直線的な刃部を持つ打製石包丁である。表裏両面から調整を行って刃部を形成し、背部は階段状剥離の後刃潰しを行っている。全体に磨滅が著しいが、表面は特に顕著である。これは水磨によるものではなく、使用によるものと推察される。S21は上下をやや欠くが、楕円形に近い形状を持ち、周縁全体が丁寧に敲打形成されている。特に背部は両面とも階段状剥離が顕著で、持ち手を意識して刃潰しも重点的に行われている。裏面の稜線から左半分には磨滅が見られる。これは、ちょうど石包丁を持ったときに指が当たる部分なので、これも水磨ではなく使用によるものである。S22も上部を欠くが、刃部はやや内湾し、緩やかに外湾する背部を持つと思われる。欠損部に近い背部に刃潰しが施されている。背部の刃が潰された部分と、表裏面の一部に磨滅が認められる。S21・S22と同様に手や指が当たる部分なので、使用によるものと思われる。全てサヌカイト製で、S21はS17と同様に色が白く、風化と思われる。

楔形石器（図版37、S23～S36・図版38、S37・S38）

当遺跡では、図化した54点のうち楔形石器は16点と最も数が多い。「１つ以上の縁辺に（微細な）階段状の剥離を有する石器は、楔形石器である（兵庫県教育委員会　1998）。」という考えを元に、次のように分類した。剪断面のないものをA類、剪断面の存在するものをB類、剪断面がありスポール状の形態と認めたものをS類と大きく３つに大別した。

A類は、階段状の剥離痕が確認できる縁辺の数で、Ａ１、Ａ２、Ａ３、Ａ４と細別した。B類は、剪断面の面数でＢ１、Ｂ２、Ｂ３、Ｂ４と細別し、Ｂ２類については、剪断面が相対する２辺に平行なものをＢ２Ｐ型、隣り合った２辺にL字状に剪断面が存在するものをＢ２Ｌ型、剪断面がV字状に存在するものをＢ２Ｖ型とした。S類は、剪断面が一面のものをＳ１型、２面のものをＳ２型とした。

なお、今回はＡ２、Ａ４、Ｂ３、Ｂ４、Ｓ１、Ｓ２類は認められなかった。

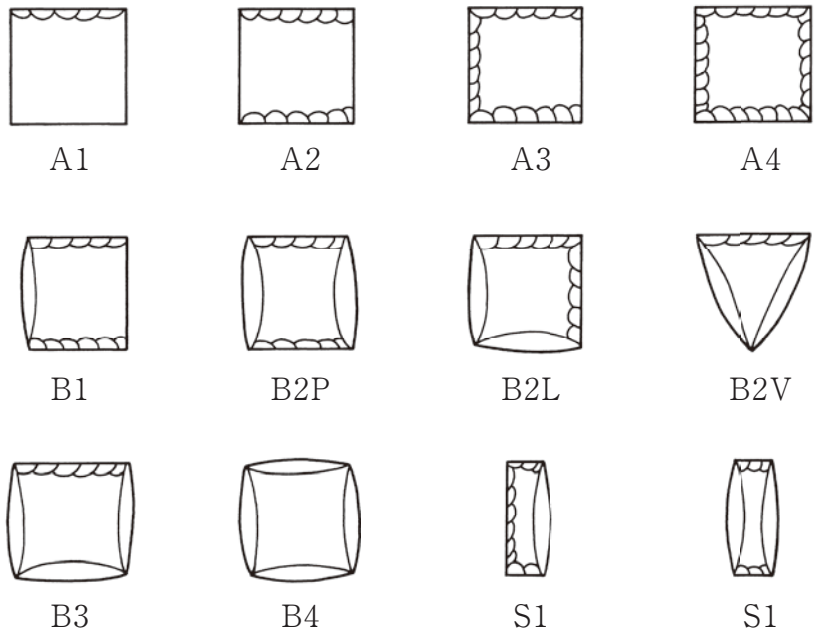


図11　楔形石器の形式分類

Ａ１類（S23）

上辺にのみ段差の大きな階段状剥離が見られる。向かい合う辺は三角形をなし、大きな剥離面のままである。使用により変形し、このような形になったと推測される。

Ａ３類（S24）

３辺に微細な階段状剥離が見られるが、特に上辺が顕著である。

Ｂ１類（S25～S31）

S25は縁辺の一部に自然面を残す。S26の縁辺の剥離は微細であるが、階段状剥離と剪断面が見られることから楔形石器に分類した。S27は上下と右側縁に階段状剥離が見られる。S28は元は台形の剥片を使用したと思われ、使用によって下面が大きく欠損したと考えられる。階段状剥離は段差が大きく、剪断面や下方の折れた部分にも敲打痕が見られることから、かなり使われたものと思われる。S29は潰れた階段状剥離が見られることから楔形石器としたが、厚みも5.8㎜と薄く、上面の加工が丁寧なことから、削器あるいは打製石包丁からの転用も考えられる。S30は厚みのある石を使用しており、階段状

表１　石器計測表

報告番号	器　種	石　材	形式分類	地区	遺　　構	土　　層	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
S01	石鏃	サヌカイト	1	Ⅲ	北半流路	上層	22.7	14.7	3.5	0.9
S02	石鏃	サヌカイト	2	Ⅰ	SH01		19.0	15.8	4.1	0.8
S03	石鏃	サヌカイト	2	Ⅱ	SK08		15.4	11.5	2.0	0.3
S04	石鏃	サヌカイト	3	Ⅱ	SK08		25.2	19.2	3.9	1.4
S05	石鏃	サヌカイト	3	Ⅱ	SK01		24.4	16.4	2.8	0.8
S06	石鏃	サヌカイト	3	Ⅰ	SK16周辺		20.5	13.5	4.0	0.8
S07	石鏃	サヌカイト	3	Ⅲ		礫層上面	17.0	19.5	3.3	0.5
S08	石鏃	サヌカイト	2	Ⅲ		礫層上面	23.2	15.7	4.9	1.2
S09	石鏃	サヌカイト	2	Ⅱ	P19		34.1	18.2	5.0	3.0
S10	石鏃	サヌカイト	4	Ⅰ	SH01		34.5	12.5	4.9	1.8
S11	打製石剣	サヌカイト		Ⅰ	SH01		97.1	43.2	12.9	43.9
S12	石錐	サヌカイト		Ⅱ	SX01		33.7	17.8	5.9	2.5
S13	石錐	サヌカイト		Ⅲ	北半部礫層上（落ち込み）	礫層上面	26.2	10.7	4.2	0.9
S14	石錐	サヌカイト		Ⅲ		包含層	39.2	10.6	5.2	1.7
S15	石錐	サヌカイト		Ⅰ	SK06		54.7	27.1	6.8	13.5
S16	削器	サヌカイト		Ⅲ		包含層（黒褐色シルト）	46.5	32.0	12.7	16.6
S17	削器	サヌカイト		Ⅰ	SK06		74.0	58.2	10.2	28.2
S18	削器	サヌカイト		Ⅲ	北半流路	上層	66.9	29.6	13.0	19.7
S19	削器	サヌカイト		Ⅰ	SD01		84.8	65.9	11.6	50.6
S20	打製石包丁	サヌカイト		Ⅲ	北半部礫層上（落ち込み）	礫層上面	43.1	44.3	8.9	20.8
S21	打製石包丁	サヌカイト		Ⅰ	SH01		92.6	43.7	12.8	72.4
S22	打製石包丁	サヌカイト		Ⅲ	北半部礫層上（落ち込み）	礫層上面	65.8	46.5	9.8	31.6
S23	楔形石器	サヌカイト	Ａ１	Ⅰ	SD01　SK10切合い部		30.3	36.2	7.0	5.6
S24	楔形石器	サヌカイト	Ａ３	Ⅲ	SH04		25.6	33.5	7.0	4.8
S25	楔形石器	サヌカイト	Ｂ１	Ⅲ		包含層	22.1	26.7	7.1	4.2
S26	楔形石器	サヌカイト	Ｂ１	Ⅱ	SX01		20.6	29.0	5.8	3.4
S27	楔形石器	サヌカイト	Ｂ１	Ⅲ	P13		27.7	23.8	7.6	4.7
S28	楔形石器	サヌカイト	Ｂ１	Ⅲ	北半部礫層上（落ち込み）		29.0	33.5	8.7	8.0
S29	楔形石器	サヌカイト	Ｂ１	Ⅲ	SD03		46.5	29.0	5.7	8.4
S30	楔形石器	サヌカイト	Ｂ１	Ⅰ	SK07		35.5	38.4	10.5	14.4
S31	楔形石器	サヌカイト	Ｂ１	Ⅲ		包含層	30.0	52.7	9.2	14.2
S32	楔形石器	サヌカイト	Ｂ２Ｐ	Ⅰ	SK14		16.2	17.1	5.5	1.6
S33	楔形石器	サヌカイト	Ｂ２Ｌ	Ⅲ		礫層上面	35.3	19.6	6.0	3.9
S34	楔形石器	サヌカイト	Ｂ２Ｌ	Ⅲ	北半部礫層上（落ち込み）		42.3	44.7	11.5	22.8
S35	楔形石器	サヌカイト	Ｂ２Ｌ	Ⅲ		包含層	17.8	21.0	7.2	2.9
S36	楔形石器	サヌカイト	Ｂ２Ｌ	Ⅰ	P45		24.5	59.8	8.8	7.8
S37	楔形石器	サヌカイト	Ｂ２Ｐ	Ⅱ	SX01		27.4	48.6	9.4	13.5
S38	楔形石器	サヌカイト	Ｂ２Ｌ	Ⅱ		包含層	48.0	51.2	12.7	35.8
S39	二次加工剥片	サヌカイト		Ⅲ	SX01		24.2	26.5	4.0	2.3
S40	二次加工剥片	サヌカイト		Ⅲ		礫層上面	42.6	28.3	12.0	12.0
S41	二次加工剥片	サヌカイト		Ⅰ	SH01		49.3	36.1	9.5	14.6
S42	二次加工剥片	サヌカイト		Ⅰ	SD01		67.0	50.5	13.7	32.4
S43	剥片	凝灰岩？		Ⅱ	SK02		27.6	17.8	5.6	1.8
S44	剥片	チャート		Ⅲ	北半流路	上層	30.8	24.6	8.0	4.3
S45	剥片	サヌカイト		Ⅰ	面精査		56.3	41.3	12.1	29.0
S46	磨製石包丁破片	粘板岩		Ⅰ	SK16		30.7	28.1	7.4	6.4
S47	敲石	花崗岩		Ⅲ	SD01		59.5	57.5	57.1	267.3
S48	敲石	安山岩		Ⅰ	SK16		98.6	35.9	28.2	133.5
S49	敲石	花崗岩		Ⅲ	SD03		159.1	52.3	48.7	615.3
S50	磨石	花崗岩		Ⅰ	SK06		59.8	101.8	27.9	209.7
S51	磨石	花崗岩		Ⅲ	SX01		84.2	92.1	38.5	400.5
S52	磨石	安山岩		Ⅰ	P42		90.5	47.6	23.7	162.0
S53	砥石	砂岩		Ⅰ	SK16		110.6	118.5	36.5	604.3
S54	砥石	安山岩		Ⅲ	P33		199.8	93.8	45.3	1430.0
S55	RF	サヌカイト		Ⅰ	P17		26.2	17.8	2.1	1.0
S56	RF	サヌカイト		Ⅰ	SH01		13.6	10.2	1.6	0.1

剥離も顕著である。S31は３辺に剥離面が見られるが、上面の剥離が特に微細である。左側の剪断面にも敲打痕がみられる。

Ｂ２Ｐ（S32・S37）

S32は16点の中で最も小さい。下部に折れた後に何度も敲打された痕が残る。S37は上下に微細で潰れた階段状剥離が見られるが、その内側には両面からの連続した丁寧な調整が施されていることから、削器を楔に再利用したものと推測される。

Ｂ２Ｌ（S33～S36・S38）

S33は小さな剥片を利用した楔で、下面の剪断面にも敲打が見られる。S34の階段状剥離は、上面にのみ認められる。S35も小ぶりの楔である。剪断面にも階段状剥離や敲打痕が見られる。S36はL字状の２つの縁辺に階段状剥離を認めたので、楔形石器に分類した。S38は上面に大きく潰れた階段状剥離が見られる。その内側には連続した調整が見られることや、断面の形状から見て、打製石包丁を再利用した可能性も考えられる。すべてサヌカイト製であるが、S29・S33は、色が白く風化が認められる。

二次加工ある剥片、剥片（図版39、S39～S42・S43～S45）

剥片の一部に、当初の剥離と区別される剥離痕をもつものを、二次加工ある剥片とした。S39は下面に微細な二次加工痕をもつ。S40は切断面をもつ剥片で、表面に連続した二次加工痕が見られる。水磨によると思われる摩滅が見られる。S41は表面に自然面を残し、加工痕は潰れた形状を呈する。S42は剥片を取る段階で大きく階段状に剥がされた面をもち、末端はややヒンジーを呈する。S43～S45の剥片は、いずれも旧石器時代のものと思われる。S43は凝灰岩製（？）、S44はチャート製、S45はサヌカイト製で、風化は著しいが稜ははっきり確認できる。

磨製石包丁破片（図版39、S46）

粘板岩製で、表面は背部の一部を残すのみで大きく剥落している。従って、刃部の形跡は残っていないが、裏面には研磨痕が見られる。

敲石（図版39、S47～S49）

S47は花崗岩製である。丸い石を使っているが、所々に平坦な部分が見られる。他の面はざらついており、敲打痕も認められるが、平坦な部分はつるっとしているところから、磨石として使用された可能性もある。S48は安山岩製。S49は花崗岩製で、両方とも細長い石を利用している。上下の部分に敲打痕が見られる。

磨石（図版39、S50～S52）

S52は上下にやや敲打痕が見られることから、敲石として使用した可能性もあると思われる。安山岩製である。

砥石（図版39、S53・S54）

S53は目の粗い砂岩製の石を利用した砥石である。砥面は表面のみで、明瞭な砥面をもたない。S54は目の細かい安山岩製の石を利用している。４面を利用しているが、砥面はほぼ平坦である。表面の下方に、やや研磨の痕跡がみられる。（古谷）

参考文献：兵庫県教育委員会1998『佃遺跡』

(3) 金属器

３点出土している。すべてⅡ区包含層からの出土で時期は確定できないが江戸時代であろうか。

Ｍ１だけは耕土混じりの層から出土しているので新しい時期になる。頭部を曲げた釘である。断面5.5×6.5㎜の方形で頭部は13㎜曲げている。先端は折れており、残存長42.5㎜である。

Ｍ２は最大幅16㎜、残存長33.5㎜の薄い銅破片である。片側の弧状部分だけが確実に生きている。厚さは0.5㎜以下である。残存状態のためかもしれないが、反っている。

Ｍ３は銅製の煙管である。吸い口部分で最大幅は10.5㎜で図化した部分で幅９㎜、高さ6.5㎜の断面楕円形になっている。0.5㎜以下の薄さで曲げている。長さは35.5㎜残っている。（渡辺）

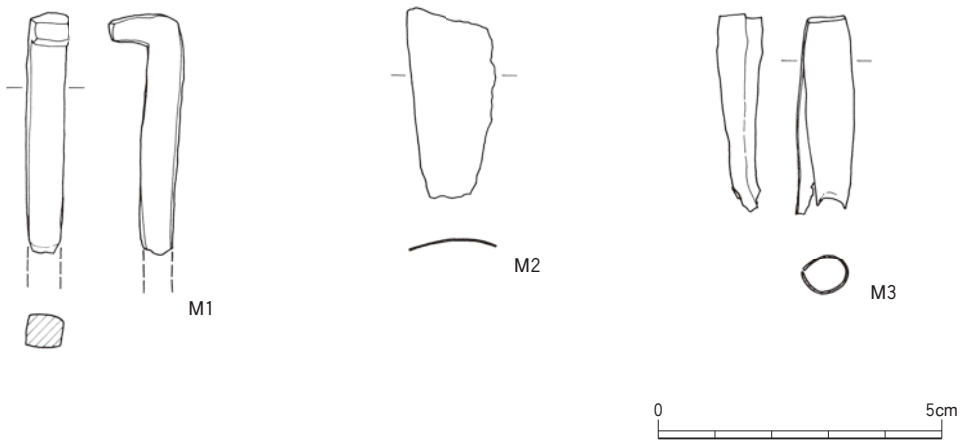


図12　金属器実測図

表２　出土遺物観察表

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
1	弥生土器	壺	Ⅰ	SK01	ナデ、ヨコナデ、斜格子文、円形浮文	外傾する口縁部で大きく曲げる	(11.00)	(2.85)		口縁部1/9	
2	弥生土器	壺	Ⅰ	SK01	ユビ成形からナデ・ハケ、円孔、凹線	外傾する体部で口縁部内湾し端部丸い	(11.30)	(6.60)		口縁部1/4	
3	弥生土器	鉢	Ⅰ	SK01	ケズリののちナデ、ヨコナデ	内湾し端部肥厚	(24.10)	(4.10)		口縁部1/18	
4	弥生土器	把手	Ⅰ	SK01	ナデ	断面不定円形		(8.55)		把手完	
5	弥生土器	甕	Ⅰ	SK01	ハケ整形、ヨコナデ、ナデ、凹線	内湾する体部から短く開く口縁部	(13.40)	(6.65)		口縁部1/9	
6	弥生土器	壺	Ⅰ	SK01	ナデ、ミガキ	平底から外傾する		(3.90)	(7.10)	底部1/4	
7	弥生土器	甕	Ⅰ	SK01	ナデ、ミガキ	平底から外反する		(3.70)	5.95	底部完	
8	弥生土器	壺	Ⅰ	SK02	ナデ、ヨコナデ、凹線、刻み目、円形浮文	外反し端部肥厚	(20.00)	(1.85)		口縁部1/12	
9	弥生土器	壺	Ⅰ	SK02	ナデ、ヨコナデ、突帯、沈線２条	外傾する		(2.45)		小片	
10	弥生土器	壺	Ⅰ	SK02	ナデ、ヨコナデ、凹線	外傾し端面で外側に肥厚	(13.90)	(5.15)		口縁部1/12	
11	弥生土器	鉢	Ⅰ	SK02	ヨコナデ、凹線４条	内湾し端部肥厚	(33.80)	(4.00)		口縁部1/18	
12	弥生土器	甕	Ⅰ	SK03	ハケ整形からナデ・ミガキ、ヨコナデ	内傾する体部に短く開く口縁部	(13.30)	(6.00)		口縁部1／9	
13	弥生土器	甕	Ⅰ	SK03	ユビ成形からナデ・ミガキ	平底から外傾する		(5.65)	(10.50)	小片	
14	弥生土器	壺	Ⅰ	SK03	ナデ、ヨコナデ、波状文・直線文	直線的に開く		(9.20)		小片	
15	弥生土器	甕	Ⅰ	SK05	ケズリ、ナデ、ミガキ	平底から外傾する		(6.10)	5.60	底部完	内面有機質
16	弥生土器	甕	Ⅰ	SK05	内面ケズリ、外面ハケ整形からナデ、ヨコナデ	平底から湾曲し短く外反する端部	(15.10)	(20.50)	5.55	口縁部3/5	
17	弥生土器	壺	Ⅰ	SK06	ヨコナデ、端面刺突文	外反し端部下に肥厚	(21.90)	(1.80)		口縁部1/8	
18	弥生土器	鉢	Ⅰ	SK06	ヨコナデ	内湾し、端部水平に大きく肥厚	(26.90)	(4.40)		口縁部1/6	
19	弥生土器	把手	Ⅰ	SK06	ナデ	断面不定円形		(3.35)		小片	
20	弥生土器	甕	Ⅰ	SK06	内面ケズリ、外面ハケ、口縁部ヨコナデ	内傾する体部から短く広がる口縁部	(12.45)	(6.60)		口縁部1/6	
21	弥生土器	甕	Ⅰ	SK06	ハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から短く外傾する口縁部	(23.85)	(6.50)		口縁部1/8	
22	弥生土器	甕	Ⅰ	SK06	ハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から短く外反し端部肥厚	(20.90)	(10.50)		口縁部1/8	
23	弥生土器	壺	Ⅰ	SK07	ユビ成形からナデ・ヨコナデ、突帯、刻み	外傾し湾曲して垂下、端部肥厚	(16.00)	(1.50)		口縁部1/10	
24	弥生土器	鉢	Ⅰ	SK07	ナデ、ヨコナデ、３条突帯	内湾する体部から端部肥厚	(22.30)	(3.70)		口縁部1/10	
25	弥生土器	壺	Ⅰ	SK07	ヨコナデ、５条波状文	外反し端部内外に肥厚		(1.30)		小片	
26	弥生土器	壺	Ⅰ	SK07	直線文帯４帯	内傾		(6.40)		小片	
27	弥生土器	壺	Ⅰ	SK07	ハケ整形、ナデ、指圧痕付突帯	くの字に広がる		(3.50)		小片	
28	弥生土器	壺	Ⅰ	SK07	ハケ、波状文	内傾		(2.60)		小片	
29	弥生土器	甕	Ⅰ	SK07	ナデ、ヨコナデ	内湾する体部、短く外反し端部つまむ	(15.10)	(4.80)		口縁部1/5	
30	弥生土器	甕	Ⅰ	SK07	ユビ成形からナデ・ハケ・ヨコナデ、	内傾する体部が短く外反し上につまむ	(16.10)	(5.00)		口縁部1/10	
31	弥生土器	甕	Ⅰ	SK07	ハケ整形からナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部で肥厚	(25.00)	(6.45)		口縁部1/7	
32	弥生土器	甕	Ⅰ	SK07	ハケ整形からナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反、端部つまむ	(25.10)	(7.60)		口縁部1/12	
33	弥生土器	甕	Ⅰ	SK07	ユビ成形からナデ・ハケ・板ナデ、	平底から外傾		(5.00)	(6.20)	底部1/4	
34	弥生土器	甕	Ⅰ	SK07	ヘラケズリからナデ	平底から外傾する		(5.10)	5.25	底部完	
35	弥生土器	甕	Ⅰ	SK07	ユビ成形、ケズリ、ナデ、ミガキ	平底から外傾する		(8.30)	(6.30)	底部1/2	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
36	弥生土器	甕	Ⅰ	SK07	ヘラケズリ、ナデ、ミガキ	平底から外傾する		(5.90)	(7.70)	底部1/4	
37	弥生土器	鉢	Ⅰ	SK07	ハケ整形、ヨコナデ、刻み	内湾し端部外側に水平に開く	(26.10)	(8.60)		口縁部1/6	
38	弥生土器	鉢	Ⅰ	SK07	ハケ整形、ヨコナデ、刻み	内湾し端部外側に水平に開く	(28.00)	(6.30)		口縁部1/8	
39	弥生土器	鉢	Ⅰ	SK07	ハケ整形からナデ・ミガキ、ヨコナデ	内湾する体部で端部水平で肥厚	(27.50)	(9.55)		口縁部3/4	
40	弥生土器	高杯	Ⅰ	SK07	絞り目、ケズリ、ミガキ	外反する、円板充填		(8.80)		筒部1/4	2次焼成
41	弥生土器	高杯	Ⅰ	SK07	ハケ、ミガキ	筒部大形で外反する、円板充填		(8.00)		筒部1/4	
42	弥生土器	鉢	Ⅰ	SK08	ナデ、ヨコナデ	内湾し端部付近で直立し端部肥厚する	(24.20)	(6.80)		口縁部1/8	
43	弥生土器	高杯	Ⅰ	SK08	ナデ、ヨコナデ	外反し端部上方につまみ上げる		(4.90)	(14.50)	裾部1/8	
44	弥生土器	甕	Ⅰ	SK10	ヨコナデ	外反する口縁部で端部内外に肥厚	(30.40)	(1.80)		口縁部1/16	
45	弥生土器	壺	Ⅰ	SK10	ハケ整形からナデ、波状文	内傾する		(3.50)		小片	
46	弥生土器	壺	Ⅰ	SK10	内面ケズリ、ナデ、外面ミガキ	平底から外傾する		(7.00)	7.90	底部完	
47	弥生土器	甕	Ⅰ	SK13	ヨコナデ、刻み目	屈曲する口縁部で端部肥厚する	(25.50)	(1.20)		口縁部1/10	
48	弥生土器	壺	Ⅰ	SK13	ナデ、波状文	内傾する		(3.50)		小片	
49	弥生土器	甕	Ⅰ	SK13	内面ケズリ、外面ハケからミガキ	平底から外反する		(3.20)	(4.90)	底部1/4	
50	弥生土器	甕	Ⅰ	SK14	ヨコナデ、刻み目	内傾する体部から外反し端部肥厚する	(27.80)	(2.50)		口縁部1/16	
51	弥生土器	壺	Ⅰ	SK14	ユビ成形からナデ	平底から内湾する		(7.00)	(5.70)	底部1/4	2次焼成
52	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	磨滅	外反し端部肥厚する	(19.00)	(2.00)		口縁部1/12	
53	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ユビ成形からナデ、沈線7条	直立ぎみの頸部から外反する口縁部	(19.40)	(15.00)		口縁部完	
54	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ユビ成形からナデ・ヨコナデ、5条沈線、刻み	外反し端部角張る	(13.60)	(8.35)		口縁部1/10	
55	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ユビ成形からナデ、沈線	外反する口縁部	21.00	(11.45)		口縁部1/4	
56	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ユビ成形からナデ、5・4条沈線、三角刺突文	内湾する		(9.00)		体部小片	
57	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ナデからミガキ、頸部突帯2条	平底から倒卵形体部、頸部外反する		(51.30)	11.50	底部完	
58	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ナデ、端面に沈線？	外反し端部角張る	(26.50)	(3.50)		口縁部1/5	
59	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	3条沈線	僅かに内湾		(5.20)		小片	
60	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ハケ整形からナデ、3条以上の沈線	外反する		(6.80)		小片	
61	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ハケ整形からミガキ、3条沈線	内湾する		(8.10)		小片	
62	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ハケ、ナデ、3条沈線後上下に3条突帯、キザミ	球形の体部から外反し端部角張る	(24.20)	(35.20)		口縁部1/3	
63	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ユビ成形からナデ・ミガキ、6条沈線	外に開き肩張り内湾する		(12.70)		小片	
64	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ユビ成形からナデ・ミガキ、4条沈線2帯	平底から倒卵形の体部		(33.00)	(10.90)	底部3/4	
65	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ハケ、ナデ、5条沈線	厚い平底から内湾、外反する頸部		(52.60)	15.00	頸部1/2	
66	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ナデ	上げ底から外反してから内湾する		(25.30)	14.70	底部3/4	
67	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ハケ整形からナデ、6条突帯、刻み目	外反する口縁部	29.80	(18.60)		口縁部2/3	
68	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ユビ成形からナデ、突帯3条2帯、頸部突帯	内湾する体部から直立から外反する頸部		(27.50)		頸部完	
69	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ユビ成形からナデ、突帯に刻み目	平底から球形の体部、直立する頸部		(28.30)	(9.40)	底部1/4	
70	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ハケ整形からミガキ、3条突帯	直立ぎみの頸部から外傾する		(4.20)		小片	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
71	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ナデ、７条突帯	内湾する		(7.70)		小片	
72	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	内面に貼付突帯で装飾	外反する		(3.10)		小片	
73	弥生土器	壺	Ⅰ	SK16	ナデ	平底から外傾		(3.70)	(8.90)	底部1/4	
74	弥生土器	甕	Ⅰ	SK16	ユビ成形からナデ、端部刻み、沈線	如意状		(4.20)		小片	
75	土師器	底部	Ⅰ	SK17	ヨコナデ、ミガキ、糸切り？	平底に内湾する体部		(1.90)	(4.00)	底部4/5	
76	土師器	皿	Ⅰ	SK19	ヨコナデ、ヘラ切り	平底から外傾し端部尖る	9.80	1.90	5.70	口縁部3/5	２次焼成
77	弥生土器	鉢	Ⅰ	P03	ナデ、ミガキ、ヨコナデ	内湾し端部大きく内外に肥厚	(26.40)	(5.10)		口縁部1/20	
78	弥生土器	壺	Ⅰ	SK05　P04	ナデ、ミガキ、ヨコナデ、10条凹線、斜格子	外傾し端部肥厚、体部僅かに湾曲	10.20	(13.00)		小片	
79	弥生土器	甕	Ⅰ	P05	ユビ成形からナデ・ハケ	上げ底から外傾する		(2.50)	5.10	底部完	
80	弥生土器	壺	Ⅰ	P30	ヨコナデ、竹管文、扇形文、刻み付突帯	斜めに垂下し端部肥厚	(35.70)	(3.20)		口縁部1/8	
81	弥生土器	壺	Ⅰ	P33	ハケ整形、ヨコナデ、ナデ、刻み	僅かに外反し端部肥厚	(16.70)	(5.40)		口縁部1/12	
82	弥生土器	壺	Ⅰ	P33	ヨコナデ	外反し端部上下に肥厚		(1.70)		小片	
83	弥生土器	壺	Ⅰ	P41	ハケ整形、竹管文、斜格子・直線文	内湾する		(6.10)		小片	
84	弥生土器	壺	Ⅰ	SD01	ヨコナデ、竹管文、刻み	内傾し垂下する口縁部	(14.50)	(1.60)		口縁部1/12	
85	弥生土器	壺	Ⅰ	SD01	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、２条突帯に刻み	外反する		(3.90)		口縁部1/6	
86	弥生土器	把手	Ⅰ	SD01	ナデ	断面不定楕円形		(5.95)		把手1/2	
87	弥生土器	壺	Ⅰ	SD01	ハケ整形からナデ、指圧痕のある突帯	内傾する肩部から外反する頸部		(7.30)		頸部1/3	
88	弥生土器	壺	Ⅰ	SD01	ハケ整形からナデ	平底から内湾する		(10.80)	(6.70)	底部1/2	
89	弥生土器	壺	Ⅰ	SD01	ナデ、縦方向のヘラミガキ	平底から外傾する		(4.10)	(7.20)	底部3/4	
90	弥生土器	甕	Ⅰ	SD01	ハケ、ヨコナデ	内湾する体部、短く外反し端部肥厚	(28.00)	(10.30)		口縁部1/5	
91	弥生土器	甕	Ⅰ	SD01	ハケ、ヨコナデ	内傾する体部から短く外傾しつまみ出す	(15.70)	(3.70)		口縁部1/12	
92	弥生土器	甕	Ⅰ	SD01	板ナデ、ミガキ	平底から僅かに外反する		(4.80)	(6.05)	底部1/5	
93	弥生土器	甕	Ⅰ	SD02	ハケ、ナデ	平底から外傾する		(2.70)	(7.40)	底部1/3	
94	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	２条突帯、棒状浮文、ミガキ	内湾する		(13.05)		体部小片	
95	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	ナデ、２条突帯（刻み）	内湾する		(6.35)		小片	
96	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	ナデ、斜格子文・円形浮文	内湾する		(9.50)		小片	
97	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	ユビ成形からハケ・ナデ、波状文・直線文	緩やかに開く		(3.90)		小片	
98	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	ナデ、波状文・直線文	外傾する		(4.40)		小片	
99	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	ナデ、２条突帯	内傾する		(4.55)		小片	
100	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	ハケ整形からナデ、２条突帯（刻み）	内湾する		(8.15)		小片	
101	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	ハケ整形から直線文	内傾する		(2.20)		小片	
102	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	内面ハケ、外面ナデからミガキ	僅かな上げ底から内湾する		(5.50)	(6.40)	底部4/9	
103	弥生土器	壺	Ⅰ	SH01	ナデのち外面ミガキ	平底から開く		(7.70)	(13.80)	底部1/5	
104	弥生土器	甕	Ⅰ	SH01	ハケ整形からヨコナデ	外反する口縁部で端部肥厚	(22.00)	(2.30)		口縁部1/12	
105	弥生土器	甕	Ⅰ	SH01	内面ケズリ、ナデ、口縁部ヨコナデ	内傾する肩部から外反する口縁部で肥厚	(34.00)	(6.00)		口縁部1/7	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
106	弥生土器	甕	Ⅰ	SH01	ヨコナデ	水平に延び端部内外に肥厚する	(32.00)	(1.65)		口縁部1/12	
107	弥生土器	甕	Ⅰ	SH01	ケズリから板ナデ・ミガキ	やや上げ底で体部外反ぎみ		(4.70)	4.80	底部5/6	
108	弥生土器	壺	Ⅰ	SX03	ナデ、ミガキ、突帯５条	外反する		(8.40)		頸部1/5	
109	弥生土器	壺	Ⅰ	SX03	縦方向のハケ整形、11条以上沈線	外反する		(9.40)		頸部1/4	
110	弥生土器	壺	Ⅰ	SX03	ナデ、ミガキ	平底から僅かに内湾する体部		(4.20)	(7.40)	底部1/2	
111	弥生土器	壺	Ⅰ	SX03	ナデ	大きな平底で外傾する		(3.45)	(19.00)	底部1/8	
112	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	ヨコナデ、５条凹線、円形浮文	外反し端部大きく垂下する	(19.20)	(2.30)		口縁部1/8	
113	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	ヨコナデ、円形浮文	大きく外反し垂下し端部肥厚する	(15.70)	(1.60)		口縁部1/8	
114	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	ハケ、２条突帯刻み目、ミガキ・ヨコナデ	外傾し端部肥厚する	(14.00)	(6.70)		口縁部1/8	
115	弥生土器	水差	Ⅱ	SX01	ハケ、ナデ、ヨコナデ、片口	くの字になり端面に凹線	(8.70)	(5.10)		口縁部1/4	118と同一
116	弥生土器	鉢	Ⅱ	SX01	ナデ、ヨコナデ	内湾し端部丸い	(7.40)	(8.10)		口縁部1/6	製塩？
117	弥生土器	鉢	Ⅱ	SX01	ハケ整形、浅い刺突文、ヨコナデ	外傾し端部付近で大きく内湾し肥厚	(16.50)	(7.20)		口縁部1/12	
118	弥生土器	把手	Ⅱ	SX01	ナデ	断面不定楕円形		(6.80)		把手1/2	115と同一
119	弥生土器	鉢	Ⅱ	SX01	ヨコナデ、２条突帯、刻み目	内湾し端部内外に肥厚し面となる	(31.50)	(4.30)		口縁部1/16	
120	弥生土器	鉢	Ⅱ	SX01	ヨコナデ、２条突帯	内湾し端部肥厚する		(2.50)		小片	
121	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	ユビ成形からナデ、外面ミガキ	平底から外傾する		(4.60)	(8.00)	底部1/2	
122	弥生土器	甕	Ⅱ	SX01	ヨコナデ、指圧痕の付く突帯、浮文、凹線	内傾する体部から外反し端部肥厚する	(17.10)	(6.50)		頸部1/4	
123	弥生土器	甕	Ⅱ	SX01	ヨコナデ、凹線	くの字で端部上につまみあげる	(17.90)	(2.40)		口縁部1/12	
124	弥生土器	甕	Ⅱ	SX01	ユビ成形からナデ、外面ミガキ	平底から外傾する		(2.50)	5.10	底部完	
125	弥生土器	甕	Ⅱ	SX01	ヨコナデ、ヘラケズリ	内湾する体部から外傾し端部肥厚		(7.70)		小片	
126	弥生土器	高杯	Ⅱ	SX01	ヨコナデ	外反し端部角張る		(5.70)	(12.80)	脚部1/5	
127	弥生土器	甕	Ⅱ	P03	ハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外反ぎみで端部つまむ	(13.80)	(4.30)		口縁部1/6	
128	弥生土器	壺	Ⅱ	P05	ヨコナデ、綾杉状刺突文、円形浮文	垂下する口縁部で端部肥厚する	(12.05)	(1.60)		口縁部1/5	河内産
129	弥生土器	甕	Ⅱ	P19	ハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外傾し端部上につまむ	(13.00)	(4.00)		頸部1/8	
130	弥生土器	壺	Ⅱ	P31	ヨコナデ、突帯１条、刻み目	外傾し端部角張り肥厚する	(12.10)	(7.70)		口縁部1/6	
131	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	ヨコナデ	垂下する口縁部で外反し端部尖る		(2.55)		口縁部1/8	
132	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	ヨコナデ	外反し端部角張る	(16.10)	(2.15)		口縁部1/5	
133	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	ヨコナデ、外面３条・内面１条突帯	外反する		(7.90)		頸部1/6	
134	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	ハケ整形、波状文・直線文	内湾する		(4.20)		小片	
135	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	ハケ整形、波状文・直線文・竹管文	内湾する		(7.70)		小片	
136	弥生土器	甕	Ⅱ	SX01	３条沈線	口縁部短く外反する		(3.05)		小片	
137	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01	磨滅のため不明	やや上げ底から外反する		(3.40)	(8.30)	底部1/4	
138	弥生土器	壺	Ⅱ	SK01	ユビ成形からハケ整形、ナデ、突帯	平底から倒卵形の体部になる		(42.00)	(12.80)	底部1/2	
139	弥生土器	壺	Ⅱ	SK01	ハケ整形、ナデ、突帯８条以上	外反する		(15.60)		頸部1/2	
140	弥生土器	甕	Ⅱ	SK01	ナデ、沈線６条	如意状の口縁部で端部丸い	(22.00)	(6.30)		口縁部1/18	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
141	弥生土器	甕	Ⅱ	SK01	ナデ、16条以上沈線	僅かに内湾する体部から短く外傾	(24.90)	(7.70)		口縁部1/6	
142	弥生土器	壺	Ⅱ	SK04	ハケ整形、ナデ、２条沈線	外反し端部角張る	(16.60)	(7.50)		口縁部1/9	
143	弥生土器	壺	Ⅱ	SK04	ナデ、８条沈線	内湾する		(3.30)		小片	
144	弥生土器	鉢	Ⅱ	SK04	ナデ、端部刻み目、１条沈線	僅かに開き外側に肥厚する		(2.10)		小片	
145	弥生土器	底部	Ⅱ	SK04	ナデ	平底から外傾する		(2.00)	5.40	底部完	
146	弥生土器	底部	Ⅱ	SK04	ハケ整形からナデ	平底から外反する		(4.80)	(8.05)	底部1/4	
147	弥生土器	底部	Ⅱ	SK04	ナデ	平底から僅かに内湾する		(8.60)	14.90	底部完	
148	弥生土器	甕	Ⅱ	SK04	ナデ、端部刻み目、７条沈線	如意状の口縁部で端部丸い	(15.80)	(4.00)		口縁部1/12	
149	弥生土器	甕	Ⅱ	SK04	ナデ、端部刻み目、８条沈線	直立ぎみの体部から短く外傾し角張る	(21.80)	(4.45)		口縁部1/18	
150	弥生土器	甕	Ⅱ	SK04	ナデ、端部刻み目、ハケ整形、８条沈線	直立ぎみの体部から短く外傾する	(21.80)	(6.10)		口縁部1/12	
151	弥生土器	甕	Ⅱ	SK04	ナデ、端部刻み目	如意状の口縁部で端部角張る	(23.00)	(5.90)		口縁部1/12	
152	弥生土器	底部	Ⅱ	SK04	ハケ整形からナデ	平底から外傾する		(5.50)	(8.20)	底部1/3	
153	弥生土器	甑	Ⅱ	SK04	ナデ、ハケ整形	やや上げ底から外傾、焼成後穿孔		(6.10)	(8.40)	底部2/3	
154	弥生土器	壺	Ⅱ	SK02	ヨコナデ	直立ぎみの頸部から外反し端部肥厚	(9.80)	(3.00)		口縁部1/6	
155	弥生土器	甕	Ⅱ	SK02	ヨコナデ、指頭圧痕付き突帯	内湾する体部から外反し端部内外に肥厚	(24.20)	(9.35)		口縁部1/6	２次焼成
156	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ユビ成形からナデ・ハケ・ミガキ、ヨコナデ	平底から肩の張る球形で外反する口縁部	(9.45)	(16.70)	6.35	約1/2	
157	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ヨコナデ	外反し端部垂下する		(3.35)		頸部1/5	
158	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ヨコナデ、外面２条・内面１条突帯	外反し端部垂下し丸い	(13.80)	(6.60)		口縁部1/4	
159	弥生土器	鉢	Ⅱ	SK05	ヨコナデ、３条突帯刻み目	内湾し端部肥厚し面になる	(31.50)	(4.55)		口縁部1/9	
160	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ハケ整形、斜格子文・直線文	内湾する		(4.50)		小片	
161	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ナデ、波状文	内湾する		(7.20)		小片	
162	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ハケ整形、波状文・直線文	内湾する		(8.00)		小片	
163	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ハケ整形、波状文・直線文	内湾する		(11.00)		小片	
164	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ハケ整形、波状文・直線文・竹管文	内湾する		(4.60)		小片	
165	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ハケ整形、波状文	内湾する		(7.40)		小片	
166	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ナデ、直線文・斜格子文	内湾する		(4.80)		小片	
167	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ハケ整形、ミガキ、斜格子文・直線文・列点	内湾する		(9.80)		小片	
168	弥生土器	壺	Ⅱ	SK05	ユビ成形からナデ・ミガキ	平底から外傾する		(14.40)	10.40	底部完	
169	弥生土器	甕	Ⅱ	SK05	ユビ成形からケズリ	平底から内湾する		(3.90)	5.05	底部5/8	
170	弥生土器	甕	Ⅱ	SK05	ヨコナデ	外傾し端部上につまむ		(1.40)		小片	
171	弥生土器	甕	Ⅱ	SK05	ユビ成形、磨滅顕著	内湾する体部から外反する口縁部	(15.20)	(4.20)		口縁部1/6	
172	弥生土器	高杯	Ⅱ	SK05	ヨコナデ、円形浮文	内湾する体部から水平に開き端部肥厚	(23.50)	(3.80)		口縁部1/10	
173	土製品	紡錘車	Ⅱ	SK05	転用、周囲を割る	内湾しており楕円形、中央に5.5㎜孔		径4.65	厚1.15	完形	
174	弥生土器	壺	Ⅱ	SK07	ヨコナデ、刻み目の付く突帯	外反する	(22.85)	(1.40)		小片	
175	弥生土器	壺	Ⅱ	SK07	ヨコナデ、円形浮文	外反し端部下に垂れ丸い	(21.80)	(4.20)		口縁部1/7	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
176	弥生土器	甕	Ⅱ	SK07	ナデ、外面ミガキ	平底から外反する		(2.40)	6.30	底部2/3	
177	弥生土器	壺	Ⅱ	SK08	ヨコナデ、綾杉状刺突文、竹管文	垂下する口縁部で端部角張る		(2.10)		口縁部1/10	
178	弥生土器	壺	Ⅱ	SK08	ヨコナデ、２条突帯	外反する		(5.50)		頸部1/18	
179	弥生土器	壺	Ⅱ	SK08	ヨコナデ、刻み目、２個１対の円孔	外傾し端部付近で大きく湾曲する	(15.30)	(3.60)		口縁部1/10	
180	弥生土器	鉢	Ⅱ	SK08	ナデ、ヨコナデ、突帯に刻み目	内湾し端部大きく肥厚し面になる	(26.35)	(4.60)		口縁部1/16	
181	弥生土器	壺	Ⅱ	SK08	ハケ整形、波状文	内湾する		(8.50)		小片	
182	弥生土器	壺	Ⅱ	SK08	ユビ成形からナデ	平底から内湾する		(4.90)	(14.00)	底部1/18	
183	弥生土器	壺	Ⅱ	SK08	ナデ、外面ミガキ	やや上げ底から内湾する		(4.30)	(9.50)	底部1/3	
184	弥生土器	壺	Ⅱ	SK08	ハケ整形からナデ、外面ミガキ	上げ底から外反する		(2.70)	8.40	底部完	
185	弥生土器	甕	Ⅱ	SK08	ユビ成形からナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反し端部肥厚	(40.00)	(6.20)		小片	
186	弥生土器	底部	Ⅱ	SK08	ハケ整形、底部再成形、ナデ	内湾し尖りぎみの底に小さな平底付加		(4.30)	2.50	底部完	
187	弥生土器	甕	Ⅱ	SK08	ナデ、外面ミガキ	平底から内湾する		(4.20)	4.90	底部1/2	
188	弥生土器	壺	Ⅱ	SK12	ハケ整形、２条突帯	外反する		(12.40)		小片	
189	弥生土器	高杯	Ⅱ	SK12	ヨコナデ	外反し端部肥厚し面になる		(5.25)	(18.00)	脚部1/10	
190	弥生土器	壺	Ⅲ	SX01	ナデ	外反し端部角張る、端面に沈線	(25.10)	(5.30)		口縁部1/12	
191	弥生土器	壺	Ⅲ	SX01	ヨコナデ、波状・直線・円形浮文	内傾する頸部から外傾し端部肥厚	(13.70)	(7.45)		口縁部1/3	
192	弥生土器	壺	Ⅲ	SX01	ヨコナデ、凹線３条	外反し端部大きく肥厚	(14.85)	(1.95)		口縁部1/6	
193	弥生土器	壺	Ⅲ	SX01	ユビ成形からナデ、斜格子文・円形浮文	内湾する		(9.70)		小片	
194	弥生土器	壺	Ⅲ	SX01	ナデ、直線文・波状文・斜格子文	内傾する		(7.40)		小片	搬入品？
195	弥生土器	壺	Ⅲ	SX01	ナデ、直線文・波状文	内傾する		(9.90)		小片	
196	弥生土器	壺	Ⅲ	SX01	板ナデ・ナデ後粗いミガキ	僅かな上げ底から内湾する		(3.50)	6.40	底部3/4	
197	弥生土器	壺	Ⅲ	SX01	板ナデ・ナデ、外面ハケ	平底から外傾する		(4.90)	(9.20)	底部1/2	
198	弥生土器	甕	Ⅲ	SX01	内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反し端部肥厚	(15.25)	(4.00)		口縁部1/8	
199	弥生土器	甕	Ⅲ	SX01	内面ケズリで口縁部ヨコナデ	外反する口縁部で端部肥厚、体部外傾	(22.30)	(3.20)		口縁部1/8	
200	弥生土器	壺	Ⅲ	SX01	ヨコナデ、凹線２条	外傾し端部内外に肥厚する	(25.00)	(2.60)		口縁部1/12	
201	弥生土器	甑	Ⅲ	SX01	ハケ・板ナデからナデ・ミガキ、底面穿孔	平底から外傾する		(5.75)	5.55	底部完	
202	弥生土器	甕	Ⅲ	SX01	ユビ成形からケズリ、ナデ、ミガキ	平底から外傾する		(7.90)	5.60	底部完	黒斑
203	弥生土器	壺	Ⅲ	SK01	ナデ、外面はハケ整形	平底から外傾する		(2.75)	5.60	底部3/4	
204	弥生土器	蓋	Ⅲ	SX01	ナデ	小さなつまみから内湾する		(1.90)		つまみ部完	
205	土製品	紡錘車	Ⅲ	SX01	ナデ、転用、中央穿孔	僅かに内湾する		径5.25	0.60	2/3	
206	弥生土器	器台	Ⅲ	SX01	ナデ、ヨコナデ、２条貼付突帯、刻み目	外傾する		(7.40)		脚部1/6	
207	弥生土器	甕	Ⅲ	SX02	口縁部ヨコナデ、表面磨滅	内湾する体部からバチ形の短い口縁部	(29.30)	(6.00)		口縁部1/8	
208	弥生土器	甑	Ⅲ	SX02	タタキ成形からハケ整形で消す、内面ハケ	不安定な平底中央に穿孔、内湾する体部		(6.40)	5.10	底部完	
209	弥生土器	壺	Ⅲ	SX02	内面ケズリからナデ、外面ハケ整形、波状文	内湾する		(4.10)		小片	
210	弥生土器	壺	Ⅲ	SX03	ナデ	平底から外傾する		(2.85)	4.45	底部完	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
211	弥生土器	壺	Ⅲ	SX03	内面ケズリからナデ、外面ヘラミガキ	平底から細く内湾する		(7.45)	3.80	底部完	黒斑
212	弥生土器	壺	Ⅲ	SK01	端面沈線１条後刻み目、貼付突帯４条ナデ	外反する頸部で口縁部開き端部角ばる	(17.45)	(9.00)		口縁部1/2	
213	弥生土器	壺	Ⅲ	SK01	ユビ成形からナデ、５条貼付突帯	外反する頸部で体部開く		(10.30)		頸部1/2	
214	弥生土器	壺	Ⅲ	SK01	ユビ成形からナデ、外面ヘラミガキ	長胴の球形		(14.10)		体部1/2	
215	弥生土器	壺	Ⅲ	SK01	６条以上沈線、ユビ成形からナデ・ミガキ	内傾する		(9.85)		体部1/2	
216	弥生土器	壺	Ⅲ	SK01	ユビ成形からハケ、ナデ	平底から外傾する		(2.70)	8.80	底部完	
217	弥生土器	甕	Ⅲ	SK01	ユビ成形からハケ・板ナデ、２条１対沈線	如意形の短い口縁部から内湾する体部	(37.40)	(21.40)		体部1/6	
218	弥生土器	甕	Ⅲ	SK01	内面・底ユビ成形からナデ、外面ハケ	平底から湾曲ぎみに外傾、如意状口縁部	23.60	27.85	8.50	口縁ほぼ完	
219	弥生土器	壺	Ⅲ	SK03	ハケ整形からナデ、底部焼成後穿孔	平底から内湾する		(10.10)	9.40	底部完	
220	弥生土器	甕	Ⅲ	P01	ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から短く外反する口縁部	(12.50)	(3.90)		口縁部1/6	
221	弥生土器	壺	Ⅲ	P22	ハケ整形からナデ、竹管文	内傾する		(3.65)		小片	
222	弥生土器	壺	Ⅲ	P22	ナデ、刺突文	外傾する		(3.10)		小片	
223	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ユビ成形からナデ・ハケ、ヨコナデ	外反し端部肥厚、内面１条、外面２条突帯	(21.15)	(9.40)		口縁部1/12	
224	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ヨコナデ、貼付突帯２条	外反する口縁部で内面に刻み目付加突帯		(10.95)		頸部1/4	磨滅
225	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ヨコナデ、刻み目付き突帯、刺突文	突帯から垂下し内湾、端部肥厚	(20.20)	(2.40)		口縁部1/5	
226	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ユビ成形からナデ・ハケ、外面ミガキ	平底から算盤玉状体部		(12.00)	6.70	底部3/4	
227	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ハケ整形からナデ	内湾する、把手外れたか？		(11.50)		体部1/4	
228	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ユビ成形からナデ、ヘラミガキ、ヨコナデ	平底から算盤玉状体部、口縁部外反	(12.25)	(27.15)	7.80	口頸部完	
229	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ハケ整形、ナデ	平底から外傾する体部		(14.10)	(11.25)	底部1/2	
230	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ユビ成形からナデ、外面ミガキ	平底から内湾する		(11.60)	(9.45)	底部3/4	
231	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ユビ成形からナデ	平底から僅かに外反する体部		(4.90)	6.70	底部完	
232	弥生土器	甕	Ⅲ	SD01	ケズリか、外面ハケ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部に短く外傾し端部肥厚	(29.25)	(18.10)		口縁部1/6	磨滅
233	弥生土器	甕	Ⅲ	SD01	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部に短く外傾し端部角張る	(13.15)	(13.05)		頸部1/8	
234	弥生土器	甕	Ⅲ	SD01	ユビ成形から強い板ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾し端部肥厚	(9.40)	(7.00)		口縁部1/2	
235	弥生土器	甕	Ⅲ	SD01	ユビ成形から強い板ナデ、ヨコナデ	肩の張る内湾する体部に短く外傾する	(8.70)	(9.70)		口縁部1/2	
236	弥生土器	甕	Ⅲ	SD01	ユビ成形から強い板ナデ・ハケ、ヨコナデ	肩の張る内傾する体部に短く内湾する	(9.40)	(5.70)		口縁部1/4	
237	弥生土器	甕	Ⅲ	SD01	ユビ成形からハケ・ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部		(11.60)		頸部1/8	
238	弥生土器	甑	Ⅲ	SD01	ナデ、ヘラミガキ、焼成前穿孔底部端に	上げ底から内湾する		(3.50)	4.90	底部完	黒斑
239	弥生土器	壺	Ⅲ	SD01	ユビ成形からナデ・板ナデ、外面ミガキ	平底から外傾し、上下から穿孔しかかる		(4.70)	7.70	底部完	
240	弥生土器	壺	Ⅲ	SD02	ユビ成形からナデ、沈線、ヨコナデ・ミガキ	内湾する体部から外反し端部丸い	18.50	(25.40)		口縁部1/2	
241	弥生土器	壺	Ⅲ	SD02	ハケ整形からナデ	平底から外傾する		(4.80)	(8.65)	底部1/3	
242	弥生土器	壺	Ⅲ	SD05	ユビ成形からナデ	平底から外反する		(4.75)	(7.10)	底部1/3	
243	弥生土器	壺	Ⅲ	SD03	ヨコナデ、沈線後キザミ・円形浮文、端部キザミ	外反し端部下に垂下、上に突帯	(15.60)	(1.80)		口縁部1/12	
244	弥生土器	壺	Ⅲ	SD03	ナデ整形、外面縦方向のミガキ	平底から外傾する		(4.40)	(8.55)	底部1/4	
245	弥生土器	高杯	Ⅲ	SD03	ユビ成形からナデ、突帯１条、端部ヨコナデ	外反し端部上方につまみ上げる		(10.60)	13.90	裾部3/4	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
246	弥生土器	甕	Ⅲ	SD03	ユビ成形から内面板ナデ、外面ハケ・ミガキ	長胴の球形で端部短く外反し端部つまむ	(14.00)	(20.00)		口縁部1/4	磨滅
247	弥生土器	壺	Ⅲ	SD03	外面ハケ、全体にナデ、口縁部ヨコナデ	平底から長胴に内湾し口縁部短く外反	13.15	20.50	5.45	口縁部3/4	磨滅
248	弥生土器	壺	Ⅲ	SD03	２本１対の沈線と波状文、ナデ	内湾する		(5.75)		小片	
249	弥生土器	壺	Ⅲ	SD03	ナデ、列点文	内湾する		(3.20)		小片	
250	弥生土器	壺	Ⅲ	SD07	ヨコナデ、内面３条突帯に刻み目、外面浮文	外反する、端部内外に肥厚、２個１対円孔	(23.60)	(2.20)		口縁部1/4	
251	弥生土器	壺	Ⅲ	SD07	ハケ整形からナデ、ヨコナデ、２条突帯、刻み目	外反し内面に細い２条突帯、小円孔	(14.50)	(6.80)		口縁部1/8	
252	弥生土器	壺	Ⅲ	SD07	３条凹線、竹管文付円形浮文、ヨコナデ	口縁端部で丸い、内湾するか		(2.10)		小片	
253	弥生土器	壺	Ⅲ	SD07	３条突帯に刻み目、間に２個１対小円孔	外反する		(5.05)		小片	
254	弥生土器	壺	Ⅲ	SD07	ヨコナデ、指圧痕付貼付突帯	外反する		(3.60)		頸部1/5	
255	弥生土器	壺	Ⅲ	SD07	ナデ、直線文と波状文	内湾する		(6.70)		小片	
256	弥生土器	高杯	Ⅲ	SD07	ハケ整形からナデ、ヨコナデ、ミガキ	直線的に開き方形の突帯から外側に開く	(20.85)	(5.25)		口縁部1/16	
257	弥生土器	底部	Ⅲ	SD07	ユビ成形からナデ	上げ底		(2.50)	6.30	底部完	
258	弥生土器	壺	Ⅲ	SD07	ユビ成形からナデ	ドーナツ状底から外傾する		(3.00)	(4.20)	底部1/2	
259	弥生土器	壺	Ⅲ	SD07	ハケ整形から板ナデ	小さめの平底から外傾する		(4.65)	4.30	底部完	
260	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、端面に刺突文	外反し端部上下に肥厚	(21.30)	(2.30)		口縁部1/8	
261	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ユビ成形からハケ、ヨコナデ、端面貝殻施文	外反し垂れて端部肥厚	(20.20)	(1.55)		口縁部1/4	
262	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、ヨコナデ、指圧痕付突帯、４条凹線浮文	外反し端部大きく肥厚	(29.65)	(8.60)		口縁部5/6	
263	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、端面に波状文	端部肥厚する	(15.85)	(1.55)		口縁部1/10	
264	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、３条凹線に４本の棒状浮文付加	外傾し端部肥厚する	(16.45)	(1.85)		口縁部1/7	
265	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、５条凹線に刺突文、円孔あり	外反し端部下に垂下		(2.20)		小片	
266	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ハケ整形からナデ、波状文・円形浮文	内湾する体部から直立する頸部		(10.90)		小片	
267	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ	外傾し端部上方につまみ出す	(31.50)	(3.30)		口縁部1/12	
268	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、円形浮文	外傾し端部肥厚する	(23.60)	(2.40)		口縁部1/12	
269	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ハケ整形からナデ、ヨコナデ、凹線４条	外傾し直立する大きな端面の口縁部	(23.40)	(6.35)		口縁部1/6	
270	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、突帯キザミ、端面に刺突文、扇形文	垂下する端部は外反し端部肥厚	(20.75)	(2.70)		口縁部1/8	搬入品
271	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、刻み目付き突帯、貝殻状刺突文	大きく外反し端部肥厚、内面２条突帯	(21.00)	(2.80)		口縁部1/6	
272	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、内面の突帯に刻み目	外反し端部内外に肥厚、内面に突帯	(16.90)	(2.45)		口縁部1/8	
273	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、ヨコナデ、２条貼付突帯、指頭圧痕	外反する		(6.35)		頸部1/5	
274	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、４条突帯の上に棒状浮文	外反する		(3.40)		小片	
275	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、波状文、直線文	内湾する		(5.10)		小片	
276	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、凹線２条、斜格子文、下に円形浮文、ハケか	内傾する		(3.80)		小片	
277	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ハケ整形後ナデ・ミガキ、刺突文	内傾する		(3.70)		小片	
278	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ハケ整形後ナデ、直線文・波状文	内傾する		(6.50)		小片	
279	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ハケ整形後ナデ、直線文・波状文・斜格子	内湾する		(5.80)		小片	
280	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	直線文・円形浮文	内湾する		(8.60)		小片	搬入品

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
281	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、外面ミガキ？　斜格子文・直線文	内湾する		(8.70)		小片	
282	弥生土器	無頸壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、突帯２条	内湾し端部角張る	(13.45)	(6.10)		口縁部1/8	
283	弥生土器	無頸壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ハケ整形からナデ、ヨコナデ、２条突帯	内湾し端部角張る	(16.80)	(5.95)		口縁部1/10	
284	弥生土器	無頸壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、突帯２条	内湾し端部丸い	(16.80)	(3.60)		口縁部1/8	
285	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、３条指圧痕付貼付突帯	外反し端部肥厚	(15.00)	(5.05)		口縁部1/10	
286	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ユビ成形からハケ・ナデ、外面ミガキ	平底から内湾する		(12.60)	7.65	底部完	
287	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ハケ整形からミガキ	平底から外傾する		(15.50)	(9.90)	体部1/4	
288	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、指圧痕付貼付突帯、円形浮文	外反し端部内外に肥厚	(29.50)	(5.20)		口縁部1/6	
289	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	内外面ハケ、ナデ、口縁部ヨコナデ	僅かに内湾する体部、短く外傾しつまむ	(13.60)	(5.20)		頸部1/8	
290	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ハケ整形、ヨコナデ	内傾する体部から短く外反し端部つまむ	(15.90)	(4.10)		口縁部1/8	
291	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、ヨコナデ	直立ぎみになり、口縁部短く外傾	(16.75)	(4.10)		口縁部1/10	
292	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ユビ成形から内面板ナデ、外面ハケ、ヨコナデ	内湾する体部から短く外反し端部肥厚	(12.20)	(5.40)		口縁部1/8	
293	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、ヨコナデ	僅かに内湾する体部から短く外傾		(4.90)		小片	
294	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、ヨコナデ	内湾する体部口縁部短く外反し端部肥厚	(18.75)	(5.70)		口縁部1/8	
295	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、沈線１条、端部刻み目	短く如意状になる、端部丸い	(19.00)	(1.85)		小片	
296	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、外面ミガキ	平底から外反する		(5.15)	5.60	底部完	
297	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、外面ミガキ	平底から外反する		(3.70)	(5.45)	底部完3/4	
298	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、外面ミガキ	平底から外反する		(3.30)	5.20	底部完	
299	弥生土器	底部	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ユビ成形からハケ・ナデ、強く焼ける	平底から外反する		(3.20)	(6.60)	底部3/8	
300	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ユビ成形からナデ	平底から内湾する		(6.00)	(3.95)	底部1/3	
301	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ユビ成形からナデ、外面ミガキ、黒斑	平底から外傾する		(7.45)	8.20	底部完	
302	弥生土器	脚台	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ヨコナデ、凹線	外反し端部角張り肥厚する		(2.05)	(18.35)	裾部1/6	
303	弥生土器	脚台	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、ヨコナデ	外反し端部角張る		(5.40)	(14.30)	裾部1/8	
304	弥生土器	高杯	Ⅲ	礫層上　落ち込み	内外ミガキ、ヨコナデ、凹線後刺突文・浮文	内湾し端部近くで水平に開き端部肥厚	(27.20)	(3.60)		口縁部1/9	
305	弥生土器	高杯	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ナデ、ミガキ、刺突文・４個１対円形浮文	内湾する杯部から水平に開き肥厚	(28.00)	(4.50)		口縁部1/2	
306	弥生土器	高杯	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ミガキ、ヨコナデ	外傾し方形の突帯となり水平に開く	(21.80)	(3.70)		口縁部1/10	
307	弥生土器	高杯	Ⅲ	礫層上　落ち込み	内面ケズリ、外面ナデ、ヨコナデ	外反し端部肥厚する		(4.95)	(10.25)	裾部1/4	
308	弥生土器	高杯	Ⅲ	礫層上　落ち込み	内面ヘラケズリ、ヨコナデ、鋸歯文	内湾し端部大きく内外に肥厚		(2.40)	(10.00)	裾部1/8	
309	弥生土器	高杯	Ⅲ	礫層上　落ち込み	ハケ整形から外面ミガキ、ヨコナデ	外に開き端部上に延びる		(4.75)	(15.40)	裾部1/8	
310	弥生土器	高杯	Ⅲ	礫層上　落ち込み	内面ヘラケズリ、ヨコナデ、三角刺突文、絵画？	外傾し端部内外に肥厚する		(4.20)	(12.85)	裾部1/10	
311	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、内面２条突帯キザミ	外反する		(5.30)		小片	
312	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	ナデ、ヨコナデ	外傾し端部付近で大きく湾曲	(15.80)	(2.40)		口縁部1/6	
313	弥生土器	甕	Ⅲ	北半流路	ヨコナデ、凹線２条	外反し端部肥厚	(20.10)	(1.80)		口縁部1/9	
314	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、刺突文	大きく外反し端部丸い	(10.40)	(2.80)		口縁部1/2	
315	弥生土器	鉢	Ⅲ	北半流路	ハケ、ナデ	外反ぎみに開き内側に大きくつまむ	(11.60)	(5.80)		口縁部1/6	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
316	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	ナデ、矢羽根状文様、３条突帯、棒状浮文	外反する		(6.20)		頸部1/4	
317	弥生土器	甕	Ⅲ	北半流路	ハケ、ナデ、ヨコナデ	外反する口縁部で端部角張る	(13.15)	(3.30)		口縁部3/8	
318	弥生土器	鉢	Ⅲ	北半流路	ヨコナデ	やや開き端部肥厚	(22.40)	(2.30)		口縁部1/6	
319	弥生土器	高杯	Ⅲ	北半流路	ケズリ、ナデ、ヨコナデ、三角刺突文、鋸歯文	外傾し端部上に肥厚		(2.40)	(9.20)	裾部1/8	
320	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	粗いハケ、ナデ	平底から内湾する		(5.40)	(7.70)	底部完	
321	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	ナデ、２条突帯、棒状浮文、竹管文、波状	内傾する		(7.00)		小片	
322	弥生土器	鉢	Ⅲ	北半流路	ケズリ、ナデ、ヨコナデ、２個円孔、外面タタキ	僅かに内湾し端部角張る		(6.45)		小片	
323	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	ナデ、３条突帯にキザミ	内湾する		(5.15)		小片	
324	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	ナデ、３条突帯	外反する		(5.40)		小片	
325	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	ナデ、列点文、円形浮文、波状文	内湾するが、肩が張る		(7.95)		体部1/6	
326	弥生土器	壺	Ⅲ	北半流路	ナデ、竹管文、波状文	内湾する		(3.80)		小片	
327	弥生土器	甕	Ⅲ	北半流路	ナデ、刺突文	内湾する		(1.80)		小片	
328	縄文土器	鉢	Ⅱ	面精査	条痕文、刻み目の付く突帯	直立ぎみで端部角張りぎみ		(3.70)		小片	
329	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ナデ、刻み目の付く突帯２条	内湾する		(3.10)		小片	
330	弥生土器	壺	Ⅱ	SH01　撹乱	ハケ、ナデ、沈線５条	僅かに内湾する		(6.70)		小片	
331	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ナデ、２条単位の波状文・直線文	内湾する		(6.90)		小片	
332	弥生土器	壺	Ⅱ	面精査	ナデ、７条沈線	内湾する		(10.30)		体部1/15	
333	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ユビ成形からナデ、３条沈線	頸部から肩部は外反し内湾ぎみになる		(7.40)		小片	
334	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ユビ成形からナデ、外面はハケからナデ	平底から湾曲ぎみに外傾		(10.30)	16.50	底部1/2	
335	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ハケ、ナデ、ヨコナデ、圧痕付き突帯、浮文	外反し端部大きく湾曲し丸い、波状文	(13.20)	(4.90)		口縁部1/4	
336	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ヨコナデ、刻み目	内傾し端部大きく外反	(13.80)	(2.90)		口縁部1/8	
337	弥生土器	壺	Ⅲ	面精査	ヨコナデ、円形浮文	外反し端部垂下する	(14.00)	(2.40)		口縁部1/8	
338	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ヨコナデ、端面に綾杉状の刻み目、突帯１条	内反し端部垂下し尖る、上部に突帯	(14.40)	(2.70)		小片	
339	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ハケ、ヨコナデ、３条凹線、刺突文	水平に開き上下に肥厚	(19.30)	(1.90)		口縁部1/10	
340	弥生土器	壺	Ⅲ	側溝	ナデ、ヨコナデ、キザミ、突帯、凹線、刺突文	外反し端部肥厚	(17.40)	(1.90)		口縁部1/12	
341	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ヨコナデ、円形浮文	内湾する	(15.60)	(1.75)		口縁部1/12	
342	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、ナデ、３条凹線	外反し端部大きく肥厚	(16.85)	(1.85)		口縁部1/8	
343	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ヨコナデ、２条凹線、刺突文	外反する	(19.80)	(1.35)		口縁部1/7	
344	弥生土器	壺	Ⅲ	黒褐シルト	ヨコナデ、４条凹線、刺突文	外反し端部大きく垂下	(27.60)	(2.50)		口縁部1/16	
345	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、２条突帯、刺突文、円形浮文	外反し下方に垂下し端部丸い	(19.80)	(2.25)		口縁部1/8	
346	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、５条凹線に棒状浮文	端面内湾	(24.00)	(2.60)		口縁部1/12	
347	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ハケ整形、ヨコナデ１条突帯に刻み目、凹線	外反し端部肥厚、穿孔	(20.70)	(1.70)		口縁部1/6	
348	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ヨコナデ、刻み目	外反し大きく肥厚する	(21.90)	(1.50)		小片	
349	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ヨコナデ	外反し垂下する	(21.60)	(1.55)		口縁部1/12	
350	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ヨコナデ、円形浮文	短く外反し端部肥厚	(29.95)	(1.90)		口縁部1/12	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
351	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ハケ整形、ヨコナデ、指圧痕付き突帯	外反し端部上につまみあげる	(16.70)	(7.80)		口縁部1/10	
352	弥生土器	壺	Ⅲ	側溝	ナデ、ヨコナデ	外反し端部角張る	(14.35)	(4.50)		口縁部1/12	
353	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ヨコナデ、２条突帯、棒状浮文	外傾し端部肥厚する		(2.50)		小片	
354	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ハケ、ナデ、ヨコナデ、２条凹線	外反し端部肥厚		(3.35)		小片	
355	弥生土器	壺	Ⅲ	黒褐シルト	３条凹線、刺突文、ヨコナデ	外傾し端部近くで立ち上がる		(2.50)		小片	
356	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ヨコナデ、２条凹線	屈曲して外傾し端部角張る	(7.80)	(3.60)		口縁部1/6	
357	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ヨコナデ、刻み目	外傾し端部角張る	(8.95)	(3.55)		口縁部1/7	
358	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ナデ、ミガキ	不安定な小さな平底から外反する		(2.75)	3.25	底部完	
359	弥生土器	壺	Ⅲ	黒褐シルト	ハケ、ナデ、工具痕	平底から外傾		(3.30)	(4.75)	底部5/8	
360	弥生土器	甕	Ⅲ	包含層	ハケ、ナデ	平底から内湾する		(4.25)	(5.90)	底部1/3	
361	弥生土器	壺	Ⅲ	黒褐シルト	ハケ、ナデ、ミガキ	突出平底から内湾する		(5.75)	6.55	底部4/5	
362	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01　撹乱	ハケ整形、ナデ	平底から外傾する		(3.30)	(8.70)	底部1/3	
363	弥生土器	壺	Ⅱ	SX01　撹乱	ハケ整形、外面ミガキ	平底から外反する		(4.60)	(5.70)	底部1/2	
364	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ハケ、ナデ、ヨコナデ、波状文、キザミ、２条突帯	外傾し端部肥厚する	(11.60)	(4.50)		口縁部1/4	
365	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ナデ、ヨコナデ	内湾し端部肥厚	(19.85)	(4.50)		口縁部1/10	
366	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、突帯４条	僅かに内湾し端部肥厚	(14.70)	(4.90)		口縁部1/8	
367	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ユビ成形からナデ、直線文・円形浮文	内湾する		(5.20)		小片	
368	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ハケ整形、波状文・直線文、頸部突帯	緩やかに開く		(6.20)		小片	
369	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ナデ、ヨコナデ、３条突帯、棒状浮文	外反する、細い浮文		(4.75)		小片	
370	弥生土器	壺	Ⅱ	包含層	ナデ、ヨコナデ、指圧痕付き突帯、斜格子文	外反する頸部から直立し端部上につまむ	(34.40)	(9.20)		小片	
371	弥生土器	壺	Ⅱ	包含層	ナデ、ミガキ、ヨコナデ、凹線	外傾し端部近くで大きく湾曲し角張る	(16.50)	(9.00)		口縁部1/6	
372	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ナデ、ヨコナデ、１条突帯	内湾し端部肥厚	(38.40)	(5.30)		小片	
373	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、ナデ、２条突帯、刻み目	内傾し端部肥厚	(26.40)	(4.20)		口縁部1/10	
374	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、ナデ、６条凹線、波状文	内傾し端部肥厚	(24.00)	(4.50)		口縁部1/16	
375	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、刻み目	内湾し端部肥厚	(23.80)	(2.55)		口縁部1/16	
376	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、ナデ、２条突帯、刻み目	内湾し端部内側につまむ	(18.25)	(4.80)		口縁部1/12	
377	弥生土器	壺	Ⅲ	黒褐シルト	ナデ、ヨコナデ、指頭圧痕の付く突帯	外反する		(5.50)		小片	
378	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ナデ、指圧痕の付く幅の広い突帯	外反する		(3.90)		小片	
379	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ハケ、ナデ、斜格子・直線文	内湾		(7.60)		小片	
380	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ナデ、突帯？	内湾する		(4.10)		小片	
381	弥生土器	壺	Ⅲ	側溝	ハケ、ヨコナデ、凹線、波状文、直線文	内湾する		(6.70)		小片	
382	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ナデ、６条波状文	僅かに内湾する		(6.10)		小片	
383	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ナデ、３条単位の波状文・直線文	内湾する		(6.90)		小片	
384	弥生土器	壺	Ⅱ	面精査	ナデ、竹管文	内湾する		(3.20)		小片	
385	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ハケ整形、ナデ、波状文	外傾する		(4.50)		小片	

番号	種別	器種	地区	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
							口径	器高	底径		
386	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ナデ、波状文、直線文、円形浮文	外傾		(3.40)		小片	
387	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ナデ、円形浮文	内湾する		(4.30)		小片	
388	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ナデ、波状文・直線文	内傾する体部		(5.00)		小片	
389	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ナデ	外反する		(3.30)		小片	
390	弥生土器	壺	Ⅲ	礫層	ナデ、突帯、棒状浮文、竹管文、波状文	内傾する		(5.10)		小片	
391	弥生土器	壺	Ⅲ	包含層	ハケ整形、ナデ、波状文、直線文	外傾する		(8.60)		小片	
392	弥生土器	壺	Ⅰ	面精査	ハケ整形、波状文・直線文	内傾する体部		(5.00)		小片	
393	弥生土器	蓋	Ⅲ	黒褐シルト	ナデ	短く外反し端部丸い、体部開く		(2.70)		つまみ完	
394	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層	ハケ、ヨコナデ	直線的体部に短く外反する口縁部	(30.00)	(5.90)		頸部1/10	
395	弥生土器	甕	Ⅲ	包含層	ヨコナデ	内湾する体部にバチ形の短い口縁部	(22.60)	(5.90)		口縁部1/4	
396	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層	ハケ、ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾し端部肥厚	(22.40)	(6.70)		口縁部1/5	
397	弥生土器	甕	Ⅲ	側溝	ヨコナデ、刺突文	体部内湾し口縁部外反から直立する	(14.90)	(6.80)		口縁部1/8	
398	弥生土器	甕	Ⅲ	土壌化層	ヘラケズリ、ナデ、ヨコナデ	外反し端部角張る	(18.05)	(3.20)		口縁部1/4	
399	弥生土器	甕	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、内外面ハケ	内湾する体部から短く開く	(19.70)	(5.95)		口縁部1/16	
400	弥生土器	甕	Ⅲ	包含層	ヨコナデ	内傾する体部から外傾し端部肥厚	(23.30)	(4.00)		口縁部1/8	
401	弥生土器	甕	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、内面ハケ	内湾する体部から短く開き端部肥厚	(14.15)	(5.50)		口縁部1/8	
402	弥生土器	甕	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、内面ナデ	外傾する口縁部で端部肥厚	(15.90)	(2.85)		口縁部1/4	
403	弥生土器	甕	Ⅲ	包含層	ハケ整形からナデ、ヨコナデ、３条凹線	内傾する体部から短く外反し端部肥厚	(15.60)	(4.75)		口縁部1/10	
404	弥生土器	甕	Ⅰ	面精査	ナデ、ハケ、ヨコナデ	内傾する体部から短く外反し端部つまむ	(17.40)	(2.90)		口縁部1/9	
405	弥生土器	甕	Ⅲ	包含層	ナデ、ヨコナデ、凹線２条	短い頸部から外傾し端部肥厚	(15.20)	(2.90)		口縁部1/5	
406	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層	内面ケズリ、ハケ、ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾し端部肥厚	(11.80)	(4.75)		口縁部1/8	
407	弥生土器	甕	Ⅲ	包含層	ヨコナデ、ナデ	内湾する体部から外傾し端部丸い	(11.05)	(7.50)		口縁部1/16	
408	弥生土器	甕	Ⅰ	面精査	ミガキ	外傾する		(6.10)		小片	
409	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層	ナデ、ミガキ	平底から外反する		(5.05)	(8.70)	底部1/2	
410	弥生土器	甕	Ⅲ	側溝	ハケ、ナデ、ミガキ	外側に突出した平底から外傾する		(8.00)	(8.35)	底部1/3	
411	弥生土器	甑	Ⅲ	包含層	板ナデ、ミガキ	平底から外傾する		(8.75)	6.65	底部完	
412	弥生土器	甕	Ⅲ	礫層	タタキ、ナデ	平底から外傾		(4.15)	(5.10)	底部1/2	
413	弥生土器	甑	Ⅲ	礫層	ナデ、ミガキ、焼成前穿孔	やや上げ底で中央に両側から穿孔		(2.20)	(5.90)	底部1/2	
414	弥生土器	甑	Ⅲ	礫層	タタキ、ハケ、ナデ、焼成前穿孔	外反し小さな平底中央穿孔		(6.10)	2.20	底部完	
415	弥生土器	高杯	Ⅲ	包含層	ハケ、ヨコナデ、端面１条凹線	内湾し端部肥厚	(30.40)	(4.80)		口縁部1/10	
416	弥生土器	高杯	Ⅲ	礫層	ヨコナデ、列点文、刻み目	内湾し端部大きく内外に肥厚	(32.50)	(3.60)		口縁部1/10	
417	弥生土器	高杯	Ⅲ	包含層	内面ケズリ、端部ヨコナデ	外反し端部肥厚		(5.60)	(14.70)	裾部1/6	
418	弥生土器	脚台	Ⅲ	土壌化層	ハケ、ナデ、ヨコナデ	外反し端部角張りぎみ、杯底は平坦		(5.95)	(9.00)	裾部1/3	
419	弥生土器	器台	Ⅲ	包含層	ナデ、ヨコナデ、２条突帯、キザミ、透孔	外反		(9.40)		小片	
420	土師器	羽釜	Ⅰ	面精査	ユビ成形からハケ・ナデ、口縁部ヨコナデ	直立する体部で端部角張る、外反する鍔	(19.55)	(8.50)		鍔部1/10	

市之郷遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

㈱加速器分析研究所

1　測定対象試料

市之郷遺跡は、兵庫県姫路市市之郷（北緯34°49′36″、東経134°42′24″）に所在する。測定対象試料は、土坑Ⅱ区SK05埋土から出土した炭化米（1：IAAA－83002)、Ⅱ区SK08埋土から出土した炭化米（2：IAAA－83003)、合計2点である。

2　測定の意義

遺構の時期を特定する。土坑からは時期の明らかな土器は出土しなかったが、周辺遺構では弥生時代前期末の遺物が出土した。

3　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

(3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

(4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

(6) グラファイトを内径1㎜のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4　測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C－AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH－2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

(1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977)。

(2) ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C／^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C／^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

(4) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6　測定結果

^{14}C年代は、Ⅱ区SK05出土の炭化米が2330±30yrBP、Ⅱ区SK08出土の炭化米が2170±30yrBPである。弥生時代前期から中期の年代となっている。炭素含有率は60％以上であり、処理・測定上の問題は認められない。

表３　試料一覧

測定番号	試料名	採　取　場　所	試料形態	処理方法	δ^{13}C(‰)（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA－83002	1	遺構：土坑(Ⅱ区SK05) 層位：土坑埋土	炭化米	AaA	－27.58±0.48	2,330±30	74.85±0.28
IAAA－83003	2	遺構：土坑(Ⅱ区SK08) 層位：土坑埋土	炭化米	AaA	－24.07±0.40	2,170±30	76.31±0.29

［#2790］

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA－83002	2,370±30	74.45±0.27	2,327±30	406BC－383BC（68.2%）	507BC－439BC（ 6.0%） 420BC－358BC（86.9%） 278BC－258BC（ 2.5%）
IAAA－83003	2,160±30	76.46±0.28	2,171±30	352BC－296BC（41.0%） 228BC－221BC（ 3.9%） 211BC－176BC（23.3%）	363BC－157BC（92.9%） 135BC－116BC（ 2.5%）

［参考値］

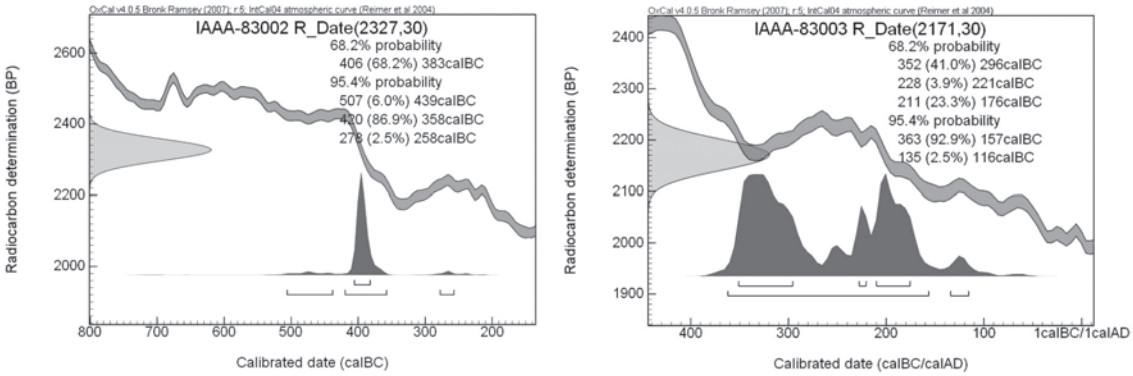
参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion：Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355－363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy：the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425－430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355−363
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381−389
Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0−26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029−1058

図13　暦年較正年代グラフ



Ⅵ　おわりに

本報告の大日線に伴う発掘調査は平成18年度の2006年12月から翌２月まで実施した。調査地点東側には市之郷廃寺が存在しており、周辺一帯が市之郷遺跡として理解されていた。市之郷廃寺の土壇が明治33年の地形図に残されている。塔心礎をはじめとする礎石も残っていたが、鉄道用地に編入される際に塔心礎は北側薬師堂に移されたと伝えられ、現在も存在する。市之郷廃寺周辺を姫路市では仮称姫路駅周辺遺跡第３地点として登録されている。遺跡の範囲がほとんど鉄道用地・関連施設となっており、大規模な調査は最近まで行われていなかった。鉄道高架工事を主とする姫路駅周辺一帯の区画整理・再開発が計画されることによって、市之郷遺跡の調査が行われるようになった。広範な鉄道ヤードが活用されることになり、今後とも遺跡の調査が実施されるものと思われる。

新幹線建設時は調査が行われなかったが、姫路駅を高架とし道路との立体交差事業に伴う発掘調査が平成７・８年度に実施された。その結果、弥生時代前期から室町時代の長期にわたる複合遺跡であることが判明した。弥生時代前期末の遺跡は小規模で、中期後半に盛行する。後期から古墳時代前期には遺跡の消長があり規模を縮小するが、古墳時代中期から勢いを増し、市之郷廃寺へと繋がるものと思われる。韓式土器の保有量・率も県下最大である。竪穴住居跡でのカマドの発生も確認される代表となる集落である。

兵庫県教育委員会では、その後大きな調査は行われなかったが、平成18年度以降に継続して大規模調査が行われることとなった。今回の大日線に伴う調査はその端緒であるが、その間には姫路市教育委員会による調査が行われている。播但線高架後の区画整理事業によって複数の地点で発掘調査が実施されている。特に今回調査したⅠ区南東部の姫路市すこやかセンター・福祉センター建設に先立つ調査で市之郷廃寺に関連する遺構遺物が検出されている。今回調査のⅡ・Ⅲ区西側の商業施設に伴う調査では遺跡は確認されなかった。兵庫県教育委員会では19年度から日出住宅・姫路警察署・ものづくり大学に伴う調査が連続し、多くの成果を得ている。本報告以降連続して報告書も刊行が予定されている。調査面積も広く、多くの遺構が検出されており、今後注目される。

今回の調査は、再開された兵庫県教育委員会が担当する市之郷遺跡の最初の調査である。調査面積はⅠ区160㎡、Ⅱ区190㎡、Ⅲ区220㎡と拡幅部分だけの小面積の調査であった。３地区合わせても670㎡と広いとは言えない調査区である。その割には出土遺構・遺物も多く、遺跡の中心地であることが判断できた。

Ⅰ区は市之郷廃寺塔心礎が置かれている薬師堂に隣接した調査区で、市之郷廃寺の西限が確認されるのではと期待したが、この時期の遺構は確認されなかった。検出した遺構は南半に集中している。竪穴住居跡１棟、土坑17基以上、溝２条と落ち込み・ピットを調査している。SK17・19は後世の遺構であり、SK16とSX03が弥生前期の遺構である。それ以外は中期後半の遺構で集中して存在している。SK16は1.65×1.35mの不定形の土坑で多量の前期土器が出土している。甕１点以外すべて壺であることが特徴である。深さは0.3mと深いわけではないが22個体以上の多量の壺が入れられていた。大形の壺も含まれる。施文は３条のものが多く、沈線は１条ずつ描いている。５条が最高で２組あるものは４条単位である。沈線と比較すると、突帯の方が条数は多い。口縁内面に突帯で波状の文様を貼付しているものや、同じく内面に渦状の文様を施している壺もあり、装飾性に富んでいる。体部下半に突帯をU字状

に貼り、波状文のように見せている例もある。ピットはある程度検出しているが掘立柱建物には復原できなかったが、存在の可能性はある。竪穴住居跡は隅円方形に近い円形住居で「１〇土坑」を有している。周壁溝があるが、0.1mと残存状態は悪い。径3.2mと通有より小形である。４本柱と思われ、出土土器は装飾性が高く古相を示すものもあるが、甕からは中期後半が妥当かと思われる。他の土坑も大枠は同じ時期である。Ⅰ区南半までが、市之郷遺跡の中心部分であろうかと思われ、Ⅱ・Ⅲ区とは微高地が異なる可能性が高い。

Ⅱ区は大日線西側に位置し、北側の調査区である。調査区内には多くの撹乱坑がみられ、調査区南側では礫層が隆起しており、遺構は確認されなかった。土坑と溝・落ち込み・ピットを検出している。土坑からは炭化米を持つ土坑やサヌカイトチップが多く出土している。性格が明らかな遺構はないが、遺跡周辺部から余り隔たらない地区であろう。比較的多くの土器が出土している。SX01は竪穴住居跡の可能性を残す落ち込みである。Ⅰ区SH01と同じ時期である。土坑も多くは中期後半であるが、SK01とSK04だけが前期の土坑である。Ⅰ区土坑と比べて壺と甕が同量出土していることと、沈線が多条化している点が異なっている。

Ⅲ区はⅡ区南側の調査区で遺構の密度は薄くなる。調査区東側には北東から南西方向に流れる旧河道を検出しており、遺構は認められない。検出した遺構は溝・土坑・ピットである。SK01は弥生前期の土坑で壺・甕が出土している。大形甕も出土しており、沈線は２条１対である。８条以上と多くなっている。溝・ピットも前期の土器も出土しているが、弥生中期と思われる。

３地区の調査から、今回の調査地区では弥生時代前期から中期にかけての集落で、後期まで継続しないことが判明した。また、Ⅲ区で南北の旧河道を検出し、現在の大日線が流路の可能性が高く、東西調査区は別の微高地であることが確認された。後代の遺構も古代・中世の土坑を僅かに２基検出しただけ

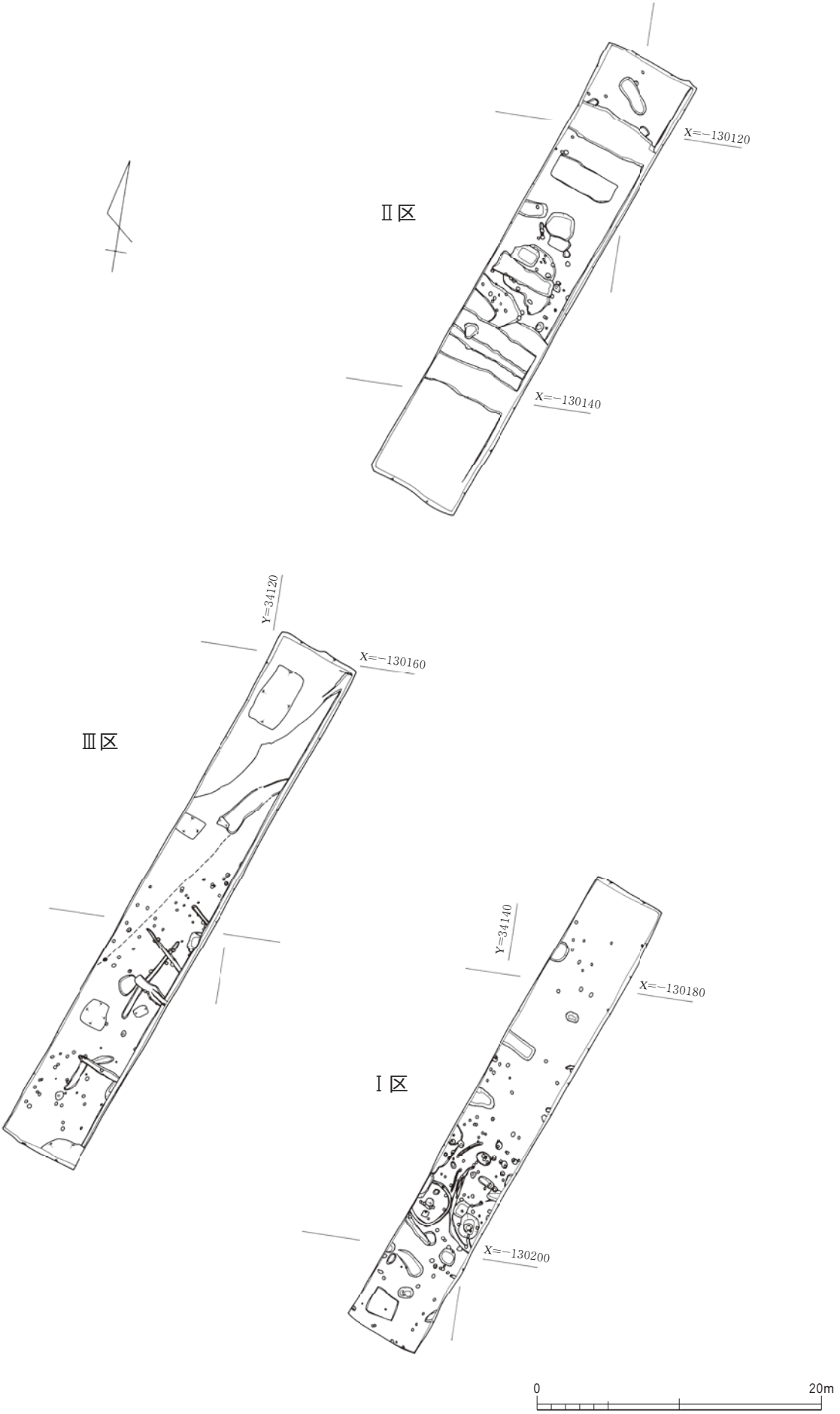
図14　市之郷遺跡周辺空中写真

で、水田として利用されていた可能性が高い。道路前の水田耕土の下層にも耕土が確認されている。南側の市之郷遺跡では古墳時代から奈良時代にかけて盛行しているのとは大きく異なっている。弥生後期自体は位置を変えて小規模となっていることから、弥生時代では大きな差はないが、古墳時代以降は条件が違っているようである。市之郷廃寺の西限の推定もなされているが、全くそれを示唆するものは確認されておらず、東側であるとする説が妥当である。

Ⅲ区南西部分の姫路警察署に伴う調査やⅠ区南東部の兵庫県ものづくり大学に伴う調査で多くの成果を挙げている。今回の調査は小面積であったにも限らず、弥生時代の市之郷遺跡の大きさを改めて認識させる結果となった。JR高架部分から今回調査区まで広い面積であることが確認され、姫路平野の中心集落であることが再認された。古代の遺構は市之郷廃寺を北限とするのではないかと思われる。中世にかけて北側よりも南側の阿保遺跡の方に広がったようである。区画整理事業によっても複数地点が調査が行われており、詳細な変化が理解されるものと期待される。

図15　出土遺物

図版

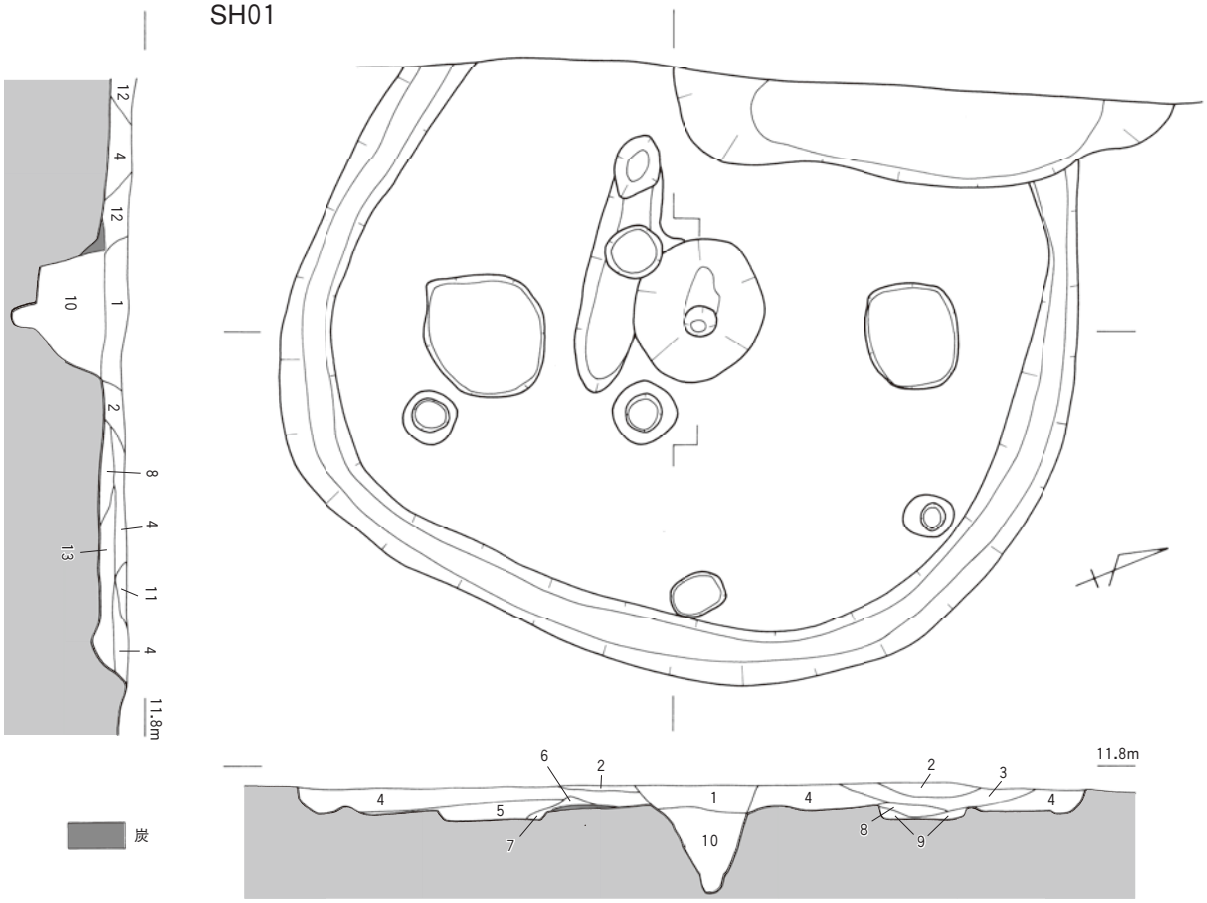

Ⅱ区
X=−130120
X=−130140
Ⅲ区
Y=34120
X=−130160
Ⅰ区
Y=34140
X=−130180
X=−130200
0
20m

調査区全体図

図版２　Ⅰ区遺構

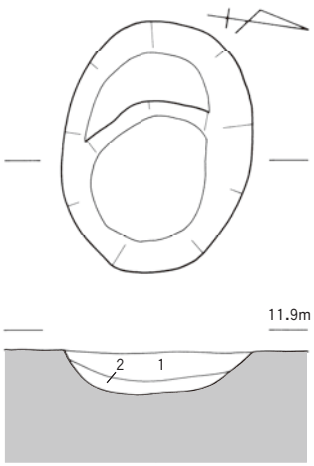
平・断面図

SH01



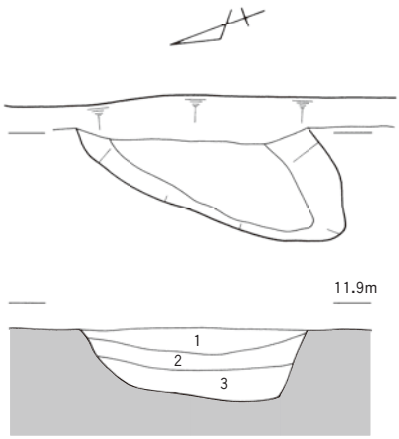
1.　5Y3/2　オリーブ黒　シルト質極細砂　マンガン沈着　土器片包含
2.　5Y2/2　オリーブ黒　シルト質極細砂　マンガン沈着　炭･灰混じる
3.　2.5Y3/2　黒褐　シルト質細～極細砂
4.　2.5Y3/3　暗オリーブ褐　シルト質極細砂　マンガン沈着　炭粒少量混じる
5.　2.5Y3/2　黒褐　シルト質極細砂
6.　2.5Y3/1　黒褐　シルト質極細砂　炭混じる
7.　5Y3/2　オリーブ黒　シルト質細～極細砂
8.　5Y3/1　オリーブ黒　シルト質極細砂
9.　5Y3/2　オリーブ黒　シルト質極細砂　マンガン沈着
10.　2.5Y3/2　黒褐　シルト質極細砂　炭混じる
11.　2.5Y4/2　暗黄　シルト質極細砂　マンガン沈着
12.　2.5Y3/2　黒褐　シルト質細～極細砂　マンガン沈着
13.　5Y3/2　オリーブ黒　シルト質極細砂　マンガン沈着

SK01



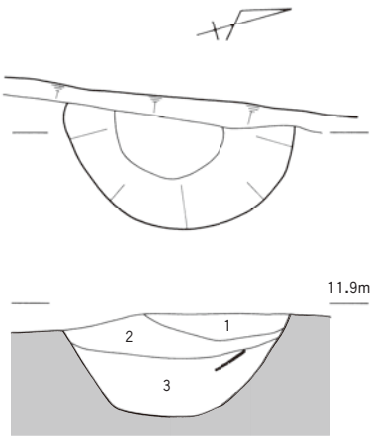
1.　7.5YR3/2　黒褐　シルト質極細砂
マンガン多量沈着　土器包含
2.　7.5YR3/4　暗褐　シルト質極細砂
マンガン沈着

SK02



1.　7.5YR3/2　黒褐　シルト質極細砂
マンガン多量沈着
2.　10YR3/2　黒褐　シルト質細～極細砂
マンガン少量沈着
3.　10YR2/3　黒褐　シルト質細～極細砂
炭混じり　土器包含

SK03

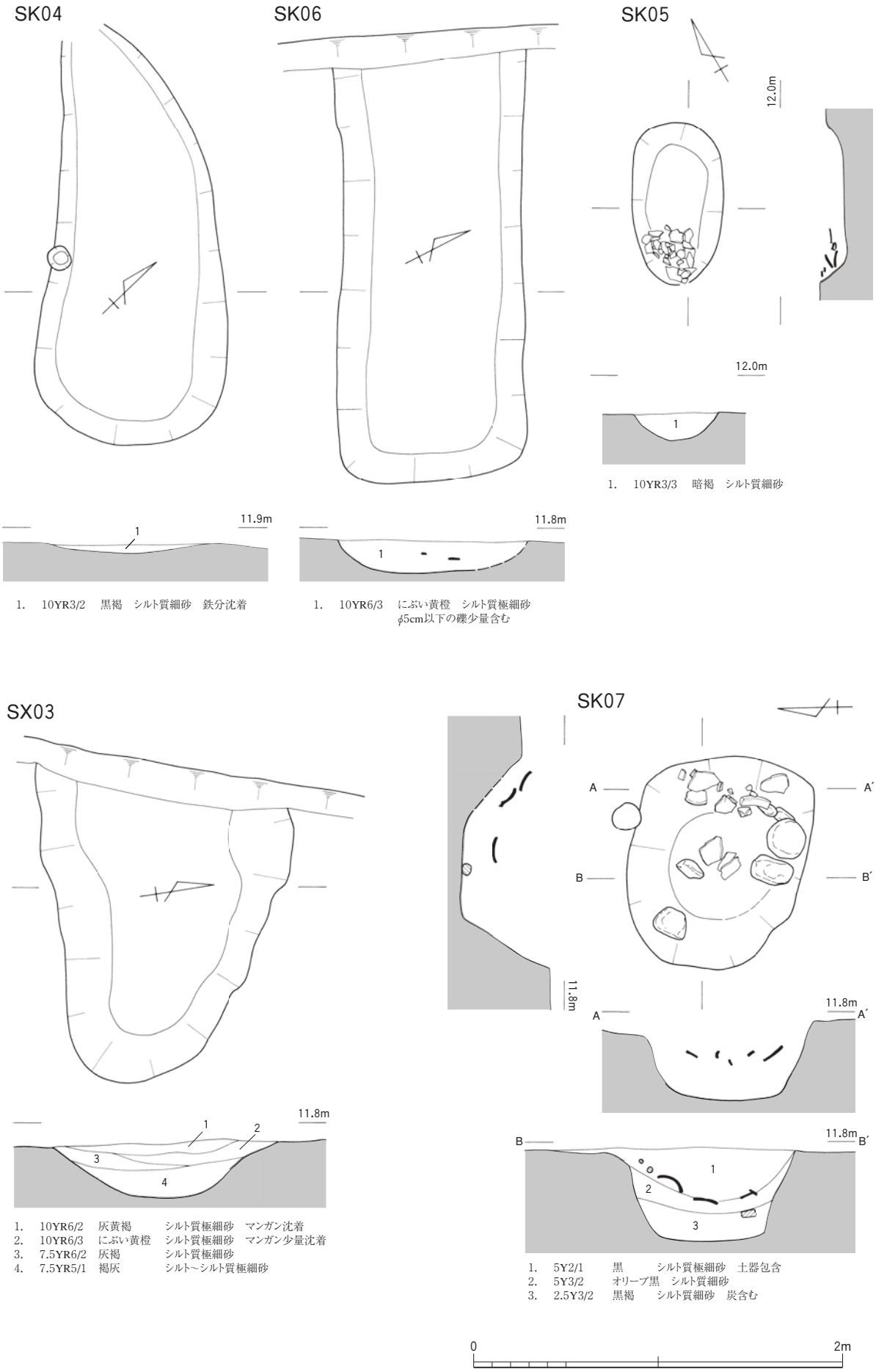


1.　7.5YR3/2　黒褐　シルト質極細砂
ベース土をブロック状に含む
2.　7.5YR3/2　黒褐　シルト質細～極細砂
ベース土をブロック状に含む　土器包含
3.　10YR3/1　黒褐　シルト質細～極細砂
粘性強い　土器包含

0　2m

住居跡・土坑（1）

図版４　Ⅰ区遺構



SK05
1.　10YR3/3　暗褐　シルト質細砂

SK04
1.　10YR3/2　黒褐　シルト質細砂　鉄分沈着

SK06
1.　10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂
φ5cm以下の礫少量含む

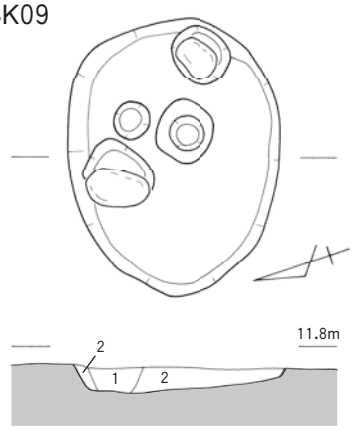
SX03
1.　10YR6/2　灰黄褐　シルト質極細砂　マンガン沈着
2.　10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂　マンガン少量沈着
3.　7.5YR6/2　灰褐　シルト質極細砂
4.　7.5YR5/1　褐灰　シルト～シルト質極細砂

SK07
1.　5Y2/1　黒　シルト質極細砂　土器包含
2.　5Y3/2　オリーブ黒　シルト質細砂
3.　2.5Y3/2　黒褐　シルト質細砂　炭含む

土坑（2）

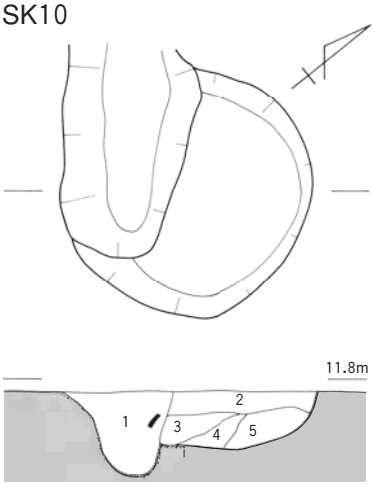
SK16

SK09

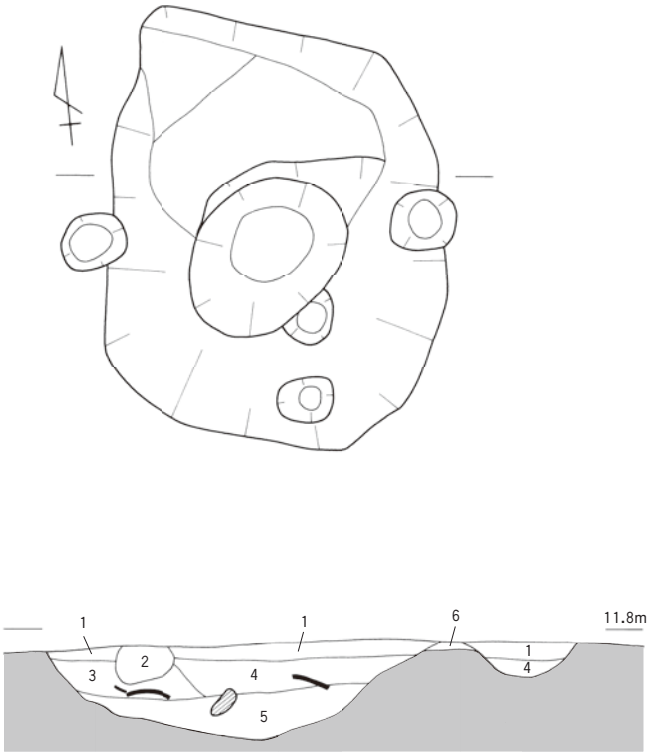


1.　10YR3/1　黒褐　シルト質細～極細砂
　　ベース土をブロック状に含む
2.　2.5YR3/2　黒褐　シルト質極細砂

SK10

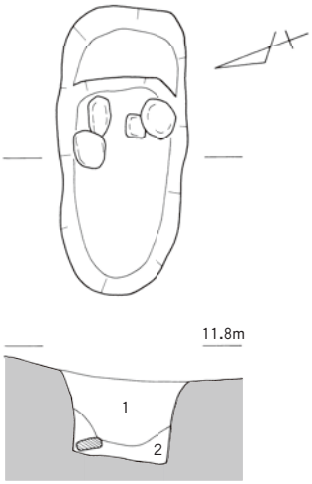


1.　10YR3/1　黒褐　シルト質細～極細砂　炭混じる
2.　5Y3/1　オリーブ黒　シルト質細～極細砂
3.　2.5Y2/1　黒　シルト質細～極細砂
4.　5Y3/2　オリーブ黒　シルト質極細砂
5.　2.5Y3/1　黒褐　シルト質細～極細砂　土器包含



1.　10YR3/2　黒褐　シルト質細～細砂　炭混じり　マンガン沈着
2.　5Y3/2　オリーブ黒　シルト質極細砂　マンガン沈着
3.　5Y3/1　オリーブ黒　シルト質極細砂
　　マンガン少量沈着　土器包含
4.　2.5Y3/2　黒褐　シルト質極細砂　炭混じる
5.　5Y2/2　オリーブ黒　シルト質極細砂　マンガン沈着
6.　2.5Y3/3　暗オリーブ褐　シルト質極細～細砂
　　ベース土をブロック状に含む　マンガン沈着

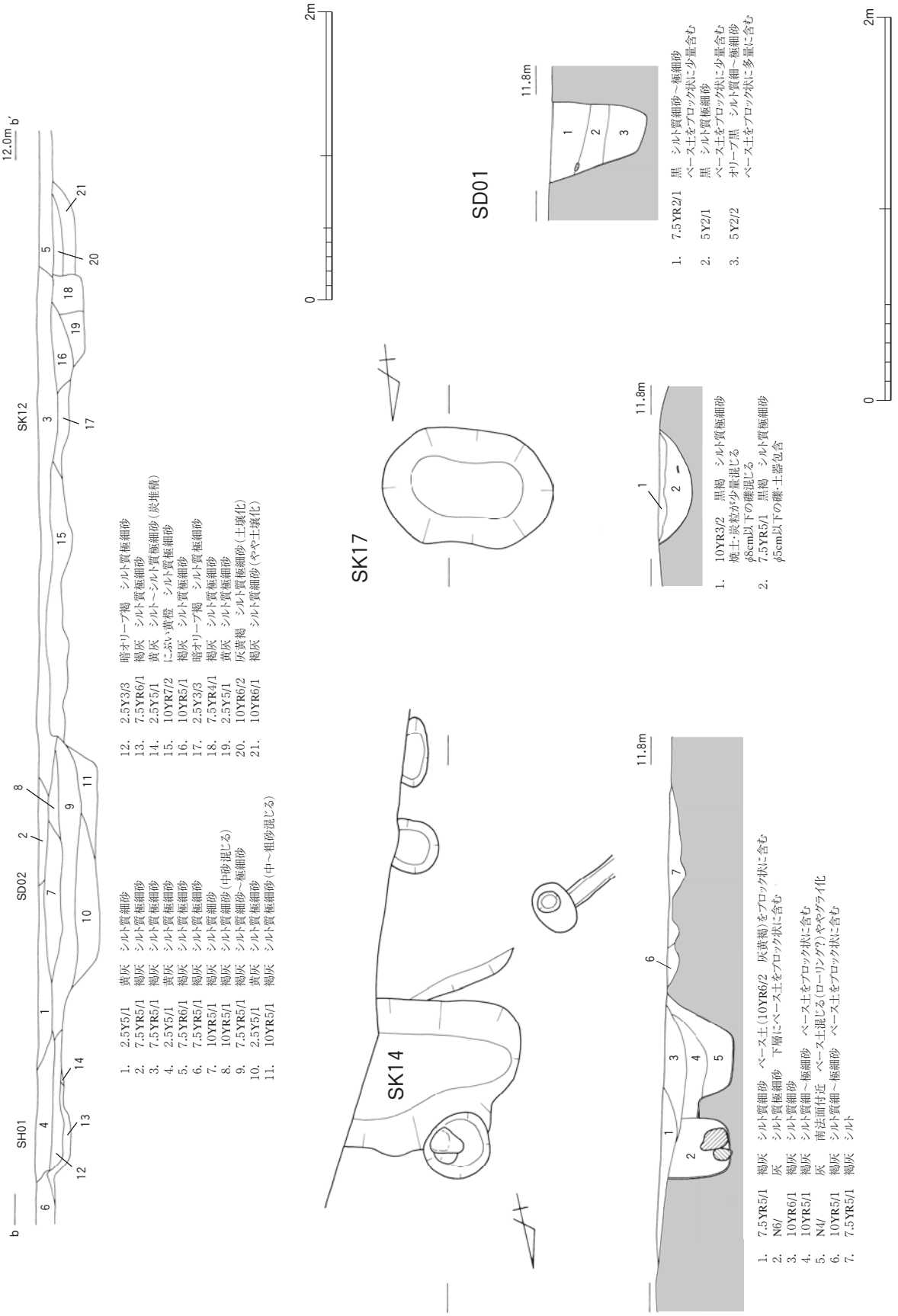
SK13



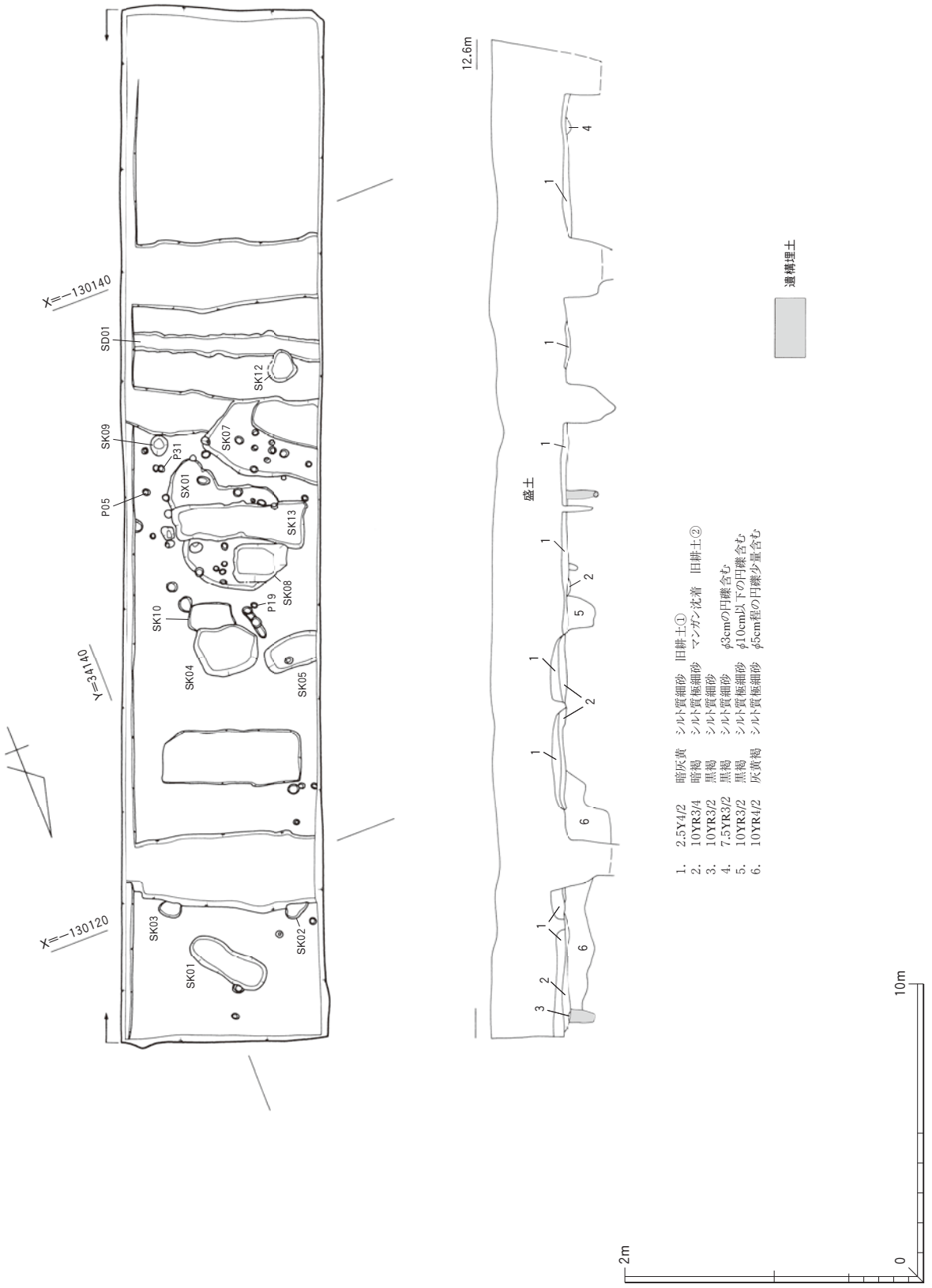
1.　2.5Y3/2　黒褐　シルト質細砂～極細砂　炭混じる
2.　10YR2/2　黒褐　シルト質極細砂　炭混じる

土坑（3）

図版６　Ⅰ区遺構

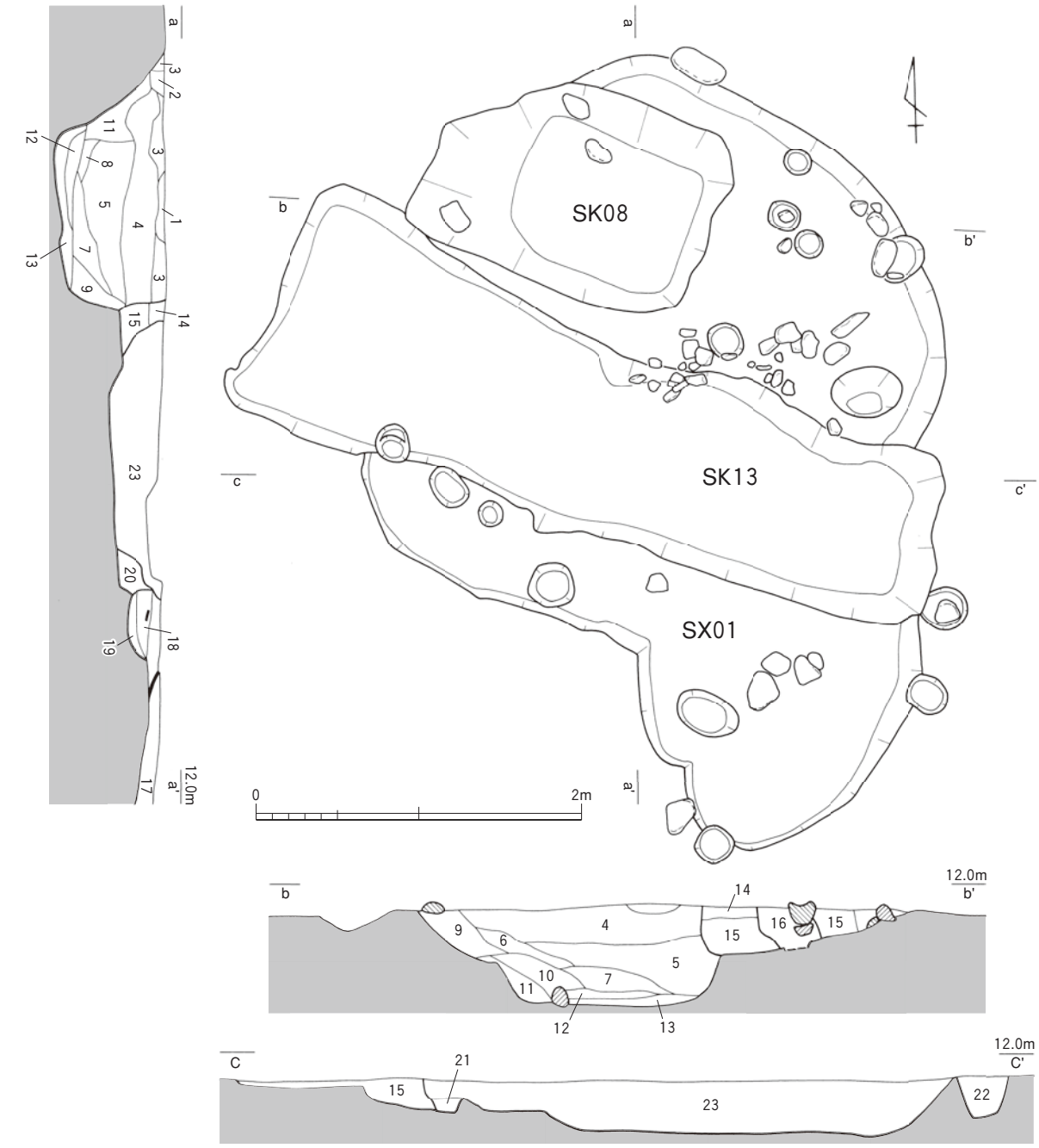

12.0m b′
b
SH01
SD02
SK12
SK14
SK17
SD01
11.8m
2m
0
1. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質細砂
2. 7.5YR5/1 褐灰 シルト質極細砂
3. 7.5YR5/1 褐灰 シルト質極細砂
4. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質極細砂
5. 7.5YR6/1 褐灰 シルト質極細砂
6. 7.5YR5/1 褐灰 シルト質極細砂
7. 10YR5/1 褐灰 シルト質細砂
8. 10YR5/1 褐灰 シルト質細砂（中砂混じる）
9. 7.5YR5/1 褐灰 シルト質細砂～極細砂
10. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質極細砂
11. 10YR5/1 褐灰 シルト質極細砂（中～粗砂混じる）
12. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト質極細砂
13. 7.5YR6/1 褐灰 シルト質極細砂
14. 2.5Y5/1 黄灰 シルト～シルト質極細砂（炭堆積）
15. 10YR7/2 にぶい黄橙 シルト質極細砂
16. 10YR5/1 褐灰 シルト質極細砂
17. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト質極細砂
18. 7.5YR4/1 褐灰 シルト質極細砂
19. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質極細砂
20. 10YR6/2 灰黄褐 シルト質極細砂（土壌化）
21. 10YR6/1 褐灰 シルト質細砂（やや土壌化）
1. 10YR3/2 黒褐 シルト質極細砂
焼土・炭粒が少量混じる
φ8cm以下の礫混じる
2. 7.5YR5/1 黒褐 シルト質極細砂
φ5cm以下の礫・土器包含
1. 7.5YR2/1 黒 シルト質細砂～極細砂
ベース土をブロック状に少量含む
2. 5Y2/1 黒 シルト質極細砂
ベース土をブロック状に少量含む
3. 5Y2/2 オリーブ黒 シルト質細～極細砂
ベース土をブロック状に多量に含む
1. 7.5YR5/1 褐灰 シルト質細砂 ベース土（10YR6/2 灰黄褐）をブロック状に含む
2. N6/ 灰 シルト質極細砂 下層にベース土をブロック状に含む
3. 10YR6/1 褐灰 シルト質細砂
4. 10YR5/1 褐灰 シルト質細～極細砂 ベース土をブロック状に含む
5. N4/ 灰 南法面付近 ベース土混じる（ローリング?）ややクライ化
6. 10YR5/1 褐灰 シルト質細～極細砂 ベース土をブロック状に含む
7. 7.5YR5/1 褐灰 シルト

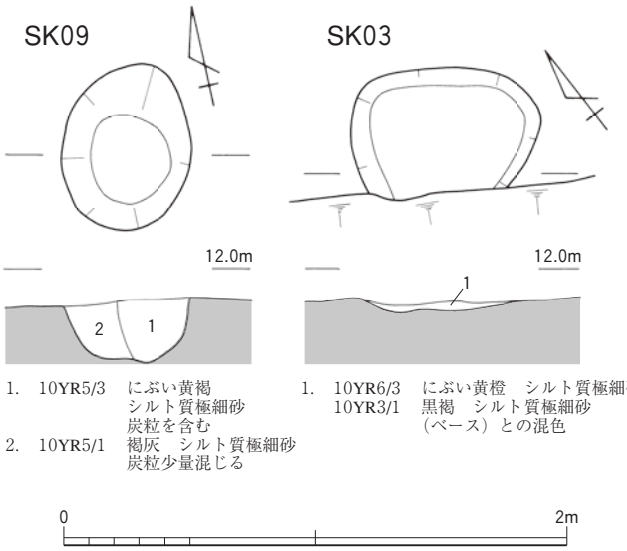
土坑（4）


X=−130140
X=−130120
Y=34140
SD01
SK09
P05
P31
SK07
SX01
SK12
SK13
SK08
P19
SK10
SK04
SK05
SK03
SK01
SK02
12.6m
盛土
遺構埋土
1. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質細砂 旧耕土①
2. 10YR3/4 暗褐 シルト質極細砂 マンガン沈着 旧耕土②
3. 10YR3/2 黒褐 シルト質細砂
4. 7.5YR3/2 黒褐 シルト質細砂 φ3cmの円礫含む
5. 10YR3/2 黒褐 シルト質極細砂 φ10cm以下の円礫含む
6. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂 φ5cm程の円礫少量含む
2m
0
10m

平・断面図

図版 8　Ⅱ区遺構



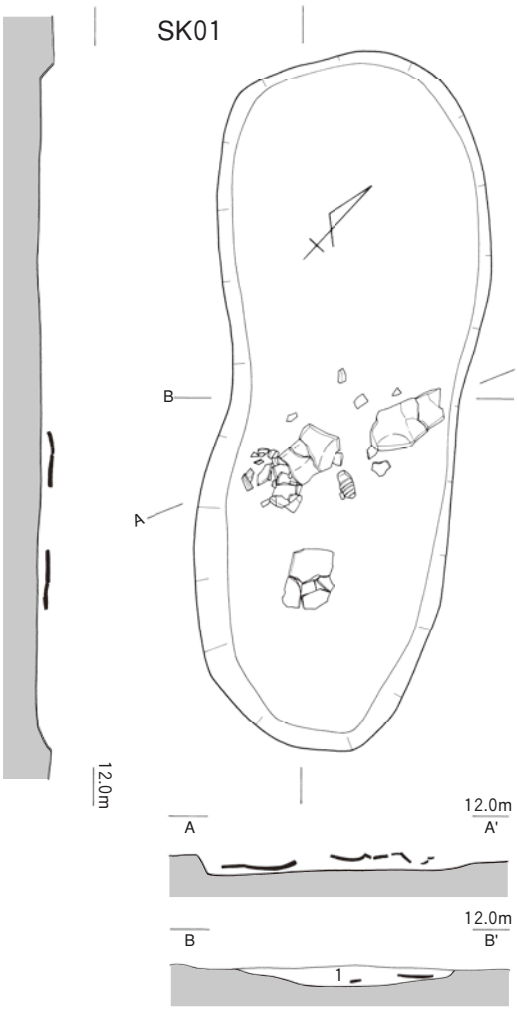


1. 10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂　炭粒を含む
2. 10YR5/1　褐灰　シルト質極細砂　炭粒少量混じる

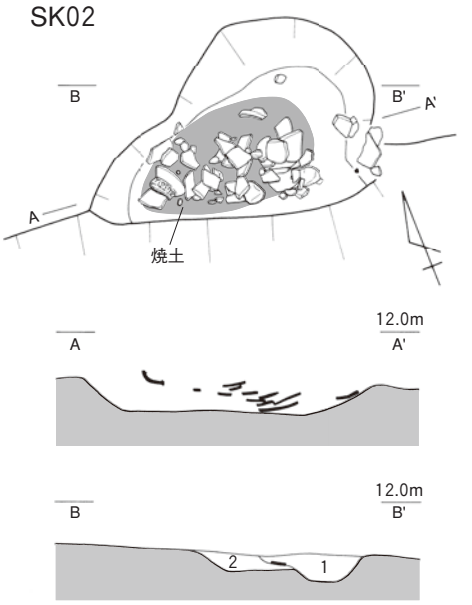
1. 10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂
10YR3/1　黒褐　シルト質極細砂
（ベース）との混色

1. 7.5YR4/2　灰褐　シルト質細砂　焼土ブロック混じる
2. 5Y5/1　灰　シルト質細砂
3. 10YR5/1　褐灰　極細砂　土器片包含　炭粒混じる
4. 10YR4/1　褐灰　シルト質細砂　炭粒混じる
5. 10YR4/1　褐灰　シルト質細砂　炭粒多量に混じる
10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂をブロック状に含む
6. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質細～極細砂　炭粒混じる
7. 10YR4/1　褐灰　シルト質細砂　炭粒混じる
10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂をブロック状に含む
8. 10YR5/1　褐灰　シルト～シルト質極細砂
9. 10YR5/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂　炭化物混じる
10. 7.5YR5/2　灰褐　シルト～シルト質極細砂　焼土粒多量に混じる
11. 7.5YR3/3　暗褐　シルト質極細砂　粗砂多く混じる
12. 5Y4/1　灰　シルト質極細砂　炭粒・焼土混じる
13. 5Y4/1　灰　シルト質細～極細砂　炭化材集積
14. 5YR4/2　灰褐　シルト質細～極細砂　土壌化
15. 7.5YR3/5　暗褐　シルト質極細砂　粗砂多く混じる
16. 10YR4/1　褐灰　シルト質極細砂　炭粒少量混じる
17. 7.5YR4/2　灰褐　シルト質極細砂　炭粒・灰混じる　土器片包含
18. 10YR4/1　褐灰　シルト質細～極細砂　炭粒混じる　土器片包含
19. 2.5Y4/1　黄灰　シルト質極細砂
20. 10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂　土壌化
21. 5YR4/1　褐灰　シルト質極細砂　炭粒少量混じる
22. 2.5Y6/1　黄灰　シルト質極細砂
23. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト質細～極細砂
φ10cm以下の円礫多量に含む　しまり弱い

土坑（1）

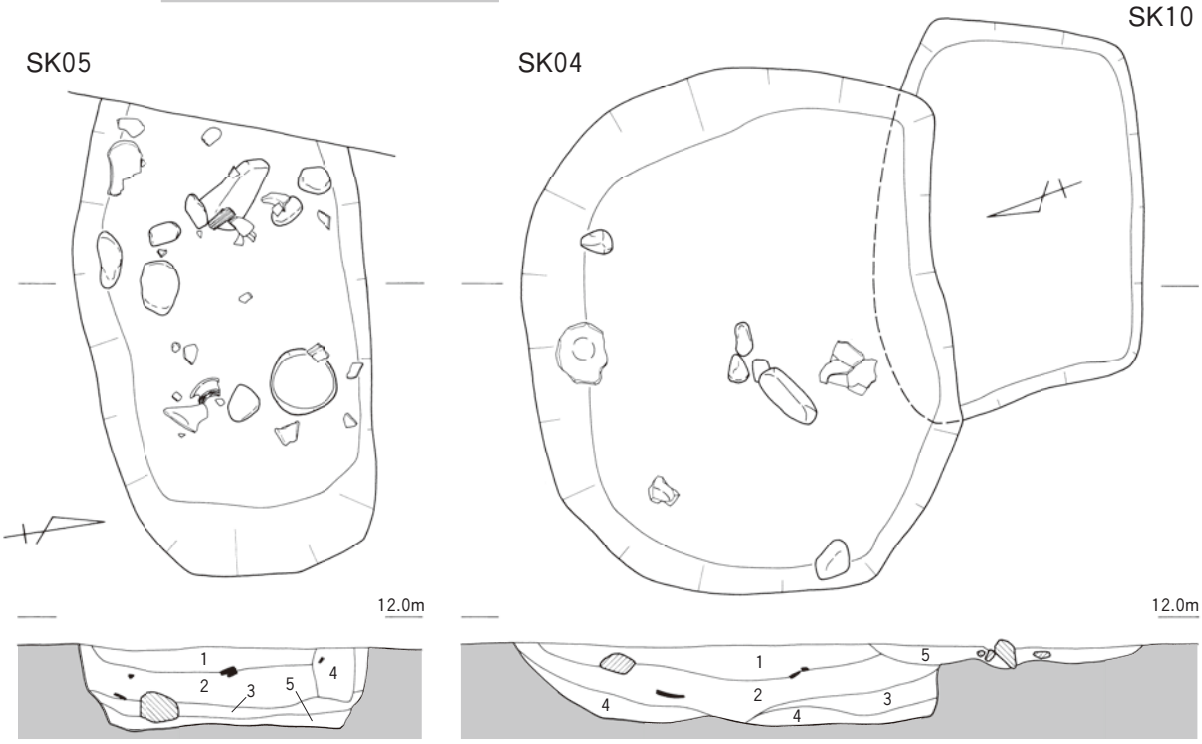


1.　10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂



1.　7.5YR5/1　褐灰　シルト質極細砂
　　10YR5/6　黄褐と10YR7/1　灰白
　　シルト質極細砂がラミナ状に混じる
2.　10YR3/1　黒褐　シルト質極細砂　細礫混じる

0　1m



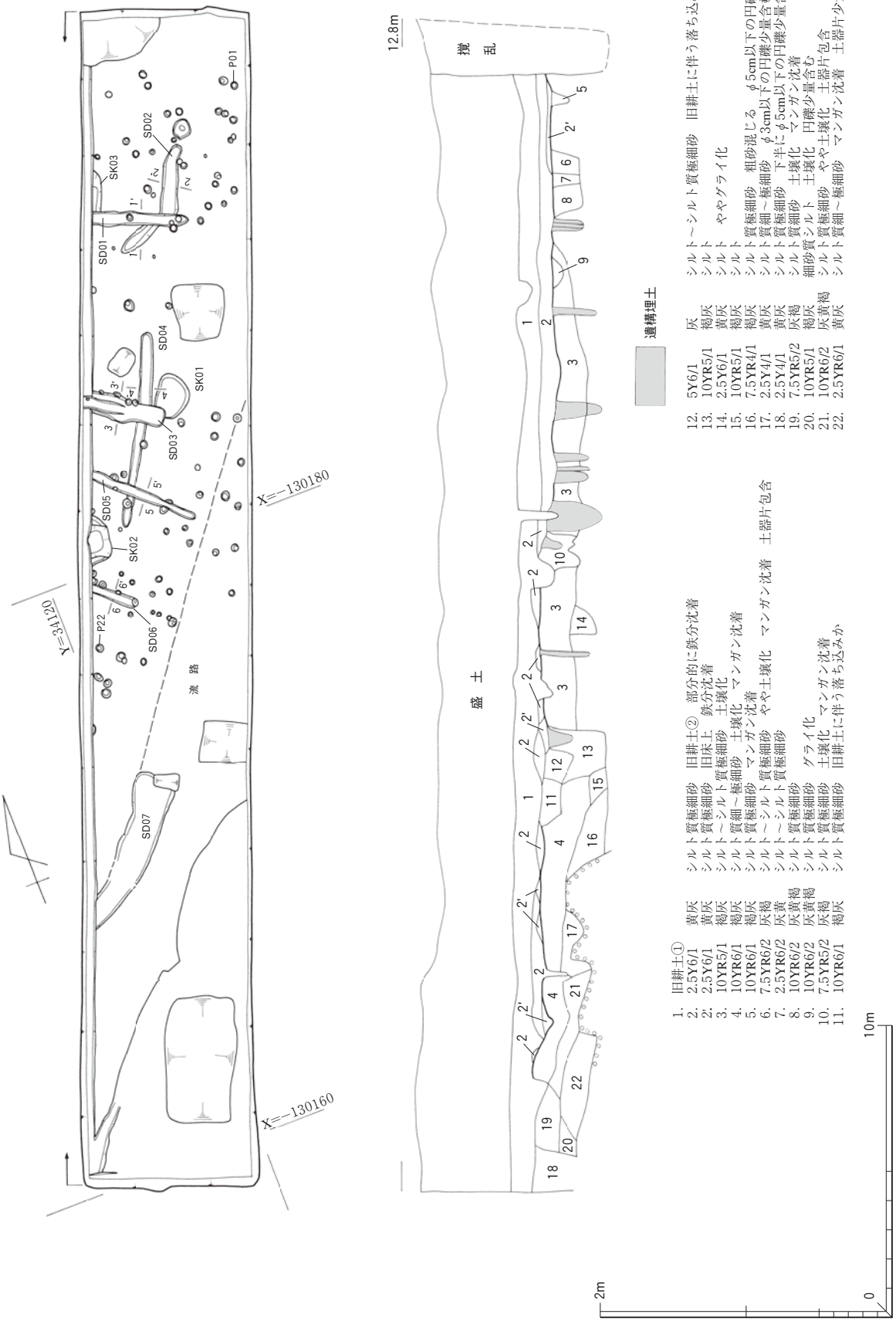
1.　10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂　炭粒混じる
2.　10YR4/1　褐灰　シルト質極細砂　炭・灰・焼土多量に混じる
3.　7.5YR4/2　灰褐　シルト質極細砂　炭粒・焼土多量に混じる
4.　10YR5/1　褐灰　シルト質極細砂
5.　5YR2/2　黒褐　極細砂　炭・焼土多く混じる

1.　10YR3/3　暗褐　極細砂（マンガン沈着）
2.　10YR2/3　黒褐　極細砂（マンガン沈着　灰混じる
　　ラミナ状の堆積）
3.　10YR3/2　黒褐　極細砂
4.　7/5YR3/2　黒褐　極細砂
5.　10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂

0　2m

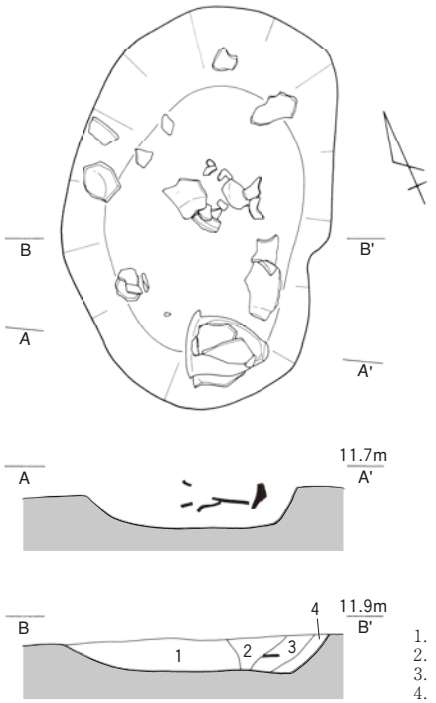
土坑（2）

図版10　Ⅲ区遺構



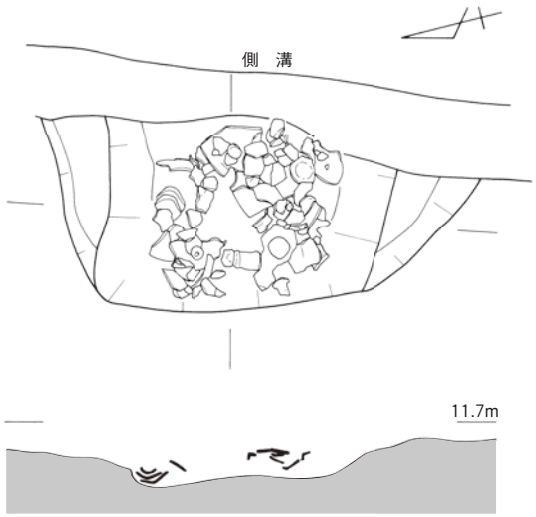
平・断面図

SK01



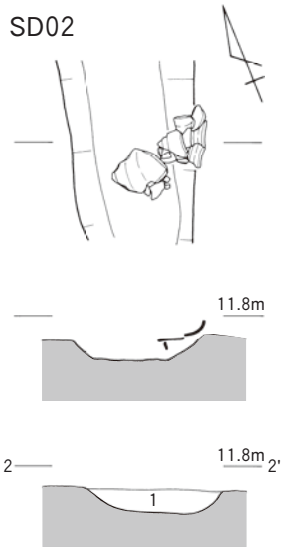
1. 7.5YR6/2　灰褐　シルト質極細砂　マンガン沈着
2. 7.5YR5/1　褐灰　シルト質極細砂　やや土壌化
3. 10YR7/1　灰白　極細砂
4. 2層と3層のラミナ状

SK02



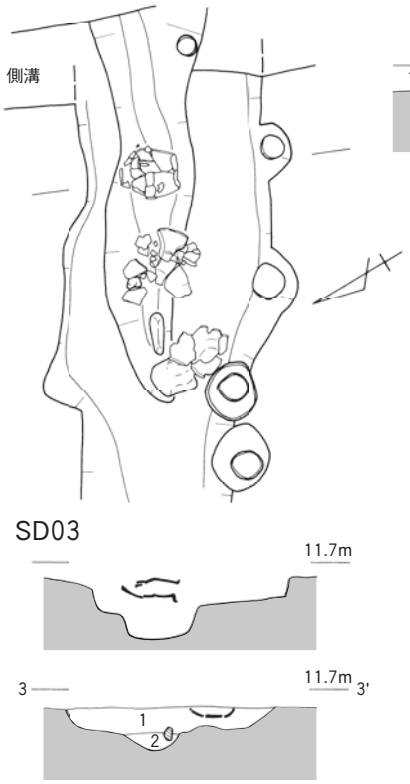
1. 10YR4/1　褐灰　シルト質細～極細砂　マンガン沈着

SD02



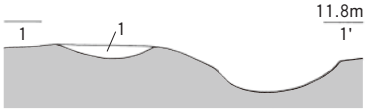
1. 10YR5/1　褐灰　シルト～シルト質極細砂

SD03



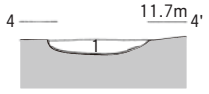
1. 5YR6/1　褐灰　シルト質極細砂　炭混じる
2. 5YR5/1　褐灰　シルト～シルト質極細砂

SD01



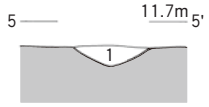
1. 10YR6/1　褐灰　シルト質極細砂

SD04



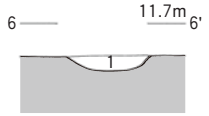
1. 7.5YR5/1　褐灰　シルト質細～極細砂

SD05



1. 7.5YR5/2　灰褐　シルト質極細砂

SD06

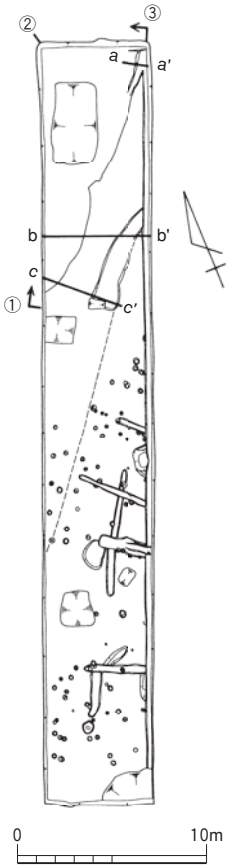


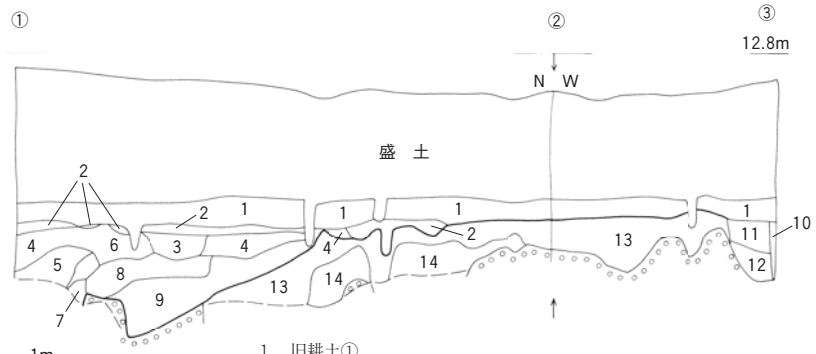
1. 7.5YR5/1　灰　シルト　グライ化

0　2m

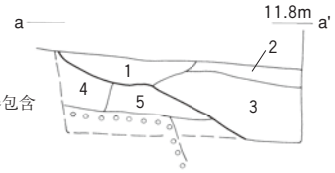
土坑・溝

図版12　Ⅲ区遺構

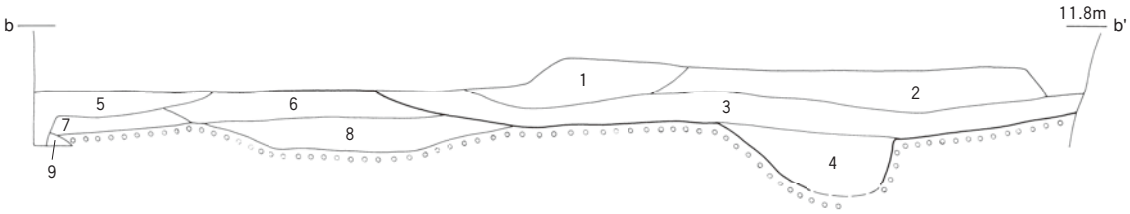




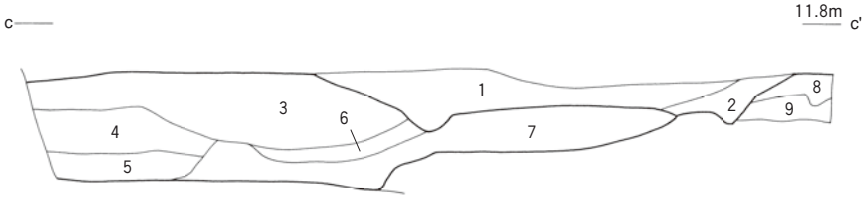
1. 旧耕土①
2. 旧耕土②
3. 10YR6/1　褐灰　シルト質極細砂　旧耕土に伴う落ち込み
4. 2.5Y5/1　黄灰　シルト質極細砂　上面　鉄分・マンガン沈着
5. 5Y6/1　灰　シルト質細～極細砂　ややグライ化
6. 7.5YR5/1　褐灰　シルト質極細砂　マンガン少量沈着
7. 7.5YR6/1　褐灰　シルト質極細砂　土器片包含
8. 10YR5/1　褐灰　シルト質極細砂　土壌化　マンガン沈着　土器片包含
9. 7.5YR4/2　灰褐　シルト質極細砂　土壌化　円礫少量含む　土器片包含
10. 2.5Y4/1　黄灰　シルト質極細砂　円礫少量含む　土器片包含
11. 10YR3/2　黒褐　シルト質極細砂　土壌化　円礫含む
12. 10YR3/2　黒褐　シルト質極細砂　土壌化
13. 7.5YR3/1　黒褐　シルト～シルト質極細砂　円礫少量含む
14. 10YR4/1　褐灰　シルト質細砂　φ５cm以下の円礫多く含む



1. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂　円礫少量含む　土器片包含
2. 10YR5/1　褐灰　細砂質シルト　土壌化　円礫含む
3. 7.5YR6/1　褐灰　シルト質極細砂　粗砂混じる　円礫含む　土器包含
4. 10YR5/2　灰黄褐　粗砂～細砂　シルト混じる
5. 7.5YR5/2　灰褐　シルト質細～極細砂
6. 10YR5/3　にぶい黄褐　粗砂～礫　上面にマンガン沈着



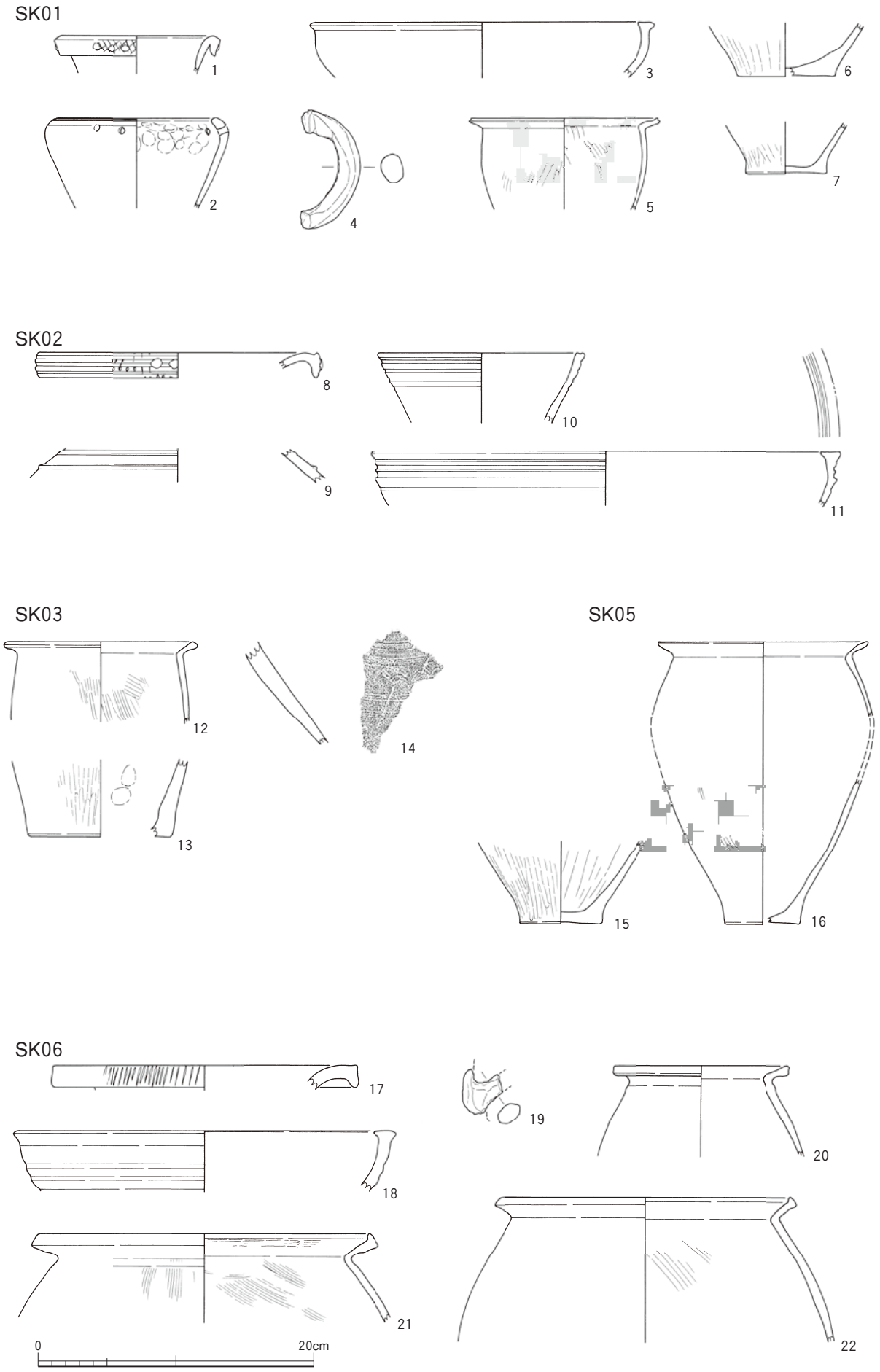
1. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂　φ10cm以下の円礫少量含む　土器包含
2. 10YR6/2　灰黄褐　シルト質極細砂　やや土壌化　土器片少量包含
3. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質細～極細砂　φ20cm以下の円礫多く含む　土器包含
4. 10YR5/2　灰黄褐　中～粗砂　φ10cm以下の円礫含む　土器包含
5. 7.5YR3/1　黒褐　シルト～シルト質極細砂　円礫少量含む
6. 7.5YR5/3　にぶい褐　シルト質細～極細砂　φ10cm以下の円礫少量含む
7. 10YR3/2　黒褐　シルト質極細砂　円礫少量含む
8. 10YR6/1　褐灰　粗砂～礫　シルト混じる
9. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質細砂　φ５cm程の円礫含む



1. 5YR4/1　褐灰　シルト質細～極細砂　φ10cm以下の円礫少量含む　土器片少量包含
2. 2.5YR5/1　赤灰　シルト質極細砂
3. 10YR7/3　にぶい黄橙　シルト質細砂
4. 5YR6/2　灰褐　中～粗砂　細礫混じる
5. N6/　灰　粗砂～細砂
6. 7.5YR7/1　明褐灰　シルト質細～極細砂　マンガン少量沈着
7. 10YR5/1　褐灰　シルト質細砂　粗砂～礫多量に含む　土器包含
8. 10YR7/2　にぶい黄橙　シルト質細砂
9. 7.5YR5/3　にぶい褐　シルト

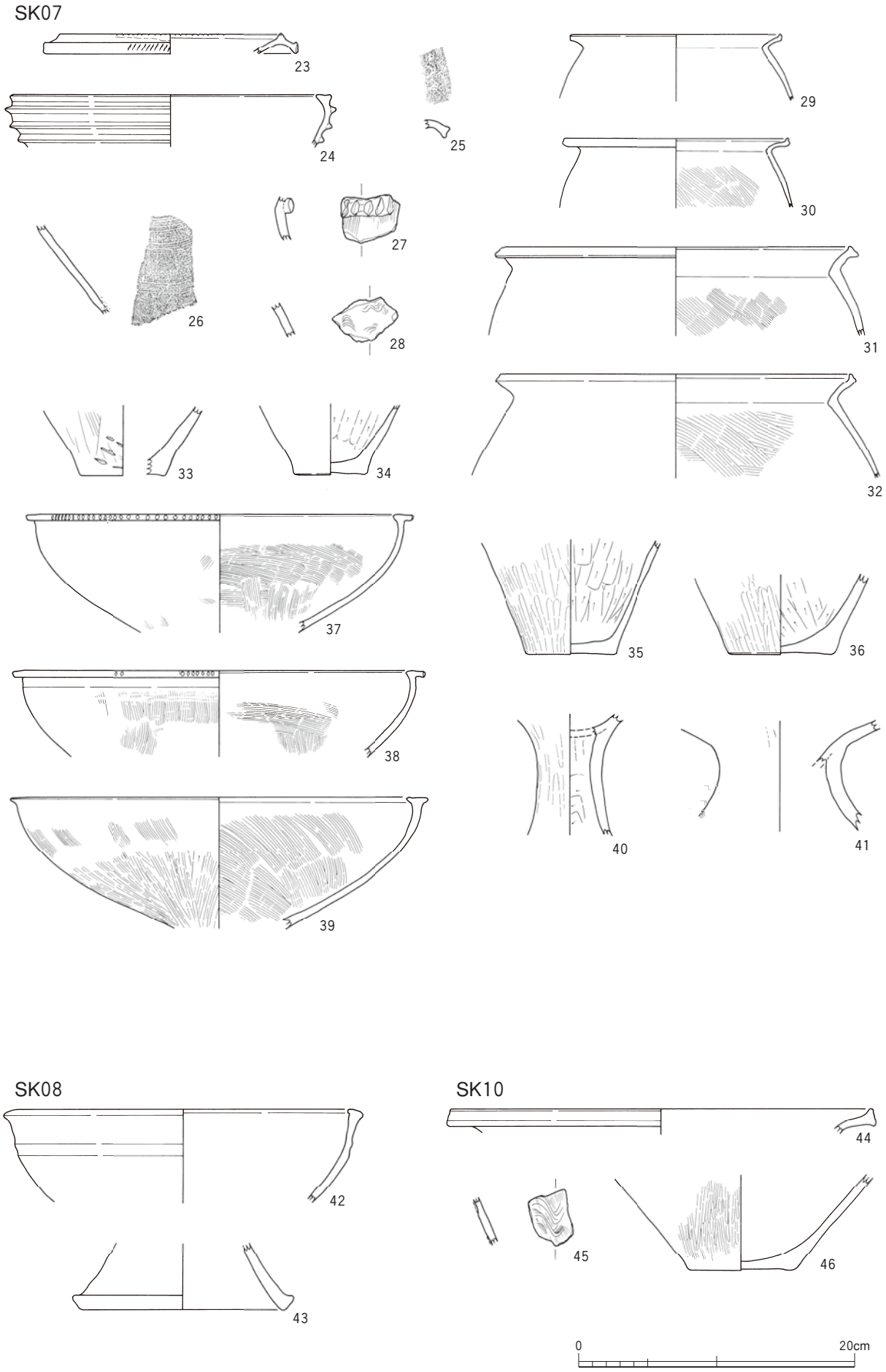
0　2m

流　　路

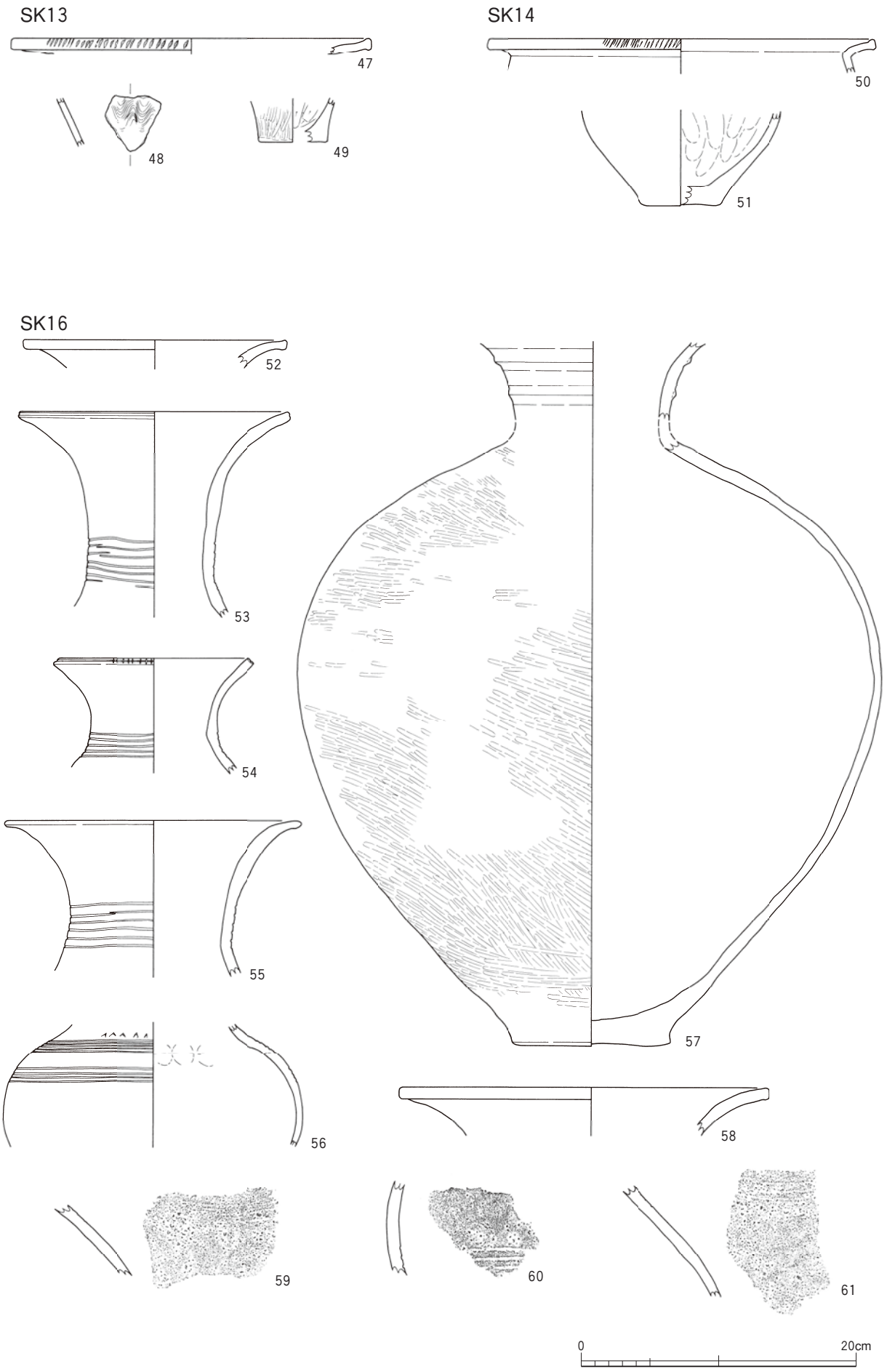

SK01
1
2
3
4
5
6
7
SK02
8
9
10
11
SK03
12
13
14
SK05
15
16
SK06
17
18
19
20
21
22
0
20cm

出土土器（1）

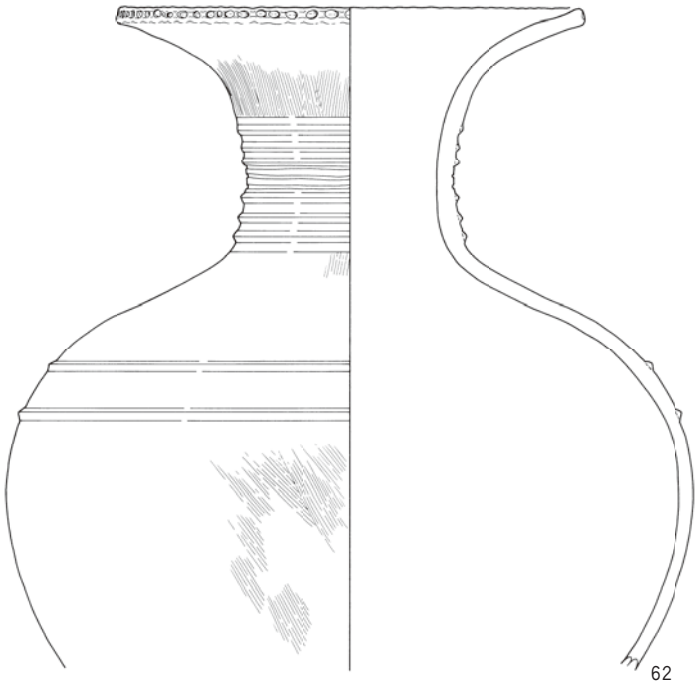
図版14　Ⅰ区遺物

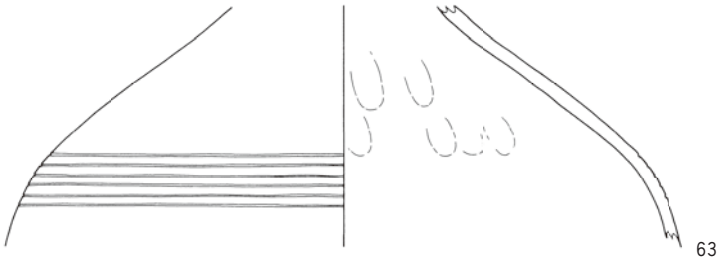


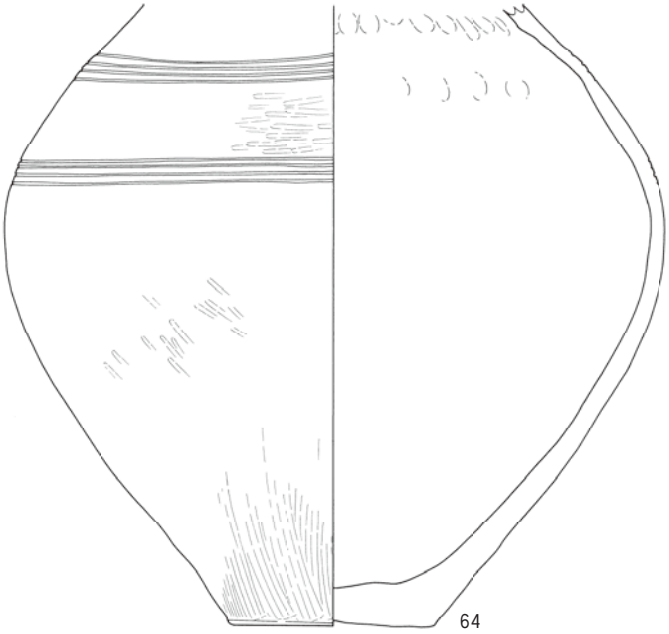
出土土器（2）



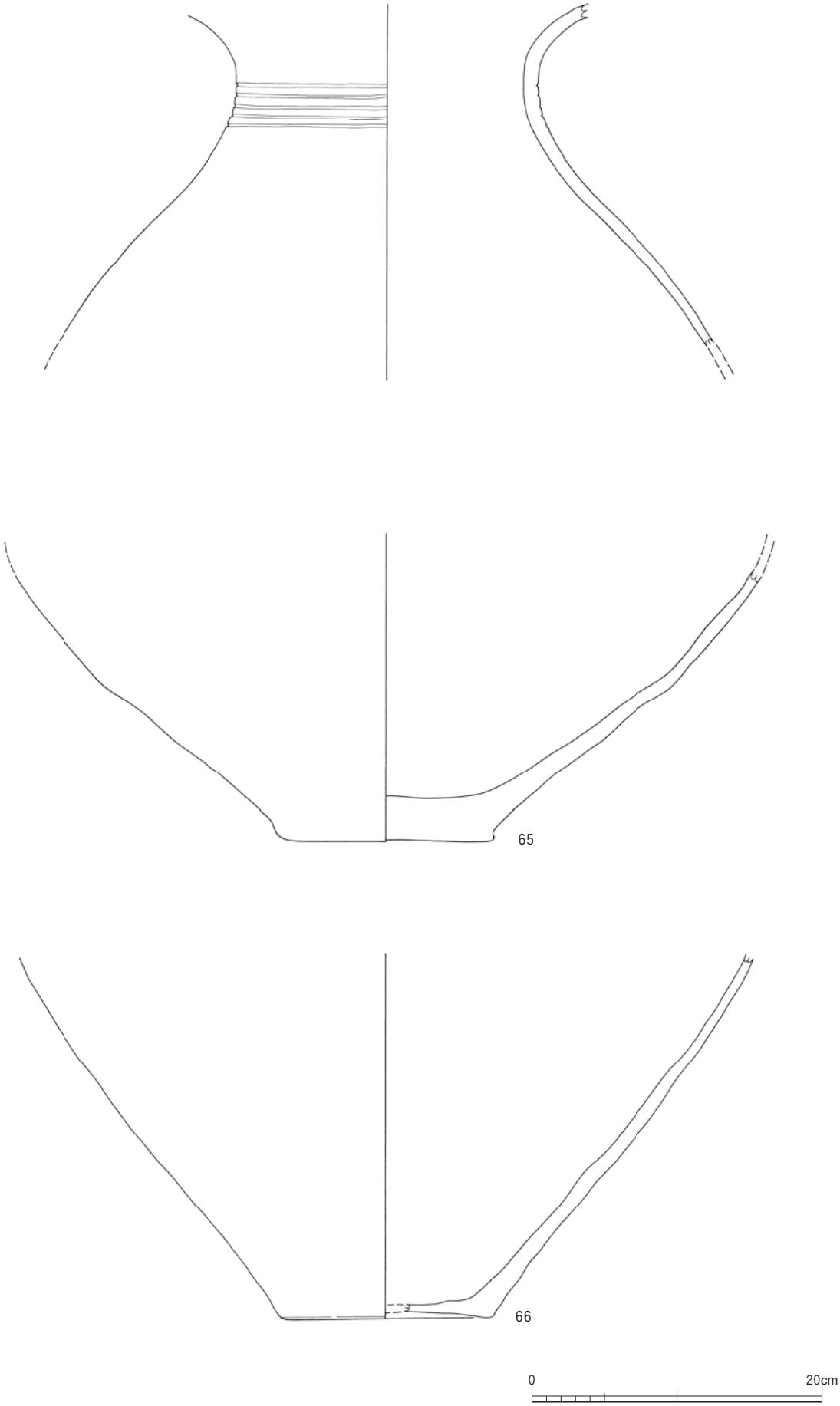
出土土器（3）



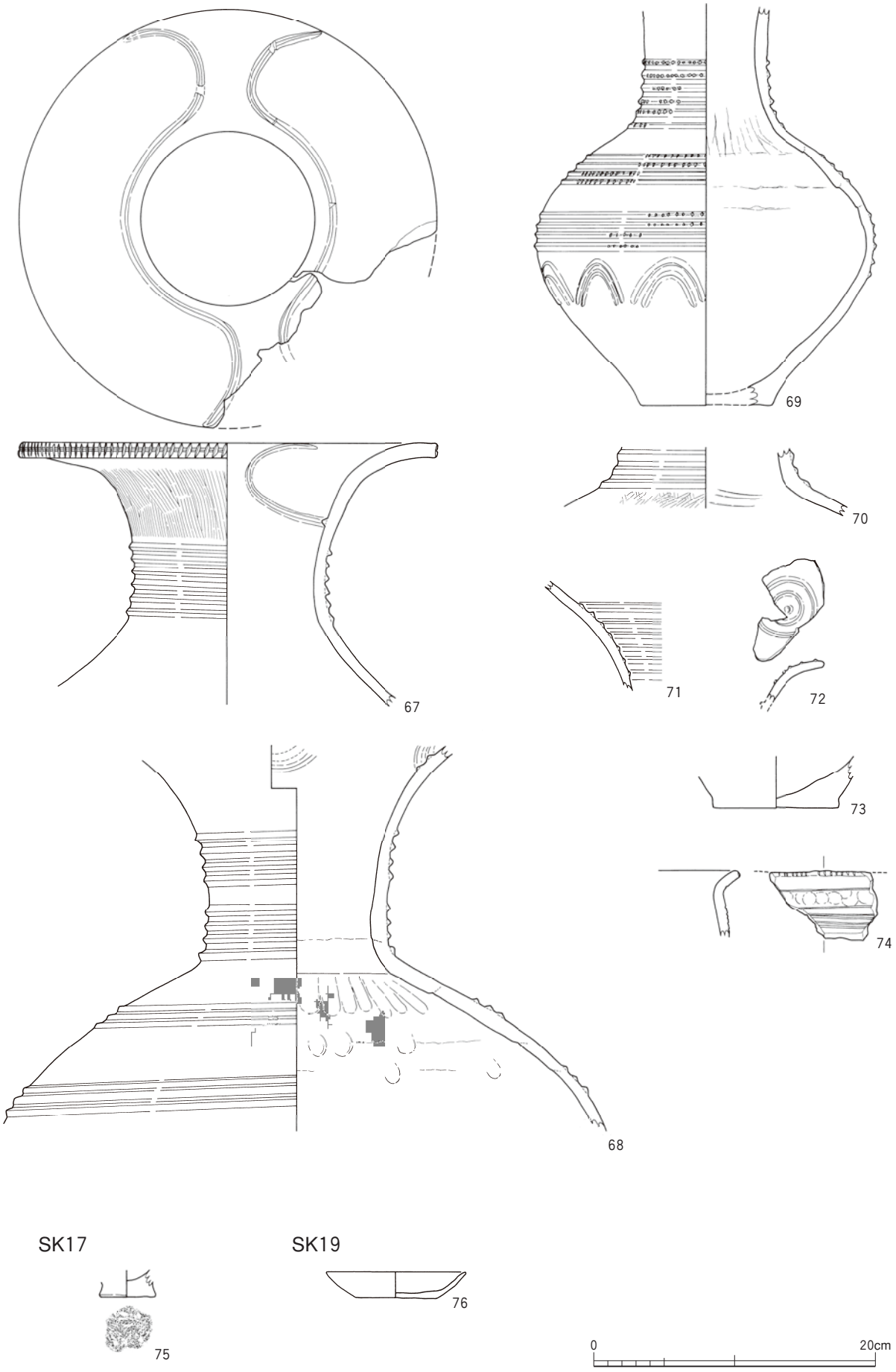




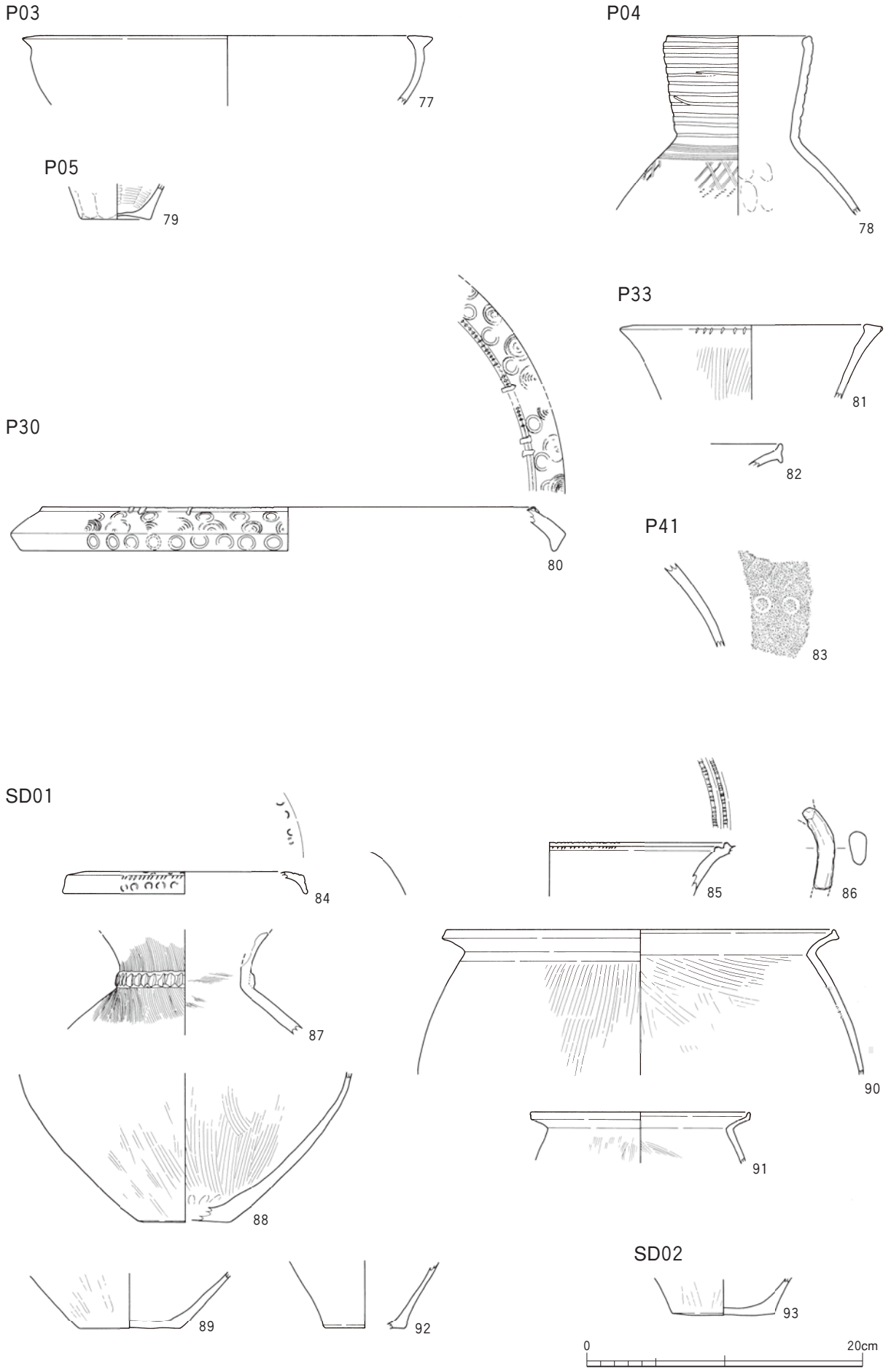
出土土器（4）



出土土器（5）

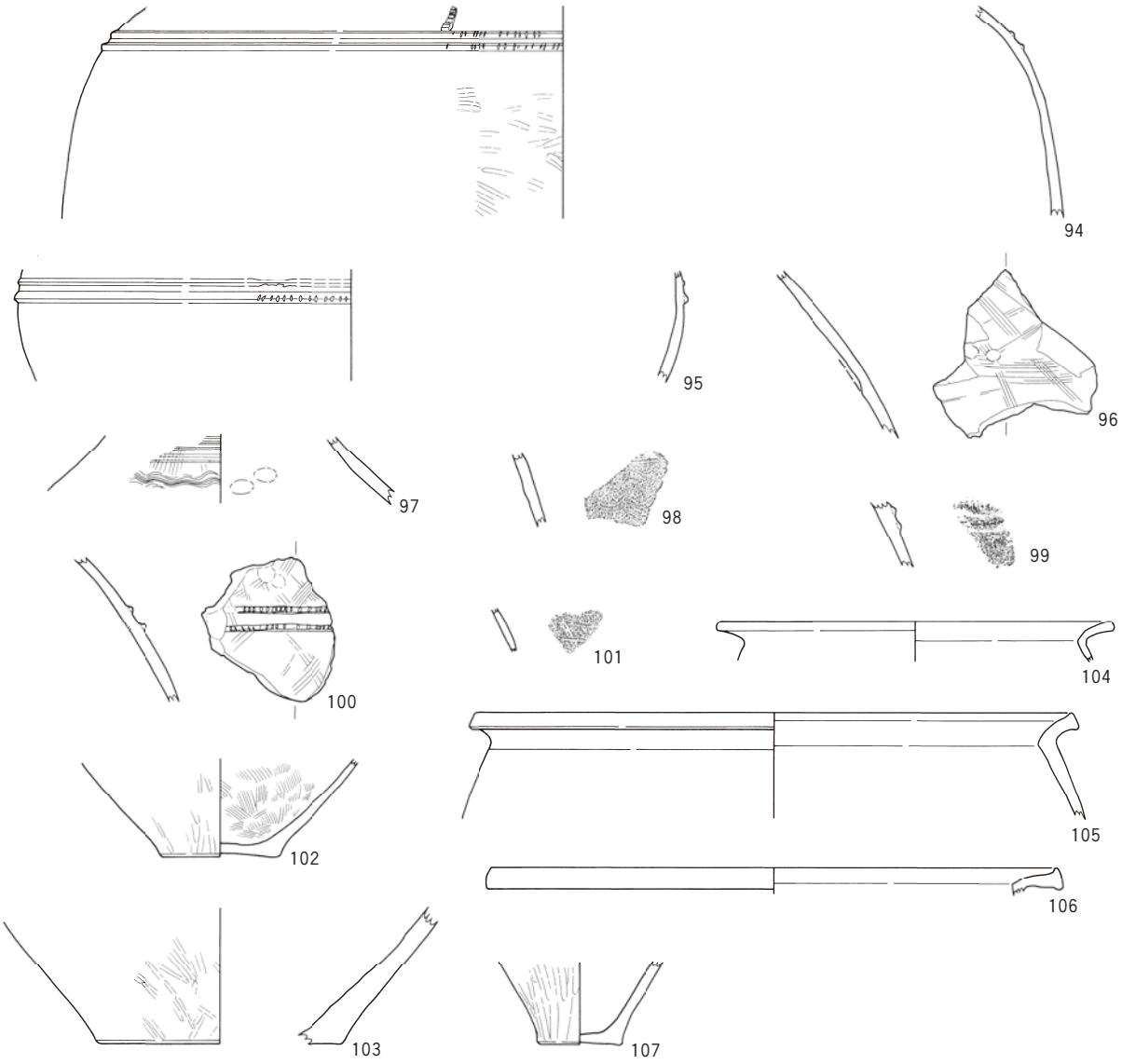


出土土器（6）

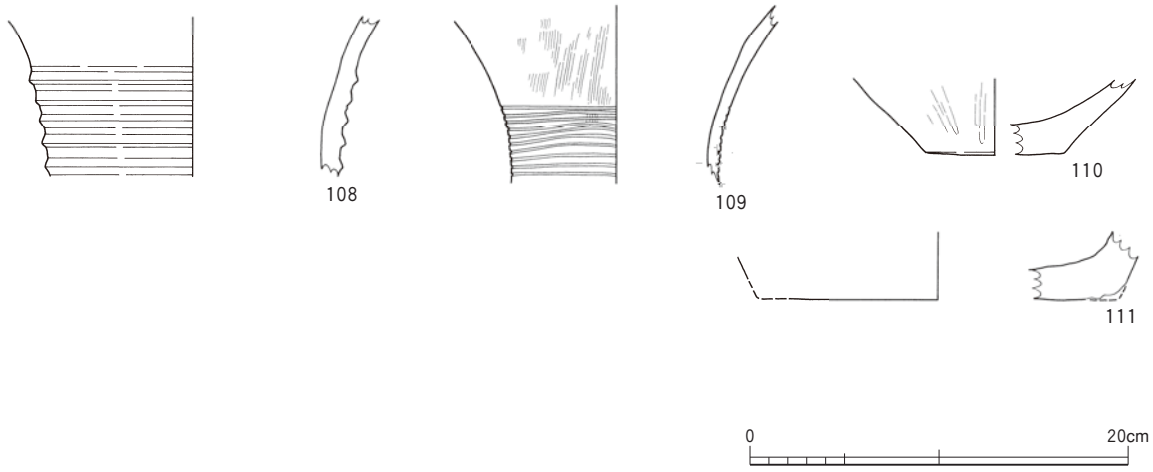

P03
77
P04
78
P05
79
P33
81
82
P30
80
P41
83
SD01
84
85
86
87
88
89
90
91
92
SD02
93
0
20cm

出土土器（7）

SH01

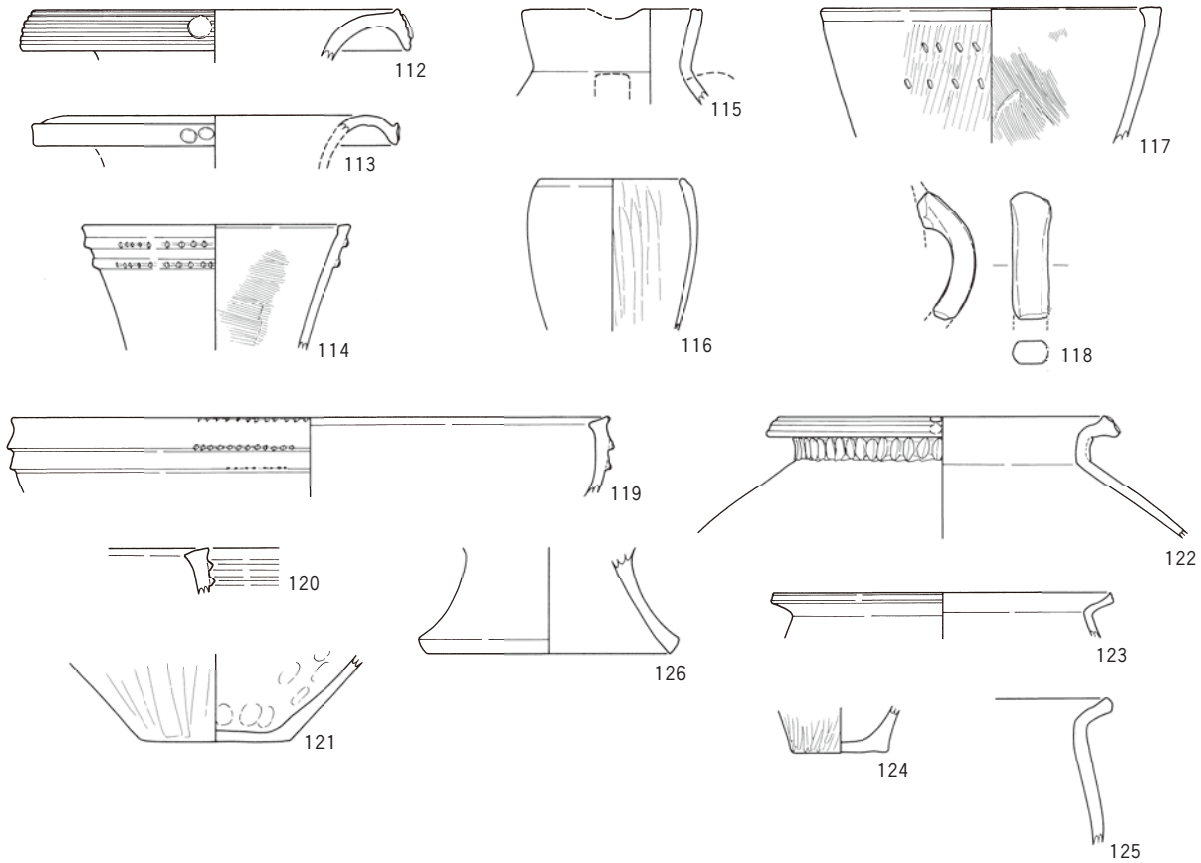


SX03

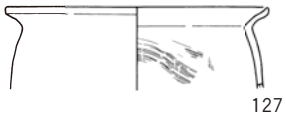


出土土器（8）

SX01

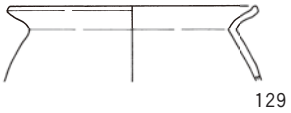


P03

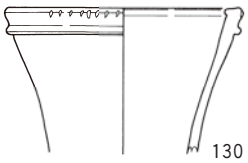


P05

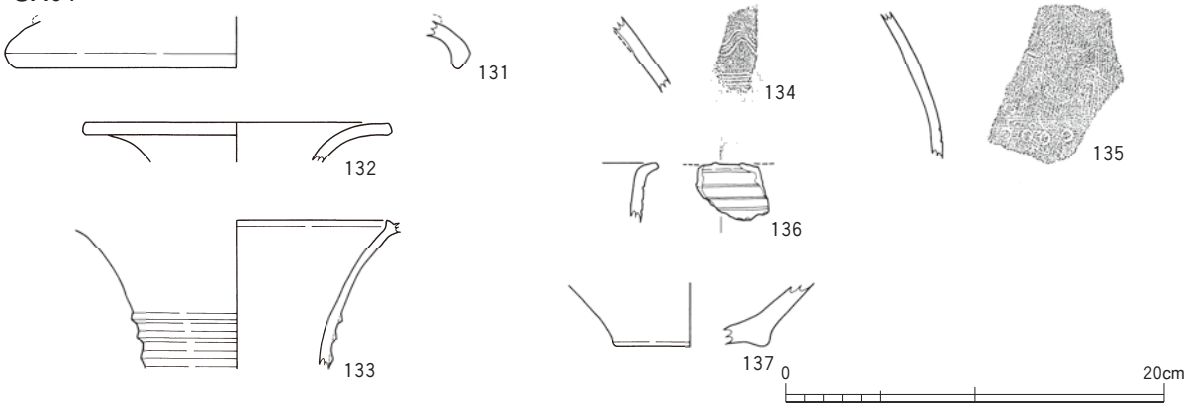
P19



P31

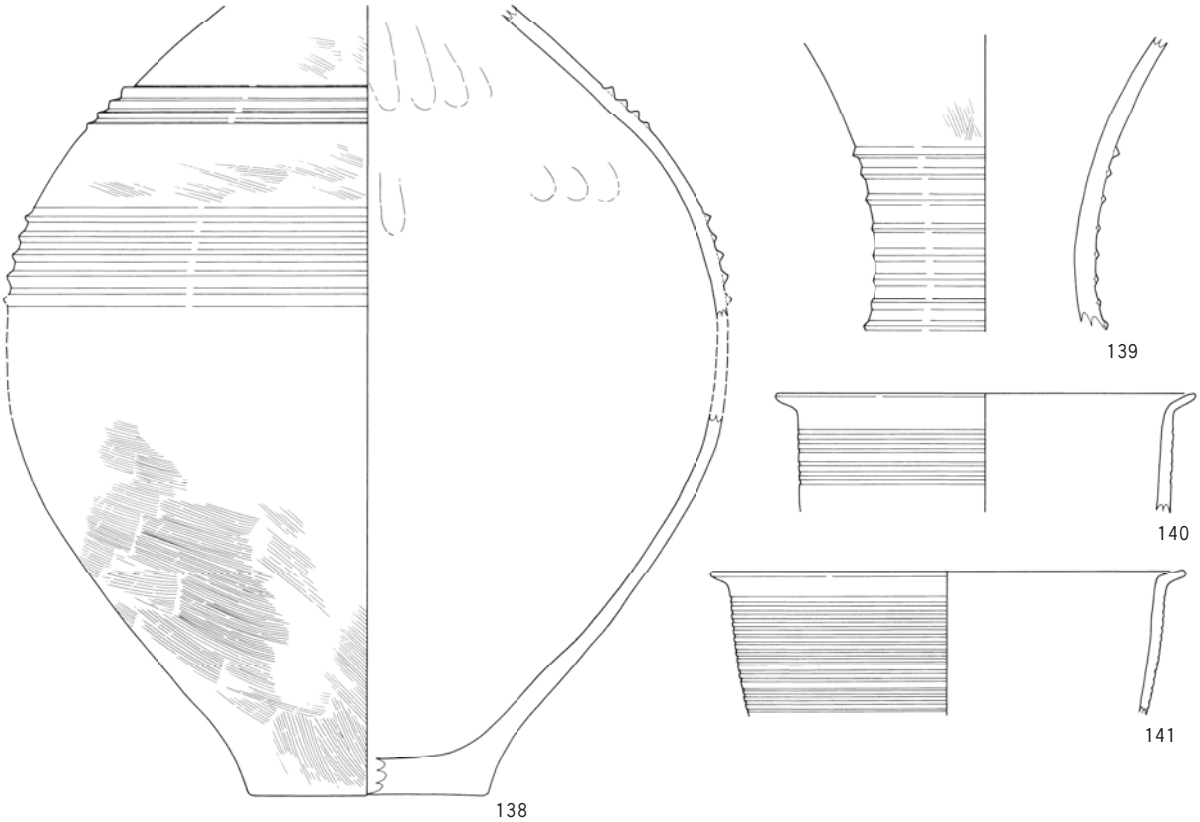


SX01

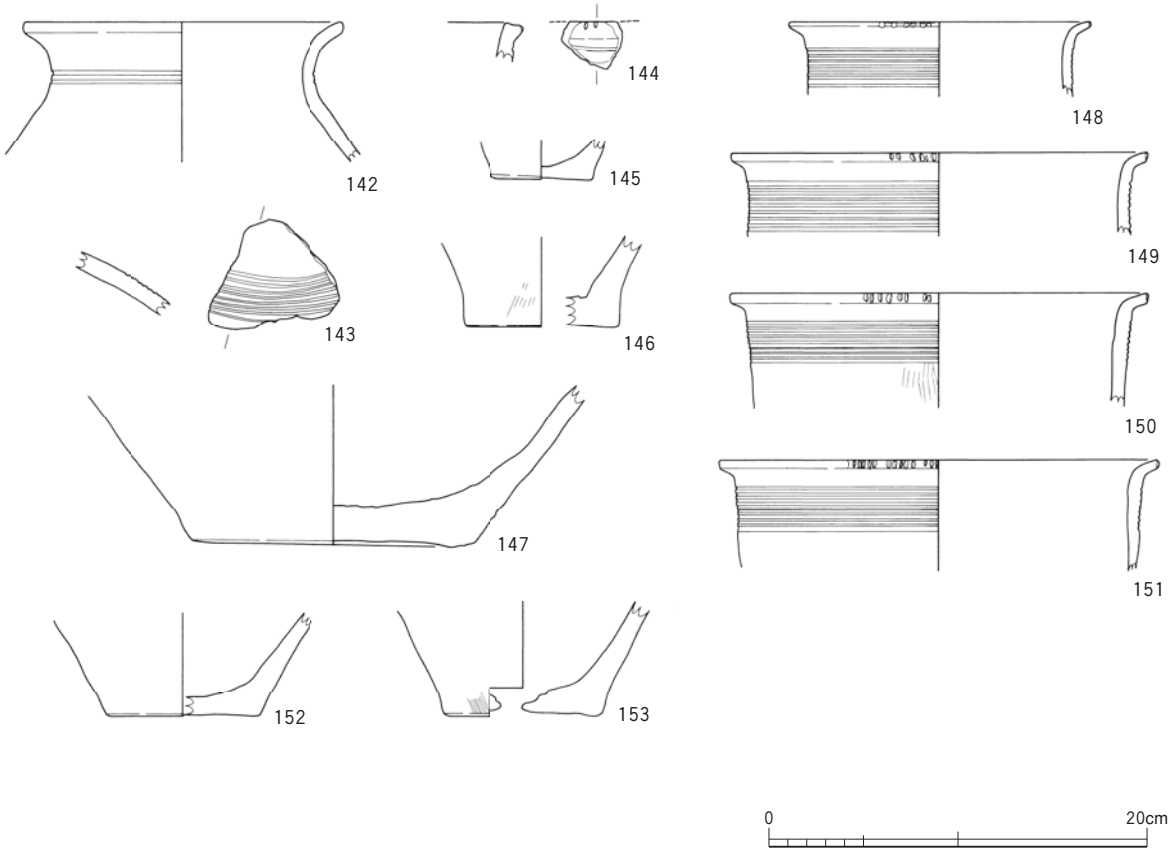


出土土器（9）

SK01

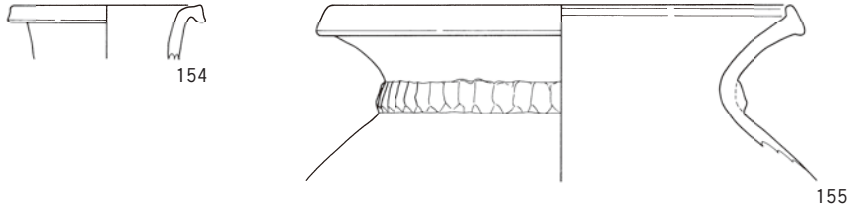


SK04

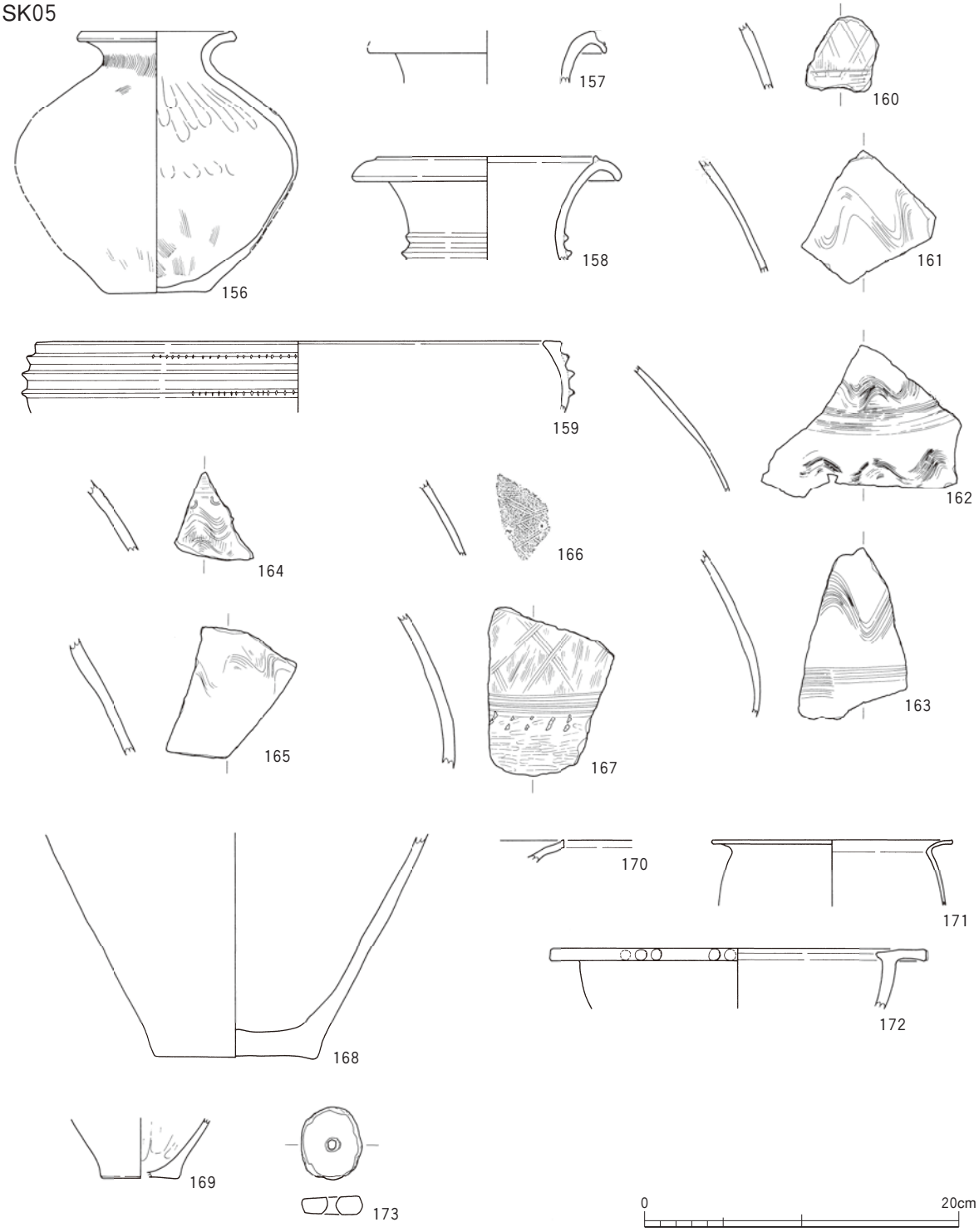


出土土器（10）

SK02

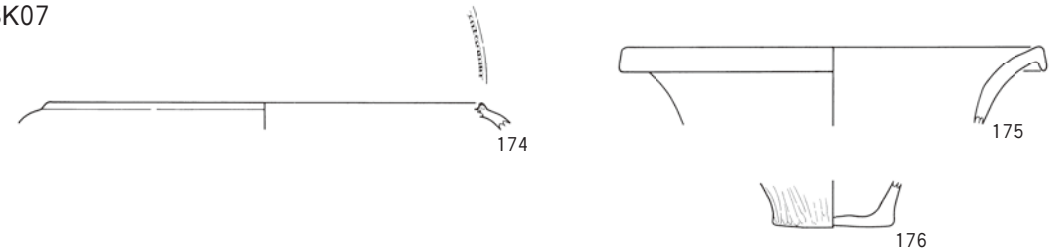


SK05

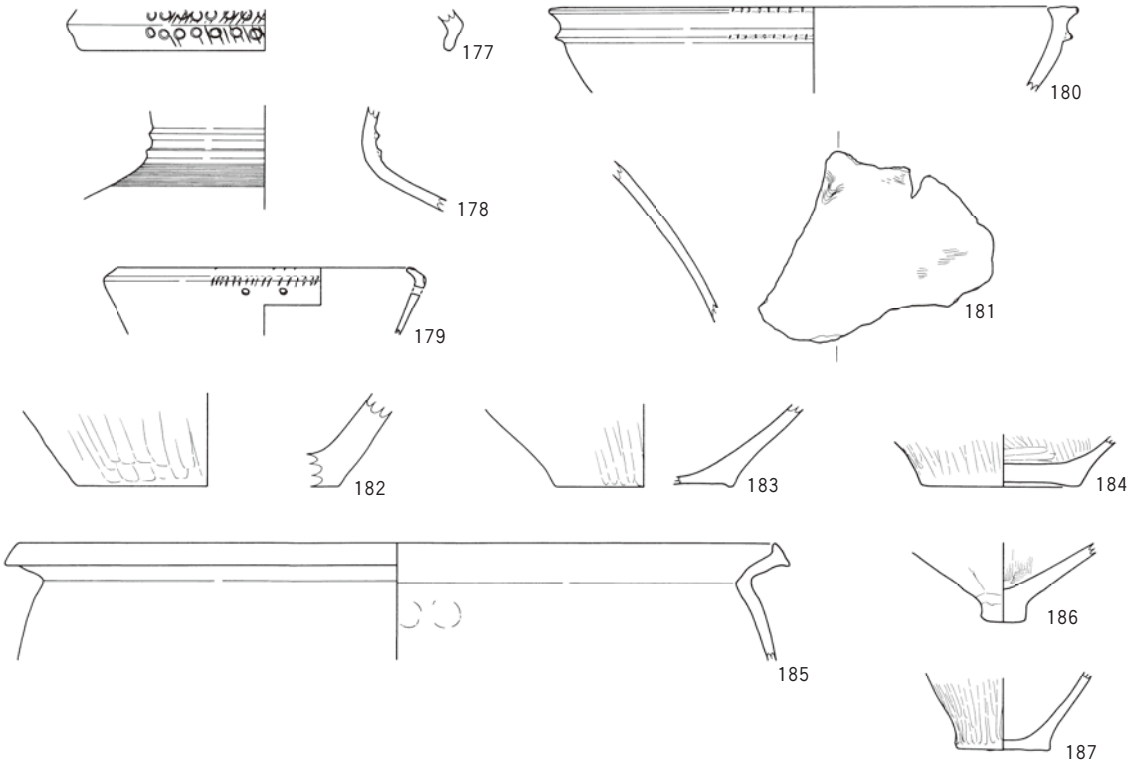


出土土器（11）

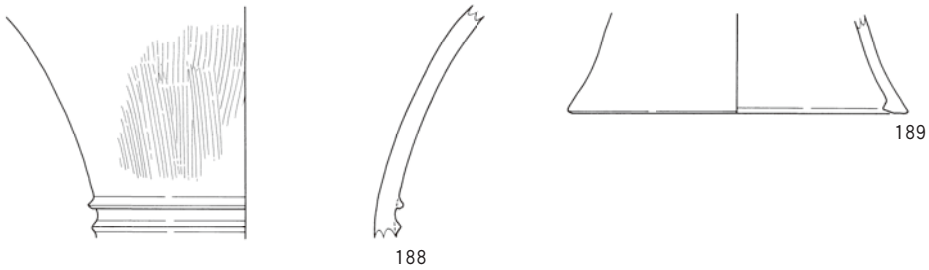
SK07



SK08



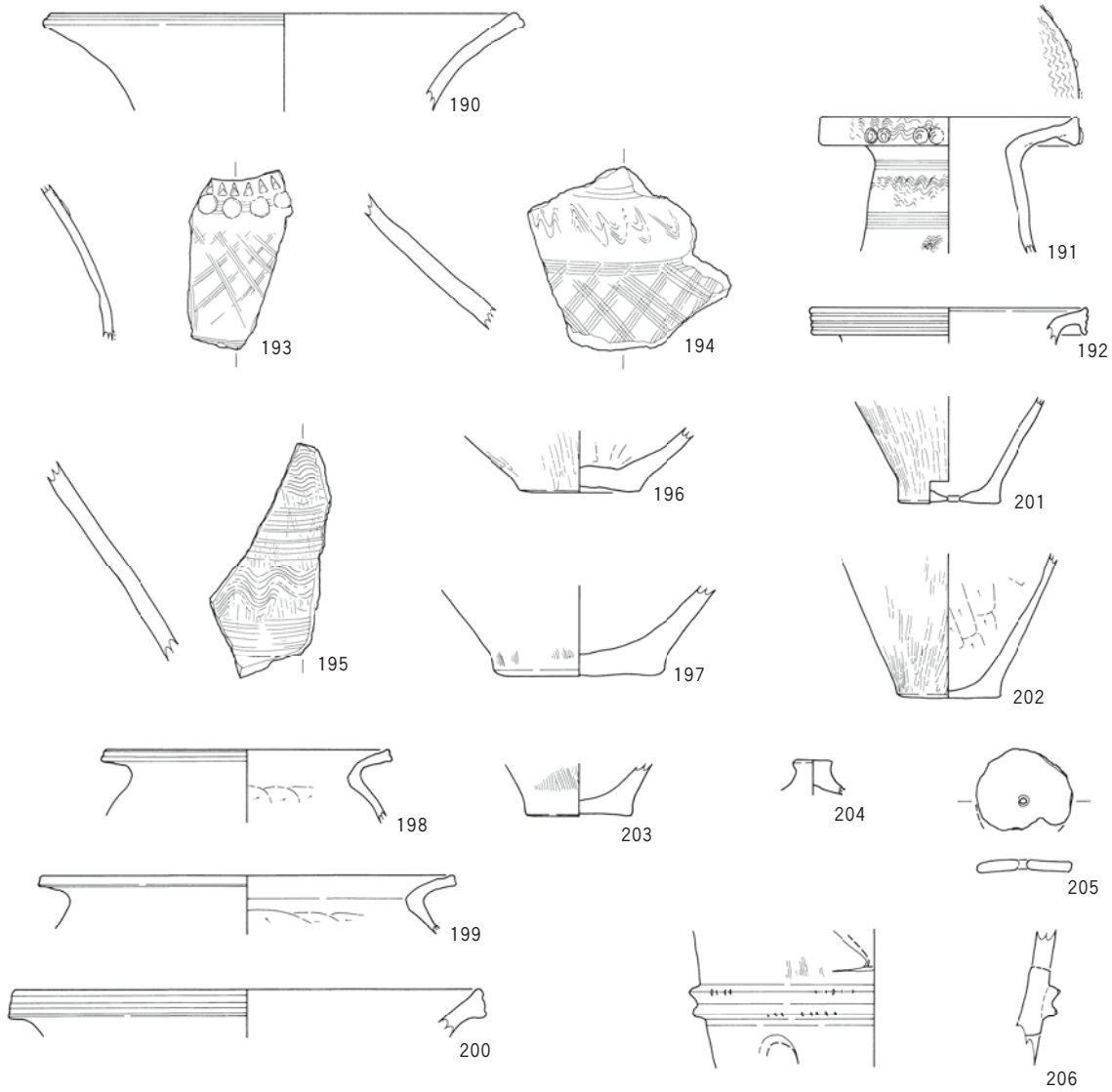
SK12



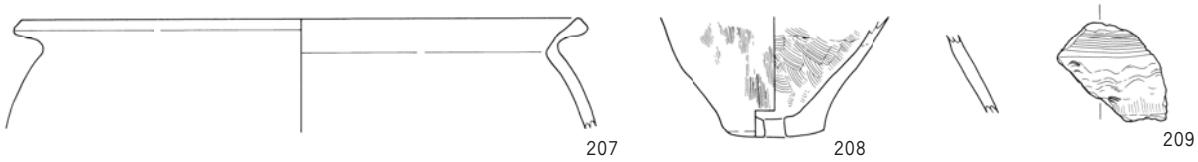
0　20cm

出土土器（12）

SX01



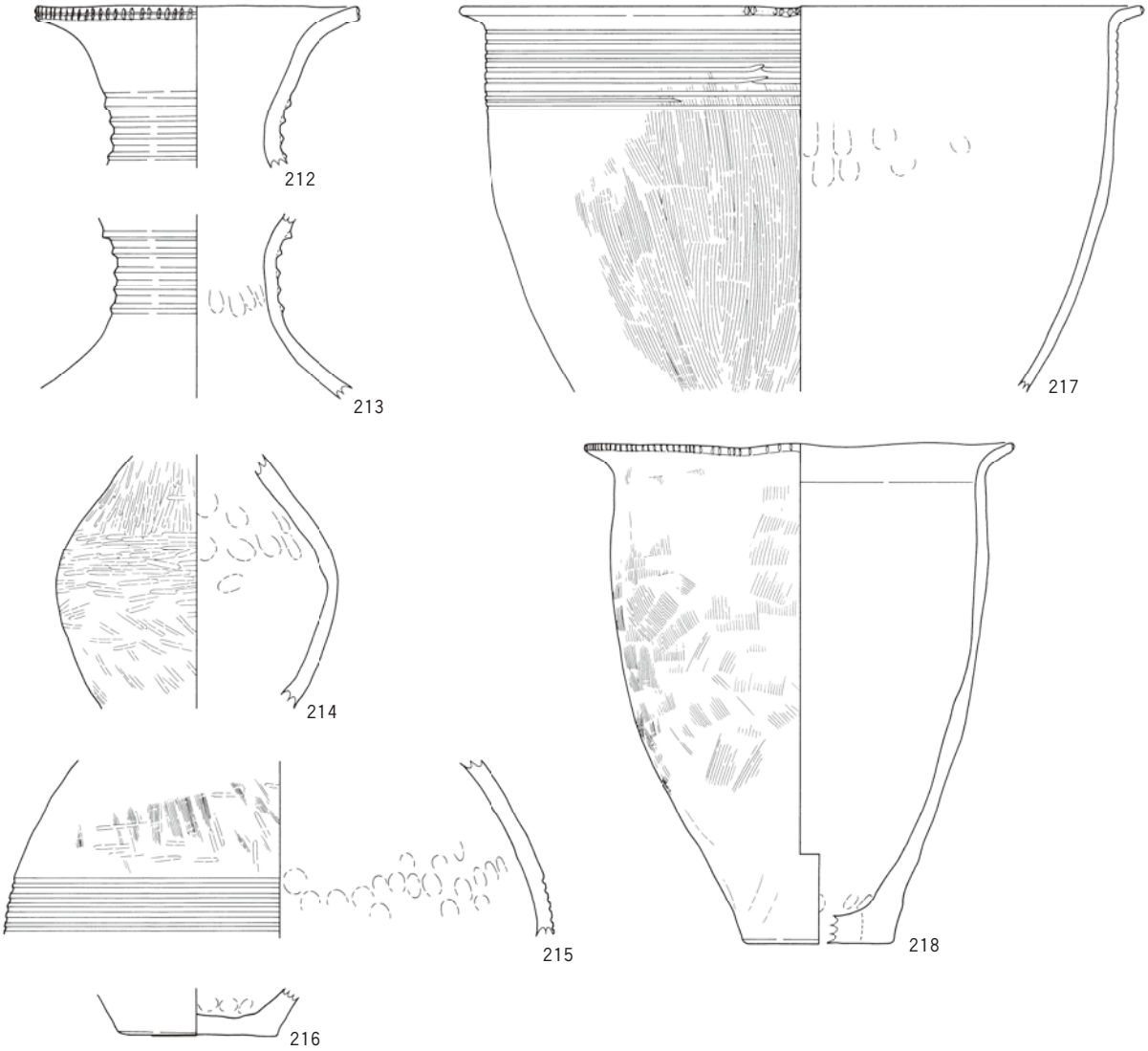
SX02



SX03

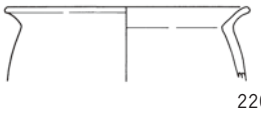
出土土器（13）

SK01

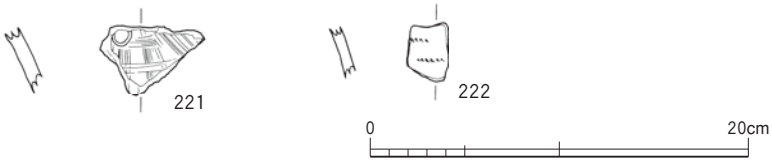


SK03

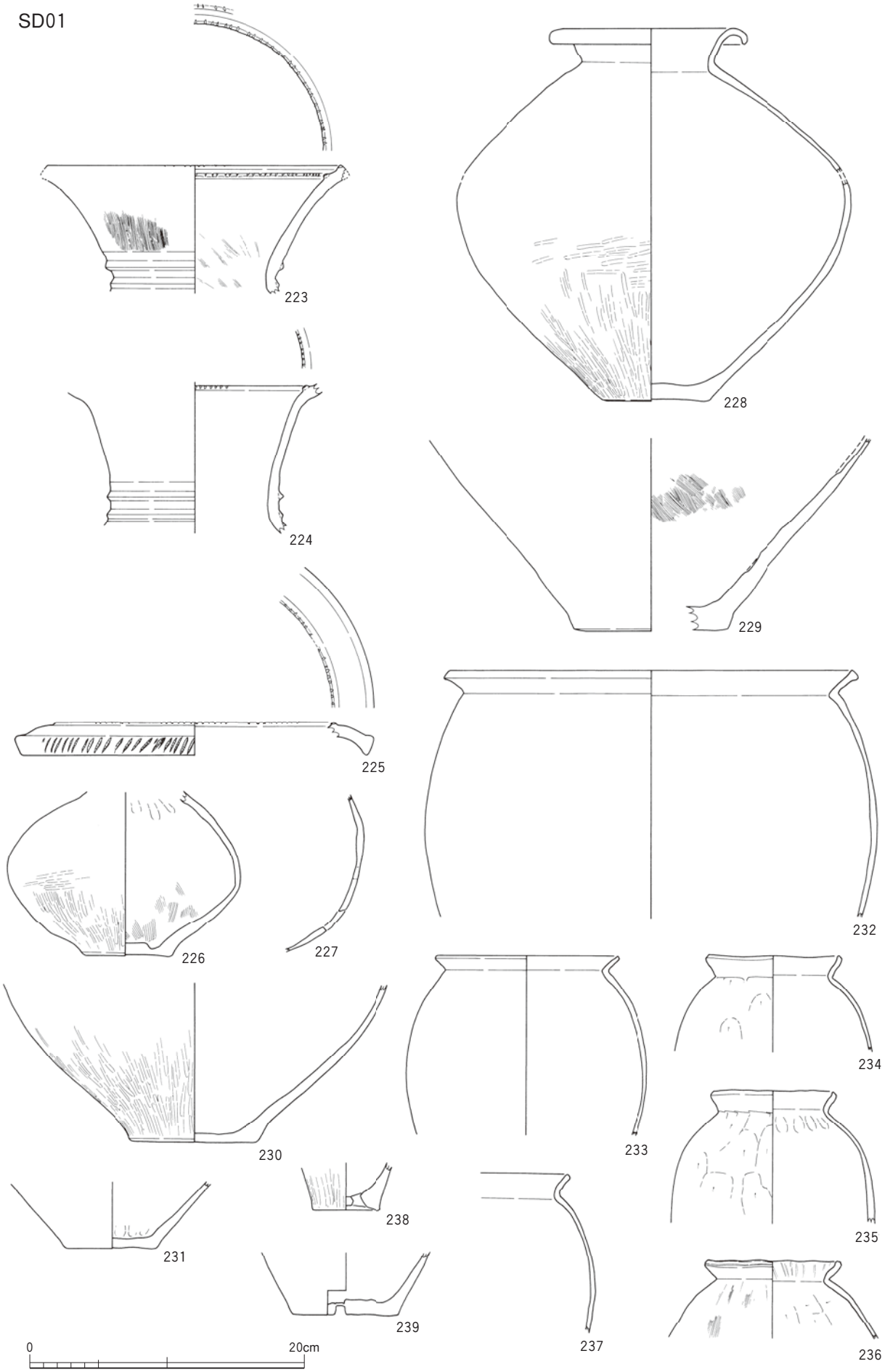
P01



P22



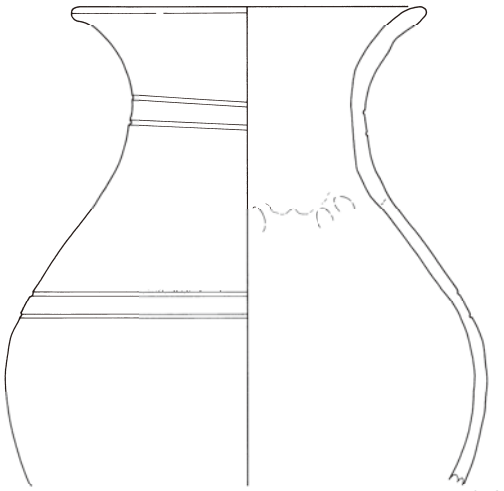
出土土器（14）

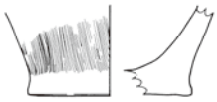

SD01
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
0
20cm

出土土器（15）

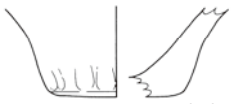
図版28　Ⅲ区遺物

SD02

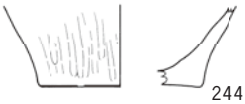


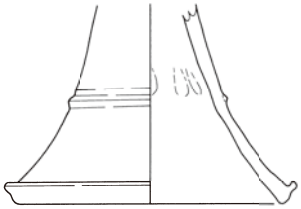


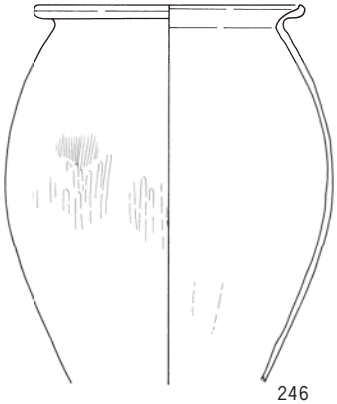
SD05

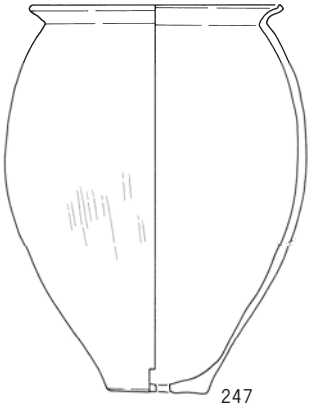


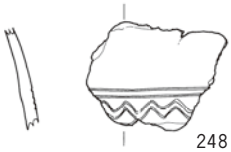
SD03



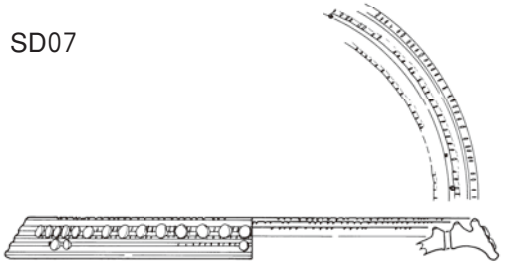


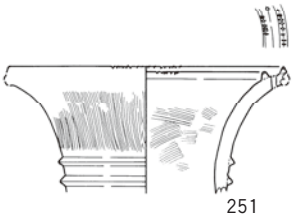


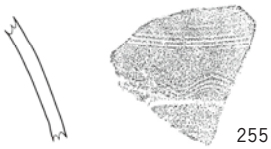


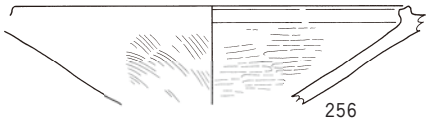


SD07





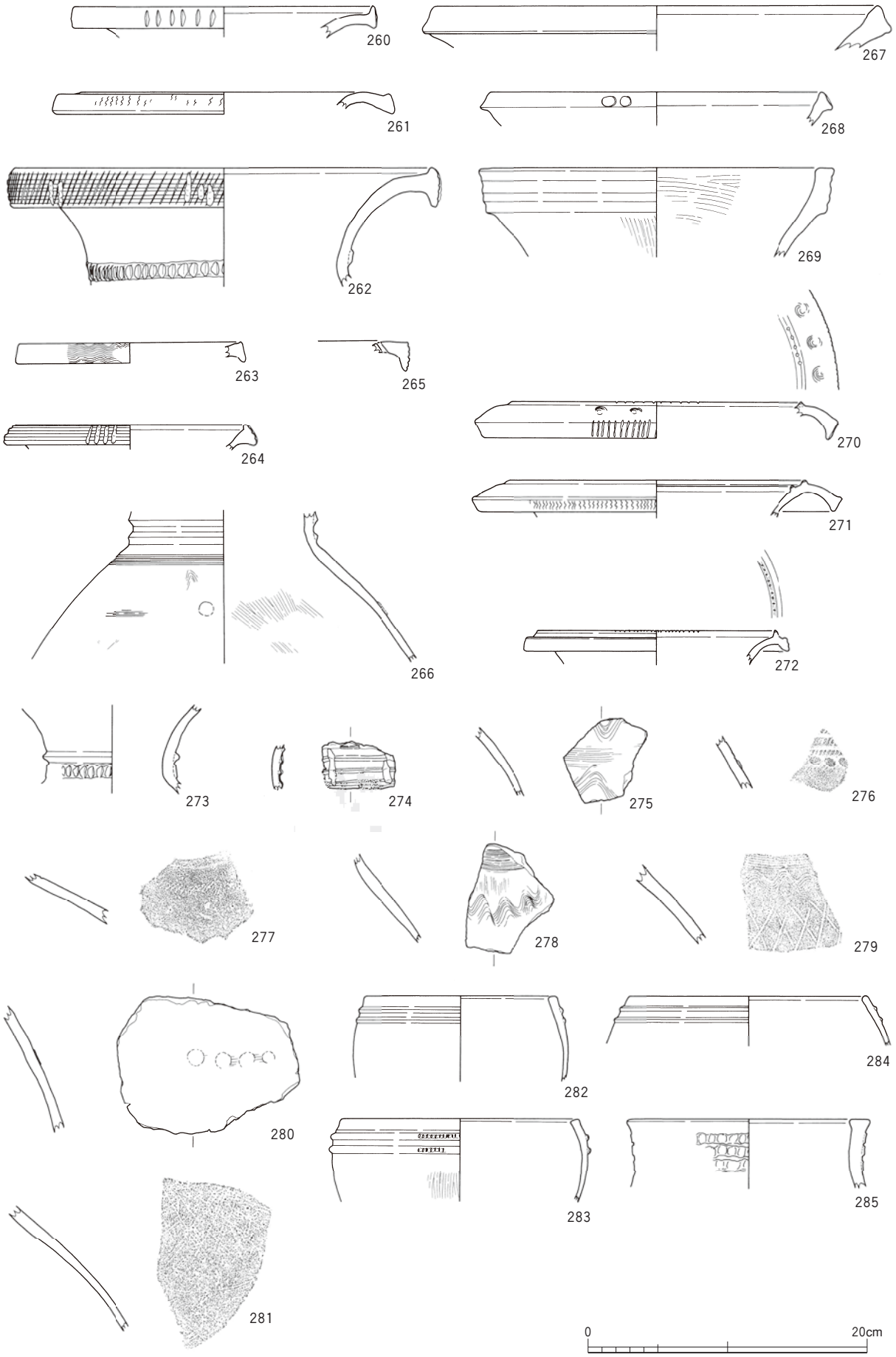




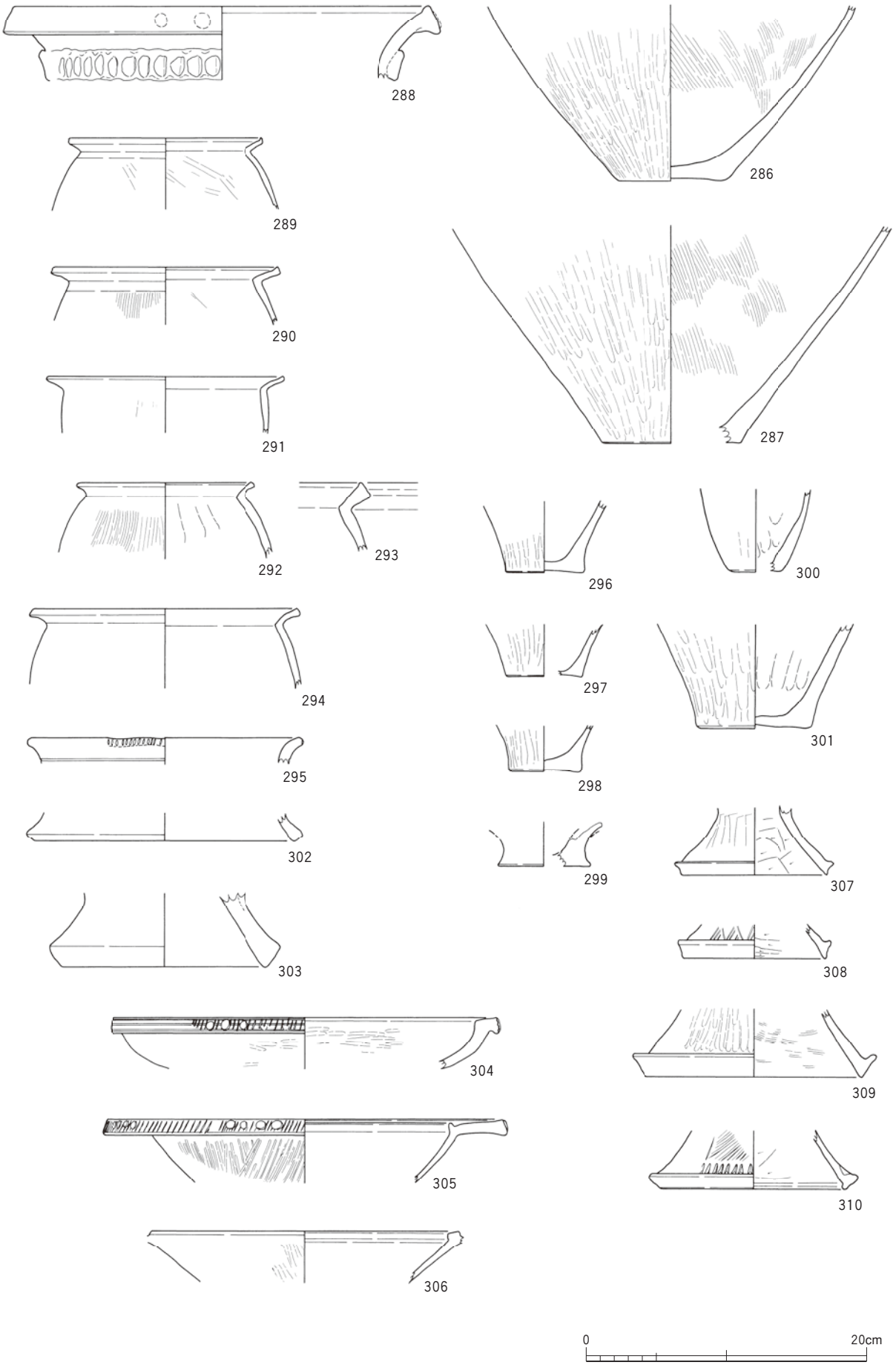
0　20cm

出土土器（16）

北半部礫層上（落ち込み）

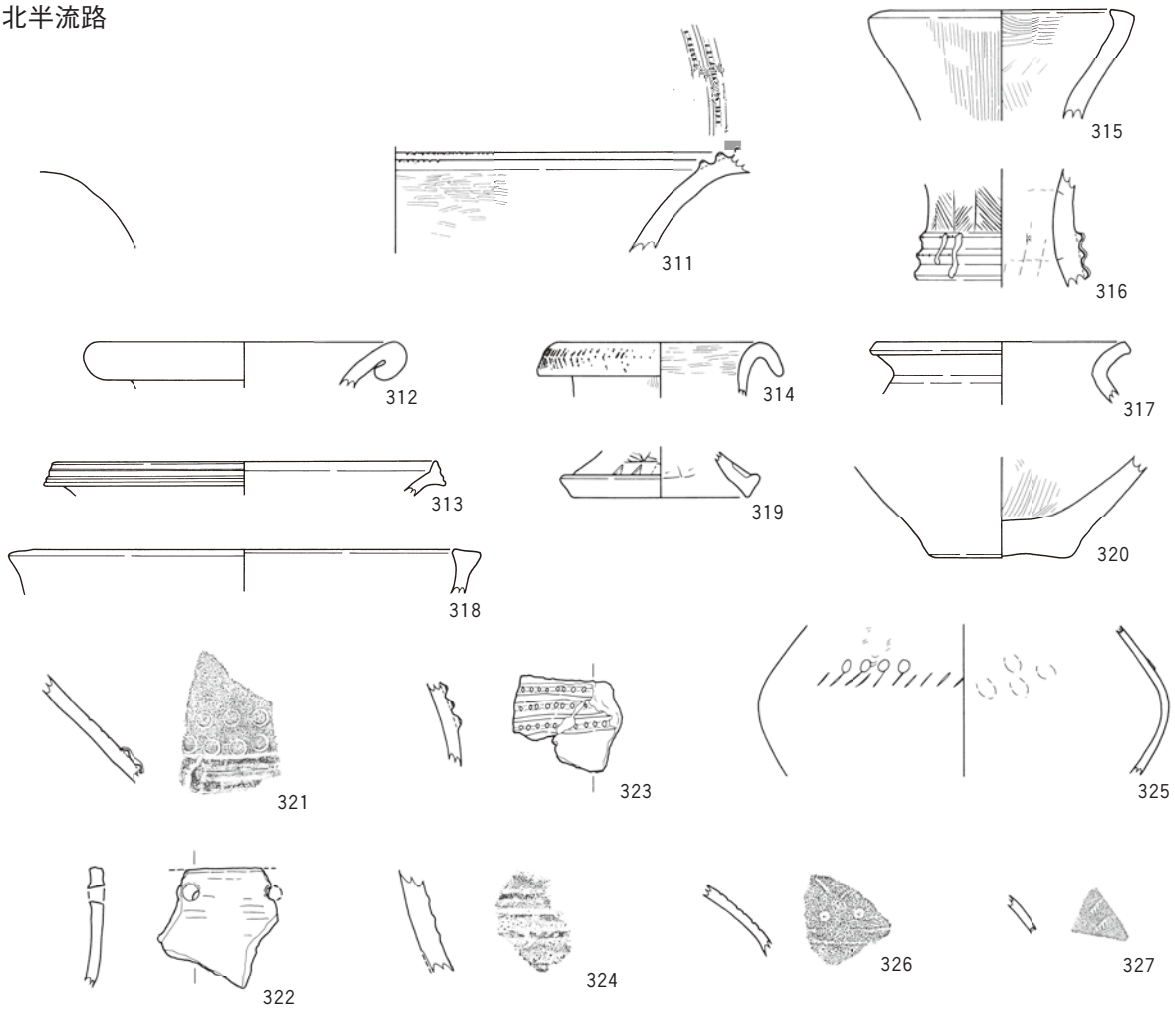


出土土器（17）

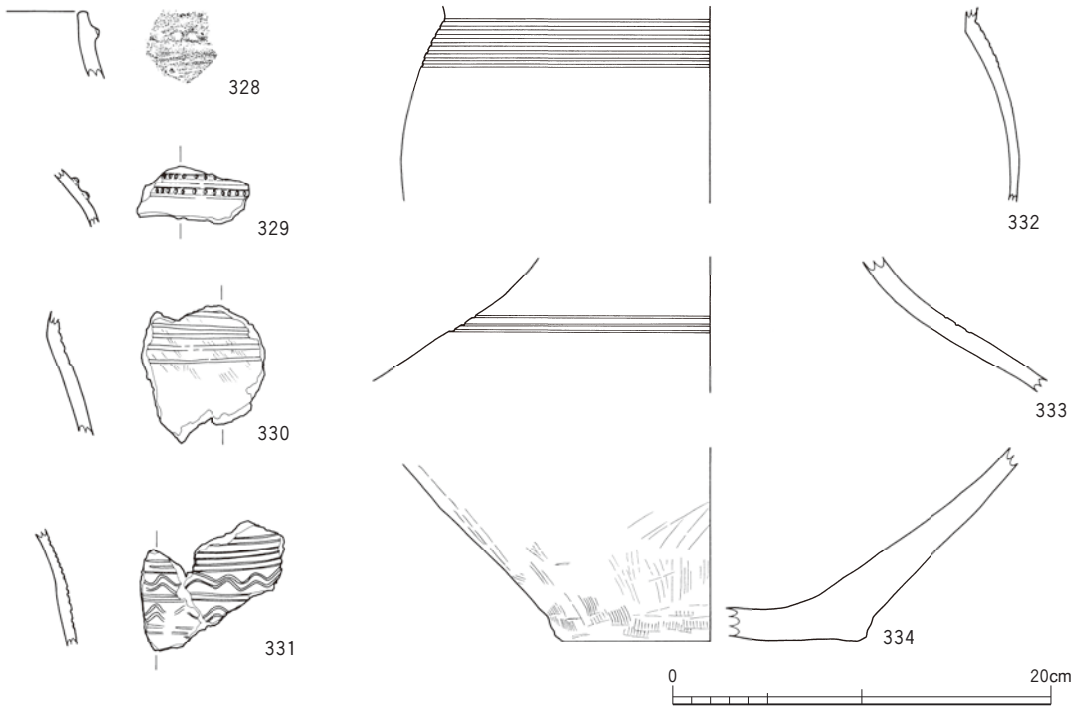

288
286
289
290
287
291
292
293
296
300
294
297
301
295
298
302
299
307
303
308
304
309
305
310
306
0
20cm

出土土器（18）

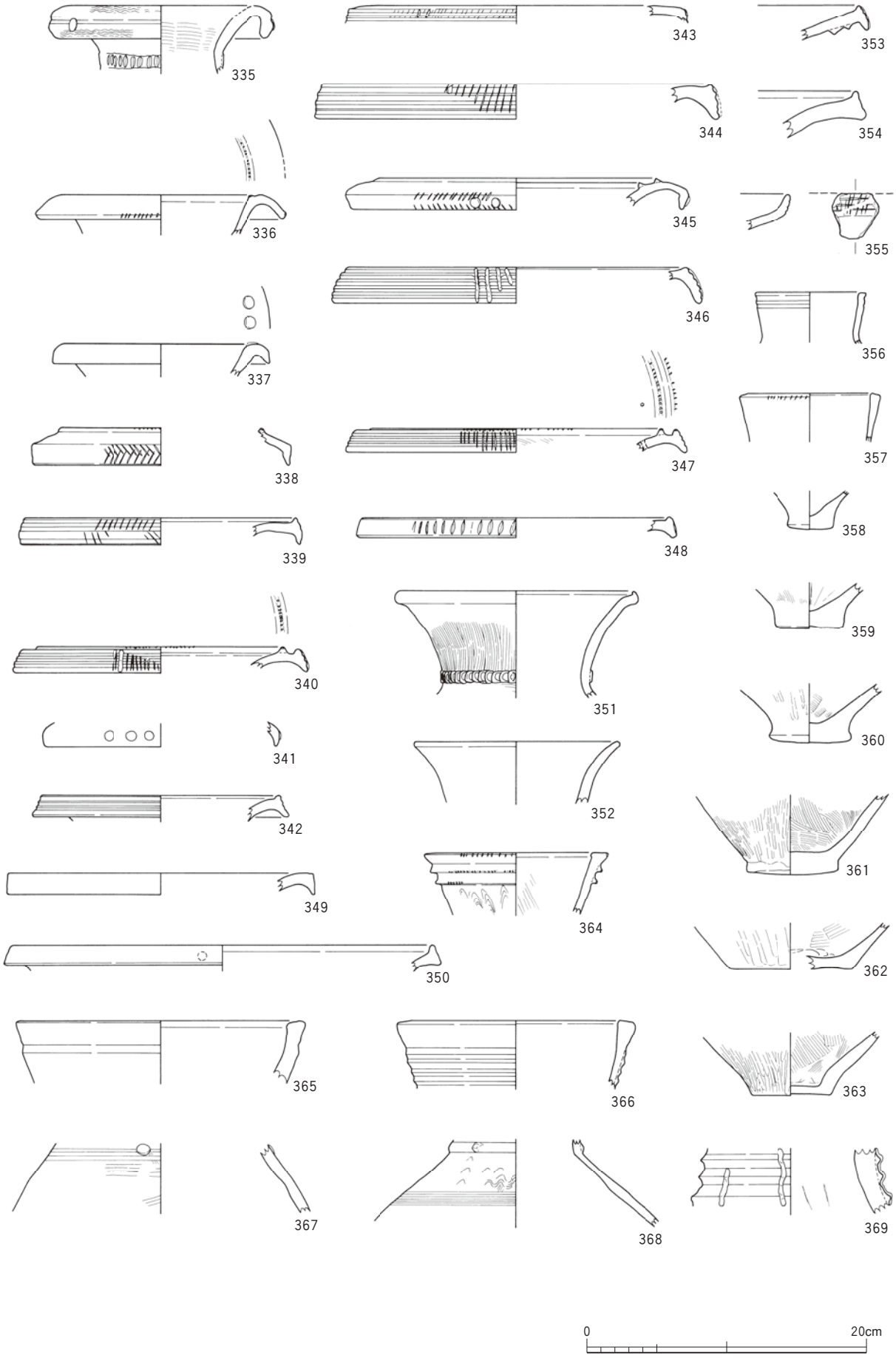
北半流路



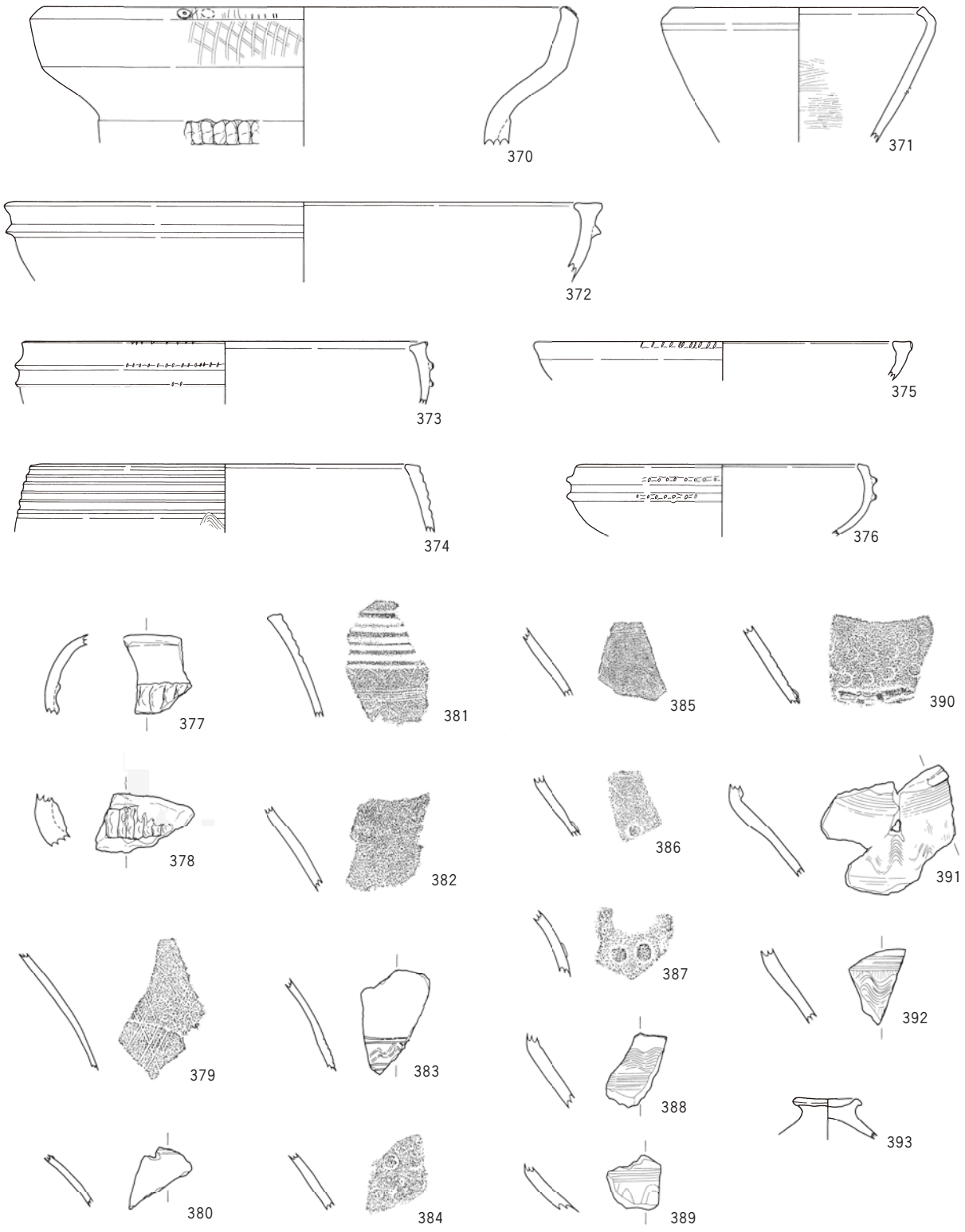
包含層



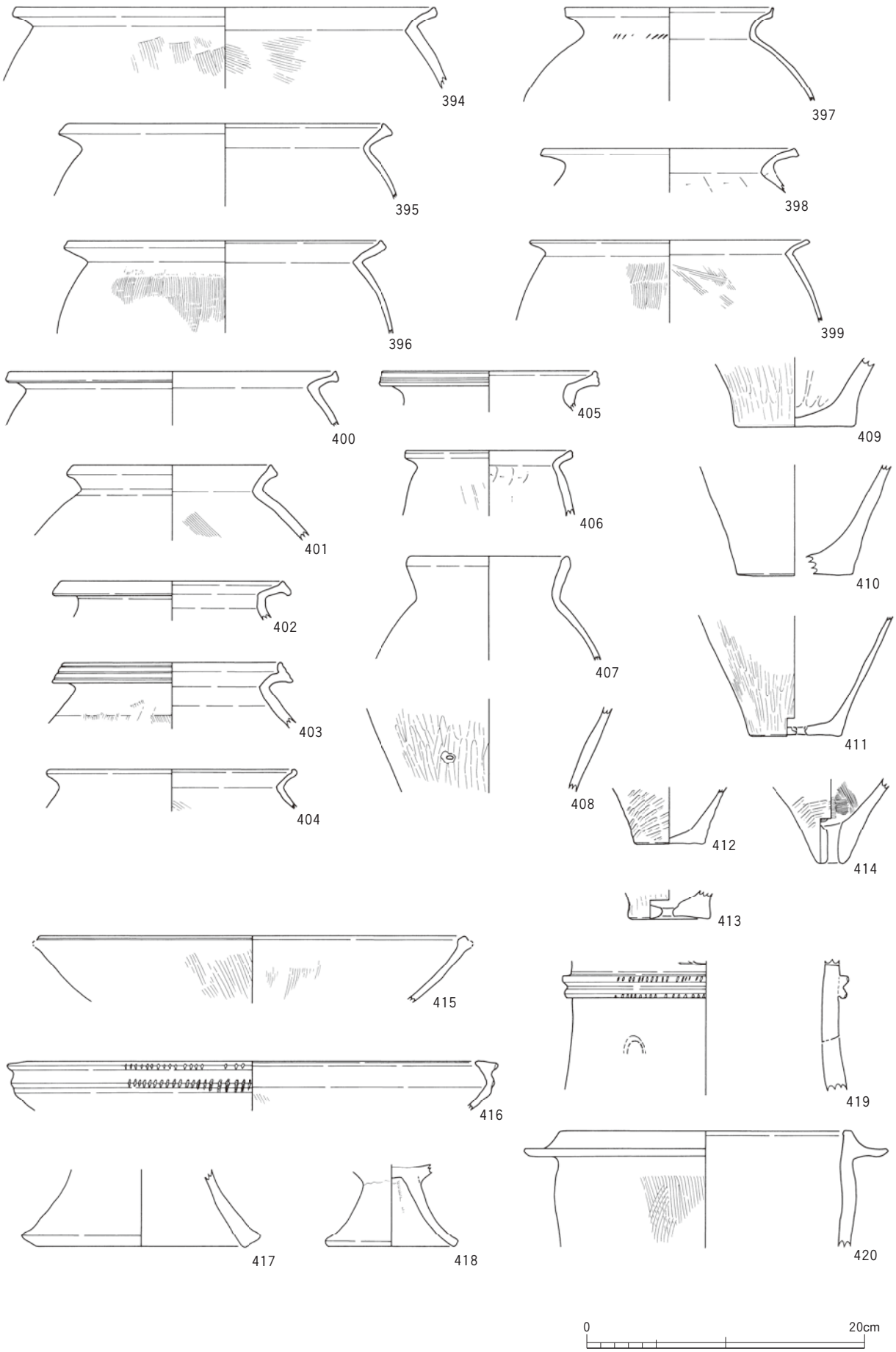
出土土器（19）


335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
0
20cm

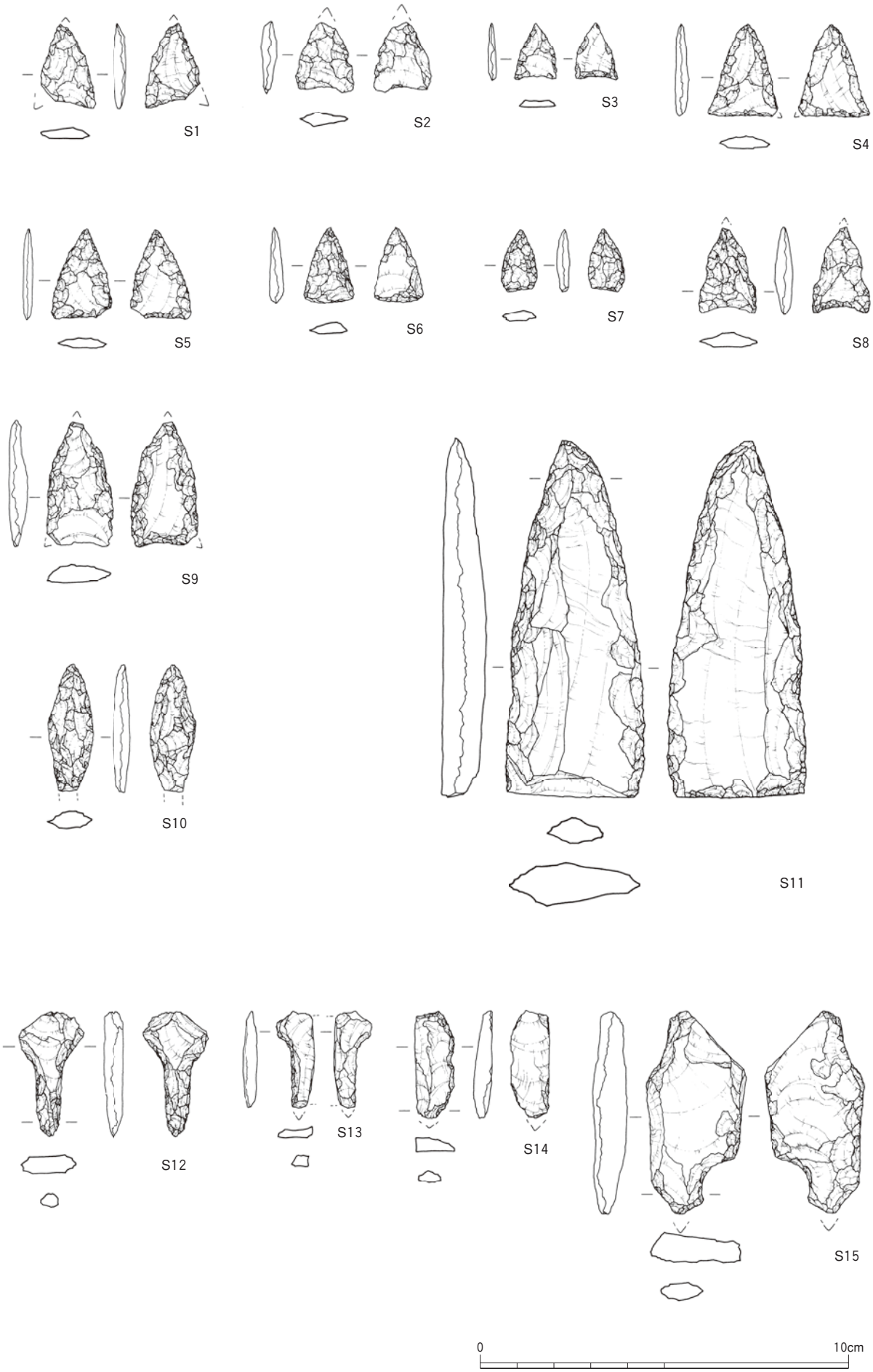
出土土器（20）


370
371
372
373
375
374
376
377
381
385
390
378
382
386
391
387
379
383
392
388
393
380
384
389
0
20cm

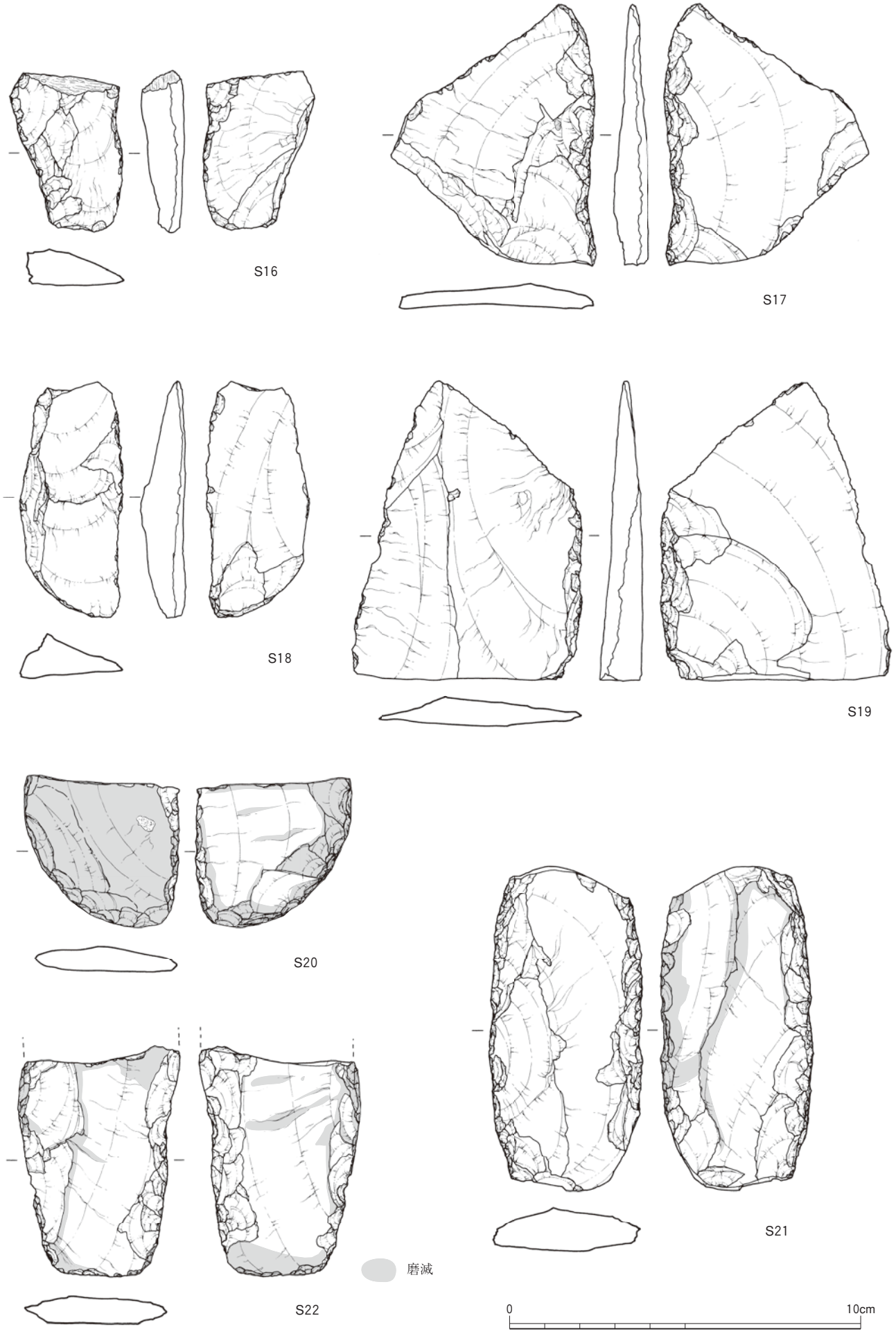
出土土器（21）


394
397
395
398
396
399
400
405
409
401
406
410
402
407
411
403
408
412
414
404
413
415
416
419
417
418
420
0
20cm

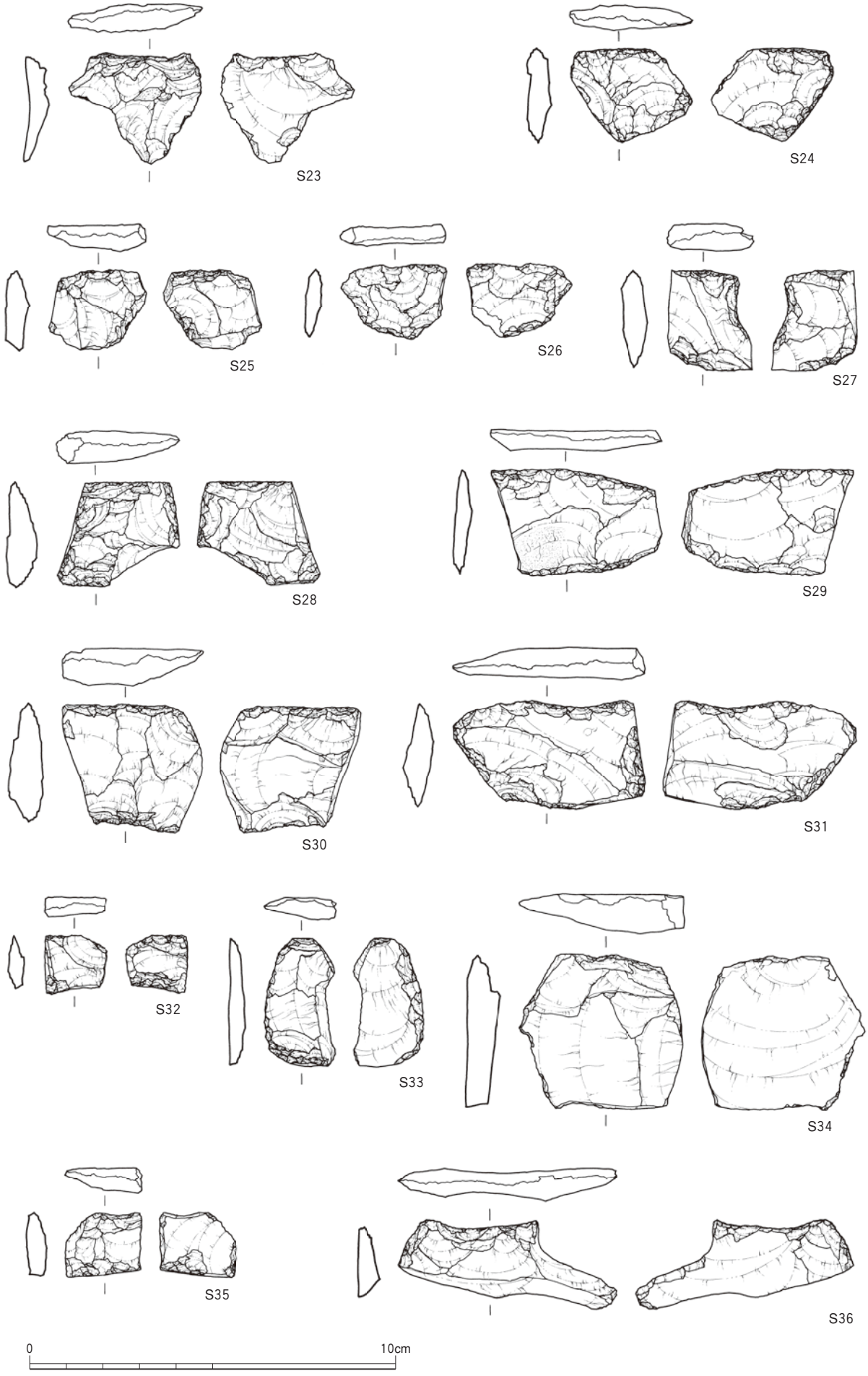
出土土器（22）



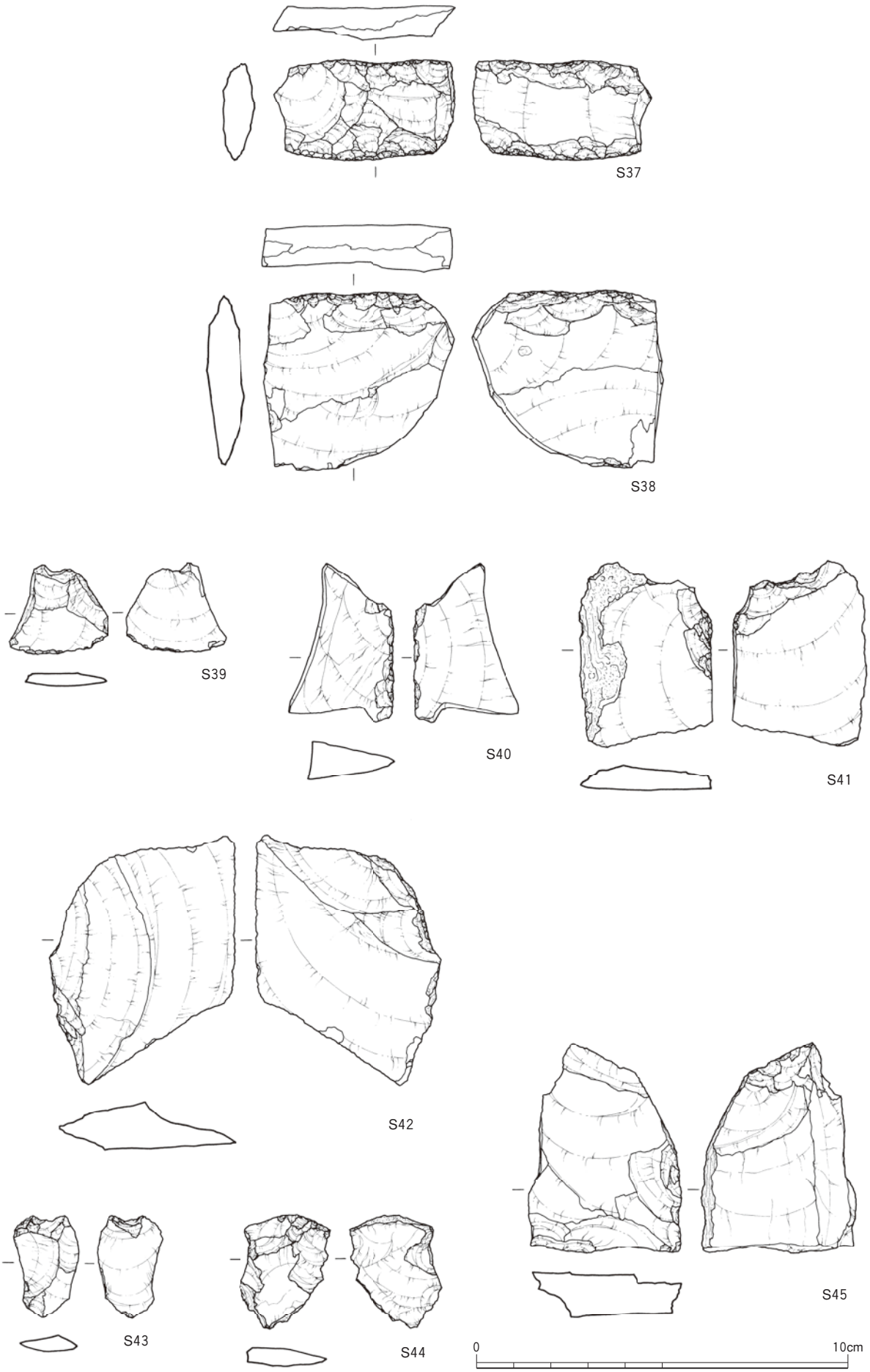
出土石器（1）



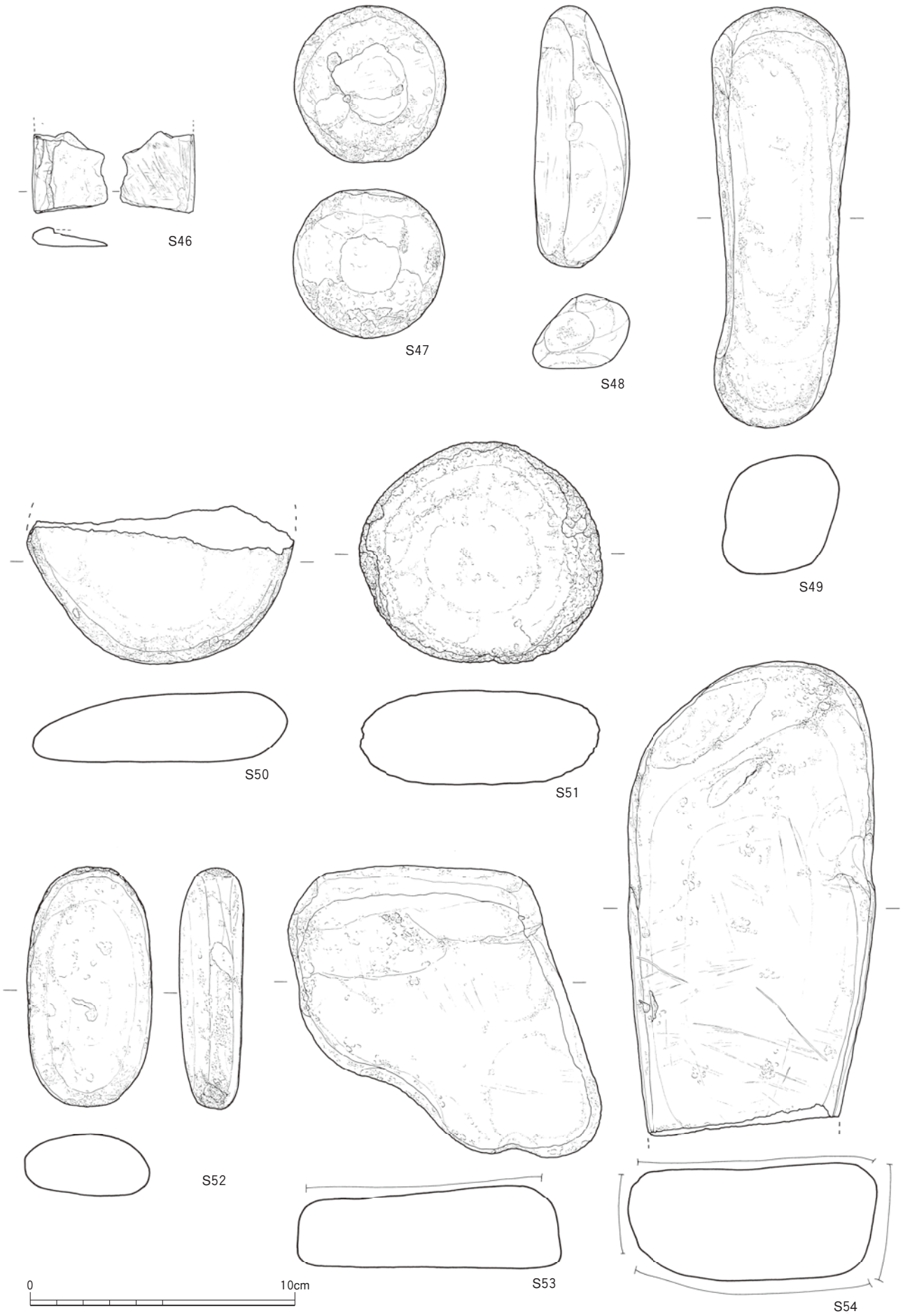
出土石器（2）



出土石器（3）



出土石器（4）



出土石器（5）

写真図版

写真図版２　Ⅰ区遺構

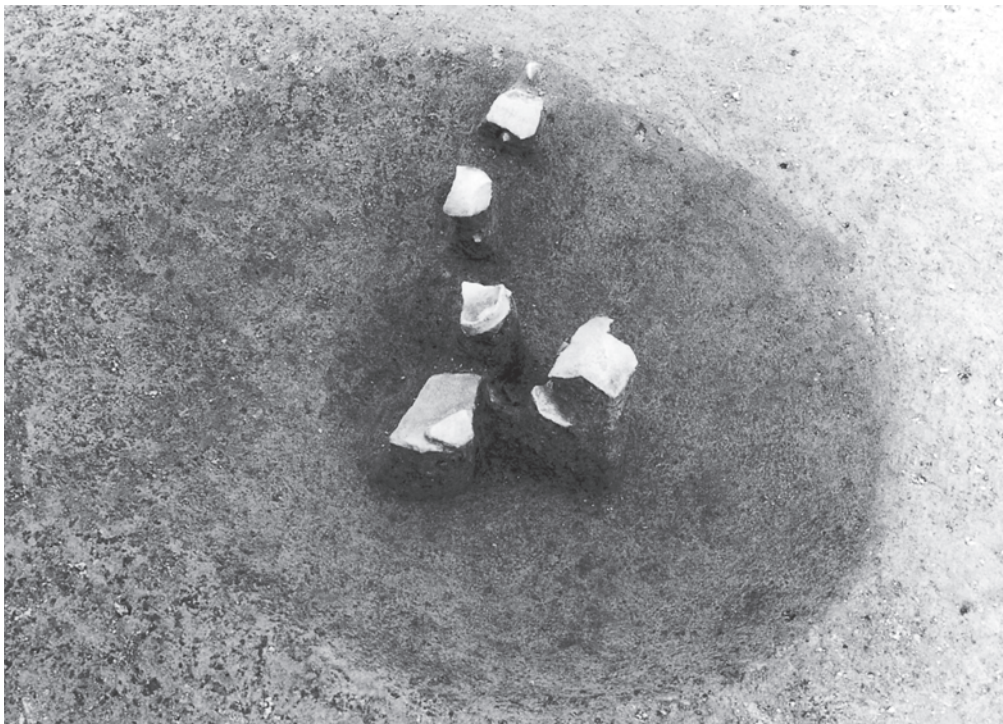
全景
（垂直写真）

左）全景　南から
右）全景　北から

南半部
南から

SH01
北から

SH01断面
東から

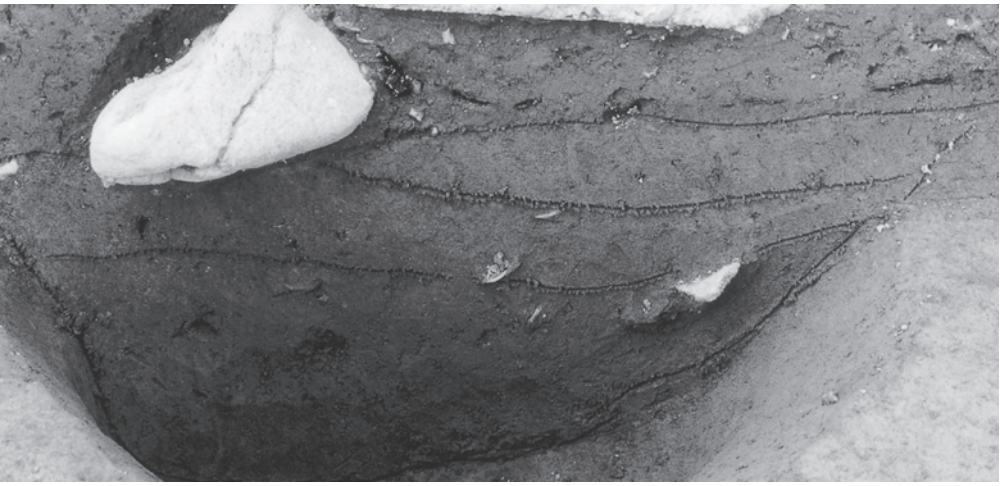


SK01
東から

写真図版４　Ⅰ区遺構

SK01断面
東から

SK02断面
西から



SK03断面
東から

SK05
東から

SK05
土器出土状況
南から

SK07
西から

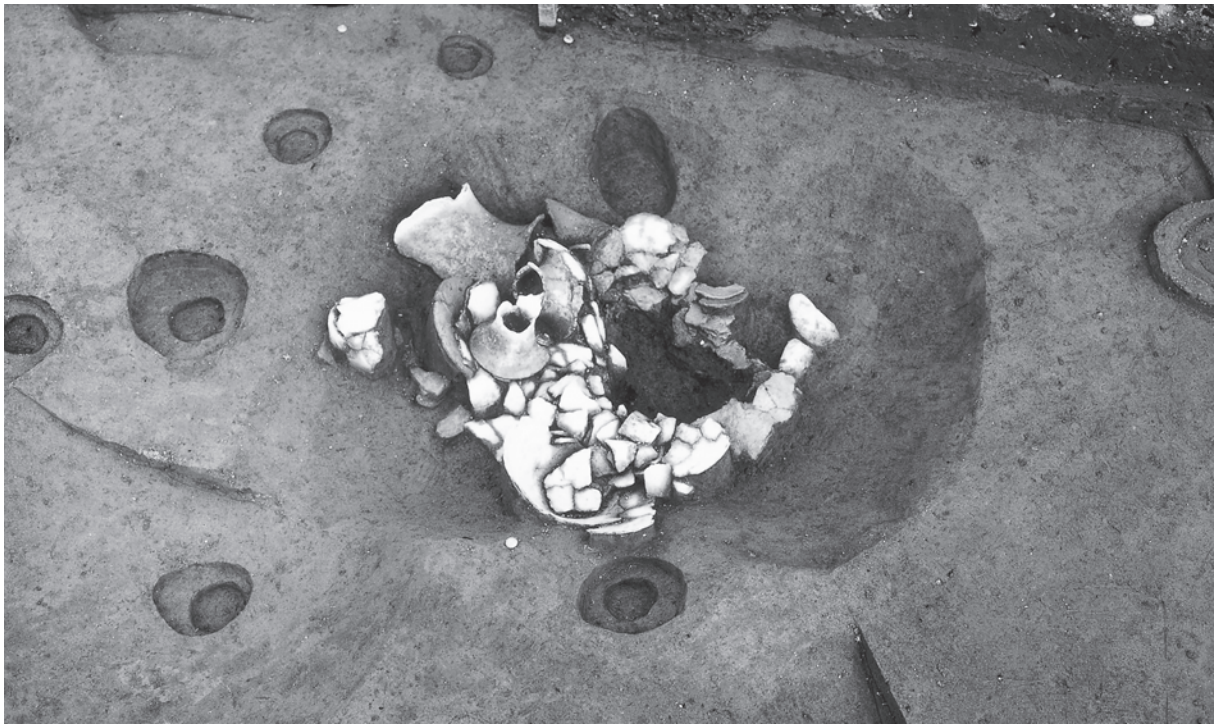
SK07断面
西から

写真図版６　Ⅰ区遺構

SK06
東から

SK06断面
東から

SK10・SD01
断面
東から



SK16
西から

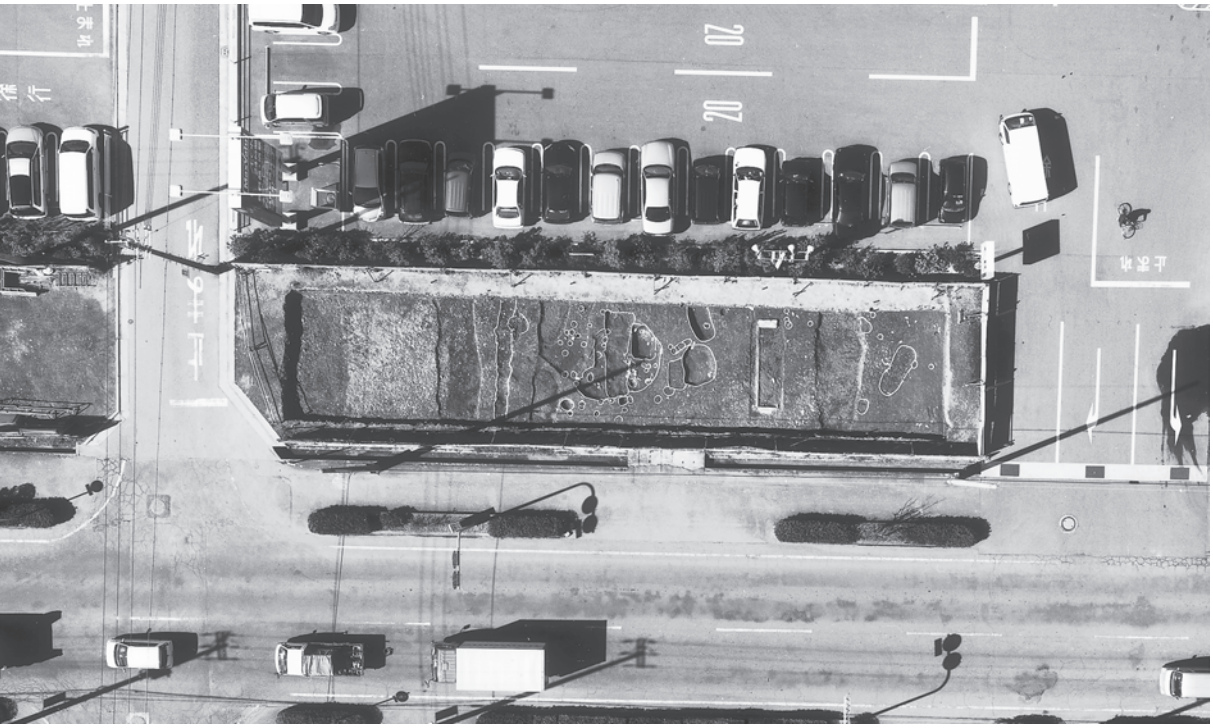
SK16
土器出土状況
西から

SK16
完掘
北から

遺跡の遠景　南から

遺跡の遠景　北から

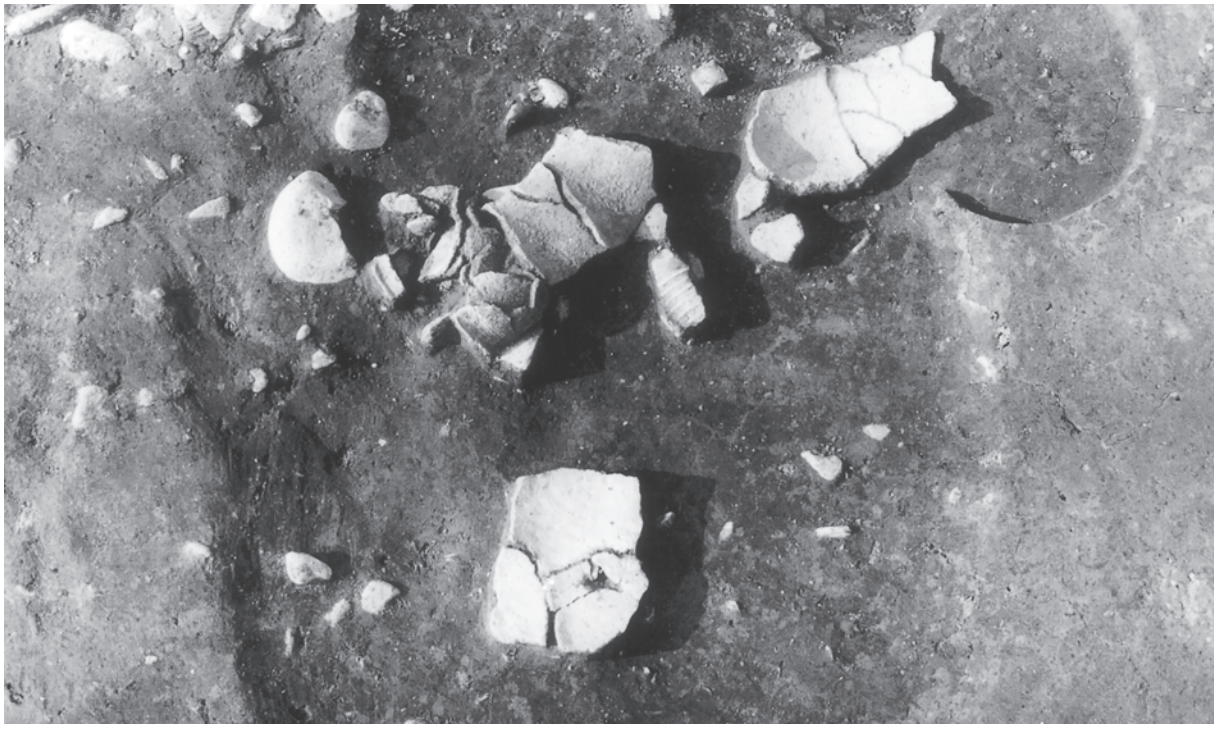
写真図版８　Ⅱ区遺構



全景
（垂直写真）

全景
北から

SK01
東から



SK01
土器出土状況
東から

SK02
南から

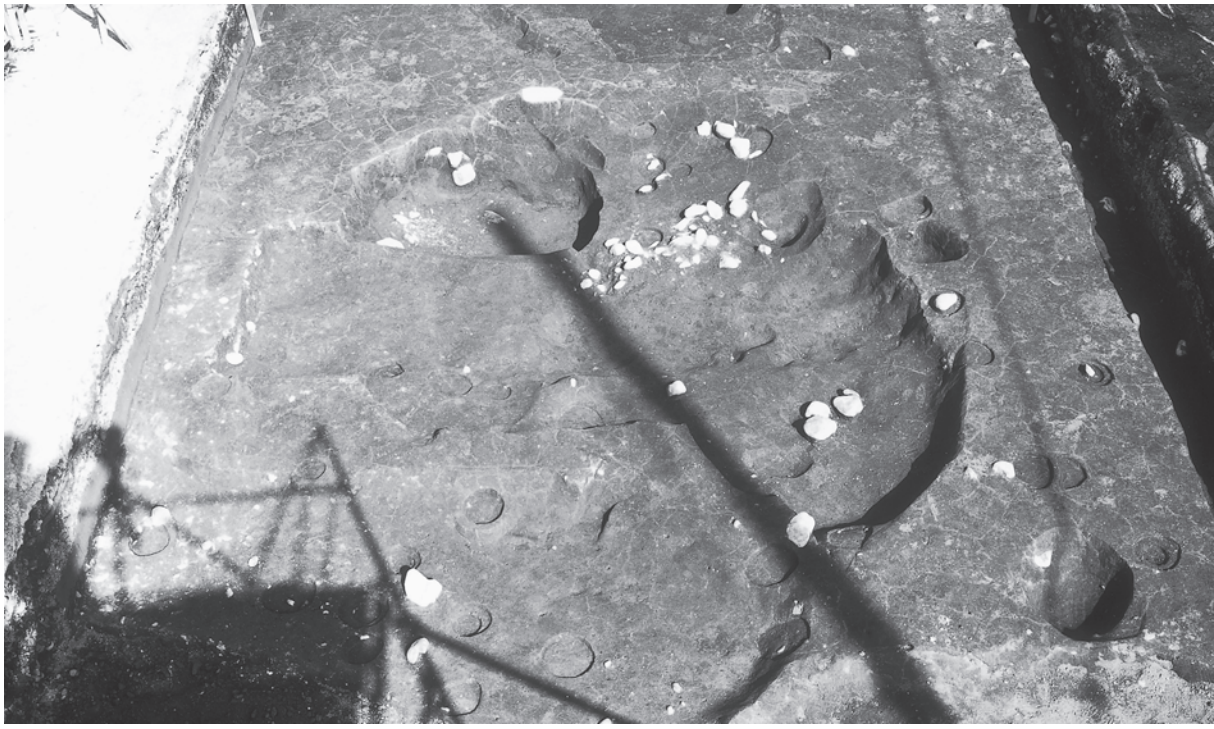
SK04
西から

写真図版10　Ⅱ区遺構

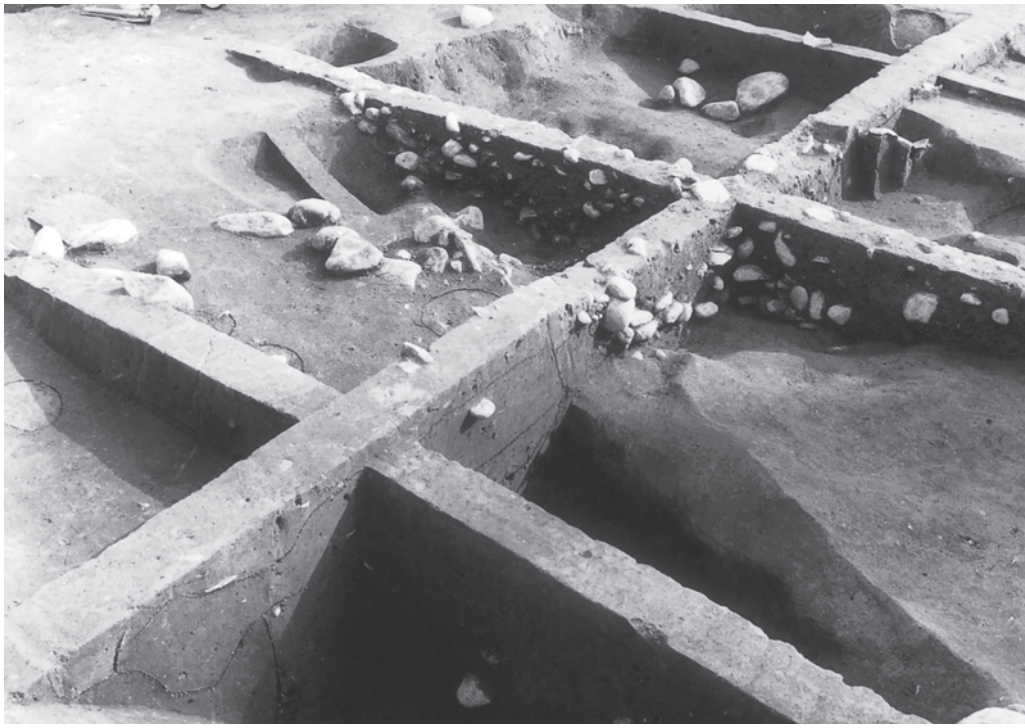
SK05
東から

SK05断面
東から

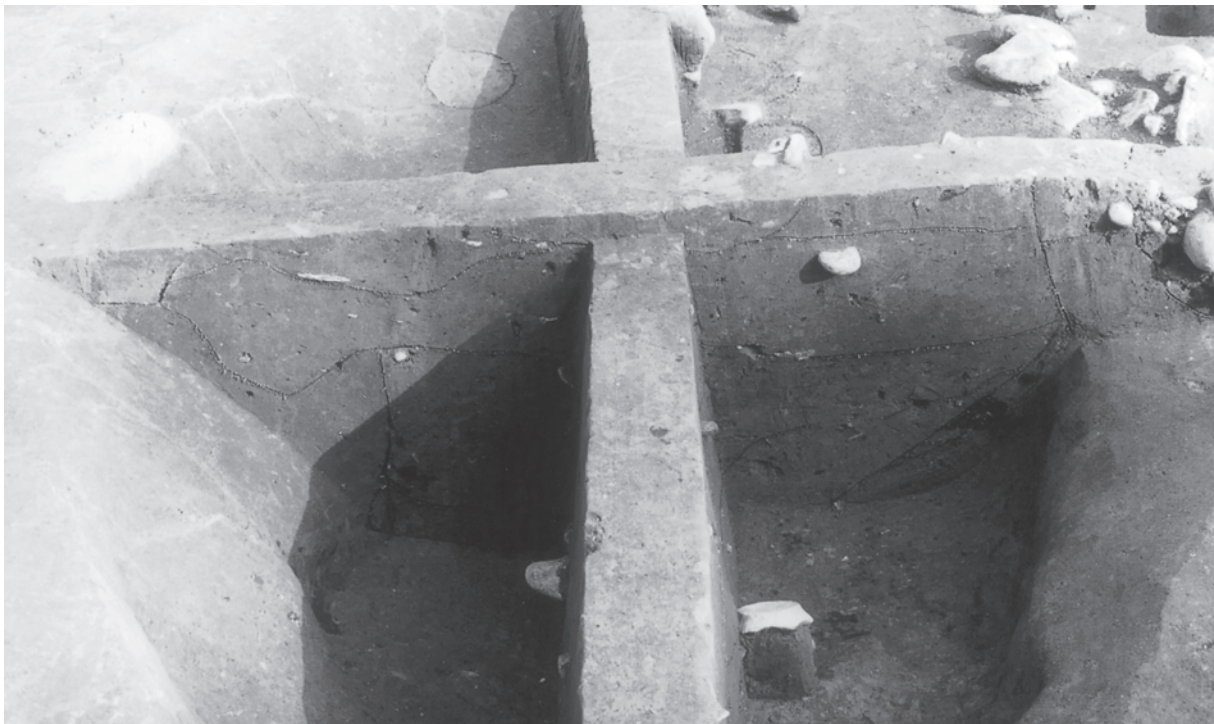
SK05
土器出土状況
東から



SX01、SK08・13
南から



SX01断面
（a―a’）
西から



SK08断面
南から

写真図版12　Ⅲ区遺構

全景
（垂直写真）

全景
北から

南半部東壁
土層断面
西から

全景
北から

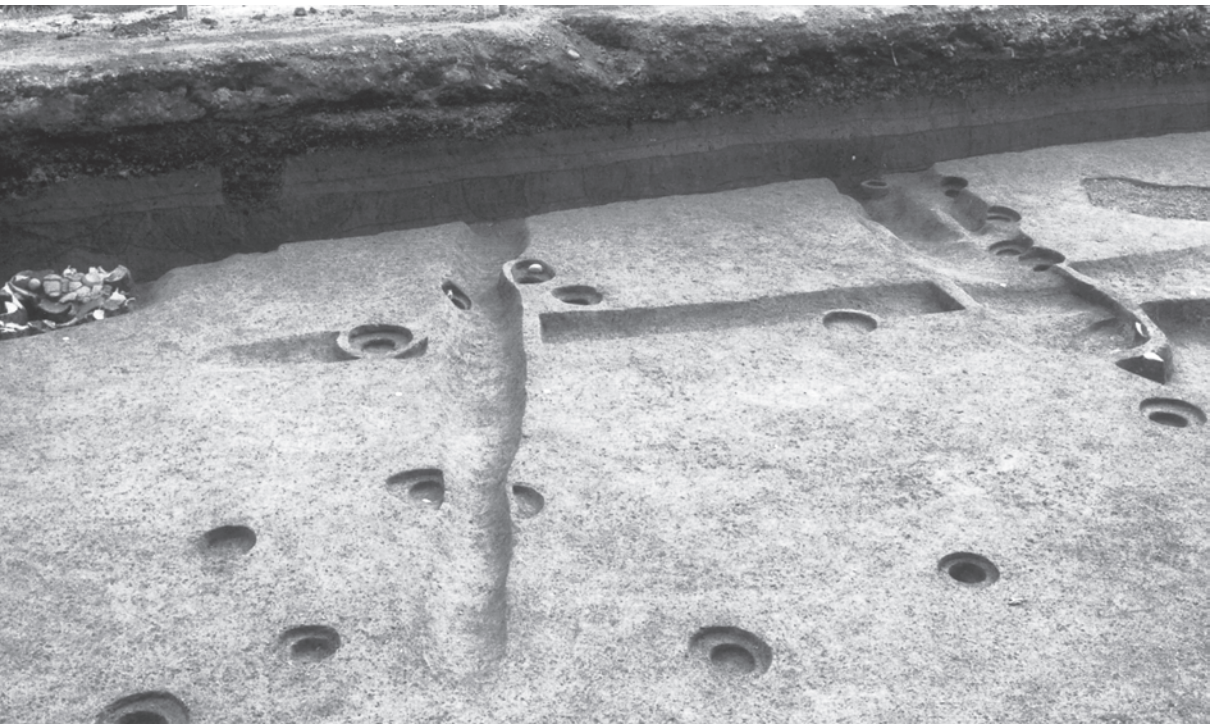
調査区南端
東壁際土坑
西から

SK01
東から

写真図版14　Ⅲ区遺構

SK02断面
北から

SK02
土器出土状況
西から



SD03・04・05
西から